

■フォーラムの趣旨

東アジアにおいては「歴史和解」の問題は依然大きな課題として残されている。講和条約や共同声明によって国家間の和解が法的に成立しても、国民レベルの和解が進まないため、真の国家間の和解は覚束ない。歴史家は歴史和解にどのような貢献ができるのだろうか。

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA（関口グローバル研究会）フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月のアジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生（東京大学名誉教授）、葛兆光先生（復旦大学教授）、趙珖先生（高麗大学名誉教授）の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は自国史と他国史との関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。13世紀前半の「蒙古襲来」を各国の「国史」の中で議論する場合、日本では日本文化の独立の視点が強調され、中国では蒙古（元朝）を「自国史」と見なしながら、蒙古襲来は、蒙古と日本と高麗という中国の外部で起こった出来事として扱われる。しかし、東アジア全体の視野で見れば、蒙元の高麗・日本の侵略は、文化的には各国の自我意識を喚起し、政治的には中国中心の華夷秩序の変調を象徴する出来事であった。「国史」と東アジア国際関係史の接点に今まで意識されてこなかった新たな歴史像があるのではないかと期待される。

もちろん、本会議は立場によってさまざまな歴史があることを確認することが目的であり、「対話」によって何等かの合意を得ることが目的ではない。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。円卓会議の講演録は、SGRAレポートして3カ国語で発行する。

program

※日中韓同時通訳付き

8月7日(月)到着、開会、基調講演、夕食会

16:00 開会セッション〔司会：李恩民（桜美林大学）〕

開会挨拶／今西淳子（渥美国際交流財団）

趣旨説明／三谷博（跡見学園女子大学）

基調講演／Ge Zhaoguang 葛兆光（復旦大学）

『『ポストモンゴル時代』？——14～15世紀の東アジア史を見直す』……………p 5

自己紹介／参加者全員

19:00 夕食会（於：リーガロイヤルホテル）

8月8日(火)論文発表（於：北九州国際会議場）

9:00～ 第1セッション〔座長：村和明（三井文庫）、彭浩（大阪市立大学）〕

要旨／論文

発表者		演題	質問者	掲載ページ
四日市康博 （昭和女子大学）	Yokkaichi Yasuhiro	モンゴル・インパクトの一環としての 「モンゴル襲来」	趙 阮	p 9 / p15
チョグト （内蒙古大学）	Chogt	アミルアルホンと彼がホラーサーンなどの地 域において行った2回の戸籍調査について	エルデニ バートル	p 9 / p22
橋本 雄（北海道大学）	Hashimoto Yu	蒙古襲来絵詞を読みとく ——二つの奥書の検討を中心に	李 命美	p10 / p28

10:40 休憩

11:00～ 第2セッション〔座長：徐 静波（復旦大学）、ナヒヤ（内蒙古大学）〕

発表者		演題	質問者	掲載ページ
エルデニバートル （内蒙古大学）	Eerdunbateer	モンゴル帝国時代のモンゴル人の命名習慣 に関する一考察	四日市康博	p10 / p38
向 正樹（同志社大学）	Mukai Masaki	モンゴル帝国と火薬兵器 ——明治と現代の「元寇」イメージ	チョグト	p11 / p44
孫 衛国（南開大学）	Sun Weiguo	朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の 日本侵攻に関する叙述	金 甫桃	p11 / p52

12:40 昼食

14:00～ 第3セッション〔座長：韓 承勲（高麗大学）、金キョンテ（高麗大学）〕

発表者		演題	質問者	掲載ページ
金 甫桃（嘉泉大学）	Kim Bo-Kwang	日本遠征をめぐる高麗忠烈王の政治的意図	ツェレンド ルジ	p11 / p65
李 命美（ソウル大学）	Lee Myung-Mi	対蒙戦争——講和の過程と高麗の政権をめ ぐる環境の変化	孫 衛国	p13 / p71
ツェレンドルジ （モンゴル国科学院歴 史研究所）	Tsegmed Tserendorj	北元と高麗との関係に対する考察 ——禡王時代の関係を中心に	張 佳	p13 / p80

15:40 休憩

16:00～ 第4セッション [座長：金 範洙（東京学芸大学）、李恩民（桜美林大学）]

発表者		演題	質問者	掲載ページ
趙 阮（漢陽大学）	Cho Won	モンゴル帝国の食文化の高麗への流入と変化	橋本 雄	p14 / p89
張 佳（復旦大学）	Zhang Jiajia	「深簷胡帽」考——蒙元時代における女真族の帽子の盛衰史	向 正樹	p14 / p96

18:00 夕食

8月9日（水）全体討議（於：北九州国際会議場）見学会

9:00 全体討議セッション [司会／まとめ：劉傑（早稲田大学）]

論点整理／趙 琬（高麗大学（名誉教授））

全体討議

総括／三谷博（跡見学園女子大学）

午後 見学会

12:30 会議場出発

元寇記念館

生の松原元寇防塁跡

太宰府

皿倉山頂上（BBQ）と夜景

20:40 小倉駅着

8月10日（月）出発

ホテルチェックアウト、解散。

著 者 略 歴……………p107

参加者リスト……………p110

2017年8月7日(月) プレ・セッション	2017年8月8日(火) セッション	2017年8月9日(水) 全体討議	2017年8月10日(木) 解散
9:00	【1】 9:00～10:40 (座長：村和明、彭浩) 発表者：四日市 康博 (質問者：趙 阮) 発表者：チョグト (質問者：エルデニバートル) 発表者：橋本 雄 (質問者：李 命美)	【全体討議】 司会進行/まとめ 劉傑 論点整理 趙珖	朝食後チェックアウト check out time 10:00
10:00	休憩	全体討議	10:00～12:00 実行委員会@国際会議場 ★実行委員のみ
11:00	【2】 11:00～12:40 (座長：徐静波、ナヒヤ) 発表者：エルデニバートル (質問者：四日市 康博) 発表者：向 正樹 (質問者：チョグト) 発表者：孫 衛国 (質問者：金 甫桄)	総括 三谷博	
12:00	屋食@国際会議場レストラン	【見学会】 12:30 会議場発 (車中弁当) ↓ ↓ 元寇記念館 ↓ ↓ 生の松原元寇防塁跡	
13:00	宿泊：JR九州ホテル小倉 http://www.jik-hotels.co.jp/Kokura/index.php		
14:00	【3】 14:00～15:40 (座長：韓承勲、金キョンテ) 発表者：金 甫桄 (質問者：ツェレンドルジ) 発表者：李 命美 (質問者：孫 衛国) 発表者：ツェレンドルジ (質問者：張 佳)		
15:00	check in time 15:00 ※参加者は16:00に国際会議場に集合		
16:00	【開会】 16:00～19:00 (司会：李恩民) 挨拶/趣旨説明 三谷博 基調講演 葛兆光		
17:00	参加者自己紹介	↓ ↓ 太宰府 ↓ ↓ 血倉山頂上(軽食)と夜景 ↓ ↓ 20:40 小倉駅着	
18:00	夕食@リーガロイヤルホテル		
19:00			

※オレンジは同時通訳付きのセッション

【基調講演】

「ポストモンゴル時代」？

——14～15世紀の東アジア史を見直す

葛 兆光（復旦大学）

[原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）]

【要 旨】

14世紀中頃から15世紀前半にかけて（1368-1420）、それまでユーラシア大陸の各地を支配していたモンゴルの勢力がしだいに弱体化していった。この時期は、東アジア諸国間の関係が再調整される軸となった時代である。私はこの時期を「ポストモンゴル時代」と呼んでよいのではないかと考えている。この半世紀のあいだに、東アジアは妥協、衝突、レバランスの時期を順を追って経験し、「応永の外寇」/「己亥東征」事件の後、朝鮮の「事大交隣」政策を中心として、新たな協調的な東アジアの秩序が築かれた。「モンゴル時代」は多くの歴史学者によって世界史/グローバルヒストリーの始まりと見なされているが、世界史の一部としてのモンゴル時代以後の東アジア史は、どのような基本的特徴があるのだろうか。これは、検討に値する重要な歴史上の問題だと思われる。

(一)

歴史上の幾つかの「鍵となる時期（关键时期）」については、議論を繰り返しておこなっていく必要がある。

中国の歴史には、幾つかのそのような「鍵となる時期」があった。それらの「鍵となる時期」の前と後の時代では異なる歴史的風貌がみられる。ここで、二つの例を挙げよう。一つ目は、唐から宋へと移り変わる時代である。内藤湖南の「唐宋変革」の仮説によって、755年（安史の乱）から1004年（澶淵の盟）に至るまでの時期が注目されるようになった。755年～1004年および1368年～1420年という二つの半世紀がいかに中古の中国と近世の中国に大きな変化をもたらしたかについて、歴史学者たちは次々と考査を試みている¹。そして、張瀚の言う中国近代思想史における「転型期」という仮説にもとづけば、1895年から1925年までの時期が「鍵となる時期」として浮かび上がり、清国末期、中華民国初期における日清戦争、戊戌変法と五四運動を一貫して考察することで、知識階級、新聞出版、教育選挙、政治制度、宗教文化などの面において、伝統中国と現代中国の間に本質的な転換がみられると考えられている²。

歴史の「鍵となる時期」という概念は、簡単に言えば「承上启下」（本意：上文を受けて下文を書き起こす）という意味合いを帯びている。学者たちはこれらの「鍵となる時期」に、王朝/国家の内部において、本質的な変化が起きたと指摘している。しかし、王朝/国家を越えた広域史においてもまた、検討すべき重要な時期がある

1 内藤湖南『概括的唐宋時代観』、日本語テキスト、『歴史と地理』第九巻第5号（1922.5）pp.1－11。英語テキスト、宮川尚志 An Outline of the Naito Hypothesis and its Effects on Japanese Studies of China, Far Eastern Quarter, Vol.14, No.4 (1955), pp.533-552。中国語テキスト『概括的唐宋時代観』、黄約瑟訳。劉俊文編《日本学者研究中国史论著选译》（北京、中華書局、1992年）に記載されている。

2 張瀚『中国近代思想史的転型時代』、張瀚『時代的探索』（台北：中央研究院、聯經、2004）p.51。

のではないだろうか。

これらの「鍵となる時期」に、各国と地域の地位、力と利益などが再編成されたのである。過去のバランスが壊されて、新たなバランスが築かれる。こうして、安定期が続き、広大な地域における国際関係が構築されることになっていく。

そのような時期のひとつとして、モンゴルの世界帝国が崩壊した後、1369年から1420年までに東アジアで起きた歴史的变化³について検討してみたい。私見では、この時期も東アジア史上における「鍵となる時期」である。この50年間の東アジアにおいては、モンゴルの勢力が徐々に弱体化するいっぽうで、明王朝、李王朝と足利幕府時代の日本が、複雑な外交往来、衝突及び妥協を経て、「応永の外寇」/「己亥東征」事件を機に、その後の東アジアの基本的な構造が構築された。即ち、朝鮮の「事大交隣」政策を中心として、明王朝、朝鮮と日本の間の基本的なパワーバランスが保たれたのである。それからの数世紀においても、倭寇事件、「壬申の戦い」、「明清易代」などの変化が続いたが、東アジアにおける基本的にバランスの取れた構造は数百年も続き、19世紀の中頃になって、遂に西側諸国の「堅船利砲」によって徹底的に覆された。

(二)

では、一番シンプルな方法で、14世紀中頃と15世紀前半(1368-1420)の間の50年にわたる東アジアの歴史を見渡してみよう。

それ以前にユーラシア大陸の各地を征服していたモンゴル帝国は、14世紀中頃以後、東アジアにおける勢力をしいに弱めていった。1368年、朱元璋が元王朝を倒し、漢民族によって統治される明王朝が創設された。1392年、李氏は高麗王朝に取って代わり朝鮮王朝を確立した。同じ年に、日本の室町幕府の将軍足利義満は南朝の後亀山天皇を退位させ、南北朝を統一した。安南においては、1400年、陳氏から黎氏への交代があった。その5年後(1405年)、明王朝の脅威であったティムールが亡くなった。この死をきっかけにティムール帝国は皇位争奪の混乱に陥り、東アジアを狙う余裕がなくなった⁴。

私は、まさにこの時期を「モンゴル時代」の後の「鍵となる時期」と見なしてよいと思う。この「鍵となる時期」においては、東アジア諸国の間でさまざまな調整が行われた。明王朝初期の中国は支配の面でいまだ安定しておらず、大きな内部問題も抱えていた。従って、自己を中心とする朝貢体制の再建を試みると同時に妥協策を取り、「十五不征之国」を宣言した⁵。また、政策の重点を東北と西南地域におき、国境地域におけるトラブルを防ごうとした。さらに、韃靼やウリヤンハイに至る周辺諸国に対して宣撫政策(人心を落ち着かせる政策)を取った⁶。また朝鮮王朝は、一方で明王朝の承認を得るために「事大」という姿勢を取り、他方では日本との関係を緩和させて「交隣」の関係を確立しなければならなかった。日本の足利義満は、明王朝と朝鮮が手を組んで日本を脅かす危険性に留意しながら、「元寇」以来日本が孤立してきた状況を変えなければならなかった。そこで、1374年と1380年の二度にわたって使者を派遣して国交の樹立を希望したが、ともに明王朝に断られた⁷。その後日本は、明王朝の虚栄心を満足させるために、1401年に「日本国准三后源道義」の名義で国書を送り、明王朝の冊封を受けた。また、「日本国王」の名義を以て、対等な姿勢で「朝鮮国王」と交渉を行い、李氏朝鮮と国交を樹立した。1405年にティムールが亡くなった後は、その後継者とも調整を行い、明王朝と比較的友好的な関係を保つようになった。

こうして、東北アジアにおいて妥協し合う新秩序が築かれた。

3 世界の近代史はモンゴルが弱体化し、元王朝が崩壊し、明王朝が確立された1368年から始まると見るべきだと指摘された。趙現海の《世界近代史の起点と明代中国の歴史分枝》《中国史研究動態》(北京)2016年第5期、pp.42-43。

4 イギリスの学者 John Darwin は《后帖木儿时代：全球帝国的兴与衰》(陸偉芳、高英芳訳。大象出版社、2011年)において、ティムール帝国が解体した後の、世界歴史に体する影響を指摘している。

5 『明史』巻322《外国三・日本》が「列不征之国十五、日本与焉。自是、朝貢不至、而且海上之警亦渐熄」と記載した。P.8344。

6 《明太祖实录》巻一二四(洪武三十五年十一月壬寅条)参照。

7 田中健夫『中世対外関係史』(東京：東京大学出版、1975年)、特に第一章である。

(三)

しかし、15世紀初期に、明太祖、李氏太祖、足利義満は相次いで亡くなり、それぞれの後継者たちがバランスの取れた東アジア秩序を変えようと試みた。永楽帝は、5回にわたってモンゴルの残存勢力に対して遠征をおこなっただけでなく、ベトナム（安南）を征服して明王朝に属する交趾郡を設置した⁸。足利義持は傲慢な態度を取り、明王朝を宗主国として認めず⁹、また「日本将軍」として「朝鮮国王」に接し、国際関係において朝鮮を凌駕しようとした。これに対抗して朝鮮の国王は強硬な態度を取り、1419年に日本の対馬を急襲し、日本に大きなショックを与えた。そして、明王朝でも洪武帝が取った保守的な政策を放棄し、同じ年に、望海渦の戦争で倭寇を粛清した。それゆえ、朝鮮も日本に対して強硬な態度を取るようになった。

このような「鍵となる時期」において、日本は博多妙楽寺の僧侶無涯亮倪を朝鮮に派遣した。ちょうど同じ年に、強硬な態度を取ってきた朝鮮太宗が亡くなった。かわって即位した世宗は最初から倭寇問題を徹底的に解決することに賛成しなかった。そのため、世宗が即位してから、日本と朝鮮の両国間での緊張関係がようやく緩和された。この緩和された国際情勢のもとで、翌年（1420年）朝鮮は宋希璟を「回礼使」として日本に派遣し、大蔵経を贈った。これを機に、数百年にわたる日朝外交交流史が始まり、朝鮮の「事大交隣」政策を中心とする東アジアにおける国際秩序が構築された¹⁰。その後、「壬辰の戦い」などの大きな事件が起きたものの、結局近代における「西潮東漸」で東アジアの情勢が一変するまでの長い期間、東アジアにおける中国、朝鮮、日本、モンゴル、沖縄、安南諸国の間では、「ポストモンゴル時代」という基本的な構造が継続した。

(四)

数多くの歴史学者はモンゴル帝国時代を世界史の発端と見なしている。例えば、本田実信、岡田英弘、杉山正明など¹¹である。しかし、注意すべきは、ユーラシア大陸を含む世界史は、1ページ目を開いたところから、激動の時代が書き記されていることである。世界は統一されたものの、その内部は幾つか独立した空間に分離されていた。「モンゴル時代」の後、モンゴル帝国の統治と脅威から解放された東アジア諸国には、興味深い変化が起き、特別な歴史的世界が形成された。

この時期、東アジア諸国はそれぞれ本国の政治と文化の再建を手がけたのだ。

まずは中国を見てみよう。明王朝はモンゴルの元王朝に取って代わって建国された。明王朝の合法性を確立するために、朝廷においては「脱モンゴル化」が幅広くかつ厳正に行われた。張佳は『新天下之化』において次のように指摘している。明王朝初期に、漢族の文化と伝統が再建された。政府は単に「胡服、胡語、胡姓を禁じる」だけでなく、各階層の人々を対象に服装制度を制定し、胡人の風俗が入り混じった冠婚葬祭の形を規制し、礼儀風俗の規範などを徹底的に整えた。政府は一連の措置を講じて、漢族の伝統生活の規範を取り戻し、士農工商の四民社会を再建し、人々の上下関係を規定する儒教の政治秩序を再構築しようとした。言い換えれば、「文化、風俗、文献そして血統などの面から、モンゴルの影響の名残を消滅した」のである。特に、明王朝初期には、科举試験制度と儒学の提唱を通じて、政治と文化を中国の伝統に復帰させることになった¹²。

次に日本の状況を見てみよう。内藤湖南は『日本文化の独立』において、「蒙古襲来」という事件が非常に重要

8 永楽帝の積極性を現わす行動は、安南の征服とモンゴル遠征以外、以下の通り。①7回にわたって鄭和に南海諸国への朝貢貿易促進の航海を委ね、東南アジアとインド洋を開拓させた。②宦官をアムダリヤ川地域まで派遣。③奴儿干都司を設置。④侯顕、李達を内陸シルクロードとチベットに派遣。

9 永楽9年（1411）、足利義持は三宝宦官王進の会見を断った。王進は「夷婦密引」を通じて、兵庫から帰国することができた。永楽16年（1418）3月に、また明王朝の行人呂淵の謁見を断って、京都に入ることを禁じた。汪向荣の『明史日本伝箋』（成都、巴蜀書社、1987）参照、pp.44-46。

10 当然、日本国内情勢は一つ重要な原因であるが、「応仁の乱」（1467-1477）の後、日本は1世紀にわたる内乱に陥って、海西に気を配る余裕がなかった。ただ、山口の大内氏が「日本国王」の名義で、白銀の採掘と海外貿易を握った。従って、東アジア海域における国と国の関係は大体平穏で冷めていた。騒動を起こしたのは倭寇が沿海地域における略奪行為だけである。豊臣秀吉が日本を統一してから、東アジア海域における国際関係が変わり始めた。

11 本田実信『モンゴル時代史研究』（東京大学出版会、1991年）岡田英弘『世界史の誕生：モンゴルの発展と伝統』（陳心慧訳、台北：広場出版社、2013年）；杉山正明『フビライの挑戦：モンゴルによる世界史の大転回』（周俊宇訳、社会科学文献出版社、2013）；杉山正明『モンゴル帝国の興亡：軍事拡張の時代・世界経営の時代』（孫越訳、社会科学文献出版社、2015）

12 張佳『新天下之化：明初礼俗改革研究』（上海：復旦大学出版社、2014）

であると指摘した。内藤は、「丁度九州に大風が起って蒙古の船が散々になった時だったといふような事がありました。……今迄日本は支那を以て日本文化の師匠であると仰いで居った所が、其師匠と仰いで居った支那が、犬の子孫である所の蒙古のために亡ぼされてしまって……そんなわけで今迄貴いと思って居った支那も、犬の子孫に統一されるやうではさう大したこともないといふので、遂に支那といふものが日本人に取ってあまり有難くなくなった」と述べている。だから、「日本は神國なり」という考えを起させるに至った。明太宗に対して懷良親王が強硬な姿勢に出たから、日本は中国に対して、「氣焰を吐く」ことになった。内藤は、これらの時代背景のもとで、「これは詰り日本の根本の文化の獨立が出来上つたからだと言つてもよいと思う」¹³と断じた。

最後に朝鮮の状況を見てみよう。14世紀末に、李氏は北元と明王朝に寄り添った高麗王朝に取って代わった。確立された朝鮮王朝は、中国との外交姿勢を調整し始めた。政治面では、明王朝を宗主国として認め、明王朝からの冊封を受けながらも、朝鮮は「且卑辞慎事之」（謙虚な姿勢で接する）という態度で接すればよいと考えていた。他方、文化の面では、明王朝より厳しい対策を取り、程朱学の政治理念と道德倫理をはじめ、儒学を普及させた。表面上、朝鮮王朝は、中国の明王朝と似た政治や文化を持つように見えた。しかし、朝鮮の国際的地位や政治制度・社会構造上の特質により、朝鮮における儒教観念、倫理制度及び道德要求は中国のそれよりも厳しく、長く維持されていた。従って、どの国が「中華」の伝統をより正統的に受け継いでいるかという認識が生まれたのである¹⁴。

(五)

1420年、永楽帝は南京から北京へと遷都をおこなった。当時、モンゴル勢力はすでに完全に弱体化し、東アジアの情勢に揺さぶりをかけることは出来なかった¹⁵。同じ年に、朝鮮使者の宋希璟が日本へ赴いた。日朝間の情勢もまた安定的であった。

「モンゴル時代」の終焉から西欧の「堅船利砲」が東アジアに入ってその地域に「ショック」を与えるまでの時期における東アジア史、或は東アジア関係史の基本的な特徴とは、どのようなものだろうか。私見では、それはすなわち以下の3点にまとめられるだろう。①環東海諸国は朝鮮の「事大交隣」政策を中心として、安定的な東アジアの秩序を構築した。当該秩序は、14世紀中頃に形成され、1420年代に安定し、19世紀中頃まで、400年にもわたって継続した。②蒙古の襲来と弱体化によって諸国が刺激され、文化面において「自己中心主義」が勃興した。すなわち、諸国において、政治と文化における独立意識が芽生え、形成された。曖昧とした「認同感」から、政治承認、文化承認と経済利用などの側面が生まれた。特に、中国では、明王朝と清王朝の王朝交替が発生し、日本と朝鮮から見れば、17世紀の中頃から中国は「華夷変態」（中華から夷人文化へ変化）した。それ以来、文化の一体感の解体がますます進んだ。③東アジアの海域を舞台に、貿易圏が形成された。公式の朝貢貿易はごく一部分しか占めていない。より重要なのは、おもに商人たちが貨物の流通を押し進めたという点である。400年あまりの間、環東アジア海域という国際環境において、各国は経済面において繋がり、文化の面において競い合い、政治の面において争った。時には、はげしい衝突もあったが、それはやがてお互いに妥協しあったのである。このような構造は、西欧の「堅船利砲」が東アジアに衝撃を与えた19世紀中頃まで続いた。

2017年4月上海に於いて

13 内藤湖南『日本文化の独立』（1922年のスピーチ）、内藤湖南の『日本歴史と日本文化』所載。（劉克申中国語訳本、北京：商務印書館、2012）p.117、p.122。

14 朝鮮儒学学者李退溪は、儒学的倫理道德を厳しく守ることこそ、「中華」が「中華」である根拠を為すとした。だから、文明は聖賢と經典が生まれた地域で確立されるとは限らないし、朝鮮も文明の正宗をなすこともできる。朝鮮の「小中華」意識がここから生まれた。李退溪は『成王皇華集序』において、「我東国天啓壤地、邈在海表、然而箕子之所受封、孔聖之所欲居、礼义文献之称、其来尚矣」と指摘している。『朝鮮文集丛刊』第三冊、卷五十九、p.291。

15 永楽時代に、明王朝は北方にあるモンゴルに対して、積極的に攻め込む姿勢をとった。永楽帝は5回も北方を討伐した。モンゴル内部にも問題が起きたが、韃靼（だたん）とオイラート（瓦剌）の2部族はしばらく安定した。オイラート三王とアルクタイが封じられた。ウリヤンハイは明朝に伏し三衛という遊牧集団を設置したが、他民族によって破られた。これにより、北方の国境はしばらく安定したのである。

【発表要旨】

■第1セッション

モンゴル・インパクトの一環としての「モンゴル襲来」

四日市康博（昭和女子大学）

13世紀から14世紀にかけてモンゴル帝国およびその継承政権はユーラシア各地を席卷し、その支配や影響は様々な地域や社会に及んだ。そのため、ユーラシアの東西では言語・宗教・民族など文化的な枠組みを超越したモンゴルの共通様式が見られる。そのような経済的・文化的交流の背景として、モンゴルの覇権に伴う東西交通の安定を意味する「モンゴルの平和」Pax Mongolicaがあったと言われる。ただし、この概念はあくまでも一面的な見方に過ぎず、それだけで経済的・文化的交流の全てを説明できるわけではなく、ましてや、モンゴル覇権下のユーラシアで戦争のない平和な状態が享受されたことを意味するわけではない。モンゴルとユーラシア各地の文化圏や社会とは、時には衝突し、相克し、共存し、融合しつつ、多角的かつ重層的に両者の交流がおこなわれた。すなわち、ユーラシア各地において、いわゆる「モンゴルの衝撃」Mongol Impactがあり、そして、それに対する各地域や各社会ごとのレスポンスが存在したことを認識しなければ、交流の内容もその後の影響も理解することはできない。この場合の「モンゴルの衝撃」には、短期の政治的・軍事的なインパクトだけでなく、長期的な経済的・文化的なインパクトも含まれる。つまり、「モンゴルの平和」と「モンゴルの衝撃」は同時に存在する表裏一体的な概念であり、ユーラシア全体における「モンゴルの平和」を理解するためには、ユーラシア各地における「モンゴルの衝撃」とそれに対するレスポンスを知る必要がある。モンゴルから二度の侵攻を受けた日本は、世界でも最も古くから「モンゴル襲来」に対する研究が進められてきた。ただし、従来の研究は日本と元という2国間関係、或いは、それに高麗を加えた3カ国関係による外交・軍事関係という視点に基づいたものであった。モンゴル帝国＝元朝の対外計略は日本のみならず、ベトナム、チャンパー、ミャンマー、ビルマ、ジャワ、琉球、サハリンなど、海域アジア全域に及び、それらは必ずしも互いに無関係ではなかった。また、海域アジア各地における「モンゴルの衝撃」の影響はその後にも長期的に持続してゆくのである。

アミルアルホンと彼がホラーサーンなどの地域において 行った2回の戸籍調査について

チョグト／朝克图（内モンゴル大学）

モンゴル帝国は世界的な大帝国である。モンゴル帝国の時期に、チンギスカンとその後継者たちは、一貫して対外の領土拡張を行い、東アジアとユーラシア大陸の各地域を征服し、史上空前のモンゴル帝国を確立した。モンゴル帝国によって行われた征服戦争は東洋と西洋にそれぞれ「モンゴル襲来」と「韃靼つむじ風」と呼ばれており、世界に揺さぶりを与え、食い止められない歴史の流れとなったのである。モンゴル帝国の対外拡張とともに、モンゴルを初めとする北アジア草原で活動する遊牧民族はアジアの中部から出て世界の舞台に登場し、モンゴルと世界各民族における地理と言葉の障壁を克服し、各民族の相互理解と融合を促し、史上空前の統一の状況を迎えた。この過程は人類のグローバル化過程を大きく促進し、世界歴史の進展に深い影響を与える。

本文はアミルアルホンが西アジアにおける活動を分析することで、モンゴルが西アジア地域を支配する過程とその特徴を理解し、解釈しようと試みた。アルホンはモンゴルオイラトの貴族であり、子供時代から、モンゴル

の王族に努めた。その後西アジアに派遣され、ホラーサーンの第五任アミルとなり、西アジアとモンゴル高原の間で何度も往復した。彼はモンゴル帝国が西アジア地域を統治し、その支配を固める為に策を出し、モンゴル帝国に大きく貢献した。特に、彼はホラーサーンなどの地域において二回の戸籍調査を行い、当地の状況に基づく税収政策を制定し、経済発展を促し、モンゴル帝国が其の地域における長期にわたる統治を固め、堅実な基礎を築いた。

アミルアルホンの西アジアにおける活動を研究することによって、モンゴル帝国が西アジア地域における統治と管理を理解するだけでなく、モンゴル帝国の多様性、世界化特徴を理解する上、学術面と歴史面に重要な意義を有する。

[原文は中国語、翻訳：宋剛(北京外国語大学)]

蒙古襲来絵詞を読みとく——二つの奥書の検討を中心に

橋本 雄 (北海道大学)

鎌倉後期に起こった蒙古襲来(モンゴル戦争)に関する史料は、存外少ない。そのなかでも、その戦争に参加した肥後国(現・熊本県)御家人の竹崎季長{たけざきすえなが}が描かせたという「蒙古襲来絵詞」(宮内庁蔵)は、両度の戦争を活写した希有な歴史資料として知られる。つまり、モンゴル戦争の基本史料の一つとして、本絵巻は非常に重要な意味をもつ。

だが、この作品が現在の状態になったのは、江戸時代の寛政年間(19世紀初頭)の修理・成巻による。そして、この絵巻には錯簡や改変が多く、寛政の修理では少なからぬ補筆が施されたとおぼしい。普通なら一つだけの「奥書{おくがき}」(巻末の作成趣意書)が二つも存在するほか、料紙の種類も一貫していないなど、謎だらけの絵巻である。

したがって、本作品を歴史研究の俎上にのぼせるためには、まず周到な史料批判が必要である。絵画作品とは言っても、本絵巻はもとより実景を描写したものではない。本作品の現状から、ナイーヴに歴史的事実を読み取ることも論外である。この絵巻を最大限活用するために、周到な史料批判が必要なゆえんである。すなわち、本絵巻の成立にまつわる作成者の意図や目論見、原状の想像的復元など、近年のモンゴル戦争研究や絵巻そのものの研究の成果を踏まえて究明してみたい。

こうした作業により、モンゴル戦争の表象論への、汎アジア史的足がかりが得られれば幸いである。

第2セッション

モンゴル帝国時代のモンゴル人の命名習慣に関する一考察

エルデニバートル／額尔敦巴特尔(内モンゴル大学モンゴル歴史学部)

チンギス・ハーン及びその子孫による大規模な対外征服戦争中、漢、女真、西夏、高麗、欽察(キプチャク)、阿速(アスタイ)、斡魯思(オロス)などの諸民族および国の人々はモンゴル地域へ移民された。14世紀に元朝が滅亡した後、モンゴル高原にいたこれらの複雑な背景をもつ人々はモンゴル人として融合してゆく。モンゴル帝国時代のモンゴル人は他の国、民族、部落及び地域の名を自分の子供に名付ける習慣があった。例えば、撒里答(サルタグ)、鎖郎哈(ソランガ)、唐兀歹(タングダイ)、忻都(インド)、囊加台(ナンギヤタイ)、蛮子台(マンジタイ)、合失(カシ)、阿速台(アスタイ)、欽察、斡羅思(オロス)、馬札儿(マジャール)、阿魯渾(アルゲン)、朮赤台(ジョルチディ)等。このような名付け習慣はモンゴル人の他民族・国家と交流やコミュニケーションを持っていたことを物語っている。元朝が滅亡した後、モンゴルに融合していたこれらの民族・国の名称もモンゴル部落の苗字として定着した。17世紀のモンゴル史料には肅良合(ソランガ)、撒兒塔兀(サルトール)、勒哈刺沁(ハラチン)、

阿速等（アソード）等の名称が多数現れるのである。〔原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）〕

モンゴル帝国と火薬兵器——明治と現代の「元寇」イメージ

向 正樹（同志社大学）

日本の歴史学界におけるモンゴル帝国のイメージは、90年代以降大きく変わってきた。とりわけ杉山正明氏は一連の著作やメディアを通じ、モンゴル帝国イメージを刷新し、その影響は広く浸透しつつある。では国民レベルでのモンゴル襲来のイメージは、それがナショナルアイデンティティ強化に利用された戦前から今日までの間でどのように変わったのだろうか。洋画家矢田一嘯（1859－1913）のパノラマ画「蒙古襲来絵図」と最近の日本の漫画での描写を比較してみたい。モンゴル軍を描く画像・映像で目に付く特徴は、先進的な火薬兵器の描写である。特に近年は専門研究で、その時代に存在したことが証明されていないような種類の火薬兵器を、モンゴル軍がすでに実用化していたかのように描かれている。

モンゴルは中央アジア・ホラズム朝征服からバグダード進攻の過程で、堅固な城壁に囲まれた都市を攻略するが、その過程で様々な兵器を導入し、さらには南中国遠征に際しては、水軍も創設された。モンゴル帝国は中国やホラズムなど征服の過程で各地の様々な技術（と技術者集団）を吸収していったことが知られる。それは軍事技術においても例外ではない。本発表では、未解決の問題が多いモンゴル帝国の火薬兵器使用について今の時点でどのように評価できるのか、文献や考古学など様々な面から考察してみたい。

朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の日本侵攻に関する叙述

孫 衛国（南開大学歴史学院）

朝鮮王朝は建国初期から、編年体で『高麗史』を編纂しようと努力を重ねてきたが、実現できなかった。李朝世宗の勅命により、高麗朝の歴史を紀伝体で編纂し、139巻の『高麗史』を仕上げ、朝鮮王朝に正統性を付与した。『高麗史』における元の日本侵攻に関する記載は、高麗の自主性を強調し、高麗が元王朝の要求に巧妙に対応したことを表わし、高麗が提供した軍隊の食糧、人力などを細かく記録している。そして、高麗を裏切って元王朝に投降した高麗人を「反人」と見なして、「叛逆伝」に収めたことから、高麗が宗藩関係のもとで独立自主を求めようとした意識と努力が伺える。『高麗史』章節「忠烈王世家」と「金方慶伝」には、元の日本東征の歴史について類似の記述がある。高麗の将軍は戦争の勝負を左右する肝心な人物であるが、モンゴルの最高司令官は専断的であり、他人の意見を聞かず、ひたすら自分の意見を通そうとした。その上、「暴風雨」に遭って東征を失敗に導いた。『元史』と日本史書と比べて、『高麗史』に見える元の日本東征に関する記述は極めて偏っている。東アジア三国の歴史事件に関して、「一国史」のクルワから抜け出し、「東アジア史」の目線から考査してから初めて、歴史の真相に近づくことができる。

〔原文は韓国語、翻訳：李へり（韓国外国語大学）〕

■第3セッション

日本遠征をめぐる高麗忠烈王の政治的意図

金 甫桃（高麗大大学院）

モンゴル帝国の登場と拡散という世界史的な出来事は、モンゴルが高麗に進攻することで高麗にも大きな影響を与えた。モンゴルが高麗に影響を及ぼした期間は、「抗蒙」といわれる戦争期と「干渉期」という戦争後の時期

に分けることができる。二度にわたって試みられた「日本遠征」は、干渉期に当たる。これは、モンゴルが高麗に日本の降伏を勧告するように招諭を要求したが、招諭が失敗に終わった後モンゴルが高麗を携えて直接日本征伐を推進させた征服事業であった。

これまで「日本遠征」は、モンゴルが主導し高麗は彼らに動員された戦争として理解する傾向が強かった。しかし、当時の高麗王（元宗および忠烈王）は、第1次遠征と第2次遠征の間に消極的な回避からより積極的な加担へと態度を変化させていることがうかがえる。本稿ではこの事件において当時の高麗王であった忠烈王が態度を変えた部分に注目してみたい。つまり、態度の変化に込められた忠烈王の狙い、政治的目的が何なのかについて調べてみたい。

13世紀後半、忠烈王の政治的な立場に対して、近年集中して検討が行われている。最近の研究の特徴の一つは、高麗をみる立場の変化である。つまり、高麗が一方向的にモンゴルによって動員されたという点を強調する傾向から抜け出し、この時期モンゴルの影響力が強く投射されている状況で、高麗または国王がこのような状況をどのように活用したのか、そしてその変化が高麗－モンゴル間の関係にどのように働いたのかという部分に注目している。

この過程で忠烈王の地位はとても象徴的である。彼は、高麗の国王でありながら、モンゴルと王室間の婚姻をした最初の国王であり、後には征東行省というモンゴルの地方最高単位の長官である丞相になった。しかし、モンゴルの「駙馬（貴人の娘婿）」としての地位、またはモンゴル王室との婚姻は高麗が先に提案した内容であり、「征東行省」はモンゴルが設置したにもかかわらず忠烈王は、行省内で自分の役割も要請した。言い換えれば、高麗王つまり忠烈王は、モンゴル帝国の威勢を借りて王権を確立し、権力を強化しようとする方向からモンゴルの駙馬、丞相という要素を通じて政治的な効果を期待した。

1170年から100年間続いた武臣政権時代に高麗の王権は弱化し続けた。1270年に武臣政権が崩壊し、王政が復古したが、すでにモンゴルとの関係の進展により高麗の様々な既存の体制に変化が現れた。すぐに忠烈王とクビライの娘「忽都魯揭里迷失（後の「莊穆王后）」との婚姻のように高麗とモンゴル間で王室婚姻が成立し、中書門下省と6部中心だった高麗の官制は僉議府と4司体制となることで、官制もモンゴルの要求によって格下げ、改編された。そして、ダルガチのようなモンゴルの官職や軍隊が高麗に常駐した。こうした状況の変化は結果的に高麗の王権を安定・強化させる要素を再設定するように強要するようになった。

そして、モンゴルは使臣の趙良弼を日本に送り降伏を勧告させ、外交的な接触が失敗に終わると戦争を準備した。使臣の派遣や2度にわたる戦争において、高麗は全面的にモンゴルに協力した。第1次遠征当時、高麗は1274年に高麗は30,500人を徴発し、900隻の船を建造し、高麗軍6千人、水夫6,700人が動員され、1281年の第2次遠征当時は戦艦900隻、軍事1万人、水夫17,000人を動員した。こうした莫大な人的、物的負担に高麗は深刻な困難を経験し、負担の重さを幾度もモンゴル王朝に訴え出た。

こうした政治的な部分、特に忠烈王にフォーカスしてみると、経済的な負担に対する高麗側の訴えとは違った脈絡が垣間見える。忠烈王は、遠征準備の負担を訴えながらも日本の遠征に対して反対はしなかった。時にはそれに応じる姿すら見える。特に、第1次遠征当時、モンゴル軍と高麗軍の指揮層の混乱像を敗戦の原因として指摘し、第2次遠征においては指揮層の統一性を強調した。そして、そのため高麗側の武官たちを万戸職に任命、金牌賜與など、モンゴル式の官制による指揮権を認めてくれることを要請したりもした。これにモンゴルは、忠烈王の要請を受け入れ、さらには高麗王、つまり忠烈王を征東行省丞相として任命した。これにより高麗王が行省の丞相を兼任する始まりとなった。

ここで忠烈王が目にした部分は、次の三つである。第一に、日本遠征事業に対するモンゴルの強力な意志を王権強化に活用するため、忠烈王は、モンゴルの風習や制度に対する部分を強調した。すぐに、モンゴルの支配層の一員である「駙馬」の義務を強調し、モンゴルが自分に指揮権などを認めさせる名分を提供した。二番目に最初の部分の延長線上でモンゴルに対して指揮権を要請し、これを高麗の將軍たちに適用することになることで、高麗軍はモンゴル軍との一元的な指揮体系を構築することができた。何よりも高麗軍をモンゴルの軍事制度である「万戸」で自分が事実上「任命」できるようになった。三番目に、指揮権に対する忠烈王の要請をモンゴルが受け入れ、それに忠烈王を行省丞相に任命することで、モンゴルは高麗王の役割を認めた。

結局、日本遠征を準備するプロセスの中で、忠烈王はこのプロセスを自分の王権強化に利用しようとする狙いを持っていたと言える。そして、その狙いは忠烈王が丞相となる時点で、ある程度所期の目的を達成したと評価できる。

[原文は韓国語、翻訳：李へり（韓国外国語大学）]

対蒙戦争——講和の過程と高麗の政権をめぐる環境の変化

李 命美（ソウル大学）

モンゴルとの戦争と交渉、また講和に至る過程は、高麗のなかで政権を掌握していた武臣政権が終わり、王権が回復されていく過程と連動していた。本発表では、このような過程にみられる高麗王権 - 政権をめぐる政治 - 外交的環境の変化について検討してみたい。

以前の高麗の外交 - 交渉相手とは違い、モンゴルは遊牧国家としての周辺との関係形成を戦争の時期から講和の段階に至るまで持続的に強く要求してきた。30 年から 40 年にわたる戦争と交渉の過程において、高麗側はこのような要求にそのまま応ずることはなく、そのときの状況に応じて対応した。その結果の一つとして挙げられるのが高麗宗室の外交的 - 政治的活動であった。このような様相は、政治単位的首将間の直接的な対面やそれを含めた個人間 - 家門間の関係を重視したモンゴルの関係形成の在り方と関連したものであった。高麗王朝体制において太子を含む宗室は、その政治的 - 外交的活動が表面に表れることは殆どなかったが、モンゴルとの戦争を期に浮き彫りになった高麗宗室の活動の様子は、戦争が終わってからも続き、高麗 - モンゴルの関係、及びその中での高麗国王権をめぐる環境の変化をもたらした。

一方で、高麗 - モンゴル間の「完全な」講和に至る過程は、高麗の元宗が武臣執権者であった林衍により廃位され、再び復位される過程と重なっているが、この過程もまたモンゴルとの関係による高麗王権をめぐる状況の変化の一面をみせてくれる。既存の東アジア国際秩序の中において、高麗国王は中国皇帝の「冊封」を受けていたが、それは事後的な性格が強いものであり、実際に高麗国王の即位と退位（あるいは廃位）は高麗の内部事情によるものであった。しかし、世子（以後、忠烈王）の請婚（求婚）と請軍が受け入れられ、軍を帯同したモンゴルの詔使が派遣されることになると、高麗王権は「実質的な冊封」と「皇室との通婚」という二つの関係を通じて皇帝権と直接つながることになった。それは既存の国家間関係の形で存在していた「冊封」が実質化していく変化であると同時に、モンゴルにおける政治単位間の関係を媒介 - 維持する重要な形式であった通婚という家門間の関係形成の形が、高麗 - モンゴルの関係にも適用されることになる変化である。それは、相互に関係しながら高麗王権をめぐる環境の変化をもたらしており、このような変化は、以後、高麗 - 元の関係のなかで発生する様々な政治的事件を誘発した構造的な変化であったと言える。

[原文は韓国語、翻訳：金相律（東京大学）]

北元と高麗との関係に対する考察——禡王時代の関係を中心に

チェックメッド・ツェレンドルジ（モンゴル社会科学院歴史研究所）

明に首都を奪われ北への撤退を余儀なくされた 1368 年から 1388 年までの元を「北元」と呼ぶ。北元の時期は、中元の覇者がはっきりせず、情勢がどのように変わるか予断を許さない過渡期的な時期であった。

北元と高麗の関係は、大きく「公民王時代の関係」と「禡王時代の関係」という二つの時期に分類することができる。公民王時代には元と明が角逐をしている隙をみて高麗は自主性を強化させる政策を行なった。1369 年、公民王政権は、元との関係を断絶し、明と事大関係を構築した。それだけでなく、元の領土を征伐するなど、敵対的な態度を示した。公民王のこうした処置はあまりにも性急な判断であった。そうしながらも公民王は、事実上北元とも関係を完全に断ち切れず両端関係を結んでいた。

1372 年を前後に北元は、内外の安定を回復させ、高麗に対する外交活動も活発化した。しかし、公民王が親明

政策を頑なに固守したため、高麗に対する懐柔政策は失敗した。

公民王を継承した禡王時代から高麗と北元関係には大きな変化が見られた。高麗は、ただ明と事大関係を維持するだけでなく、一時期国交が断絶していた北元とも関係修復を試みた。しかし、このような試みは反対勢力の猛烈な反対により、紆余曲折の末、やっと達成された。

高麗の北元との関係再開は、公民王の一方的な外交政策を修正し、明をけん制しようとする北元と高麗の実質的な必要性から始まった当時東アジア勢力バランスを維持しようとする努力の結果であった。

本稿では、禡王時代の北元と高麗との関係の推進過程、そしてこの関係が当時東アジアの歴史に及ぼした影響及び結果に関して全体的に検討してみたい。

[原文は中国語、翻訳：李へり（韓国外国語大学）]

第4セッション

モンゴル帝国の食文化の高麗への流入と変化

趙 阮（漢陽大学）

13世紀のモンゴル帝国建国以来、大規模な移動が起こり、その後、各地域で文化交流が行われた。文化的な接触や刺激、変化は、モンゴル帝国時代の物質文化の領域の中でも、食文化に大きく反映されている。13世紀、モンゴルがユーラシア大陸を征服後、各地域でモンゴルの皇帝に食事をもてなし、14世紀には帝国の中心部で食文化の多様化や融合が見られた。食文化の変化は、帝国の中心部から次第に周辺地域にも広まった。1260年モンゴルと高麗の和親締結後、高麗に仏教で禁止されていた肉食文化が流入した。

朝鮮時代は、仏教の衰退とともに茶に代わる飲み物が発達した。14世紀『飲膳正要』に紹介されていた清涼飲料水の舎兒別の調理に関する知識が、17～18世紀朝鮮後期の日用生活書である『山林經濟』と農書『林園經濟志』に渴水として紹介されている。本発表では、モンゴル帝国の食文化の多様化と高麗地域への流入の過程を検討し、朝鮮半島で起こったモンゴルの食文化流入の跡を辿りながら、13世紀のモンゴル帝国が拡大する中で現れたモンゴル帝国のグローバル現象の特徴とその意味を見ていく。

[原文は韓国語、翻訳：金 範洙（東京学芸大学）]

「深簷胡帽」考

——蒙元時代における女真族の帽子の盛衰史

張 佳（復旦大学文史研究院）

明太祖の洪武元年に発した「胡服」を改める詔令には、元の時代に流行っていた「深簷胡帽」も対象となっていた。蒙元時代の資料を総合的に考察すれば、鮮明な時代的特徴を持つ「深簷胡帽」は即ち「幔笠」のことだと判明する。「幔笠」はそもそも金の女真族の服飾であったが、後にモンゴル人に受け入れられ、さらに蒙古の遠征とともに中国、高麗、中央アジアないしペルシアにまで広がった。君主から大臣官僚、知識人、庶民に至るまで各階層で広く着用されていた。元明交代以後、「深簷胡帽」が漢民族の士大夫たちに、元の時代に中国がいかに胡化されたかの重要な象徴だとされ、たちまち歴史の舞台から退いた。朝鮮半島においても、高麗から朝鮮王朝への交代の際に似たようなことがあった。

「幔笠」は鮮明な時代的特徴を備えているが、これまでの蒙元服飾研究においては正確に理解されておらず、明の帽子との混同も見られた。「幔笠」に関する研究は、重要な図像資料の生成時代を明らかにすることができる。また、東アジアにおける「幔笠」の流行と消失は、かつて一世を風靡した「蒙古スタイル」の盛衰や、東アジア儒者知識人の「胡漢・華夷」思想の消長の歴史の一側面を物語っているといえよう。

[原文は中国語、翻訳：丁 莉（北京大学）]

【発表論文1】

モンゴル・インパクトの一環としての 「モンゴル襲来」

四日市康博（昭和女子大学・非常勤講師）

はじめに

13世紀から14世紀にかけてモンゴル帝国およびその継承政権の支配は東西ユーラシアの各地に拡大し、その影響は様々な地域や社会に及んだ。そのため、ユーラシアの東西では言語・宗教・民族など文化的な枠組みを超越してモンゴルの共通様式が見られる¹。そのような経済的・文化的交流の背景として、モンゴルの覇権に伴う東西交通の安定を意味する「モンゴルの平和」Pax Mongolicaがあったと言われている²。ただし、この概念はあくまでも一面的な見方に過ぎず、それだけで経済的・文化的交流の全てを説明できるわけではなく、ましてや、モンゴル覇権下のユーラシアで戦争のない平和な状態が享受されたことを意味するわけではない。モンゴルとユーラシア各地の文化圏や社会とは、時には衝突し、相克し、共存し、融合しつつ、多角的かつ重層的に両者の交流がおこなわれた。すなわち、ユーラシア各地において、いわゆる「モンゴルの衝撃」Mongol Impactがあり、そして、それに対する各地域・各社会のレスポンスが存在したことを認識しなければ、交流の内容もその後の影響も理解することはできない。この場合の「モンゴルの衝撃」には、短期の政治的・軍事的なインパクトだけでなく、長期的な経済的・文化的なインパクトも含まれる。つまり、「モンゴルの平和」と「モンゴルの衝撃」は同時に存在する表裏一体的な概念であり、ユーラシア全体における「モンゴルの平和」を理解するためには、ユーラシア各地における「モンゴルの衝撃」とそれに対する各地域・社会におけるレスポンスを知る必要があるだろう³。

1. モンゴル帝国 = 元朝の海域アジア経略と日本侵攻

日本への「モンゴル襲来」を扱うには、モンゴル帝国 = 元朝の海域アジア全体に対する経略方針についても見ておかなければならない。モンゴル帝国の侵攻は金朝、高麗、南宋、日本、ビルマ、チャンパー、ベトナム、ジャワなど多角的におこなわれたが、決してそれぞれが別個におこなわれたわけではなく、全てが連動していた。日本に焦点を当ててみると、日本への「モンゴル襲来」は元朝と日本の二国間外交だけによる結果ではなく、高麗を介した三カ国間の国際関係が反映された結果であり、さらには高麗における独立勢力であった三別抄もモンゴ

1 モンゴル帝国期は、ユーラシアの東西において、モンゴル語、トルコ語、ペルシア語、チベット語、漢語など発令された文書の言語の如何にかかわらず、類似した文章構造や共通の特定語彙が使用された文書が見られる。このようなモンゴル帝国期に共通する様式を持つ文書は「モンゴル帝国様式文書」或いは「モンゴル命令文書」などと呼ばれる。詳細は、四日市 2015 および Yokkaichi 2015 を参照。

2 「モンゴルの平和」Pax Mongolica は「タタールの平和」Pax Tatarica とも呼ばれ、早くは Michael Prawdin などがその概念を提唱している（Prawdin 1937; 佐口透 1970; 四日市 2001 などを参照）。ただし、Prawdin や佐口など初期の「タタールの平和」論に見られるような政治的・軍事的な安定が全ユーラシア規模で実現していたとは考えられない。「モンゴルの平和」とは、あくまでも経済面・文化面に寄与した東西交通の安定化のみを指す限定的な分析概念である。したがって、ユーラシアにおけるモンゴル帝国の覇権を「モンゴルの平和」という概念だけで表すのは極めて一面的であり、各地の社会・文化に動揺を与えた「モンゴルの衝撃」Mongol Impact も同時に論じなければ、片手落ちである。

3 この問題に関して、2016年12月に国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト：考古学・歴史学から見た「海域アジアのモンゴル襲来」」(International Symposium "Mongol Impact on Eurasia: Archeological and Historical Perspectives of the Mongol Invasion") が昭和女子大学において開催され、日本、中国、韓国、ベトナム、モンゴル、オーストラリア、イスラエルから考古学者・歴史学者・地域研究学者が報告をおこない、活発な議論がおこなわれた（オーガナイザー：菊池誠一・四日市康博ほか）。このシンポジウムの成果は単行本として2017年度に刊行される予定である。

ル、日本双方に対して外交的な動きを見せていたことが知られている⁴。

周知のように、日本侵攻の切っ掛けとなった建言は高麗人の廷臣である趙彝によるものであったが⁵、趙彝が建言をおこなった至元二年(1265CE)というタイミングは、モンゴルの度重なる侵攻に対して中統元年(1260)に高麗がモンゴルの冊封を受け容れ⁶、また南方では中統三年(1262)に陳朝ベトナムが三年一貢の約(朝貢)を受け容れて安南国王に封じられ⁷、本格的な南宋侵攻を前にして、いかにその隣国の日本を処遇するのか様子を伺っているという局面であった。モンゴルでは伝統的に戦争の最前線で帰順した敵兵は次の戦闘の前線に送られることになっている⁸。この習慣に従えば、新たに服属した高麗の兵も次なる戦場へ送られるはずであった。ところが、この直後、至元五年(1268)の襄陽攻略戦を皮切りに本格的な南宋攻撃が開始されたものの、高麗軍が対南宋攻略戦に動員されたという記録はほぼ見られない。彼らが動員されたのは、珍島・耽羅(済州島)に立てこもった三別抄軍の平定、さらにはその海の向こうに位置する日本攻略であった⁹。日本に侵攻してきた軍の主体は、第一次侵攻(文永の役)時も第二次侵攻(弘安の役)時の東路軍(高麗発艦隊)もモンゴル帝国による一連の高麗経略の末期に送り込まれ、三別抄を平定したヒンドウの軍および高麗から帰属した洪福源・洪茶丘の軍であった。つまり、モンゴルによる日本侵攻は明らかに高麗経略の延長線上のものとしてあったのである。

一方、モンゴルの日本侵攻は高麗以外の国々に対するモンゴルの経略とも互いに並行・連動していた。このとき、東南アジア方面では、陳朝ベトナムとの関係が表面上は安定化していたものの¹⁰、ビルマに派遣した使節に対するパガン朝の対応は反発的なものであり、摩擦が増大しつつあった。実際、至元十一年(1273)に第二次ビルマ派遣使節がパガン朝によって処刑されたことを受けて、第一次日本侵攻(文永の役)の三年後、至元十四年(1276)に元朝は第一次ビルマ侵攻を開始する¹¹。この時、元朝は東方における日本攻略、南宋攻略、さらに南方ではパガン攻略という3つの経略を同時進行していたのである。第一次日本侵攻、第一次ビルマ侵攻が失敗に終わると、引き続き、第二次侵攻の準備にとりかかるが、南宋の都、臨安を無血開城させ、さらに至元十五年(1279)の崖山の戦いを以て完全に南宋が平定されるのを待って、至元十七年(1281)に第二次日本遠征がおこなわれた。時を同じくして、東南アジア方面でもビルマ侵攻の動きが再び活発なものとなり¹²、至元十九年(1283)から南海交易の拠点であるチャンパーへの侵攻を開始¹³、至元二十年(1284)にはビルマへの侵攻が本格化した¹⁴。いずれも、南宋攻略軍が日本、チャンパー、ビルマへと振り分けられた結果であろう¹⁵。このように見てみると、日本侵攻が高麗経略の延長線上にあるばかりでなく、一方では、南宋攻略とも連動しており、その南宋攻略は東南アジア方面のチャンパー、ベトナム、パガンの攻略とも直接連動していた。つまり、日本侵攻は海域アジア全体におけるモンゴル帝国＝元朝の経略の一環として捉えられなければならないのである。

2. 海域アジア諸国への「モンゴルの衝撃」

前節で見たように、モンゴルの軍事的侵攻は東部海域アジア諸国のほぼ全域に及んだのであるが、もちろん、「モ

4 三別抄と日本の交渉に関しては、村井章介 1988(a) および石井正敏 2010 を参照。また、モンゴル侵攻以前の南宋、高麗、ベトナム、日本の外交については榎本渉 2015 を参照。

5 『元史』巻二〇八、外夷伝一、日本

6 『元史』巻二〇八、外夷伝一、高麗

7 『元史』巻二〇九、外夷伝二、安南

8 これと同じ習慣はチンギス＝ハンやオゴデイ＝ハーンが中央アジアからイランにかけて遠征をおこない、領土を拡大した際にも見られる。その記録が残される『世界征服者の歴史』にはモンゴル語でこの習慣を表した語は見られないが、ペルシア語では「ハジャル」hajar と呼ばれている。

9 至元五年(1268)には高麗国王が元宮廷に対して兵一万と船千隻を準備したと上奏してきたため、世祖フビライは都統領ドルズを派遣してこれを閲見させると共に黒山から日本に至るルートを視察させており、高麗の船兵が日本経略への転用を前提とされていたことがわかる。(『元史』巻六、世祖紀三、至元五年七月丙子)

10 実際には、ベトナムにおいてもモンゴルによる監督官ダルガチの派遣と厳格な要求に対する反発が増大しつつあり、モンゴルに対する反感は陳朝の太宗の死後、モンゴルとの戦争へと発展することになる。

11 『元史』巻二一〇、外夷傳三、緬。

12 『元史』巻一一、世祖紀八、至元十七年二月丁丑

13 『元史』巻二一〇、外夷傳三、占城

14 『元史』巻二一〇、外夷傳三、緬。

15 さらに、重罪人およびモンゴル兵、さらには、南宋から新たに帰順した「新附軍」がそれぞれ日本、チャンパー、ビルマへの遠征軍に振り分けられて用いられた。(『元史』巻一二、世祖紀九、至元十九年十一月甲戌；巻一二、世祖紀九、至元二十年五月戊午)

ンゴルの衝撃」はそのような軍事的インパクトだけに限られない。中長期にわたって経済的・文化的なインパクトをも各地域に与えたと考えられるのである。モンゴル側から各地域への「インパクト」には当然ながらある程度の共通性が見られるが、その「インパクト」に対する地域ごとの「レスポンス」、すなわち、政権や社会の反応やインパクトの影響による社会変容はそれぞれのケースによって異なっていたはずである。

高麗の場合はモンゴルと断続的に交戦と和解を繰り返し、最終的にモンゴル＝元朝側が態度を軟化させたことから、全面的に降伏して冊封を受け容れた。高麗は形式的にはモンゴル帝国の所領（＝属国）という扱いではあったが、実質的には高麗王家による独立支配を維持していた。これとよく似た国際関係としてウイグル王国、オングト王国など中央ユーラシアにあってモンゴル帝国に帰順した諸王政権が挙げられる。当然ながら、これらの国々はモンゴル帝国＝元朝の統治政策・財政政策などの影響・干渉を直接受けることになり、それだけモンゴルからのインパクトも強く、政治・経済・文化など多方面にわたっていたと言える。これに対して、高麗王家は融和という方法で対処した。すなわち、歴代の高麗王は公主（元朝皇帝の娘）を娶って駙馬（娘婿）となり、その王子は秃魯花（質子）として元朝皇帝のケシク（輪番近衛兼エリート育成機関）に出仕することで、モンゴル帝国の皇族に準ずる存在として優遇を受けることになった。高麗王家はそれら諸王家の中でもとりわけ高い地位を保証されている¹⁶。また、高麗の官制は元朝的な官制に準じるように改められ、高麗宮廷の王族・貴族の間ではモンゴル文化の受容も進んだ。従来はこのようなモンゴル帝国との融和を否定的に捉える傾向が強かったが、近年はむしろ肯定的に認識する研究者も現れている¹⁷。高麗王家は積極的にモンゴル帝国の上層部の一部となることによって「モンゴルの平和」Pax Mongolicaによる政治的安定や異文化受容を享受できたとも見るのであり得るのである。例えば、森平雅彦によれば、高麗期の王権の崇仏的要素が、続く朝鮮期には排されて、代わりに朱子学が体制教学としての役割を強めたが、この朱子学が本格的に伝播したのが元朝期であった。また一方で、元朝との関係を通じて、高麗仏教は中国仏教・チベット仏教・インド仏教との交流を深め、国家的宗教・民衆的宗教の両面において変容をきたしたとされる¹⁸。

一方、高麗と対照的なのがベトナムである。陳朝ベトナムの場合は、やはりモンゴルの攻撃を受けて冊封を受け入れたが、モンゴル側の全ての要求を受け容れたわけではなく、内政干渉が強まると反発が強まり、戦争に発展した。これにより、都のタンロンを陥落させられたが、結果としてモンゴル軍を撃退することに成功した。その後、陳朝は即座に朝貢をおこなって捕虜を返還し、冊封を再び受け入れている¹⁹。これによって陳朝は実質的な独立性を勝ち得たと考えられている。朝貢に伴う経済的な紐帯は維持したものの、モンゴルからの政治的干渉の排除に成功したのである。戦争に勝った上で敢えて形式的に服属することで二国間の関係を政治的な関係から経済的な関係に変換し、以後、「モンゴルの衝撃」は主に経済面・文化面に限定された²⁰。このことに関しては、ベトナムの政治的独立を守ったとか、ナショナリズム発揚の発端となったという評価が存在する一方で、「モンゴルの平和」および「モンゴルの衝撃」に伴うユーラシア＝インド洋海域世界規模の経済的・文化的交流の享受も限定的なものにとどまったという見方も存在する。

3つめのパターンとしてジャワのシンガサリ朝／マジャパイト朝が挙げられる。ジャワは日本と同じく招撫を受けた当初は元朝の冊封体制へ入ることを拒んだが、元朝の侵攻を受けて撃退した後には元朝に朝貢使節を派遣した。この時、マジャパイト王が元朝から王公に封じられたという記録は残っていないので、冊封を受けてはいないと考えられるが、以後、盛んに朝貢をおこない、元朝とジャワは戦役以前よりも緊密な通商関係を持つようになった²¹。「元朝・ジャワ戦役」が契機となって、以後の長期的な「モンゴルの衝撃」＝朝貢に伴う通商関係の樹立が生じたのである。なお、この通商関係の樹立はジャワ側の行動によって生じたわけではなく、元朝側もジャワ戦役に際して招撫使と商人の団をジャワの周辺諸国に派遣していたことが知られている。

16 モンゴル帝国＝元朝内における高麗王家の位置付けおよび高麗王政における反映に関しては、森平雅彦 2013（特に「駙馬高麗国王の誕生」（22-59 頁）；「高麗王位下とその権益」（60-104 頁）；「高麗王家とモンゴル皇族の痛恨関係に関する覚書」（105-146 頁）；「元朝ケシク制度と高麗王家」（147-203 頁））を参照。

17 森平雅彦 2013（特に「高麗・元関係史研究の意義と課題」（1-21 頁））；李康漢 2016 などを参照。

18 森平雅彦 2013, 5 頁, 291-309 頁。

19 元朝のベトナム経略の経緯に関しては、山本達郎 1950; 同 1975; 四日市康博 2015(b) を参照。

20 陳朝ベトナムおよびチャンパーと元朝の通商・経済関係に関しては、桃木至朗 2011 および四日市康博 2015(b) を参照。

21 『元史』巻一八、成宗紀一、元貞元年九月丁亥；巻一九、成宗紀二、大德元年十月乙卯

最後に、スマトラ島のサムドラ王国や南インドのマアバル（＝パーンディヤ王国）との関係を挙げておきたい。いずれの国も直接にはモンゴル帝国＝元朝の侵攻を受けてはいないし、冊封も受けていない。とはいえ、これらの国々にも遠征軍を派遣しようという動きが無かったわけではない。元朝宮廷ではタイ、スマトラ島から南インドにかけての国々に派兵をおこなう案も討議されたが、結局は使節を派遣して招諭することに落ち着いた。実際、至元十七年には、クーラム、マアバル、ジャワ、ベトナムが朝貢してきており、また、至元二十三年には、マアバル、ラムリー、サムドラを含む十ヶ国が朝貢をおこなっている。中でも、インド東南岸に位置するマアバル（＝パーンディヤ王国）は至元十六年から延祐元年までの間に、記録に見えるだけでも十数回にわたって朝貢をおこなっており、また、元朝側も度々使節をマアバルに派遣している。同様に、13世紀後半にスマトラ島北部に興った新興イスラーム政権のサムドラ王国もマアバルほど頻度が多くはないものの、至元十九年以後、何度か朝貢をおこなっている。これら、マラッカ海峡以西の諸国の朝貢の特徴として挙げられるのは、(1) 政治的目的よりも経済的目的が主目的となって朝貢をおこなっていたこと、(2) 単独で朝貢をおこなうのではなく周辺諸国や経由地の使節と同船して往来すること、の二点である。前者に関しては、マラッカ海峡以西の諸国に対して冊封がおこなわれた事例はほとんど見られず、また、世祖フビライ朝末期に朝貢に訪れた使節たちが商人に対する海禁によって帰還できない状況にあったことから、朝貢使節団に多くの海上商人が含まれていたことが知られる²²。後者に関しては、彼ら南海諸国の朝貢使節が元朝側の招撫によって朝貢に応じたものであったことが反映されている。ただし、これらのケースにおいて元朝側も帝国としての覇権を広く知らしめる目的もあり、また、サムドラをはじめとする海上諸国側もモンゴル帝国＝元朝の覇権を自ら統治権力の後ろ盾として利用しようという意図があったと見られる²³。その意味では、やはりこのケースでも中長期的な「モンゴルの衝撃」が存在し、それが経済的にも政治的にも利用されていたとすることができる。

3. 改めて日本における「モンゴルの衝撃」を考える

さて、以上のような事例が存在することを踏まえて、改めて日本に対する「モンゴルの衝撃」について考えてみたい。日本はモンゴル帝国＝元朝からの冊封を拒んで、その摩擦は戦争にまで発展してしまった。同様の事例は、ジャワやパガンなどいくつかの地域でも見られるが、先にも述べたように、日本の場合、戦後も元朝とは正式な国交を持たず、それにもかかわらず民間の交易は活況を呈していた点が特徴的である。

有名な「新安沈没船」は至治三年六月に慶元（現在の寧波）から博多に向かって航行中に風や潮流の関係で韓国沖の新安近海まで流されてそこで沈没した交易船である。この沈船遺跡の船艙からは積み荷がほぼそのまま出土しており、搭載されていた陶磁器、銅銭、紫檀材などは膨大な数量にのぼる²⁴。この新安船が慶元を出航した時点で 至元十八年／弘安四年（1281）の第二次日本侵攻（弘安の役）からおよそ四十年経っているわけであるが、この前後四十年ほど、成宗テムルの大徳年間後半から文宗トク＝テムルの至正年間初期にかけて——十四世紀前半期には頻繁に日本と元朝の間をジャンク船が往来していたことが知られている²⁵。さすがに元朝・日本戦役の直後には交易船が両国間を往来した記録は残っていないが、戦後およそ十年後の至元二十九年（1292）には日本側が三艘の交易船を仕立て、そのうち一艘だけが慶元に到達できた記録が残っている²⁶。また、日本側にも正応三年（1290）に唐船から貿易の利益を差し押さえた記録が残っており、既に通交が再開されていたと見られる²⁷。つまり、

22 『元史』巻一八、成宗紀一、至元三十一年十月乙巳

23 マルコ＝ポーロは小ジャワ（スマトラ島）Java la menor/Giava minore の八王国のうちバスマン王国 royaume de Basma/regno di Basma（バサイ王国）、サムドラ王国 royaume de Samatra/regno di Samara、ダグロイアン王国 royaume de Daroian/regno di Dragoian、ラムリー王国 royaume de Lanbri/regno di Lambri、ファンスール王国（パルス王国）royaume de Fansur/regno di Fanfur が元朝の皇帝を「大ハン」le grant kaan/il gran Can と呼んで臣従しているが、実際には直接の朝貢はおこなっていないことを伝えている。（Marco/F, pp.171-174; Marco/R, pp.260-264.）

24 新安沈没船に関しては、文化 公報部 文化財 관리국 1981-85; 文化 公報部 文化財 관리국 1988; 文化 公報部, 국립해양유물전시관 2006; 川添昭二 1993; 村井章介 2013(a)などを参照。

25 ただし、この後、元朝の沿海では日本人による暴動に起因する短期的な貿易の途絶が散発する。榎本渉はこれらをそれぞれ「至大倭寇」「泰定倭寇」「元統倭寇」と呼ぶが、榎本自身が指摘しているように、これらの倭寇は暴動的な要素が強い単発的な事件であり、明代以降の倭寇とは性格を異にすることは注意が必要である（榎本渉 2014, 97-98 頁）。

26 『元史』巻一七、世祖紀一四、至元二十九年六月己巳

27 正応三年四月二五日付関東御教書（福岡市教育委員会『大悲王院文書 一〇』）；榎本渉 2006, 243-244 頁。榎本は 1280 年代の後半には入元僧が存在しており、

少なくとも戦後十年で博多・慶元間の交易船の往来が再開され、さらにその十年後には日本と元朝の交易がかなりの活況を呈するようになっているのである。この第二次日本 - 元朝戦役後の十年間、すなわち、世祖フビライの至元年間後半期は、財政拡大策をはかった権臣アフマドが失脚したものの、続いてウイグル人宰相サンガの推挙を受けた盧世栄が財政改革に着手し、続いてサンガ自身が大量のムスリム・ウイグルを財務官僚に任命して、アフマドと同じく財政拡大策がはかられた時期である。この時期、特にマラッカ海峡以西の南海諸国が大挙して元朝に朝貢をおこない、また、ムスリム商人たちの貿易活動も活発化し、南海貿易は大いに繁栄した²⁸。しかし、榎本渉が指摘するように、日本と元朝間の貿易はその時流とは逆の傾向を示している²⁹。先にも触れたように、日本と元朝の間でジャンク船が盛んに往来するようになるのは、次代の成宗テムル＝ハーン朝後半期からであり、戦役以後、世祖フビライ朝末期までは交易も決して活発ではなかった。その理由は、やはり元朝 - 日本戦役であった。といっても、二度にわたっておこなわれた第一次・第二次日本侵攻（文永・弘安の役）の影響ではない。第三次の日本侵攻が計画されていたからである。日本の商船が通商を再開した至元二十九年（1292）の時点で、なお日本侵攻計画が持ち上がっている。

至元二十二年（1285）、元朝では第三次日本侵攻をおこなうために征東行省が設置され、その宰相にアタハイ、劉国傑、陳巖、洪茶丘らが任命された³⁰。翌年、世祖フビライは日本よりもベトナムへの侵攻を優先する旨の宣言をおこない、また、高麗に隣接する東方三王家領で叛乱が続いたことから、一旦日本侵攻の中止が宣言されるが、東方三王家の叛乱やベトナム、チャンパー、ジャワの戦役が収束した至元二十九年（1292）に、再び日本侵攻の建言がおこなわれ、高麗王忠烈王もそれに賛同したことから第三次日本侵攻が実現に向けて動き始めた³¹。しかし、この時、既に世祖フビライは高齢であり、二年後の至元三十一年（1294）、フビライが死去すると、第三次日本遠征もそのまま沙汰止みとなった。つまり、第一次・第二次の日本侵攻が収束した後の十年間は、未だ「戦後」とは言えなかったのである。むしろ、条件さえ揃えば、三度目の日本遠征をいつフビライが命じてもおかしくない状況が続いており、「戦争直前」と言っても差し支えない状況であった。これは元朝と隣接していたベトナムやチャンパーにおいても同様である。しかし、結局、第三次の日本侵攻は実現しなかったのに対して、チャンパー、ベトナムに対しては日本戦役の後に第二次、第三次の侵攻がおこなわれている。さらには、その後、ジャワに対しても遠征軍が派遣されている。この違いはやはり、ベトナム、チャンパー、ジャワが南海交易の幹線ルート上に位置していた要衝であったのに対して、日本は当時の海上交通の大動脈とは外れたところに位置していたことが大きいと考えられる。ベトナム、チャンパーを経由する「西洋航路」に対して、日本や琉球が福建地方やマニラなどと結びついた「東洋航路」が重要性を増すようになるのは十六世紀以後のことである³²。この時点では、元朝は南海を経由してイスラーム諸国まで達する「西洋航路」沿線の国々に対する経略を優先させていた。それは、当然、軍事・政治上の意味合いだけでなく、経済・商業的な目的が多分に含まれていた。元朝によるベトナム侵攻においても、続くジャワ侵攻においても、商人や貿易を目的とした招撫をおこなう一団が遠征軍に同行している³³。しかし、日本侵攻においては、そのような貿易振興的な目的を持った人間が同行していた痕跡が確認できない。あくまでも高麗経略・南宋経略の延長線上として日本経略がおこなわれたと考えられる。結果として、そのような背景の違いによって第三次日本侵攻が実現に至らなかったのではないだろうか。世祖フビライの死後に即位した成宗テムルは大徳三年に禅僧の一山一寧を使節として日本に朝貢を促しているが³⁴、フビライの時代に比べると日本に対する姿勢はかなり軟化しており、既に武力によって冊封に組み込む意図は無かったとみられる。成宗テムル朝以後も中央ユーラシア方面ではモンゴル宗族間の武力衝突が絶えなかったのとは対照的に、日本を含む海域アジア諸国に対する軍事侵攻はほぼ見られなくなる。よって、成宗テムル朝以後をもって日本 - 元朝戦役もよう

両国の交通も再開していたと見ている（榎本渉 2006, 143-144 頁；同 2014, 95 頁）。

28 この時期の元朝の財政・商業政策と南海交易の関係については、四日市康博 2015(b) を参照。また、マラッカ海峡周辺の諸港市王国による海上貿易については、深見純生 2004, 同 2006 を参照。

29 榎本渉 2006；同 2014。

30 『元史』巻一三、世祖紀一〇、至元二十二年十月癸丑

31 『高麗史』巻二九、世家三〇、忠烈王三、忠烈王十八年〔八月〕丁未；巻三〇、世家三〇、忠烈王三、忠烈王十八年〔九月〕壬午

32 東洋航路・西洋航路に関しては、四日市康博 2015(b) を参照。

33 四日市康博 2015(b), 26-29 頁。

34 『元史』巻二〇、成宗紀三、大徳三年三月癸巳。なお、この国書の写しが金沢文庫に残されている（『金沢文庫古文書』6773）。

やく戦後を迎えたと見て差し支えないだろう。日元間の交易が活況を呈するのはまさにこれ以降の時期である。

では、元朝 - 日本戦争以前と以後では、どのような違いが見られるのであろうか。村井章介によれば、日宋・日元の交易には貿易船到来頻度の規制、日本人の渡海規制、銅銭流通禁止などの規制が実施されていたが、それらはいずれも建前上のものであったという³⁵。しかし、元朝の第一次日本侵攻の直後から鎌倉幕府は具体的・実効的な規制措置を取り始める。弘安四年(1281)、鎌倉幕府は新たに入国する外国人に対して規制するという法令を出し、次いで正安二年(1300)には鎮西探題に外来者の管理・監督の権限を付与し、「異賊防禁」の名のもとに鎮西探題の軍事機能を強化した³⁶。これらがきっかけとなって博多には次第に公権力の支配が浸透していったと村井は説明する。しかも、博多を構成する博多浜と息浜はその後の支配者が別々となり、都市博多の一体性を阻害したと同時に公権力の関与を強める結果となったという。このように見ると、元朝 - 日本戦役という短期的な軍事インパクトが政治的・経済的・文化的な長期インパクトとしてその後も大きな影響を与えていったことがわかるだろう。

これと同様のことは元朝側にも言うことができる。榎本渉は元朝 - 日本戦役以後の日元交通の展開について、従来あった戦役以後に貿易政策が消極化したという説を否定し、元朝側の倭船警戒根拠を日本の招撫失敗による不臣服であったと結論づける³⁷。私もこの論に賛同する。元朝の日本侵攻という戦役自体、日本の臣従による冊封体制への編入を目的としたものであり、その後の元朝側の警戒は戦争そのものに対する反動よりも、朝貢国として日本を管理下に置くことができなかったことに起因するであろう。しかも、元朝側の警戒にもかかわらず、盛んに交易船が往来しているという事実は、両国間の交易による利益が両国政府の没交渉や相互不信を上回るほどのものであったことに他ならない。特に日本側からのアプローチには強いものがあり、日本と元朝間を往来していた交易船は中国のジャンク船であったにもかかわらず、主に日本側の需要に添う形で運行されている³⁸。このような日元交易船は日本側では「寺社造営料唐船」と呼ばれているが³⁹、これは或る意味、貿易構造や内容の変化を反映したものであった⁴⁰。例えば、経済面では元朝からも宋銭を多く含む大量の中国銭が日本に輸入され、銀が日本と元朝の双方向に流通していたが⁴¹、モンゴル帝国期はユーラシア全体を銀が環流した時代として知られている。また、元朝下における書画・陶磁器・茶文化などは日本における唐物受容と不可分であり、それは続く明代一室町時代にも継承されてゆく⁴²。それらの中には必ずしもモンゴルのとは言えない要素も含まれるが、元朝統治下の華北・江南で継承され発展していったものであり、やはり元代には元代の特徴がある⁴³。元朝後半期に日本と元朝間での僧侶の往来は空前の盛行を迎えたが、村井章介や榎本渉はこの時期を「渡来僧の世紀」と呼んでいる⁴⁴。これらの文化交流は一見すると「モンゴルの衝撃」と結びつかないような印象を受けるかもしれないが、そ

35 村井章介 2013(a), 264-266 頁。

36 鎌倉幕府追加法四八八条(異国警固条々)、七〇一条(牒使来着時在所并問答事)(『中世法制史料集』第一巻, 249 頁, 307 頁); 村井章介 2013, 265 頁。

37 榎本渉 2007(b), 106-117 頁; 森克己 1975, 366-370 頁, 511-525 頁。江静 2000, 同 2002 も参照。

38 その理由としては、日本から元朝側に航行する交易船はいずれも元朝側の市舶司廃止・下海禁止期間と関係なく元朝側の港(主に慶元)に入港しているが、日本へ帰航する際には市舶司廃止・下海禁止期間中は出港することができず、下海禁止令が解除されて初めて出港していることが挙げられる。詳しくは、四日市康博 2016 で取り上げた。

39 「寺社造営料唐船」に関しては、村井章介 2003、村井章介 2013; 中村翼 2013 などを参照。また、寺社造営料唐船の個別の事例に関しては、福島金治 1991; 福島金治 1996; 永井晋 2010 も参照。

40 南宋期に博多から多く出土する「綱」銘および「綱首」銘墨書陶磁器は元代になるとほぼ見られなくなる。これは、宋代の綱を中心とした海上貿易構造が元代には変容したことを示唆している。一方で、新安沈没船からは「綱司」銘の木簡が多数出土しているが、この「綱司」が「綱首」と同様の意味として用いられていたのか、或いは別の立場の者であったのか、未だ解決されていない。

41 日本から中国への銀の流れは、『至正四明續志』巻五、市舶物貨、細色に「倭銀」として、日本の銀、特に対馬銀が慶元(現 寧波)経由で元朝に輸入されていたことが明らかである。一方、博多の聖福寺では江戸時代の享保元年(1716)に元代の銀錠が出土しており、その際の様子伊藤東涯の『壺簪録』に記されている。これは銀の流通が決して一方行ではなく、中国から日本へも銀の流通があったことを示している。(『壺簪録』巻四)

42 具体的な事例としては、例えば、村井章介 2003; 榎本渉 2003 などを参照。

43 端的な事例としては、日本の唐物文化・禅宗文化のなかに散見する「蒙古文字」、すなわち、パクパ字が挙げられる。日本では蒙古字をパクパ字として認識した上で積極的に持ち込まれたわけではなかったが、それでも随所にパクパ字が残されている。例えば、茶壺に利用された福建・広東産の褐釉四耳壺(後にルソン壺と呼ばれるようになる)や青磁にはしばしば漢字の吉祥句が刻されているが、兵庫・鹿児島・博多(新安船)・沖縄などではパクパ字のスタンプ印を刻した四耳壺やパクパ字銘のある青磁が出土している(たつの市埋蔵文化財センター 2015; 石垣市総務部市史編集課 2008; 鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会 2006)。また、室町後期の臨済宗の禅僧、玉隠英興は自らの名をパクパ字で表記した落款印を作成している(日本経済新聞社 2003)、これはパクパ字の漢字音との対応表を示した韻書である『蒙古字韻』を参照したと見られ、十五〜十六世紀までは玉隠が住持を務めた建長寺、或いは金沢文庫などに日本に将来された『蒙古字韻』が残されていたと考えられる。

44 村井章介 2013(b); 榎本渉 2007 などを参照。

れらはモンゴルの覇権下に隆興した経済・文化交流によってもたらされたものであり、「モンゴルの衝撃」と無関係と言うことはできない⁴⁵。

おわりに：「^{モンゴル・インパクト}モンゴルの衝撃」とは何であったのか

日本だけを主体に考えると、「モンゴルの衝撃」とは戦役そのものが最大かつ主体的なインパクトであったと思われるがちである。実際、従来のモンゴル襲来研究は、主に戦役前の外交関係や戦争そのものだけに焦点が当てられてきた。しかし、先に見たように、海域アジアの他の諸地域の事例も勘案してみると、「モンゴルの衝撃」とは決して戦役のみではなく、むしろ、戦後の政治関係・経済関係こそが社会や文化に大きな影響を及ぼした「長期的インパクト」であったことがわかる。さらには、戦前・戦中に生じた政治的なインパクトがその後の経済的・文化的インパクトに深い影響を与えていたことが確認される。言葉を換えれば、日本戦役の際して元朝・日本（鎌倉幕府・朝廷）双方から貿易や通交に関して規制がかけられ、それが貿易構造そのものに直接影響を与えたわけであるが、その状況とその後の揺り返しによる貿易隆興とは一連の流れとして捉えられなければならない。先の村井の説にあったように、日本-モンゴル戦争直後から日本側は貿易規制を急速に強めて、新たな来航者を制限したが、それにより、それまでの中国側に本拠を持つ漢人商人（いわゆる「宋商」）主体の貿易から博多に拠点を置く漢人商人（「宋商」の子孫たち）に主体が移り、さらには漢人商人の日本定住化が進むと、室町＝明代には「宋商」の子孫を含む日本商人に主体が移っていったと考えられる。いずれにしても、鎌倉・南北朝＝元代は日中貿易の構造が転換する過渡期であり、それには元朝-日本戦役とその後のインパクトが深く関わっていたのである。

本稿は紙幅の関係もあり、敢えて日本における「モンゴルの衝撃」の内容にどのようなものがあったのか具体的な事例は取り上げずに、「モンゴルの衝撃」が軍事的・政治的なインパクトに限られず、それらの短期インパクトがさらに経済的・文化的なインパクトに繋がったという点に主眼を置いた。本当にこのテーゼが正しいのかどうか、それには日本以外の地域も視野に入れつつ、具体的な事例を取り上げながら検証してゆかなければならないが、それは今後の課題として筆を置くことにしたい。

45 『元史』巻一七、世祖紀一四、至元二十九年六月己巳

【発表論文2】

アミルアルホンと彼がホラーサーンなどの地域において行った2回の戸籍調査について

チョグト／朝 克图（内モンゴル大学）

[原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）]

アルホンはモンゴルオイラト族に属し、モンゴル帝国の時代に、影響力を持っていた歴史上の人物である。彼はモンゴル帝国の支配するホラーサーンなど西アジア地域の第四任アミルであり、モンゴル帝国による西アジア地域の統治と管理に様々な計策を出し、大きな役割を果たし、その名前を歴史に残した。当時、著されたモンゴル帝国時代の歴史に関する様々な史料の中で、彼はアミルアルホンあるいはアルホンアゴなどと呼ばれている。彼はモンゴル帝国の西アジア地域に対する基本政策を忠実に実施し、モンゴルの大汗（モンゴル民族の皇帝に対する称号）が現地に対して行った直接的な統治を強化し、経済発展を促進する上で、積極的な役割を果たした。

国内外において、モンゴルの西アジア征服と統治に関する研究は多くない。その問題を扱う論文の中で、日本人学者本田実信の論文「阿母河等処行尚書省考」¹が相対的に大きい影響力を持っている。その文章は、モンゴル帝国の西アジアに対する征服と統治について詳しく記述しているが、モンゴル帝国が西アジアに派遣したアミルたちの業績と彼らが取った具体的な措置については全面的には述べていないから、この問題に関するさらなる研究が必要である。

モンゴル帝国の西アジア地域に対する統治と措置をさらに理解し把握するために、本論考は上述の論文に基づいてアルホンの生涯の事績を簡単に述べ、同時に彼がホラーサーンなどの地域において行った二回の戸籍調査の過程と意義を紹介することにより、モンゴル帝国の西アジア地域における統治と措置を考査した。

（一）アルホンの族源と早期の歴史活動について

アルホンの生涯と実績について紹介する前に、まず、その生涯と実績に関する歴史上の記載を正確に理解し、把握する必要がある。モンゴル帝国の時代にラシード・ウッディーンによって著された『歴史集成』とジュヴァイニーによって著された『世界征服者の歴史』などの史籍には、アルホンの生涯と実績についての記載がある。これらの史籍によれば、アルホンはモンゴルオイラト族に所属し、モンゴル帝国の時代に、影響力を有する歴史上の人物であることが分かる。アルホンについて、ラシード・ウッディーンの『歴史集成・オイラト部紀』には次の記載がある。

（例一）

イランとトゥーラーンには、過去も現在も多くのオイラト部アミルがいる。しかし、彼らが所属する支部が分からない。彼らの出身は彼らの間でしか分からない。その中に、アミルアルホン—アゴという人がいる。彼の出身は人々に尊敬されるものではない。オゴディカアン時期のある飢饉の年、彼の父は彼をジャライル部族のアミルであるイルゴーヘタン²に売って、牛の足一本と交換した。アミルイルゴーヘタンはオゴディカアンの師匠を担当していた。しかし、イルゴーヘタンは自分の子をオゴディカアンの宿衛怯薛の

1 本田実信、『モンゴル時代史研究』、東京：東京大学出版会、1991年、第101-127ページ。

2 原文は亦魯格・合丹であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

組織に送ると同時に、アルホンーアゴも一緒送った。アルホンーアゴは機敏であるから、段々と地位を手に入れ、イランの国政を握ってバシハ（鎮守官）の職³まで担当した。

アルホンの出身と成長については、『歴史集成・ジャライル部紀』にも類似した内容が記載されている。

（例二）

飢餓に面し、アミルアルホンの父は、アミルアルホンをルゲナヤン⁴の父ヘタンに売って牛の足一本と交換した。しかし、ヘタンは自分の息子にオゴディカアンの宿衛を担当させる。また、アミルアルホンを自分の息子の親兵にさせた。即ち、アルホンはその子の奴隷になった。アルホンは機敏で利口であり、また話し好きで頭がいい人だから、すぐに出世して、同世代の人々より高い地位を獲得した⁵。

以上の二つの記載において、アルホンの出身と成長に関する内容は基本的に一致している。しかし、細かく比べると、上記の史料には具体的な人名などに異なる点がある。例えば、例1では「彼（アルホン）の父は飢饉の年に、彼をジャライル部族のアミルイルゴーヘタンに売った」と記述しているが、例2において、その人は「ルゲナヤンの父ヘタン」である。上記の二つの記載のうち、どちらが事実と一致しているのだろうか？ それに関しては、さらなる研究が必要だと思われる。いずれにしても、上記の記載を通じて、アルホンの出身の部族の情報を得た。また、その成長や経歴などの重要な情報も手に入れた。

それ以外、ほかのモンゴル帝国の時代に著された史籍の中にも、アミルアルホンの出身に関する記載が見られる。

ジュヴァイニーによって著された『世界征服者の歴史』は、アルホンの事績を記載するもう一冊の重要な史籍である。この本ではアルホンのホラーサーンでの活動を大量に記述している。しかし、彼の出身と家族に関しては詳しく記載されていない。『世界征服者の歴史』では、アルホンの出身と家族について次のように記載されている。

（例三）

アミルアルホンはジャライル部の人であり、彼の父太出は千戸である⁶。

ここでは、アルホンの父の名前だけでなく、千戸であることも述べられた。これも重要な記載である。『歴史集成』の記載によれば、ジャライル部によって構成される千戸は四つある⁷。しかし、四つの千戸について、史籍には詳しい記載がない。アルホンの祖先について、『歴史集成』には前文で引用した二つの記載以外に、何の情報も見つからない。しかし、アルホンの子孫に関しては詳しく記載されている。

（例四）

彼の息子は、キライ・メリ、タリアジ、ニィウルシ、レケジ、ハジ、イカンレ・フトル、フレドヘイとカンイシダイである⁸。孫はグレケ⁹などたくさんいる。娘も大勢いる。何人かの娘は君主とアミルたちに嫁いだ。また、彼の息子であるニィウルシとレケジは（チンギスカン）皇族の娘と結婚し、チンギスカンの娘婿になった¹⁰。

アルホンがオゴディカアンの宮廷に務めてからのことについて、関連の史籍には詳しい記載がない。しかし、『世

3 著者ラシード・ウッディーン、余大鈞、周建奇訳『歴史集成』第一巻第一分冊、北京：商務印書館、1992年、第197ページ。

4 原文は魯格那顔であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

5 著者ラシード・ウッディーン、余大鈞、周建奇訳『歴史集成』第一巻第一分冊、北京：商務印書館、1992年、第153ページ。

6 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高濟、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』（下）、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第603ページ。

7 著者ラシード・ウッディーン、余大鈞、周建奇訳『歴史集成』第一巻第一分冊、北京：商務印書館、1992年、第368ページ。

8 キライ・メリ、タリアジ、ニィウルシ、レケジ、ハジ、イカンレ・フトル、フレドヘイとカンイシダイは中国語でそれぞれ乞来・灭里、塔里阿只、涅兀魯思、列克集、哈只、亦幹勒、忽都魯、不勒都黒と幹亦刺台である。

9 中国語で古列克であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

10 著者ラシード・ウッディーン、余大鈞、周建奇訳『歴史集成』第一巻第一分冊、北京：商務印書館、1992年、第198ページ。

『世界征服者の歴史』の記載から、アルホンの従事する仕事に関する情報が得られる。

(例五)

若いにも関わらず、オゴディカアンの宮廷に入り、ビチクチ¹¹を担当した。ますますカアンに寵愛された。まだ若い彼をヘバン¹²と一緒に、重要な使命を与えて契丹に向かわせた。彼は少しの間、契丹に泊まり、カアンに会見した。カアンはアルホンを信頼し、エディグティムール¹³とクオリギシ¹⁴の案件の審理と調査をアルホんに任せた¹⁵。

エディグティムールはクオリギシが朝廷での地位を固める前に、機先を制し、クオリギシの活動をカアンに報告した。そして、エディグティムールはトングズ¹⁶ (Tonguz) を推薦し、皇帝の前で、クオリギシを貶しめ、罪を被らせた。鎮海に恥を掻かせようとした人々は、彼のいない間に、アカンに彼のことを告発した。結果として、アルミアルホン、クルバクア¹⁷ (Qurbaqa) 及びシャマスーティン・カマガル¹⁸ (Shamas-Din Kamagar) は皇帝の命令により、この案件の事情を調査した¹⁹。

以上の記載からも分かるように、アルホンはオゴディカアンの宮廷に入ってから、ビチクチを担当したことがあった。前述の『歴史集成』に記載された内容(例一)(例二)と一致している。しかし、彼はジャルグチ(即断事官)としてエディグティムールとクオリギシの紛争に関わる。モンゴル帝国の時代に、ビチクチとジャルグチの職務は極めて近いから、筆者はアルホンがオゴディカアンの宮廷でビチクチを担当すると同時に、ジャルグチを兼任した可能性は大きいと判断した。

(二) アルホンはモンゴル高原とホラーサーンの間で往復する

西征が終わって、チンギスカンがモンゴル高原に帰った後、ジャラルルッディーンは印度からホラーサーンに戻り、一部の町を奪い、モンゴルの統治者と激しい対抗を展開した。そのため、チョルマグンはオゴディカアンの命令に従い、軍隊を率い、ジャラルルッディーンと戦った。

チンギスカンの時代に、モンゴルの軍隊はホラーサーンを占領し、ジョチはチンティムールをその地域の長官に任命した。チョルマグンがホラーサーンに着いたのち、チンティムールはオゴディカアンの命令により、チョルマグンと一緒にその地域を征服した。現地の指揮権を争って、チョルマグンとチンティムールの間に紛争が起こった時、オゴディカアンは現地の指揮権をチンティムールに渡すという命令を下した。こうして、チンティムールはモンゴル帝国がホラーサーン地域に派遣した第一任のアルミとなった。

チンティムールはホラーサーン各地に使者を派遣し、統治を固めた。当地の経済はすぐに回復し、さらなる発展を遂げた。チンティムールが亡くなった後、ノサエル²⁰がアルミになった。当時、モンゴルの統治者内部、そして、モンゴル統治者と現地官僚の間に、紛争が相次いだ。そして、現地官僚の権力は膨らみ、モンゴル帝国の税収を把握し、モンゴル帝国の統治者を悩ませた。

モンゴルの大汗にとって、如何に現地に対する管理と統治を強化するか、税収の仕事をいかに有効的に展開す

11 モンゴル語の音訳で、書記、秘書のことである。

12 中国語で合班であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

13 中国語で額得古鉄木ルであり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

14 中国語で阔儿吉思であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

15 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第603ページ。

16 原文は通忽思であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

17 原文は忽儿巴哈であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

18 原文は苦思丁・迦马格尔であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

19 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第589-590ページ。

20 原文は诺撒耳であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

るかは、解決すべき最大な問題である。だから、クオリギシはアルミになってから、戸籍調査や、税収の再開などの措置を取って、上記問題を解決し、ホラーサーンとマーザンダなどの地域の統治秩序を回復した。しかし、当時、チンティムールの息子であるイドティムールとクオリギシはその地域の指揮権奪取の紛争に陥り、宮廷で相手を誹った。大汗は紛争を解決する為に、事情調査をアルホンに任せた。最終的に、この事件はクオリギシの勝訴に終わった。クオリギシは勝訴して引き継ぎアルミを担当し、またアルホンを連れてホラーサーンに帰った。まもなく、アルホンは又モンゴル高原へ派遣された。その後、クオリギシはチンギスカンの黄金の氏族のメンバーたちと言い争って、死刑に処された。ドレゲネトレゲネはオクサス川からホルス、グルジア、ルーム及びモタリなどの地域の統治権をアルホンに渡した²¹。

アルホンはモンゴル高原からホラーサーンへ戻って、ヤルリグ²² (yarli'gh) を読み上げて、各地の長官を任命し、そして滞納の賦税を徴収するために弛まぬ努力を重ねてきた。チョルマグンとバイジュはホラーサーンに来てから、戦乱に乗じてその地域を自分の私有財産と見なした。特に、オゴディカアンが亡くなった後、諸王は各地域を巻き上げて、勝手に賦税を徴収し、ヤルリグ (yarli'gh) と札を発行し、当地を混乱に陥らせた。この状況のもとで、アルホンは現地の秩序を迅速に回復させる為に、税収軽減の政策を取ったから、現地の人々に擁護された。これまで、モンゴル統治者に反対する態度を持っていた人々も相次いでアルホンに帰順した。

グユクが即位したのち、アルホンはモンゴル宮廷に赴き、グユクに謁見した。グユクは彼に虎頭令牌とヤルリグ (yarli'gh) を賜った。モンゴル高原からホラーサーンへ戻ったアルホンは、各地にさまざまな宮廷と庭園を建設し、現地の人々に歓迎された。当時、アルホンの活動に反対するモンケボシ²³ はモンゴル高原に赴き、グユクにアルホンを誹った。その情報を聞いたアルホンは、自ら宮廷に赴き弁明しようとしたところで、グユクが亡くなった。そしてエルギテイ²⁴ (Eljigitei) がホラーサーンに駐在するという情報が伝わってきたため、アルホンはアルミフシンをオルドゥへ派遣し、彼自身はホラーサーンに残ることにした。

アルホンはエルギテイ (Eljigitei) のために、積極的に食糧などの軍需物資を用意した。しかし、各地諸王は勝手に賦税を徴収し、また、エルギテイ (Eljigitei) の徴発と要求が過酷であったため、現地の人々は困り果てていた。

以上の状況に鑑み、アルホンは再び宮廷に赴き、現地の状況を如実に報告した。朝廷でモンケボシと激しく論争し、勝利した。彼はホラーサーンに戻ってまもなく、クリルタイ²⁵ に行きモンケに謁見し、ホラーサーンなどの地域の様々な問題を如実に報告した。モンケはアルホンにホラーサーンで土地と戸籍を調査させ、税収の徴収などを強化させるように命じた。

フレグがイランに到着した時に、アルホンは自ら迎え、また、フレグを強力に支えた。まもなく、彼はフレグの命令に従い、再びモンゴル宮廷に赴き、モンケに現地の情報を報告した。アバカ・ハンがイル・ハン国を統治した時期に、彼は引き続き、各地の包税制の主管の職務を担当した。バラクがイル・ハン国に侵入した時、アルホンは伊利汗国の左翼軍隊を率い、バラクと戦ったが、失敗した。1275年に、アルホンはツシ²⁶ のちかくにあるアラトナシリの領地で亡くなり、ここに葬られた。

(三) アルホンがホラーサーンで戸籍調査を行った過程と意義

モンケに謁見した時から、アルホンはホラーサーンなどの地域での賦税と雑税の徴収で起こった嚴重な問題を如実に報告し、またヤラワチの河中地域での賦税徴収の方法を学ぶように提議した。ヤラワチの河中地域での賦税徴収については、『世界征服者の歴史』に具体的に記述されていないが、この本の下編『アルミアルホンがクリルタイに赴く』という章節の関連記載を通じて、次の内容が分かる。

21 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』（下）、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第604ページ。

22 原文は札儿里黑 (yarli'gh) で、勅令文書のことである。

23 中国語で蒙哥字刺であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

24 原文は宴吉只帯であり、参考になる訳名がないから、音訳でエルギテイとなる。

25 原文は大忽里台で、中世から近世にかけて開催されたモンゴルの最高意志決定機関のことである。

26 中国語で图思であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

(例六)

その結論のポイントは、百姓が負担する賦税と様々な勝手な雑税の数が多すぎることで、百姓が四散する原因となっている。だから、ヤラワチの河中地域での賦税徴収の方法で、賦税を徴収すべきである。即ち、クリルタイ (qupchur) 税のことである。人々が毎年納める税金は財産と納付の能力に基づいて決められるから、規定額の税金を納めたら、同年内には納める必要がないし、ほかの税金を負担させてはいけない。こうやって決めた²⁷。

以上の記載によれば、賦税を徴収する具体的な方法は「ヤラワチの河中地域における賦税徴収の方法」であり、即ちクリルタイ (qupchur) 税に関する内容であると推測できる。また、上記の「こうやって決めた」という言葉からも、アルホンがホラーサーン地域で、ヤラワチの賦税徴収と同様な措置を取ったと判断できる。

アルホンは上記の決定をモンケに報告した。モンケは彼の提案を聞いたのち、以下の勅命を下した。

(例七)

金持ちは毎年10%の税を納めるべきであり、財産に応じて、貧しい人は1%の税を納めるべきである。この税収の全部をハシャール (hashar)、駅 (yams) と使臣の生活費 (ikhrajat) などに使う。それ以外は、百姓を邪魔してはいけないし、不法な徴収を行ってもいけない。さらに賄賂を受け取ってもいけない。彼 (アルホン) は各状況に応じて、札撒²⁸を制定することができる²⁹。

モンケの以上の勅令の内容から見れば、裕福な人と貧しい人に対し、異なる税率を採用するという条文を制定したのはアルホンのアドバイスを採用したからである。同時に、モンケはこの地域の最高の権力をアルホンに与え、ナコル³⁰たちと他の地方官僚を任命した。

アルホンはモンケに謁見し、ホラーサーンに帰ってから、大汗の命令を如実に実施し、各地に派遣するアルミとビチクチを新たに任命し、議論を通じてコプチュル (qupchur) 税³¹の徴収額を決めた。

(例八)

彼は勅命に従い、アルミと書記を任命し、連日相談を重ね、コプチュル (qupchur) 税の徴収額を決めた。最後に、戸籍調査を実施した時に、税額を毎年十人ごとに七十%の税を納めるべきだと定め、アルミと書記に戸籍とコプチュルを制定させた。ホラーサーンとマーザンダにおいて、彼は諸王を代表するモンゴルアルミ及び彼の親戚であるノウフ³²、オルガナのビチクチであるハファヘルティン・ヒキシティ³³、丞相イエスティン・タシエル³⁴を彼の代表として指定した。彼はナイマダと私の父、サシボヂマン³⁵をイラクとイエツダに派遣した。(中略)そして、ツルマダイ、サリヘブホフ³⁶とマリクサドル・アルディンに、タブリーズの火者であるマイサツティン³⁷と協力してもらい、戸籍の調査、千戸の認定とコプチュルの徴収を手配させた。(中略)彼はダルバンを経由し、グルジア、アラン及びアゼルバイジャンに赴き、戸籍調査、コプチュル税の徴収などの仕事を完成し、イラクに向かった³⁸。

27 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第615ページ。

28 モンゴル語の音訳で、法律、条例のことである。

29 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第615ページ。

30 モンゴル語の音訳で、部下のことである。

31 コプチュル税は能力によって納める税金が異なる税のことである。

32 原文は脳忽であり、参考になる前例がないから、音訳を採用する。

33 原文は哈法合魯丁・比希昔惕である。参考になる前例がないから、音訳を採用する。

34 原文は撒希伯底万である。参考になる前例がないから、音訳を採用し、財政大臣のことである。

35 原文は也速丁・塔希耳である。参考になる前例がないから、音訳を採用する。

36 原文は撒里合不花である。参考になる前例がないから、音訳を採用する。

37 原文は麦术督丁である。参考になる前例がないから、音訳を採用する。

38 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第617-619ページ。

以上の記録には、アルミールアルホンがホラーサーンなどの地域で行った戸籍調査とコプチュル税の徴収の定額など具体的情報が記載されている。その戸籍調査はホラーサーン、マーザンダ、イラク、イエツダ、グルジア、アランとアゼルバイジャンなどの地域で同時に行われた。戸籍調査を通じて、当地の金持ちと貧乏な人々の経済状況を調べ、それに基づいて以上の税収の定額を定めた。つまり、徴収する税額について、現地の人々にとって負担できない状況を改善した。モンゴルの西アジアに対する統治が危機に直面した時、現地住民を安定し、社会経済の発展を促進し、モンゴルの統治を固める面において、アルミールアルホンの以上の措置は積極的な役割を果たした。

アルホンの戸籍調査が完成した時に、フレグがイランに到着した。アルホンは碣石でフレグに謁見した。その後、彼はフレグに依頼され、再びモンゴル高原に赴き、現地の状況について報告した。アルホンはホラーサーンから来た異なる政治見解を持つ使臣たちとの論争で勝った。そして、モンケに信頼された。この時期に、モンケはホラーサーン諸地域を自分の親戚と弟たちに分けた³⁹。

アルホンはモンゴル高原から、自分の領地に帰って、アランバイ⁴⁰に行き、フレグに謁見した。フレグは彼をグルジア（今のグルジア）に派遣し、再び戸籍調査を行わせた。

（例九）

アルミールアルホンはアラン地域にいるフレグを謁見しに行った。ここに到着して報告した後、彼は谷儿只に行き、戸籍調査を行い、現地住民を千戸に分けた。初めてのコプチュル税の税額を毎年十人ごとに七十的那を納めるべきだと定めた。ハシャール (hashar)、駅 (yams) と馬 (ulagh) の費用と軍隊の出費は予想を超え、当時定めたコプチュル税の税額を以てカバーできないため、足りない分は定めた税額の比例に応じて分担させる。（中略）アルホンはこの状況を報告し、金持ちのコプチュル税の税額を500的那に訂正し、貧しい人々が納めるべき1的那も比例に応じて調整するように命令された。新たな税収を行うために、戸籍調査も徹底的に実施された⁴¹。

上記の記載から分かるように、今回の調査において、アルミールアルホンは戸籍調査を実施しただけでなく、現地住民を千戸に分け、コプチュル税の税額を改めて調整し、裕福な人々と貧しい人々に対して異なる税収政策を取った。

周知のように、アルミールアルホンの管轄地域に、その後イリ汗国が建てられた。フレグをはじめとするイリ汗国の統治者たちは千戸制度を普及させ、現地に対して長期的かつ有効な統治を実施した。しかし、実際に、現地で初めて戸籍調査を行い、千戸制度を実施したのはアルホンである。だから、モンゴル帝国がイランなどの西アジア地域を統治する過程において、アルホンは極めて重要な役割を果たしたといえる。われわれには、アルホンの実績と彼の果たした役割について深く検討し、研究する必要がある。

39 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』（下）、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第620ページ。

40 原文は阿兰拜であり、参考になる前例がないから、音訳を採用する。

41 著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』（下）、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第621-622ページ。

【発表論文3】

蒙古襲来絵詞を読みとく ——二つの奥書の検討を中心に

橋本 雄（北海道大学）

はじめに

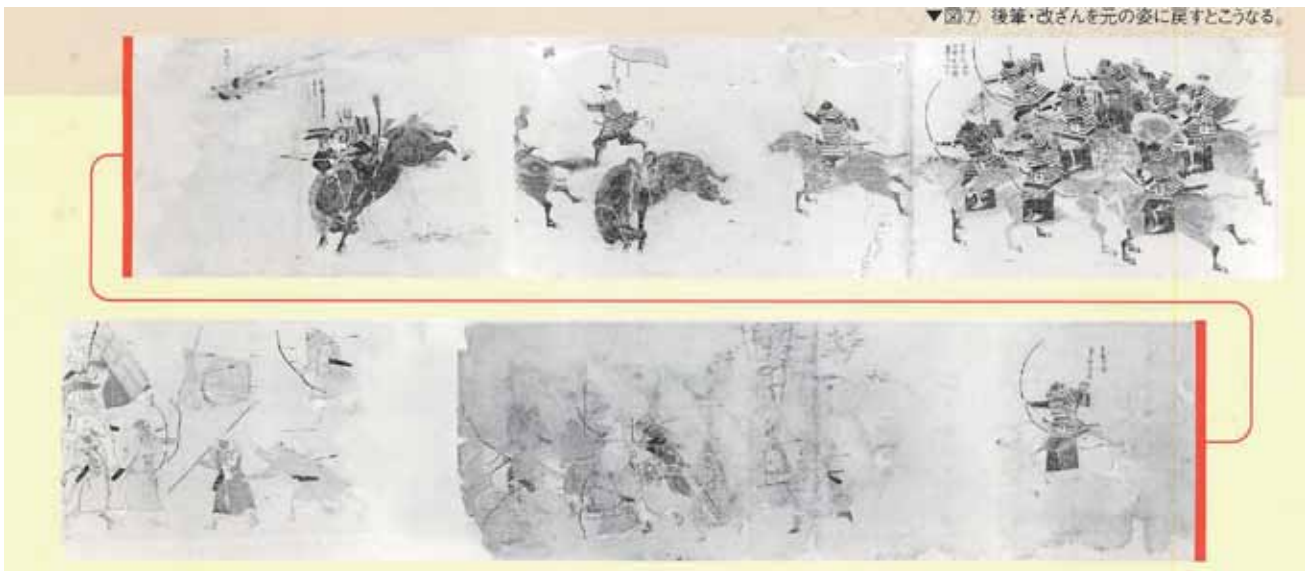
鎌倉後期に起こった蒙古襲来（モンゴル戦争）に関する史料の蒐集は古くから進められてきた。なかでも、この戦争に参加した、肥後国（現・熊本県）御家人の竹崎季長が描かせたという、通称「蒙古襲来絵詞」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）は、両度の戦争を活写した希有な歴史資料・絵画史料として著名である。モンゴル戦争の基本史料の一つとして、本絵巻がもっている意義は極めて大きなものがある。これはもはや斯界の共通認識と言ってよい。ただし、絵画作品の常として、迫力ある本絵巻といえども、もとより実景を描写したものではない（粉本・型紙の利用は日常茶飯事である）。この点を弁え、構築主義的に本絵巻を読み解いていく必要がある。

ところで、この絵巻が現在の状態（現状）になったのは、江戸時代の寛政年間（19世紀初頭）の修理・成巻による。また、この絵巻には錯簡や改変が多く、寛政の修理までの間に、少なからぬ補筆や改作が施されたことも確実である。そのもっとも典型的な具体例が、著名な下記場面であろう。3人の蒙古兵に立ち向かう、流血の馬上の竹崎季長。彼の頭上付近には「てつはう」（鉄炮；『金史』に見える「震天雷」カ）が爆裂している。そして図の左方には、日本兵の矢から逃げ惑う蒙古兵の姿が窺える。ひととき印象的なこの蒙古兵3人が、紙の継ぎ方の分析や赤外線写真により、絵巻原本作成時には存在せず、のちに加筆されたものだという事実が明らかとなった（佐藤鉄太郎氏・太田彩氏）。またしばしば注目される「てつはう」自体も、描画の時期はともかくとして、後世の書き入れであるという意見が出されている（佐藤鉄太郎氏）。「てつはう」描画の時期は措くにせよ、この場面は、別のストーリー仕立てだったものを、竹崎季長の勇猛さを印象づけるために料紙の順序を入れ替えて成ったものである。



*最近、服部英雄^{はっとりひでお}氏は、3人の蒙古兵が本絵巻と同時期に描かれたものであると主張した。その筆致の巧みさは、工房の主が希代の歴史事件を渾身の力で描いたためだとし、また紙継ぎ部分にわたって（多少遅れて、あるいは異筆にて）描かれたのは、通常、絵巻では紙一枚ごとに絵を描き、継いだあとに、紙をまたいで描くのが普通だからだ、とも述べている。しかし、卑見のみならず多くの論者が同じ意見だと思われるが、3人の蒙古兵の絵姿は、周囲の蒙古兵と似ても似つかぬものである。異論もあるが、同一工房で描かれた蓋然性は著しく低いと考えられる。また、絵巻は通常、ある枚数の紙を継いでから、詞書きや絵画を描くものである（これは実際に絵巻物を実見すれば分かることである——ちなみに報告者は2017年5月、サントリー美術館の『絵巻マニア列伝』展において、この点を中心に絵巻類を観覧したが、例外なく、先に紙を継いで文章や絵画を入れていることを確認した）。紙をまたぐから異筆の絵画が描かれても不自然ではないという論法は、簡単には成り立たないと思う。

上記場面を、太田彩氏や村井章介^{むらいしやうすけ}氏の見解をもとに「復元」してみると、以下のようなになる（「てつほう」については仮に残したが、制作当初には描かれていなかった可能性もある）。つまり、逃げ惑う蒙古兵たちを、竹崎季長とともに従軍した姉婿の三井資長^{あねむこ}——季長はむしろ資長の事実上の配下であったか（石井進説）——を筆頭に、馬や弓矢で追い込んでいく構図が本来の姿であった可能性が高いのである。



（以上、九州国立博物館 開館記念特別出陳パンフレットより転載）

事ほどさように、本絵巻の現状から、歴史的事実を素朴に読み取ることは不適切・不可能である。また、本絵巻の物理的不自然さも枚挙に暇なく、ひとつずつ潰していかなければならない。先学によれば、料紙の種類やサイジング^{にじ}（滲みどめ）の有無なども一貫していない。詞書きや絵画表現のタッチの違いなどについても、数多くの指摘がある。要するに、本絵巻は、さまざまな謎を抱えた絵画史料なのである。それゆえに、本絵巻に関する先行研究は幅輳を極めており、今後もなお、周到な史料批判を推し進めていく必要がある。それ抜きに、本絵巻を歴史資料として十全に扱うことはできないだろう。

ただし本報告では、そうした画面上の絵画・書蹟分析から敢えて一線を画し、また近年のモンゴル戦争研究の進展——とりわけモンゴル帝国史研究や鷹島^{たかしま}（長崎県松浦市）に沈んだモンゴル軍船に関する水中考古学の展開——については他の報告や論著に譲り、本絵巻が現状に至るまでの前提条件を考えてみることにしたい。具体的には、本絵巻の全体的理解の鍵となる、「奥書」に論点を絞って、その歴史的性格を見極める途を採りたいと思う。というのも、この「蒙古襲来絵詞」には、普通なら一つだけしかないはずの「奥書」（巻末の作成趣意書）が二つも存在し、それが必ずしも同一内容を語っていない、という謎を孕んでいるからである。本報告のタイトルに比して羊頭狗肉の感は強いが、まずは奥書A・Bの分析に注力して、本報告の責めを塞ぎ、今後の研究の礎とするこ

とを目指したい。

さて先述の通り、この絵巻を最大限活用するためには、さまざまなレベルの史料批判が欠かせない。大前提として、発注者の意図や絵師の世界観に肉薄するまで、絵巻の現状にまわりついたヴェイルを順次剥ぎ取る作業が不可欠である。しかし本報告でそのすべてを試みるのは不可能であって、上記の如く、問題設定を限定した次第である。こうした作業の先に、「蒙古襲来」（モンゴル戦争）の実像・実態を逆照射する手がかりが得られるようになるであろうし、またモンゴル戦争の表象論ともいべき、イメージの世界の汎アジア史に広がっていくとすれば、望外の幸せである。

1. 「蒙古襲来絵詞」を読み解くために

（1）絵巻の概要説明

まず蒙古襲来絵詞について簡単に紹介しておく。本報告のタイトルには、わかりやすさも考慮して、便宜的に通称「蒙古襲来絵詞」を掲げたが、本絵巻の主人公にしてその活動を描いた、「竹崎季長の絵巻」、つまり「竹崎季長絵巻」と呼ぶべきという意見も根強く、報告者は実際には後者に近い立場である。ただし、さしあたり今は結論を留保しておきたい。

現在、宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵される原本は、現状、上下（前後）2巻で構成される。主人公にして発注主（作製依頼主）とおぼしき竹崎季長の家から流出し、いずれの段階で熊本の^{おおやのけ}大矢野家の所有に帰した。そして1825年（文政8）、熊本藩主細川家に預けられ、江戸にもたらされて多くの武家の知るところとなった（例、^{まつだいらさだのぶ}松平定信の閲覧・^{がくおう}模写→「楽翁本」製作）。その後、近代に入り、1890年（明治23）、臨時全国宝物取調委員会の調査によって原本所有者大矢野家から本絵巻が買い上げられ、宮内庁に収められた。現在、皇室の御物と言われるが、実際には、現在は三の丸尚蔵館の所管品、という扱いである。

＊なお、天草出身の大矢野家は文禄・慶長期に肥後南部の^{こにしゆきなが}小西行長の与力となり、その後、西軍の^{せきがはら}小西家が関ヶ原の戦いで滅びると、肥後一国を領することになった加藤家に所属（^{たまな}玉名郡下^{しもながたむら}長田村に領地を安堵される）。加藤家改易後は細川家の家臣となり、玉名郡に拠点を有することとなった。

絵巻の法量は、おおよそ以下のとおり。前巻（上巻）がタテ40.3cm×ヨコ2450.6cm、後巻（下巻）がタテ40.2cm×ヨコ2111.8cm。順序等にはさまざまな見解があるが、通常、現状に即して、前巻に詞一から詞九まで、絵一から絵十まで、後巻に詞十から詞十六まで、絵十一から絵二十一までが配されていると考える。実に長大な絵巻物である。ただし、過去には3巻にまとめられたこともあり、また前後入れ替えや錯簡・削除があったり、料紙の質や大きさがバラバラであったり、これは後段にて詳述するが、一部の詞書と絵とが別置されていた（大矢野家に秘匿されていた）ことがあるなど、作成時の状態を復原するのは極めて難しい。それゆえ、史料研究に関する蓄積も膨大である。たとえば、最低でも同様の絵巻が二本（正本・副本）作られたという説が唱えられており、それなりに有力と思われるが、果たして二本で済むのかどうか、三本説も唱えられており、今後も引き続き検討していかねばならない。

（2）本絵巻研究の視角と課題

こうした絵巻物史料を理解するためには、絵（絵画部分）と詞（^{ことば}詞書き；文章部分）とから成る絵巻全体の細部はもちろん、通常、巻末に置かれる^{おくがき}奥書（制作趣意書）を理解することが大切である。前者は絵巻の全体を通じて、細部にこだわる視点・方法であり、後者は、絵巻の全体を対象化して位置付ける、メタ的な視点につながる。絵巻研究は、前者と後者の緻密な検討と、両者の往復・接合によって昇華されていくこと、贅言を要すまい。ただし、^{さっかん}錯簡や^{かいざん}改竄、補筆・加筆等の多い本絵巻に限って言えば、まず後者の全体的把握を優先させ、それにより、

前者の細部の改変を解釈していく、という手順が重視されるべきと考える。それが、本絵巻が現状に至る過程を解明することにつながり、そのヴェイルを順次剥がしていくことで、制作当初の姿（原態）に近づいていけると判断するからである。

＊とはいえ、細部の分析によって本来の絵巻の姿に近づくこと、あるいは絵巻の「実証性」を高める研究は着実に進んでおり、最近では、詞二の錯簡の分析を中心に、竹崎季長らの進軍の経路を解明した堀本一繁氏の研究などが際立っている。

さて、不思議なことに、本絵巻には奥書に当たる詞が2つ残されている（順番にA〔詞十五〕・B〔詞十六〕と便宜的に呼ぶ）。「永仁元年二月九日」（永仁元年＝1293）という同じ日付ながら、それぞれ異なる筆致で、まったく異なる趣旨の内容が記される。

簡単にいえば、Aでは「〔安達〕泰盛の事」と書き出され、泰盛から「直に御下文を給わり、御馬を給わる事、ただ季長一人ばかりなり」とあるように、御家人竹崎季長が（海東郷地頭職を拝領するにあたり）鎌倉で世話になった安達泰盛の鎮魂が謳われたと考えられている。

これに対してBでは、季長が帰依していたらしき甲佐社（大明神）に感謝し、まさに海東郷地頭職に任じたことに報謝する内容が記される。具体的には、甲佐の大明神がこの世に現われ、社壇の東の桜の枝に止った、この「東」とは関東（「くわんとう」）のことであり、将来、地頭職を獲得する海東（「かいとう」）と「同じ文字」なので――似ているすら思えないほど強引だが――、季長は関東への出訴を思いついた、そして実行に移して成功した、という筋書きである。

そしてもっとも興味深い事実は、この「永仁元年二月九日」という日付の表記は当時存在せず、正しく書くとすれば「正応六年二月九日」とすべきだったという点であろう（萩野三七彦説）。永仁への改元は正応6年8月5日のことであり、中国・朝鮮のごとき即位年（零年）の観念のなかった中世日本では、同年（1293年）の8月5日までは正応年間、それ以後は永仁元年と記するのが普通である。つまり、この「永仁元年二月九日」という書き方は、正応6年2月当時の人間には知る由もない元号表記、つまり「未来年号」なのであった。逆に言えば、この日付の記載は、永仁改元以後のものとするほかない。つまり、本絵巻そのものが、文永・弘安の戦争時（1274・81年）を少なくとも十年以上くだる時期に制作されたという事実を明示するわけである。それどころか、永仁元年をさらに降ってしまう可能性すら否定できない。本絵巻の制作意図が見通せず、多くの研究者を悩ませることとなった所以である。

＊こうした絵巻物には、ふつう奥書が添えられ、年月日も記載される。もし原「蒙古襲来絵詞」が正応6年当時に作成されたならば、「正応六年二月……」と記されたであろう。当然、のちに改竄・改作を行なう人間は、この日付をなぞるのが自然と思われ、ゆえに本絵巻原本（宮内庁三の丸尚蔵館蔵本）の原態が永仁元年以降のことだと推定できるわけである。

さて、近年、奥書A・Bともに絵巻そのものから切り離して理解すべきという問題提起（宮次男説）が改めて強調された（服部英雄説）。服部氏曰く、Aについて言えば、季長はその後、安達泰盛派と縁を切っていたと考えられ、だから岩門合戦に参加しなかった、と説く。またBでは、絵巻そのものに熊野先達（熊野神社系修験者・山伏）が登場するのに、阿蘇神社系の甲佐社（大明神）が出てくるのは如何にも後付けに過ぎないだろう（なお服部説に拠れば、肥後の熊野信仰の拠点は玉名にあり、玉名周辺に位置する竹崎こそが季長の名字の地だという）、そもそも海東郷の地頭職を季長が得たということは絵巻の本体には一度も出てこない、つまり絵巻と奥書Bとは対応しないのではないか、という問題提起である。

ただし、Aの筆跡は、漢字にルビが振られるなどの特徴を持ち、書体・字姿を見ても、のちに問題とする詞九――内容は詞二や詞七と大きく重なる――と同じ手（筆跡）と見てほぼ間違いない（宮次男氏・小松茂美氏・太

田彩氏ら)。もちろんそこには季長が安達泰盛に訴え出る場面が記され、その恩顧が強調される論理展開である（ただし詞七と詞九との筆跡も異なる）。そうだとすれば、奥書 A を根拠に季長が反泰盛派の立場を取っていたという服部説は、現在の絵巻の全体構成から見れば首尾一貫していない、と言わざるを得ない。

＊ちなみに、石井進氏は誤写混入と考えてか（小松茂美氏も別本からの混入に過ぎぬと見なす）、この詞九を『中世政治社会思想』（上巻）に収載しなかった。そのため、石井説では、詞十が「九」と番号付けされ、宮内庁本に依拠する詞書きの番号（通例・通説）と一つずつずれることとなった。つまり、奥書 A（宮内庁本の詞十五）は石井翻刻では「一四」となり、奥書 B（宮内庁本の詞十六）は石井説では「一五」と番付けされることとなった。この点、注意が必要である。

周知の通り、竹崎季長が恩顧に感じたであろう3名——安達泰盛・安達盛宗・小式（武藤）景資——は、8代執権北条時宗・9代執権貞時の御内人筆頭の平頼綱の謀略により滅ぼされた（1285年（弘安8）、霜月騒動）。とくに泰盛派の小式景資は、福岡県での岩門合戦（1284年（弘安7））において、当時家督を争っていた兄の小式経資に滅ぼされてしまう（経資は必然的に反泰盛派の平禅門側につく）。この岩門合戦に際して、竹崎季長ら肥後の御家人勢がどのように動いたかは史料上不明であり、通説では、彼ら肥後勢は合戦に向かう余裕無く、泰盛派の小式景資を助けることもできずに後悔を感じたのではいか、と推測する（川添昭二氏・石井進氏）。これに対して、服部英雄氏は、季長が当時すでに反泰盛派に転じていたので合戦に赴かなかったのだと判断したわけである。だが、実際のところ、いずれの意見も、明確な実証的根拠があるわけではない。

2. 「蒙古襲来絵詞」奥書 A・B の分析

（1）奥書 A と詞七・詞二・絵二と——大矢野家の由緒論

そこで、本報告では、江戸時代の文政末期頃まで、原本の詞二と絵二とが大矢野家に秘匿されていて、まったく知られていなかったという事実（堀本一繁説）に注目してみたい。

まず、詞二には、「日の大将〔その日の指揮官〕」たる小式景資が登場する。景資の面前を、絵詞の主人公たる竹崎季長が進み、先懸けを遂げたら鎌倉将軍に報告してくれるよう、景資に依頼する（景資はこれに応諾）。これに対応する図様が、下に掲げる絵二である。図版右側でどっかり座っているのが小式景資であり、詞二と対照すれば分かる通り、今は失われている本図の前半部分に、おそらく竹崎季長が描かれていたのであろう（いずれの模本にも存在せず）。



（「蒙古襲来絵詞」前巻・絵二／太田彩『蒙古襲来絵詞』より転載）

問題は、いまや確認しえない、その季長の姿である。詞二によれば、先懸けを急ぐ餘り、下馬の礼すら取らず

に景資の面前を過ぎたことが記されている。おそらく、図二の欠失部分（上掲図版の右方向）には、馬上の季長の姿が描かれていたことであろう。

上掲図版を見れば容易に判断できる通り、そうした季長の非礼ぶりを意図的に隠匿するために、図二の前半部分が切り落とされたと見るのが自然である。そうでなければ、竹崎季長の非礼な態度を説明する詞二が秘匿されたことの理由も見つからない。武家の秩序や礼制の厳しい江戸時代にあっては、そうした非礼な場面を持つ絵巻を後生大事にしていること自体、責めを受けるべき事柄だったのではないか。

*とくに、下馬の礼を取らなかったことについては、武家の礼法に著しく抵触した可能性、あるいは悪しき先例とされていた可能性がある。たとえば、江戸時代の武家の教養書でもあった、鎌倉幕府の正史、『吾妻鏡』^{あづまがみしょう}治承5年(1181)6月19日条には、頼朝配下の上総介^{かずさのすけひろつね}広常が頼朝に対して下馬の礼をとらなかったことが問題となっている。「主君」頼朝への広常の反抗的な姿勢は『吾妻鏡』の随処にあらわれ、おそらく広常を反逆者と見なすための「伏線」が敷かれていたのだろう。この後、広常はいわゆる「東国独立論者」として頼朝により肅正される^{こうちしょうすけ}（河内祥輔説）。なお、下馬の礼に関する日中間の律令継受の問題については、大隅清陽氏^{おおすみきよはる}の研究に詳しい。

このように考えるのは、詞二の内容と、詞七・詞九のそれとがほぼ被っている——僅か5騎しか連れない竹崎季長が「日の大将」小式景資に対して自分の先懸けの意気込みをアピールする——にも拘わらず、後者の詞七・詞九には、季長が下馬しなかったことへの言及が一切見られないからである。

この点を推理するためにも、詞書きの字配りに注意してみよう。すると、詞二は前欠ではなく、博多において、竹崎季長が「日の大将」小式景資に先懸けの企図を伝えることから始まっている。つまり、戦争の現場・当時の発言の記録である。

これに対して、詞七・詞九では、1275年^{けんじ}（建治元）に季長が鎌倉についてから何とかしてようやく恩賞奉行安達泰盛の面前で庭中（訴訟）^{せりふ}したときの台詞として書き起こされている。過去の出来事を振り返り主張する際に、くだんの「日の大将」云々のくだりが忠実に再現されたわけである。しかしながら、この訴えの文言のなかで、季長が小式景資に下馬の礼を採らなかったことへの言及はまったくない。いくら先懸けのためとはいえ、上述の通り、本来なら武家として許されない行為だったからではないか。

*詞九（奥書Aと同筆）の料紙第43紙の右端には、松の枝が^{ほのみ}仄見えるので明らかに前欠ではなく、また料紙を跨いで絵が描かれていたことがはっきりと分かる（大倉隆二氏・佐藤鉄太郎氏）。ただし、残念ながら詞九は後欠であり、その全文が分からない。ただともかくも、この奥書Aと詞九との存在により、少なくとも二本の「蒙古襲来絵詞」の存在したことが確実に言ったと言えよう。

繰り返しになるが、詞二およびこれに対応する絵二が大矢家にて秘匿されたことも、やはり無理からぬことと言ふべきだろう。「先懸け」という行軍秩序を乱す「勇敢な季長」ではあったが——竹崎季長は小式景資から博多息浜にて「一同に〔同時に・一斉に〕合戦すべし」と一度釘を刺されたにも拘わらず、手勢の少なさから「先懸け」で軍功を上げたいと申し出て許された経緯がある（詞二・詞七・詞九）——、上司たる「日の大将」景資に非礼な態度をとるほどの無礼者ではなかった、と筋書きを変えねばならなかった。そのために、上記の如き秘匿・^{せんじょ}削除が行なわれたのではないか。

*詞九（奥書Aと同筆）の料紙第43紙の右端には、松の枝が^{ほのみ}仄見えるので明らかに前欠ではなく、また料紙を跨いで絵が描かれていたことが明瞭に窺える（大倉隆二氏・佐藤鉄太郎氏）。ただし、残念ながら詞九は後欠であり、全文が分からない。ただともかくも、この奥書Aと詞九との存在により、少なくとも二本の「蒙古襲来絵詞」の存在したことが確実に言ったと言えよう（奥書Aと詞九とを含むものが確実な「別本のひとつ」である）。

そして、くだんの奥書 A——安達泰盛への謝意表明——の問題に戻ると、この詞九——小式景資に下馬の礼を採らなかったことを隠蔽——と同筆ということが決定的である。つまり、大矢野家は、竹崎季長を、一貫して安達泰盛—小式景資ラインに位置づけようとしていたと思われる。というのも、それが自家の由緒作成に有利に働いたからである。

第一に、大矢野家は自家の由緒を大宰大監〔じょう〕に求めており、これは大宰小式〔すけ〕、つまり武藤家の次位・部下に当たる。要するに、近世の大矢野家は、自家と小式氏（武藤家）との関係性の強さを強調（脚色・捏造）する必要があった。そのために、小式景資に恩義を感じず竹崎季長を、いわば媒介項として発見し、利用したのではないか。

また第二に、大矢野種保ら兄弟 3 人が 1281 年第二次戦争（弘安の役）の海戦で竹崎季長と行動をともにしていたかのように現状の絵巻では表現されていること（後巻・絵十六——「大矢野兄弟三人／種保」の語が明らかに後筆で書き込まれている）は、竹崎季長と大矢野家祖先とが戦場で生死を共にしたことを強調するためだろう。その季長は、弘安の役を扱う後巻では、安達宗盛（泰盛次男、肥後守護代）軍との密な関係を描かれていることも付け加えておきたい。

＊ただし、なぜ家督を相続し、岩門合戦で勝利した小式経資の側に、大矢野家は肩入れしようとしなかったのか、考える餘地はあるだろう。それはおそらく、これまでの研究史が明らかにしてきたように、岩門合戦後に筑後・豊前・肥前・肥後の守護が北条得宗家一門に奪われてみすみす漁夫の利を取られてしまった経資の失態ぶり、加えて、のちの平禅門の乱（1293（正応 6＝永仁元））を経た翌年には旧泰盛派の復権が叶ったという事実が大きいだろう。また、源平交替史観の強い江戸時代からすれば、平氏＝北条家の支配にあらがった菊地氏・大友氏・小式氏は英雄的存在であり、そこに自家が密接につながるといふ「歴史」こそが重要である。大矢野家にとって、小式氏や菊池氏との密な関係が描かれた「竹崎季長絵巻」が有用視されたのも当然、と言えよう。

これまた繰り返してしまうが、最終的に細川藩（肥後・熊本）の藩士となった大矢野家にとって、肥後の御家人であった竹崎季長と生死をともにしたこと——もちろん上記の通り実話とは考えがたい——は、肥後に生きる際の正統性を担保しえたと思われる。さすれば、大矢野家より先に本絵巻を有していたという名和興賢が甲佐社の神庫から本絵巻を横領した——あるいは大矢野家の人間が押領した可能性も否定できまい——という説（桜井清香氏）も、まったくの空論として捨て去ることはできないだろう。

（2）奥書 B と竹崎季長置文——鎌倉後期九州の徳政状況

それでは、奥書 A や詞九は、江戸時代の偽作および別本からの混入であって、その張本人は大矢野家、ということになるのであろうか。その可能性は高いと思うが、いま一つ、奥書 B にも若干不自然な点があるので、それを確認しておこう。

竹崎季長自身が残した関係文書が、塔福寺文書等に残っている。なかでも著名なのが、彼が知行地として安達泰盛・宗盛に認められた海東郷の所職（権益）の一部が、氏寺の塔福寺や海頭郷神社（海東社）などに寄進されたことを示す「竹崎季長置文」（遺言書兼寄進状）である（1293 年（正応 6）原作〔第 1 版〕、1314 年（正和 3）自筆改稿版〔第 2 版〕；『中世政治社会思想』（上巻）にも掲出）。ところが、寄進された先の地名・社名の表記方法を見ると、違和感を覚えざるを得ない。というのも、塔福寺文書等を見ると、すべて海頭郷神社と記され、絵巻の奥書 B に見えた海東郷という表記がまったく見られないのである。本人の名前の表記がともすれば変化するという中世において、これは些細な違いと思われるかもしれないが、もし夢想の神託により関東（鎌倉幕府・恩賞方）へ行き、海東郷地頭職を給わったことを記念して本絵巻を作成した（奥書 B）、というのであれば、季長自身は海東の表記に終生こだわったはずではないか。要するに、「海頭」（塔福寺文書）を「海東」（「絵巻」奥書 B）と表記してしまうこと自体、後者（奥書 B）が季長の意志と懸け離れている可能性を示唆する。

*奥書Bの最後には、「甲佐大明神の神徳を明らかにするため、これ〔蒙古襲来絵詞のこと——石井進説〕を記した」とある。ただし、現存する絵巻の詞書きや画面等では、甲佐大明神への竹崎季長の報謝の念を感じさせる場面がないことにも、石井進氏は注意を促す（しかしさほど配慮している形跡もないのだが）。なお、海東郷は甲佐社（肥後二の宮）の神領であり、ここで季長が所領を寄進した海東社（現・海東阿蘇神社）とは、海東郷におそらくは甲佐社（阿蘇末社）を介して勧請された阿蘇末社の一つであろう（いつ勧請されたかは分からないが、もし、季長が甲佐社の神徳に感じて勧請したのなら、季長が海東郷に入部した1276年（建治2）正月6日以後のことと思われる）。また塔福寺はこの海東神社の近くにあり、新しく建立した神宮寺（1293年（正応6＝永仁元）ころ建立カ）に塔福寺僧を入れるなど、竹崎家の海東社・海東郷支配を強化する手段であったと見られる。

そして、奥書A・Bともに「永仁元年二月九日」と記した1293年は、上述の通り、8月まで「正応6年」であった。ところが、上記「竹崎季長置文」（塔福寺文書〔第2版〕・秋岡家文書〔第1版〕）の日付は「正応六年正月廿三日」の如く、正確な元号で表記されている。これがもっとも不審な点である。つまり、「置文」が同時代史料であるのに対して、奥書A・Bは、ともに後世の作だとしか考えられない。

総合的に見ると、先述の奥書A——近世初頭に大矢野家が書き添えたか——ほどではないにせよ、この奥書Bも、やはり不自然さが拭い切れない。とはいえ、同時代の政治・経済・宗教情勢に鑑みると、江戸時代の作とまで見なす必然性は乏しいように思う。すなわち、竹崎家による海東郷の政治的・宗教的支配を強化する動きが1276年（季長の海東郷入部）から1293年（海東社に神宮寺を建立、また自身の所領を寄進）までの間に徐々に展開された。そして、その支配を実質的に保全するものにするために、海東阿蘇社・新設神宮寺への寄進が取り決められたという見方である。

というのも、1293年（正応6・永仁元）4月、平禅門の乱が起こって旧安達泰盛派が復権した。安達泰盛はいわゆる「弘安徳政」（1284年（弘安7）6月）を主導し、別相伝所領（公家や武家の所有に帰した元の神領）を否定して本来の神領に戻す（神領興行）という、急進的な施策を採っていた（井上 聡氏）。実際には、別相伝を否定する徳政政策はその後現われなかったのであるが、その後の1297年（永仁5）「永仁徳政令」や1312年（正和元）「正和の徳政令」を見ても、神用を弁じない地頭御家人や下司名主の排除は共通しており、御家人竹崎氏としてもこうした政策を軽視するわけにはいかなかったはずである。しかも、旧泰盛派の復権や北条貞時の専制方針——1293年（永仁元）、裁判の最終的判断が得宗北条貞時に集中する「執奏」制度を設け、翌年（1294）には貞時の裁定を覆そうとする越訴（再請要請）は一切受け付けなくした——や伏見天皇の親政志向——記録所庭中を整備し、雑訴（土地・所領関係の裁判）を月6度も開催する決まりを作った——が徐々に明らかになるにつれ、竹崎氏としても何らかの対応を余儀なくされたことだろう。最悪の場合、ほんらい甲佐社（肥後二の宮、阿蘇末社）の神領であった海東郷を否定され、所領・地頭職を甲佐社に回収されてしまう虞すらあっただろう。

そこで竹崎季長の採った策が、所領の一部を膝下の海東社（阿蘇末社）に寄進したり、神宮寺を設けたり、仏物・神物を堅持する「置文」を作る、という方策だったのではなからうか。また、本主の甲佐社に対しては、こうした施策を正当化するべく、自家（竹崎家）と甲佐社との強い由緒を語る必要もあっただろう。そうした「深い因縁」を語るために奥書Bが作成された——、という可能性はないだろうか。

*こうした内政的動向と密接に絡み合った、対外的脅威の強まりがこの時期に存在したことにも注意が必要である（川添 昭二氏）。1292年（正応5・至元29）7月には元の燕文楠の書が鎌倉に到達し（『鎌倉年代記』）、同年には都合3度目の高麗国書——元朝文書を仲介——が金有聲らによって、10月、大宰府にもたらされている（『金沢文庫古文書』・『高麗史』等）。耽羅（済州島）に漂着した日本人商人を送還すると同時に、中間に立った高麗の金有聲によって国書の表現は柔和に改められたが、みたび、日本の元朝への帰順を促す内容であった（植松 正氏）。こうした元—高麗側の動きを承け、日本側は対外的緊張を強いられ、同月には諸国国分寺・一宮等に異国降伏を祈らせている（『東寺百合文書』）。11月にはのちの鎮西探題となる、国防指揮官（大将）の選定にも取りかかっている（『親玄僧正日記』）。鎮西探題は、翌年3月に北条兼時・時家を任命して発足するほか（村井章介説）、4月には前述

の通り平禪門の乱が起こって旧泰盛派が復権、6月には伏見天皇が親政を開始した。

すると、たとえ奥書Bに不自然な表記が窺えるにせよ、1293年（正応6）〔第1版〕～1314年（正和3）〔第2版〕の竹崎季長置文（塔福寺文書等）と、この奥書Bとがまったく無関係なものとするのは難しいと考える。むしろ、鎮西（九州）を代表する宇佐神宮（八幡宮）の式年遷宮（1289年（正応2））が遅れ、完了するも僅か2年で弥勒寺とともに焼亡した事件（1309年（延慶2））や、これと前後する九州の宮崎宮・香椎宮の焼亡、後深草上皇・亀山上皇・後二条天皇の死没、鎌倉大地震、疫病の流行、慶元での日本商人騒擾事件（榎本・渉氏）、得宗貞時の死去など、社会不安が相次ぎ、徳政の機運が高まっていたことに留意したい。実際、それゆえに1312年、「正和の徳政令」が発せられたのである。繰り返しになるが、そうした情勢のなかで竹崎季長が自領保全を図る手段の一つが、自身と甲佐社・海東郷とのつながりをアピールする、奥書Bの作文だったのではないか。そしてこうした内容の文面の奥書Bを付した以上、「蒙古襲来絵詞」の一本（原本？）は、やはり甲佐社に寄進されたとみるのが自然であろう。

もし、以上の如き推論が多少とも的を射ているとすれば、奥書Bは、正和年間に記された蓋然性が高いと考える。海頭社（塔福寺文書）と海東郷（「絵巻」奥書B）という漢字表記の違いは、時期による違いというより、アピールする対象（宛先・読者）の違い、竹崎季長の政治姿勢の表れ方の違い、と見て取るべきかもしれない。

おわりに

羊頭狗肉の感は免れないが、以上の議論を、補足も含めてまとめておく。

まず「絵巻」奥書Aについて。——おそらく、大矢野家にとって都合の良い奥書Aは、近世になって、肥後・熊本藩士として生きることになった大矢野家が作成（捏造）したものではなかろうか。肥後菊池氏の存在が絵巻のなかで強調されていたことは元々のものと見受けられるが、本絵巻冒頭に記された「豊後国守護大友／兵庫守頼泰之手／軍兵」の画中註は、詞書きにも対応するものがなく、不審である。小弐・菊池・大友の鎮西三大勢力との関係、とくに菊池・大友は阿蘇との関係（？）をアピールするための加筆なのではなかろうか。大友氏が阿蘇社内部に明瞭に関わるようになるのは16世紀・戦国期のことであり、これも画中註記が鎌倉・南北朝期よりも大幅に遅れる可能性を示唆しよう。

次に奥書Bについて。——竹崎季長の海東郷支配と直接・間接に関係する奥書Bは、弘安・永仁・正和の徳政状況のなかで、季長が自領の保全のため——つまり別相伝否定や地頭御家人排除を趣旨とする徳政令が出た場合、それに対抗するため——、甲佐社との縁の深さを強調するべく起草したものであったと推察される。

なお、宮次男氏や服部英雄氏が結論するように、本来、奥書A・Bと絵巻本体とは別物であったと見ることは、ある程度正しいだろう。しかし、石井進氏の論の如く、まったく絵詞と無関係であったと断ずるのも難しい。別言すれば、絵巻の現状を理解するためには、奥書A・Bの趣意をこそまず追究すべきなのであって、基本的には、奥書A・Bそれぞれに整合するように絵巻は改編されてきたと見るべきと思う。だから、絵巻と奥書とは、決して「無関係」の一言で片付けるべきではない。一気に「蒙古襲来絵詞」原態に辿り着くことが極めて困難である以上は、こうした段取りを踏んで考察を進めていくほかはないと思うのだが、如何であろうか。

また、石井説の如く、竹崎季長が安達泰盛・小弐景資らを追慕するために「蒙古襲来絵詞」を制作したという可能性は、まだ払拭され切ったわけではない。本報告が論じたのは、後筆と見られる奥書A・Bの歴史的 성격に過ぎないのであって、いまは分からない「蒙古襲来絵詞」原態・原本制作時の竹崎季長の思惑は、依然としてヴェイルの彼方にあるからである。

今後、この「蒙古襲来絵詞」をさらに踏み込んで分析するためには、上記の如き奥書A（近世初頭？）や奥書B（正和年間？）の歴史的特徴を踏まえつつ、その都度行なわれたであろう改作・加筆等を析出していくことが求められよう。もちろん、奥書A・Bそれぞれのシェーマにそぐわない加筆や改竄、削除等が存在する可能性も当然あるだろう。また逆に、「絵巻」現状そのものの分析から、奥書AやBの評価を改めていかねばならぬ場合も生ず

るだろう。今後、報告者も微力を尽くし、引き続き、本「絵巻」の謎解き・絵解きに挑戦していくことを誓いたい。

【主な引用・参考文献】

- 石井 進 1972 「竹崎季長絵詞」(詞書き翻刻・解説)『中世政治社会思想』(上)岩波書店 新装版 1994
 ————1991 『中世史を考える——社会論・史料論・都市論』校倉書房
 ————2000 『鎌倉びとの声を聞く』NHK 出版(日本放送出版協会)
 井上 聡 2013 「神領興行法再考」『東京大学日本史学研究室紀要別冊 中世政治社会論叢』同研究室
 植松 正 2015 「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」『東方学報』
 榎本 渉 2007 『東アジア海域と日中交流：九～一四世紀』吉川弘文館
 大倉隆二 2007 『「蒙古襲来絵詞」を読む』海鳥社
 大隅清陽 2011 『律令官制と礼秩序の研究』吉川弘文館
 太田 彩 2000 『絵巻＝蒙古襲来絵詞』(日本の美術 414)至文堂
 荻野三七彦 1932 「蒙古襲来に就ての疑と其解釈」『歴史地理』59 巻 2 号
 川添昭二 1977 『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版
 工藤敬一 1974 「竹崎季長おぼえがき」『日本歴史』317 号
 河内祥輔 2013 『頼朝がひらいた中世——鎌倉幕府はこうして誕生した』(ちくま学芸文庫)筑摩書房
 小松茂美 1988 『蒙古襲来絵詞』(日本の絵巻 13)中央公論社 再版 1990
 佐伯弘次 2016 「蒙古襲来以後の日本の対高麗関係」『史淵』153 輯
 桜井清香 1967 『元寇と季長絵詞』徳川美術館
 佐藤鉄太郎 2005 『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』錦正社
 ————2016 「元寇の実相：服部英雄著『蒙古襲来』の実証的批判」『軍事史学』52 巻 2 号
 中村一紀 1975 「蒙古襲来絵詞について」『熊本県文化財調査報告書 (17) 竹崎城』熊本県教育委員会
 服部英雄 2014 『蒙古襲来』山川出版社
 宮 次男 1964 「蒙古襲来絵詞について」『日本絵巻物全集 (9) 平治物語絵巻・蒙古襲来絵詞』角川書店
 村井章介 1988 『アジアのなかの中世日本』校倉書房
 ————2001 『北条時宗と蒙古襲来：時代・世界・個人を読む』(NHK ブックス)日本放送出版協会
 ————2006 『中世の国家と在地社会』校倉書房
 堀本一繁 1998 「「蒙古襲来絵詞」の現状成立過程について」『福岡市博物館研究紀要』8 号
 ————2012 「「蒙古襲来絵詞」の復原にみる竹崎季長の移動経路」『交通史研究』78 号

【発表論文4】

モンゴル帝国時代のモンゴル人の 命名習慣に関する一考察

エルデニバートル／額爾敦巴特爾（内モンゴル大学モンゴル歴史学部）

[原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）]

モンゴル帝国の時代に、モンゴル人は征服した部落及び地域の名を自分の子供に名付ける習慣があった。『モンゴル秘史』、『元史』、『史集』などの史書を参照すれば、その現象が普遍的であることに気付くだろう。例えば、撒里答（サルタグ・回回¹）、鎖郎哈（ソランガ・高麗）、唐兀歹（タングダイ・西夏人）、忻都（印度）、囊加台（ナンギヤタイ・南宋）、蛮子台（マンジタイ・南宋人）、合失（カシ・河西）、阿速台（アスタイ）、欽察（キプチャク）、斡羅思（オロス）、馬札儿（マジャール）、阿魯渾（アルグン）、術赤台（ジュルチディ・女真人）等がそれである。本論考ではその現象の分析を試みたが、至らない点があればなんなりとご指摘いただければ幸いである。

撒里答（サルタグ・sartaq）

撒里答（サルタグ）という言葉は Sartaq の音訳である。また、撒里答（sartaq）は撒儿塔兀勒（サルタウレ）と訳された。モンゴル人は花刺子模（ホラズム）、不花刺（ブハーラー）、撒馬耳乾（サマルカンド）等、地域のムスリム民族の商人またはそれらの地域を撒里答（サルタグ）又は撒儿塔兀勒（サルタウレ）と呼ぶ。撒里答の語源はサンスクリット語の Sartnavaho であり、「商人」という意味である。最初はイラン語を話す現地に定着した商人に対する突厥人の呼称であり、即ち隋唐時代の「薩宝」である。突厥語の発音は「Sartaq」であり、モンゴル語では、複数形である撒儿塔兀勒（サルタウル・Sartaul）と形容詞形の撒儿塔黒台（サルタクタイ・Sartaqtai）となる²。『元朝秘史』には「撒儿塔兀勒（サルタウレ・Sartaul）」、「撒儿塔黒臣（サルタクタイ・Sartaqc'in）」等の言葉が何度も現れ、「回回（ムスリム）」と注釈が加えられている。

『秘史』§254:「帖兀訥 (te'ün-ü) 豁亦納 (qoyina) 成吉思合罕 (Činggis Qa'an) 撒儿塔兀勒 (Sarta'ul) 亦儿格捏 (irgen-e) 兀忽納 (Uquna) 帖里兀田 (teri'üten) 札温 (Ja'un) 額勒赤你顔 (elč'in-iyen) 者惕古周 (Jetgüjü)」。

「撒儿塔兀勒 亦儿格」(サルタウル イルゲン) は「回回民 (ムスリム)」と傍訳されているが、ここではホラズム人を指し、また、イスラーム教を信仰する西域人をいう。1219年から1225年まで、チンギスカンは中央アジアの花刺子模国に対し、大規模な征伐を行った。モンゴル語で「Sartaqc'in ayan」と呼ばれる³。

撒里答（サルタグ）はよくあるモンゴル人の名字である。特に花刺子模（ホラズム）を征服した術赤（ジョチ）家族においても、その名前の付いた人は何人もいる。拔都（バトゥ）の長男の名前は撒里答（サルタグ）である⁴。貴由汗（グユク・カン）が死んだ後、撒里答は父の命令に従い、軍隊を率いて憲宗蒙哥（モンケ）を擁護した。

1 ムスリムの略称である。また、回族とも呼ばれる。

2 「ソ連」著者：ウラジーミロヴィチ・バルトリド、訳者：羅致平、『中亚突厥史十二講』、中国社会科学出版社、1984年、第132-133ページ。『中国歴史大辞典』（遼夏金元史）、上海辞書出版社、1986年、第518ページ、周清樹による「サルタク」の項目である。

3 亦隣真、『至正二十二年蒙古文追封西丁王忻都碑』、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001年、第693ページ。

4 余大鈞、周建奇訳、ラシードウッディーンが編集した『集史』第二巻、1985年、第127ページ；ボイル英訳、周良宵訳注『チンギスカンの後継者たち（『集史』

後に、欽察汗国（キプチャク・カン国）の西側を守り、幹羅思（オロス）諸国を統率した。フランスのフランシスコ会修道士であるルブルク出身のギョームはモンゴルに赴き、拔都の長男である撒里答と何度も会った⁵。

朮赤汗（ジュチ・カン）の長男は幹児答（オルダ）である。バルタンの長男の名前も撒儿塔黑台（サルタクタイ）である⁶。オゴデイ・カーン国時代に、第一次高麗遠征を行ったモンゴル軍隊の将軍の名前は撒礼塔（サルタウル）である。1231年、撒礼塔は命令を受け、高麗に進攻し、連戦連勝して高麗の王城に迫った。高麗の国王は使者を派遣し、講和を申し入れた。高麗の京、府、県にダルガチ（達魯花赤）七十二人を残した⁷。翌年、七月に、高麗の国王は江華島へ逃げ、モンゴルが残したダルガチを殺した。八月に、モンゴル軍が襲来した。1235年に、サルレタフは再び命令を受け、高麗を征服し、開京（現在朝鮮開京）の處仁城を攻撃したが、高麗軍隊に射殺されてしまった⁸。

クビライ・カーンの臣下には撒儿塔黑台那顔（サルタクタイ・ノヤン）という人がいる⁹。ラシードウッディーンによれば、「阿難達（アナンダ）の臣下には撒里答という人がいて、イスラム教に反対し、大ハーンに謁見し、阿難達がよくモスクで祈りを捧げ、宴会で『コーラン』を読むと愚痴をこぼした。」という。

二、肅良合（ソランガ・Solangqa）

肅良合（ソランガ）はモンゴル人の高麗人に対する呼び方として、最初は漢字による音訳の「莎郎合思」（Solangqas、言葉 Solangqa の複数形）の語で、『元朝秘史』の第274節に現れ、「高麗」と解釈された¹⁰。元王朝の後期の高麗人奇氏完者忽都（オルジェイ・クトゥク）は元順帝妥歡帖睦爾（トゴン・テムル）の皇后である。元六年（1340）に、皇子愛猷剌知理達腊（アユルシリダラ）を生んだ。こうして、モンゴルの皇族にも高麗人の血統が混じった。待望の皇子愛猷剌知理達腊（アユルシリダラ）を生んだから、奇氏は皇子生母として次皇后になった。至正十三年（1353）息子愛猷剌知理達腊（アユルシリダラ）は皇太子に冊立された。二十五年（1365）、奇氏は正皇后に昇格し、摂太尉によって、玉冊と玉宝を授けられた。冊文によれば「肅良合氏、名族の出身で、朕のそばに遣える」¹¹ 奇氏を皇后に冊立する勅書に「奇氏を肅良合氏に改める」¹² とある。妥歡帖睦爾（トゴン・テムル）の勅書によれば、奇氏という漢民族っぽい名前をモンゴル語の名前に改名し、それが高麗人全体の族名となり、「名族」と認定されたのである。そして、Solangqa の漢訳の字を規定した。ほかに、『元史』に皇帝が定めた族名肅良合を氏名とする、朴賽音不花（パクサイン・ブカ）という人が記載されている。彼の姓が高麗民族の姓「朴」であり、名前がモンゴル語の「サインブカ・Sain-buqa」で、いい雄牛という意味である。また、漢民族の士人を真似て徳中という字を付けた。『伝』によれば、彼は「肅良合台人」である。古代モンゴル人が氏名を述べる時は、族名の後に氏名と接尾語を加える。男性の氏名の接尾語は「-dai/dei」であり、女性の氏名の接尾語は「-jin」である。朴賽音不花（朴サイン・ブカ）は高麗人であるから、彼は肅良合氏—Solangqadai である。肅良合は始め宿衛で速古儿赤（スグルチ）を担当した。速古儿赤（スグルチ）とは即ち、「内府の傘持ちを担当する怯薛執事」である。彼は奇皇后に薦められ、宿衛に務めることができ、また官利器庫提点や奇皇后が設立した資政院判官に任命され、軍事を担当する同知枢密院事に昇任された。高麗の合浦、全羅等の軍民万戸を担当し、大司農、嶺北行省平章にも任命された。至正二十四年（1364）に翰林学士承旨になった。さらに、集賢院大学士、宣政院使、中書平章政事を歴任した。二十八年、明の軍隊は大都に迫り、彼は数百人の兵士を率いて承順門を守った。城が攻め落されたため彼も捕虜になったが、降伏しないため殺されてしまった¹³。

第二巻』、天津古籍出版社、1992年、第139ページ。

5 『柏朗嘉賓蒙古行紀 魯布魯克東行紀』、耿昇、何高濟訳、中華書局、1985年、第313-317ページ。

6 余大鈞、周建奇訳、ラシードウッディーンが編集した『集史』第二巻、第116ページ。

7 『元史』巻二百八、高麗伝、第4608ページ。

8 鄭麟趾：『高麗史』巻二十三、高宗世家二。

9 余大鈞、周建奇訳、ラシードウッディーンが編集した『集史』第二巻、第318ページ。

10 『中国歴史大辞典』（遼夏金元史）第337ページ、周清澍が編纂した「肅良合」という条目である。

11 原文：奇尔肅良合氏，篤生名族，来事朕躬。

12 余大鈞、周建奇訳、ラシードウッディーンが編集した『集史』第二巻、第318ページ。

13 『元史』巻一百一十四、オルジェイ・クトゥク皇后奇氏伝；巻46、順帝本紀、第971ページ。

『元史・后妃表』の記載によれば、太祖の第四斡耳朵（オールド＝君主の宮殿）には鎖郎哈（ソランガ）の妃がいる。鎖郎哈は即ち肅良合のことである。例えば、漠南五投下の亦乞列思（イキレス）部にいた建国の功労者チンギスカンの義理の弟孛術（ボト）の曾孫の名前は鎖郎哈であり、彼の娘は武宗皇后であり、明宗の生母、順帝の祖母である¹⁴。

三、唐兀（tan r ud）、合申（Qašin）

唐兀（タングト）はモンゴル語党項という言葉の音訳である。党項人及び彼らによって建立された西夏国のことでもある。「合申」（カシ）という言葉は「河西」の発音が変化した結果であり、当時のモンゴル人は西夏のことをこういうふう呼んでいた¹⁵。『元朝秘史』の第249節によれば、「チンギスカンはそこから出発し合申の人々を征服した。」とある。オゴデイ・カーンの第五子の名前は合失（カシ）である。ラシードウッディーンによれば、「彼はチンギスカンが唐兀惕（タングート）と呼ばれる河西地域を征服した時生まれたから、カシンという名前を付けた。しかし、彼はお酒が好きで、いつも酔っていた。そういう乱暴な飲み方のせいで、オゴデイ・カーンは彼に先立たれてしまった。彼が死んだ後、合失（即ち、河西という名前）は禁じられた。これ以来、其の地域は唐兀惕と呼ばれるようになった。」¹⁶ 合失（カシ）の息子は海都（カイドウ）である。

四、術赤台（ジュルチェデイ・Jüricidei）

モンゴル人は女真を Jürčen と呼ぶ。『元朝秘史』第247節によると、モンゴル語で「主儿扯敦」と書き、また「女真の」と解釈された。

チンギスカンの建国の功臣兀魯兀部（ウルウト部）の術赤台（ジュルチダイ、また主儿扯歹（ジュルチタイ）、術儿徹丹（ジュルチタン）、術徹台（ジュチダイ）は最初に札木合（ジャムカ）に帰順し、後に軍隊を率いてチンギスカンに帰順した。モンゴルの軍隊と克烈（ケレイト）族は哈蘭真沙陀（ハランジンサタ）で戦った。兀魯兀（クイルダル）部と忙兀（マングト）部が先頭に立ち、オンカンの子亦剌合（イチカ）を矢で撃った。モンゴルの建国当時、亦剌合（イルカ）は左手兀魯兀四千戸の担当者に任命され、チンギスカンは克烈（ケレイト）族オンカンの弟札阿紺孛（ジャア・ガンボ）の娘亦巴合別乞（イバガ・ベキ）を彼に賜った¹⁷。

五、南家台

南家台（南家思）、南家はそもそも、金朝が宋人を南家と呼んでいたことに由来する。モンゴルはその呼び方を受け継ぎ、又複数を表す語尾—sを加え、南家思と呼んだ¹⁸。チンギスカン時期の建国の功臣扈昔礼（キシリク）の孫、成宗の時期の大臣哈拉哈孫（ハルガスン）の父の名前は囊加台（ナンギヤタイ）である。囊加台は「憲宗に従い、蜀を征伐し、軍隊の中でなくなった」¹⁹ 乃蛮（ナイマン）部人囊加歹、初任は都元帥府経歴であり、阿朮（アジュ）が宋の襄陽を包囲した際に従軍し、また丞相の伯顔（バヤン）に従い、江を渡り東へ向かい、宋朝と交渉を行った。元の軍隊は臨安（今の杭州）に迫っていた。宋朝が投降し、彼は城に入った。浙江東部の諸州県を占領し、蒙古軍副都万戸に昇任され、後に江東道宣慰使に抜擢された²⁰。伯顔の子の名前は囊加歹（ナンギヤダイ）である²¹。

14 『元史』巻一百一十八『ボト伝』、第2923ページ。

15 『中国歴史大辞典』、第414ページ、周清澍が編纂した「唐兀」という条目である。

16 『集史』第二巻、第12ページ。

17 『元朝秘史』第208節。

18 伯希和：『南家』、冯承鈞訳『西域南海史地考证译丛』二编、中华書局、1995年、第57ページ；『中国歴史大辞典』（辽夏金元史）第353ページ、周清澍が編纂した「南家」の条目である。

19 『元史』巻一百三十六、ハラハスン伝哈拉哈孫傳、第3291。

20 『元史』巻一百三十一、囊加台伝、第3184。

21 『元史』巻一百二十七、顔伝、第3116ページ；冯承鈞：『元代的几个南家台』、『冯承鈞西北史地论集』、中国国际广播出版社、2013年、第185-201ページ。

六、欽察（キプチャク・Kipcak）

欽察（キプチャク）族は、元々エルティシ川流域に住んでいた。「欽察」（Kipcak）という名前は中世紀のイラン語 kip に起源し、「紅色」或は「浅い色」という意味であり、cak はすべての草原住民に対する通称である。だから、欽察の意味は「浅い色の肌を持つ草原住民」である。欽察人は「クマン人」と呼ばれていたことがある。その名前の起源はコーカシアにあるクマン川である。キプチャク族はイランと突厥の後代である。七世紀に、欽察人は突厥人に追い払われ、西へ移動した。十一世紀中頃、欽察人はボルガ流域とウクライナ草原地域に定住した²²。『元朝秘史』の記載によれば、1205年、チンギスカンはエルティシ川流域で蔑儿乞（メルキト）族の残余勢力を打ち負かし、その首領黒脱阿別乞（トクトアー・ベキ）は殺されて、その忽都（クドゥ）ら三人の息子は康里を経由し、キプチャクまで逃げた。1216年、チンギスカンは速不台（スベータイ）にカンリン、乞ト察兀惕（キプチャク）、斡羅速惕（オロス）、馬札剌惕（マジャール）、アスなど11の国への遠征を命じた²³。オゴデイ時期、拔都（バトゥ）が統率した先鋭部隊がドナウ川まで侵攻した侵略戦争は『元朝秘史』で「Qibcaqcin ayan」と呼ばれる²⁴。拔都（バトゥ）が撒萊（サライ）で都を建て、欽察（キプチャク）草原を領地とし、欽察汗国と呼ばれた。多くの欽察人はモンゴル軍の捕虜になり、奴隷のようにこき使われた。馬乳で馬乳酒を作るから、哈刺赤（ハラチ）と名付けられた。元の世祖の時期に、首領土土哈（トトハ）は戦功を建てたから、欽察人の諸王は奴隷になる運命を免れ、軍隊に配属された。また、欽察衛親軍の都指揮使司が設置された。後に、左、右両部の龍翊護衛官を分けて、其の上に欽察親軍大都督府を設置した²⁵。オゴデイの第六子であるコデン・オグルの息子には欽察と名付けられた人がある²⁶。

七、阿速（As）

阿速（アスト）、又は阿思（アス）、阿宿（アシク）、阿速惕（アスタイ）など訳された。元々、アスト人は北コーカシアに住んでいたイラン人であり、ギリシャ正教会を信じ、ダルバンデのボルガ河の川口に移住し、ビザンツ、谷儿只（グルジ、今のグルジア）、斡魯思（オロス）と緊密な関係を持っている。1221年、速不台（スベータイ）などが軍隊を率いてコーカサスから、コーカサス山脈を超えて北へ進み、阿速（アスト）人等部族の連合軍を大敗させた。1239年、蒙哥（モンケ）が軍隊を率いて阿速蔑怯思（メゲス）城を包囲攻撃した。三月、この部族を征服し、多くのアスト人がモンゴルに降伏し、勇猛なアスト軍隊を形成した。憲宗三年（1253）、人を派遣し阿速（アスト）部族の戸籍調査を行わせ、七年にダルガチ（達魯花赤）をアストに駐在させた。中原に移住した阿速（アスト）人の多くは軍隊に入った。元九年（1272）、阿速拔都（アス・バートル）軍を編成し宋を攻撃した。武宗の時期に、左、右アスト両宿衛部を設置した²⁷。モンケ・カーンの息子に阿速台（アストティ）という人がある²⁸。ラシードゥッディーンによれば、モンケ・カーンには「奎帖尼（クイテニ）という妃がいて、出身は額勒只斤（エレジギン）の部族である。モンケ・カーンと彼女の間に息子が生まれて、阿速帯（アスタイ）と名づけられた。阿速帯（アスタイ）は阿里不哥（アリクブケ）と手を組んでフビライに対抗したことがあった。」²⁹

八、阿儿渾（アルグン・Argun）

ポール・ペリオによると、「阿儿渾（アルグン・Argun）は部族の名前であり、十一世紀末の Kašigari が知られて

22 烏云卒力格：『喀喇沁万户研究』、内モンゴル人民出版社、2005年、第14-15ページ。

23 『元朝秘史』第199節、第262節。

24 隣真前掲文、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001年、第693ページ。

25 『中国歴史大辞典』（遼夏金元史）第372ページ、周清澍が編纂した「欽察」という項目である。

26 『集史』第二巻、第21ページ。

27 『中国歴史大辞典』（遼夏金元史）第353ページ、周清澍が編纂した「阿速」という項目である。

28 『元史』卷一百七、第2723ページ。

29 『集史』第二巻、第2733ページ。

いる Argu 部族であり、現代の『黒姓乞儿吉思 (カラキラギシ・Kara-Kirghiz)』の Argin 或は Argun 族と関連している。³⁰ という。アルグン人は中アジア 7 大河川地域からチュイ川まで、即ちキルギス共和国とカザフスタン共和国の一部の地域に住む突厥部族である³¹。旭烈兀 (フレグ) の孫阿魯渾 (アルグン、1255-1291) はイルハン朝の第 4 代君主である。

九、斡羅思 (オロス・Oros)

斡羅思 (オロス)、または斡羅斯 (オロス)、兀羅思 (ウロス)、兀魯思 (ウロス)、阿羅思 (アロス) と訳され、複数の形は斡羅思惕 (オラスティ) である。ボルガ川から西のモスクワとキエフ地域を指す。十三世紀に、ロシアは幾つかの公国に分けられた。1223 年、モンゴル軍隊は初めてボルガ川地域で敵を撃破し、その南部に入った。拔都 (バト) の西征の後、キプチャクハン国に降伏した。一部の人が捕虜になり、奴隷としてモンゴルと中原地域に連れていかれた。順元年 (1330) に、「宣忠扈衛親軍都万戸府を設置し、官位は正三品であり、斡羅思 (オロス) の軍隊と兵士を統率し、枢密院に従属する」。十二月、一万の斡羅思 (オロス) 人を集めるように命じられ、百頃 of 田地を賜り屯田させた。翌年の四月に、万戸府を宣忠扈衛親軍都指揮使司に変えた。 (『元史』巻 34、35、文宗紀三、四；巻 100、兵志三、屯田)

海都 (カイドゥ) と妻迭連臣 (ディレンチン) の間に生まれた息子の名前は斡羅思 (オロス) である。ラシードウツディーンによると「ハトと境を接する地域をオロス (斡羅思) に渡し、彼に大きな軍隊を託した。」という (『集史』第二巻、第 16 ページ)

十、馬札儿 (マジャル)

馬札儿 (マジャル)、または馬扎 (マジャ)、馬茶 (マチャ)、馬割 (マジャ)、馬札刺 (マジャール) と訳される。即ち現在のハンガリーである。1241 年春に、拔都 (ハドゥ) 兄弟、速不台 (スブタイ) などが率いるモンゴル軍が馬札儿 (マジャル) を攻撃した。間もなく、モンゴル軍が首都ペスト (Pest) の近くに来たため、馬札儿軍が出兵したが大敗した。十二月、拔都が軍隊を率いてトナ川 (ドナウ川) を渡り、グラン (Gran) 城を占領した。篋里乞氏 (メルキド部) 伯顔 (バヤン) の弟である馬札儿台 (マジャルダイ、1285-1347) は武宗、仁宗に仕えた。泰定四年 (1327)、陝西西行台治書侍御史を担当し、また兵部尚書、御史大夫、知枢密院事等を歴任した。元三年に至り (1337)、太保と任命され、枢密院に配属され、北方を鎮守した。六年にバヤンについて右丞相を担当した。 (『元史』巻 138、第 1337 ページ、馬札儿台伝。)

十一、忻都 (Hindu)

忻都という言葉は印度のことをさす。『元朝秘史』第 261、264 節で忻都思 (—s は複数を表す語尾である) と表示されている³²。

チンギスカンと彼の子孫たちによって行われる大規模な対外征服戦争において、漠、女真、西夏、高麗、欽察、阿速 (アスト)、斡魯思 (オロス) など諸民族および国家から大量の人口がモンゴル地域に移され、後にその大部分がモンゴル人に同化した。モンゴル帝国の時期に、モンゴル人がいつもほかの民族や部族の名前を自分の子供の名前にする現象から、これらがモンゴル人と付き合い、触れ合ってきた歴史が伺える。

モンゴル帝国時期以後、モンゴル民族に融合したあらゆる民族と国家の名前もだんだんモンゴル部族や氏族の

30 ポール・ベリオ、『尊麻林』、『西域南海史地考証译丛三編』第 58 ページ。

31 楊志久:『元代的阿儿渾人』、『元史三論』、人民出版社、1985 年、第 229 ページ。

32 隣真前掲文、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001 年、第 690 ページ。

名称へ変わっていく³³。17世紀のモンゴル語文献の中に、肅良合（ソランガ）、撒兀塔兀勒（サルタウル）哈刺沁（ホルチン）、阿速（アスト）等の部族が現れる。例えば、サガンセチェン『モンゴル源流』に「肅良合」の記載が何箇所もある。

（一）己未年（1433）、太松吉台（タイスン・タイジ）は自分を太松合罕（タイスン・カーン、漢籍のトクトアー・ブカ・カン）に立てて、自分の弟アハバルジ（阿黒巴儿只）にジノンという称号を与え、四瓦剌部（オイラト部）へ出征した。瓦剌側も阿ト都刺・扯臣（アブドゥウラー・セチェン）を阿黒巴儿只（アクバルジ）のところへ派遣し、彼とその兄太松の間にもめ事を起こさせようとした。其の夜に、（アクバルジ・阿黒巴儿只）は肅良合人（Solongqas）忽都巴哈（クト・ブカ）、火你赤兀氏猛可（コニチ・グシ・モンケ）二人を阿ト都刺・扯臣（アブドゥウラー・セチェン）に同行させ、一緒に帰らせ、四瓦剌部と手を組んだ³⁴。

（二）阿黒巴儿只（アクバルジ）が即位し、大ハーンとなったが、彼と彼の息子哈儿忽出黒（ハルグチュク）は相次いで瓦剌人に殺された。瓦剌の先汗（エセン・ハーン）の娘薛扯克（セチェク）妃子は哈儿忽出黒（ハルグチュク）の妻であり、妊娠七ヶ月であった。薛扯克（セチェク）妃子が息子を生むと、殺されるため、薛扯克（セチェク）妃子は男の子を生んで、先汗（エセン・ハーン）の祖母撒木儿（サムル）公主のところに送った。撒木儿（サムル）公主は彼を伯顔・猛可（バヤン・モンケ、即ち、モンゴル語史書の中でダヤン・ハーンの父である）と名付けて、肅良合人桑哈勒都儿（サンガルドル）の妻哈喇黒臣（ハラグチン）太夫人が彼を育てた³⁵。

（三）太松合罕（タイスン・ハーン）の息子莫蘭台吉（モーラン・タイジ）はモーリハイ王に擁護され、大ハーンを即位した。肅良合人忽都巴哈（クトラバハ）はモーラン・ハーンところで、「モーリハイ王は蛮地の王妃と共謀し、軍隊を率いてあなたを征伐しようと企てた。」また、モーリハイ王のところで、「モーラン・ハーンがあなたを殺そうとした。」と告げた。両者の間で揉め事を引き起こし、結果としてモーラン・ハーンが戦敗し、殺された。真相を知ったモーリハイ王は忽都巴哈（クトラバハ）の舌を切って殺した³⁶。

33 隣真前掲文、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001年、第690ページ烏蘭：『关于蒙古人姓氏』、『蒙元史暨民族史论文集—纪念翁独健诞辰一百周年』、社会科学文献出版社、2006年、第102-103ページ。

34 烏蘭：『「モンゴル源流」研究』、遼寧民族出版社、2000年、第273ページ。

35 同上、第277ページ。

36 同上、第280ページ。

【発表論文5】

モンゴル帝国と火薬兵器 ——明治と現代の「元寇」イメージ

向 正樹（同志社大学）

1. 様変わりしたモンゴルのイメージ

日本の歴史学界におけるモンゴル帝国のイメージは、90年代以降大きく変わってきた。とりわけ杉山正明氏は一連の著作¹やメディア²を通じ、モンゴル帝国イメージを刷新し、その影響は広く浸透しつつある。多元社会を治める柔軟性と経営マインドに富んだ統治集団としての新しいモンゴル像が、世界に破滅をもたらした征服者としてのステレオタイプと取って代わる。モンゴル人第一主義、九儒十丐、ラマ教の狂信といった古色蒼然たる旧説は痛烈に批判された。

では国民レベルでのモンゴル襲来のイメージは、それがナショナルアイデンティティ強化に利用された戦前から今日までの間でどのように変わったのだろうか。洋画家矢田一嘯^{やだいしゅう} (1859 – 1913) のパノラマ画「蒙古襲来絵図」と最近の中国の観光地のパノラマ展示や日本の漫画での描写を比較してみたい。

矢田一嘯と元寇記念碑運動

矢田一嘯は明治期に活躍した洋画家で、歴史を題材としたパノラマ画を数多く残した人物である。安政5年(1858)横浜に生まれ、日本画を学んだのち洋画を学び、明治15年(1882)頃にアメリカやヨーロッパに渡り、帰国後、上野パノラマ館に戊辰戦争のパノラマ画を描き注目を浴びた。

パノラマ館とは、円筒形の建物内部に大画面を巡らせた見世物施設である。1794年にロンドンで生まれ、ヨーロッパ、アメリカに広がった。矢田も海外滞在中にそれらを目の当たりにしたと考えられる。明治23年(1890)に開業した上野パノラマ館は日本最初のもので、浅草・大阪・京都・熊本・富山にも建造された。

矢田はその後、熊本に九州初のパノラマ館ができたとき、そこに西南

図1 矢田一嘯 蒙古襲来絵図「博多上陸」 本佛寺

うきは市ホームページ>くらし>歴史・伝統文化>元寇の油絵 本仏寺より

http://www.city.ukiha.fukuoka.jp/imgkiji/pub/detail.aspx?c_id=71&id=22

2017年7月10日閲覧



1 杉山正明『大モンゴルの世界—陸と海の巨大帝国—』(角川選書227, 角川書店, 1992;『クビライの挑戦—モンゴル海上帝国への道—』(朝日選書525), 朝日新聞社, 1995;『モンゴル帝国の興亡』講談社, 1996.

2 NHKスペシャル「大モンゴル」(1992年放送)など。

戦争のパノラマ画を描いて活躍した。明治27年(1894)、福岡に移ると、湯地丈雄の元寇記念碑を建設する運動に賛同し、そのために元寇を題材とした一連のパノラマ画を描いた。元寇記念碑の建設された東公園には、それらを展示するため、元寇記念パノラマ館もつくられた³。矢田はまた解剖学の知識を生かして博多人形の育成にも尽力し、そして、大正2年(1913)に没した⁴。

図2 「蒙古襲来絵詞」前巻、絵7 宮内庁



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:M%C5%8Dko_Sh%C5%ABrai_Ekotoba.jpg?uselang=ja 2017年7月10日閲覧

元軍イメージの変遷——明治・現代日本と中国

矢田のパノラマ画には元軍の際立った特徴のひとつである火薬兵器の使用がしっかりと描かれている(図8)。有名な「蒙古襲来絵詞」(図2)に描かれた博多に上陸した元軍との戦闘シーンに想像力を加えて立体感を出した構図となっている。湯地丈雄・高橋熊太郎『元寇』にも「てつはう」が炸裂する「蒙古襲来絵詞」の挿絵が描かれるほか⁵、次のように記しており、あきらかに火薬兵器に特別な注意が向けられていた。

元の軍勢はすでに中央亜細亜地方に於て、百戦を経たる雄将猛卒にして、其の指揮の整い進退の駆引自由自在なる、戦場の法すべて我が国人の意外に出でたりける、殊に毒矢を射かけ、火矢を放ち、鉄砲を打ちかくる、其の音空に鳴り渡りて雷の如くひびきわたり、之にふるるものはいかに勇猛なりといえども直に命を落としけり…⁶

今日、モンゴル軍を描く画像・映像で目に付く特徴は、さらに先進的な火薬兵器の描写である。特に近年は、その時代に存在したことが完全には証明されていないような種類の火薬兵器を、モンゴル軍がすでに実用化していたかのように描かれる例もある。例えば、近年、たかぎ七彦の漫画『アンゴルモア 元寇合戦記』では、後述のようにクビライ時代には存在が確認されていないはずの金属管形火器が登場する⁷(図3-a)。氏の作品は綿密な調査に基づく斬新な描写を特徴とする。例えば、唐が鮮卑系王朝であり、唐皇帝が「天可汗」として世界に君臨したとか⁸(図3-b)、モンゴル帝国を「ウルス」と記述するのは⁹(図3-c)、近年の研究動向を踏まえたものとみられる。モンゴル人登場人物のセリフや軍旗に、パクパ文字、ウイグル文字モンゴル語が多用され、異国感を表現しているのが印象的である(図3-d)。これに対し、矢田一嘯のパノラマ画では元軍の旗は基本的に漢字で「右軍」「東路」

3 後述の佐野前助上人によって銅像前の広場に建てられたが、大正中期に大暴風雨によって倒壊した。太田弘毅編著『元寇役の回顧—記念碑建設史料—』錦正社、2009、p. 164。

4 以上、太田、2009 および西本匡伸編『よみがえる明治絵画—修復された矢田一嘯「蒙古襲来絵図」—』福岡県立博物館、2005、より。

5 湯地丈雄・高橋熊太郎『元寇—日本と蒙古の対戦—』鶴飼兵太郎出版、1893、p.69。同一内容が湯地丈雄・高橋熊太郎『少年世界 元寇』(学友館、1891)として先に出版されている。

6 湯地・高橋、1893、p. 64。

7 たかぎ七彦『アンゴルモア 元寇合戦記』第4巻、角川書店、2015、pp. 37-38。

8 同上、第5巻、2016、p. 106。唐=「鮮卑系王朝」説や唐太宗の「天可汗」称号については森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社、2007、p. 138、164 参照。

9 同上、第1巻、2015、p. 54。

「大元水師」などであった。モンゴル側の人物を描く際、ときにかねらの価値観の独自性を表現しつつも、共感可能な人間的な側面も同時に際立たせているのは（図 3-e, f）、グローバル世界の多様性を反映した、極めて現代的な表現感覚であるといえよう。

最近、中国大陸の例で、興味深いのは、広東省江門市新会区にある宋元崖門海戦文化遊覧区である。1276 年、崖門に行宮を置いていた南宋の幼主趙昰（端宗）を元が海戦のすえ滅ぼしたのにちなみ、行宮が置かれた場所に作られたテーマパークである。南宋側の視点で作られている。園の最奥部には、楊太后を祭った慈元廟、文天祥・陸秀夫・張世傑を祭った大忠祠、宋軍の兵士を祭った義士祠の三つの真新しい廟宇が並び立つ。その建造の資金を香港・マカオの住民のほかアメリカ在住の華僑が出している（図 4-a）。対モンゴル戦争の記憶が、遙かな遠隔の地にあって当地出身の人々のアイデンティティの核となっている様が興味深い。

園内の建物のひとつには、最近描かれたとみられる南宋と元の戦いを描いたパノラマ画が展示されている。そのなかの一枚には元軍が大口径の大砲を発射する絵がある（図 4-b）。また、入口付近の建物で、海戦の様子を描いた再現 CG 映像がスクリーンに流れていたが、その映像中にも元の艦隊が大砲を一齐射撃するさまが描かれていた（図 4-c）。園内の展示によれば、元軍が大砲を使用したことを含め、海戦の詳細を描くという地方文献のコピ

図 3-a 銃

（たかぎ七彦『アンゴルモア元寇合戦記一』第 4 巻, p. 42 より）

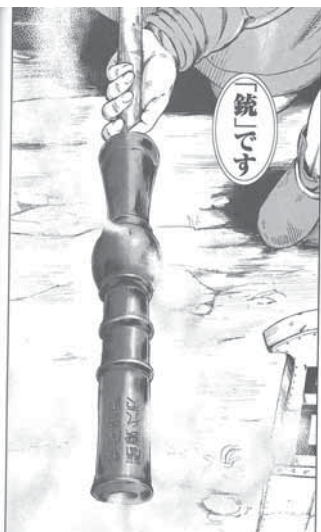


図 3-b 天河(ママ)汗

（同第 5 巻, p. 106 より）



図 3-c ウルス

（同第 1 巻 p. 54 より）

図 3-d バクバ文字・ウイグル文字
モンゴル語（同第 6 巻 p. 46 より）

図 3-e モンゴル將軍

（同巻 3, p. 171 より）



図 3-f モンゴル將軍

（同巻 3, p. 172 より）



一が展示されていた。たしかにそこには「砲」を使用したとの記述がある。しかし、この「砲」が何を指すのか、実は難しい問題なのである。

図 4-a 宋元崖門海戦文化遊覧区

2016 年 2 月 23 日筆者撮影



図 4-b 同 パノラマ画



図 4-c 同 再現 CG 映像



2. マンジャニークと火薬兵器——軍事技術の東西交流

火薬兵器が世界史において果たした役割については、つとに多くの議論がある。15 世紀以降のヨーロッパ人のアジアや新大陸進出の前提条件として、造船技術、航海技術とならび火薬兵器の改良が挙げられる。またそれ以前の時代に幾度もユーラシアの歴史を大きく動かしてきた騎馬遊牧民の勢力が定住農耕民社会の帝国に対して劣勢に置かれた一要因としても、後者による火薬兵器の導入が挙げられる。しかし、もっとも早く火薬兵器の開発を進めてきたのは中国王朝であった¹⁰。しかもそれを戦争に本格的に導入したのは北方騎馬遊牧民系の政権であった。

ユーラシア東西に跨る史上最大の帝国をうち立てたモンゴル——その最大の武器は、騎馬遊牧民ならではの組織力と機動力であった。しかし、特に中央アジア・ホラズム朝征服からバグダード進攻の過程では、堅固な城壁に囲まれた都市の攻略が必要となり、その過程で様々な兵器を導入し、さらには南中国遠征に際しては、水軍も創設された¹¹。モンゴル帝国は中国やホラズムなど征服の過程で各地の様々な技術（と技術者集団）を吸収していっ

10 Jerry H. Bentley, *Old World Encounters: Cross-cultural Contacts and Exchanges in Pre-modern Times*, Oxford University Press, 1993, pp. 181-184; Needham, Joseph. *Science & Civilization in China*, Vol. 5: Chemistry and Chemical Technology, Part 7: Military Technology: the gunpowder epic. New York: Cambridge University Press, 1986; テンプル, ロバート著, ジョセフ・ニーダム序文, 牛山照代訳『図説 中国の科学と文明』河出書房新社, 1992, 改訂版 2006, pp. 380-387 (原著 Robert Temple (Foreword by Joseph Needham), *The Genius of China: 3000 Years of Science, Discovery & Invention*, Patrick Stephens Ltd., 1986; Carlton Publishing House, 2006).

11 蕭啓慶「蒙元水軍之興起与蒙宋戦争」『漢学研究』第 8 巻第 2 期 (16 号), 1990, 177-200; 向正樹「蒲寿庚軍事集団とモンゴル海上勢力の台頭」『東洋学』89(3), 2007, pp. 80-82.

たことが知られる¹²。それは軍事技術においても例外ではない。本発表では、未解決の問題が多いモンゴル帝国の火薬兵器使用について今の時点でどのように評価できるのか、文献や考古学など様々な面から考察してみたい。

モンゴル帝国が征服戦争の過程で、イランで改良されたカタパルト式投石器マンジャニーク（図5）のような攻城兵器など、新しい軍事技術の導入に積極的であったことはよく知られている¹³。マンジャニークはもともとの意味は投石機である。いかにより大きな巨石を飛ばし、ユーラシア大陸の都市に一般的な堅固な城壁を破壊するか、を主たる使用目的としている。『集史』には、1258年のフレグ軍によるバグダード攻めの際、周辺の山から石をあつめ投石機で飛ばし城壁に穴をあけた記述がある。巨石を飛ばせるマンジャニークがバグダード陥落の決め手であった。

ところが、実はこの戦役に火薬兵器が使用された事実も無視できない。しかも『集史』によればそれは中国由来のものであった。『集史』フレグ・ハン紀によると、1251年、第4代皇帝モンケが、弟フレグにバグダード遠征を命じたさい、中国から三種類の兵器を扱う技師1000名を派遣させている。それらは扱う兵器の種類によって Manjanīqī, Naftandaz, Charkhandaz とペルシャ語で記されている¹⁴。それぞれ、ペルシャ語で「Manjanīq を扱う者」、「Naft を投射するもの」、「Charkh を投射するもの」を意味する。Manjanīq は先述のマンジャニークであり、Naft はもともとは石油を意味する語であるが火薬の意味もある。Charkh は火箭（所謂ロケット）のようなものであろう。従来これらは、「石・石油・槍を投射する…」とか「砲手・火炎放射手・弩手」とか解されている。

モンゴル帝国時代の用例については、Naft を石油と解するのが一般的である。それはアラビア語やペルシャ語の話される世界においては正しい判断かもしれないが、石油におとらず火薬が兵器として使用された中国にもその用例は通じるかどうかは大いに再考の余地がある。例えば、イブン＝バットゥータ旅行記に、中国ジャンクの搭乗者として Naft を投げる兵についての記述がある。旅行記の訳注を行った家島彦一氏は Naft について「石を綿でつつみ石油を浸して点火し…」という推定して述べている¹⁵。しかし、Naft という語はのちに火薬の意味ももつ

図5 アラビア語写本の挿絵に描かれるモンゴル軍の投石器 エディンバラ大学図書館蔵



(<https://en.wikipedia.org/wiki/File:MongolsBesiegingACityInTheMiddleEast13thCentury.jpg> より 2017 年 7 月 10 日閲覧)

12 松田孝一「モンゴル帝国における工匠の確保と管理の諸相」『平成12~13年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』（研究代表者：松田孝一；課題番号：12410096），2002，pp. 171-200。

13 杉山，1992，p. 237; 1995，p. 177

14 コンスタンティン・ムラジャ・ドーソン著、佐口透訳注『モンゴル帝国史』4（東洋文庫235）平凡社，1973，p. 138; 拉施特主編，余大鈞訳『史集』第3卷（漢訳世界學術名著叢書）北京：商務印書館，1997，p. 138; Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джамий ат-таварих; критический текст А.А. Али-Заде, Москва: Изд-во Наука, 1965, Persian text, p. 22.

15 イブン＝バットゥータ著、イブン＝ジュザイイ編、家島彦一訳注『大旅行記』（東洋文庫691）第6巻，平凡社，2001，p. 128; 184, 注163。

ようになる。イブン＝バットウータの旅行記は中国ジャンクについて語っているものであり、しかもイブン＝バットウータよりも70年も前に「てつはう」が存在していることから、Naftを火薬と解する方が正しいと考えられる。

また、バグダード包囲戦のとき、脱出しようとした敵軍への砲撃でブカテムルという将軍が率いる軍が“qawārīr naft”を使う記事がある¹⁶。Qawārīrとは、ペルシャ語で「フラスコ」や「瓶」を意味し、アラビア語 qārūra (t) (意味は「ガラス瓶、くすりの瓶」)の複数形 qawārīr に由来する。「ナフトを何か割れやすい容器に詰めたもの」だろう。もし naft が火薬なら、内蒙古や九州で出土

している陶製の火薬玉だろう(図6)。この火薬玉が旧金朝の華北出身の漢人部隊の武器であるなら、『金史』にみえる「震天雷」に近いものとみられる。つまり、バグダード陥落の決め手はあくまでも投石機であったが、「震天雷」に類する火薬兵器も同様に活躍したということである。

1268から1273年までのモンゴルによる襄陽攻撃の際、大元ウルスの遠征軍首脳の一人ウイグル人将軍エリクカヤが西域のような強力な投石機があればと考え、皇帝クビライがイルカン国(フレグ家)当主アバカに依頼し阿老瓦丁(アラー・ウッディーン)と亦思馬因(イスマーイール)が大元ウルスに派遣され¹⁷、襄陽の城壁を破壊した。

中国には火薬兵器の震天雷があったが、マンジャニークほど強力な投石機がなかった。逆に西にはマンジャニークはあったが火薬の弾丸をそれで飛ばすという発想がなかった。それぞれの足りない部分を補うように融通させた柔軟さと構想力こそが、ユーラシア世界帝国を築いたモンゴルの真骨頂といえることができる。

3. 二種類の火薬兵器と「砲」のジレンマ

モンゴル帝国(元朝)の時代は早くから火薬兵器を発達させ使用してきた中国においても、おそらくはそれが戦争に広範囲に投入されたという点で画期に当たる時代とみられる。この時期の火薬兵器使用についての記述は、漢文文献のなかにおそらく豊富にある。しかし、それがどのような形態のものだったのか特定するのは難しい。その時代のもものと認定される火薬兵器の実物には、以下に述べるように陶製爆弾と金属管形射撃性火器の二種類があること、その組み合わせが幾通りか考えられること、これらを指す漢語がはっきりしないこと、などの問題があるからである。

漢語において古くから火薬兵器を指す文字として「砲」(やのちに「炮」)が使用されてきた。「砲」は本来「礮」と書かれ、巨石を投じる機械を指し、火薬兵器登場以前の『後漢書』袁紹伝に用例がある。石へんが意味を表し、つくりの「包」が音を表す(一説には轟音を表現するという)。これがおそらくは金～元にかけての時期に火薬兵器を指す字となった。博多湾や伊万里湾で実物も発掘されている火薬兵器の「てつはう」の漢語表記もそれであろう。ところが、同時にこの時期には先述の投石機マンジャニークが「回回砲」と呼ばれていた。そのため、個々の用例で「砲」がどちらを指すのか、にわかには判然としない。しかし、考古発掘の成果を踏まえつつ、文献の用例を子細に分析することで見えてくることもあろう。そこで以下にいくつかの仮説的考察を加えてみたい。

図6 しつ葵(陶製爆弾) 内蒙古蒙元文化博物館



16 Фазлаллах Рашид ад-Дин, 1965, Persian text, p. 57.

17 『元史』巻128, 阿里海牙伝, p. 3125 (中華書局); 同巻203, 王芸伝, 亦思馬因, p. 4544 「亦思馬因, 回回氏, 西域旭烈人也, 善造砲, 至元八年與阿老瓦丁至京師, 十年, 從國兵攻襄陽未下, 亦思馬因相地勢, 置砲于城東南隅, …」; 蘇天爵『元朝名臣事略』巻2, 丞相楚國武定公(阿里海涯), p. 33(中華書局)「九年, 公請以西域礮攻樊城…」.

a. 陶製爆弾

「てつほう」とは、直径 15 センチ、陶製の球形の器に火薬を詰め爆裂されたものである。1281 年の日本遠征の際、4 千隻のモンゴル軍船が沈んだとされる長崎県松浦市鷹島沖海底からは、冑や矢束など多くの遺物とともに「てつほう」が発見された。海底からの遺物は外部を覆う貝殻のせいで形状を判別しがたいことが多く、また、金属遺物は錆と貝殻が厚く固着し、元の形状を探るために、三次元立体像を高速・高出力で撮影できる X 線 CT スキャナーが活用されている。鷹島からは内容物が残る「てつほう」も見つかり、X 線 CT 調査によると、内部に短冊状に割った鉄片、陶器片様のものが詰められていることが確認された。鉄片には気泡があり鑄鉄が使用されていることが判明する。これらが火薬の爆裂と同時に破砕・飛散して強い殺傷能力を実現していたと考えられるという。口付近には繊維質の痕跡がみられ、導火線あるいは有機物の内蓋があったと考えられている¹⁸。

日本遠征に「てつほう」を投入した皇帝クビライの時代、元軍が火器部隊を活用した記述は少なくない。漢人將軍の張榮の子君佐は南宋平定戦で、「火炮」を使用している¹⁹、先述のナヤンの乱でも、大元ウルス軍の李庭が決死隊に「火炮」をもたせて夜襲をかけ自爆し、敵を大混乱に陥れる記事がある²⁰。また、大元ウルスが南宋の残党を滅ぼした崖山の戦いで、南宋の艦隊に対し、「砲」を用いる策が検討されていたという記述がある。この提案に対し、「砲」を用いても「火起れば則ち舟散ず。戦うに如かず。」という反対意見があったことが記されている。それに続く戦闘のシーンでは、「弧弩火石交作」したと描写され、海戦での火器の使用を裏付ける²¹。

b. 金属管形射撃性火器

さらに、驚くべきことに、近現代の銃や大砲の祖形とみられる金属管形の射撃性火器までもが、モンゴル帝国軍によって広く用いられていた。中国の学界では「火銃」などと書かれる銅製・鉄製のこうした兵器は、宋代の竹筒を用いた「火筒」のようなものから派生して中国で独自の発展を遂げ、明代に広範に用いられていたことが従来知られていた²²。だが、現在中国にはすでにおそらく 10 をゆうに超える数の「火銃」が元代のものと推定され、博物館などに展示・収蔵されている。近年、内蒙古蒙元文化博物館が収蔵するパクパ文字で大徳 2（1298）年の銘が刻まれた全長 34.7 センチ、口径 10 センチの銅火銃が本物と認定され（図 7）²³、これまで紀年をもつもののなかで最古のものとされていた中国国家博物館蔵の至順 3（1332）年の紀年の銅火銃に代わり最古のものとなった。

この銅火銃は大元ウルスの上都遺跡周辺の牧民の家で発見されたという。おそらくは上都守備隊のものと推定される。大徳 2 年という、クビライ政権末期に帝国を揺るがしたチンギスの弟の一族であるナヤン、カダアンの反乱が収束してから 6 年後であり、大元ウルスはまだ東部モンゴリア方面への警戒を解くことができず、火器部隊を配置し睨みを利かせていた可能性もあろう。

図 7 パクパ文字大徳 2 年銘銅火銃
内蒙古蒙元文化博物館



c. 船上での火薬兵器使用？

1984 年、中国山東省登州港の蓬萊水城で三艘の古船が出土した。その中の一艘は残長が 28.6 メートル、残幅 5.6 メートルであり、全長 32.2 メートル、幅 6 メートルの中規模戦船であるとみられ、元代末期か明初のころの

18 今津節生「4. 長崎県松浦市鷹島海底遺跡出土品の X 線 CT 調査」『蒙古襲来、元の軍船からみえてくるもの』（鷹島神崎遺跡国史跡指定記念シンポジウム要旨集）、2013, pp. 287-300.

19 『元史』巻 151, 張榮伝, p. 3582.

20 『元史』巻 162, 李庭伝, p. 3798.

21 『元朝名臣事略』巻 6, 元帥張獻武王, 中華書局本, p. 106.

22 劉旭『中国古代火薬火器史』鄭州, 大象出版社, 2004, p. 31.53.

23 鐘少異, 齊木徳・道爾吉, 硯鴻, 王兆春, 楊泓「内蒙古新發現元代銅火銃及其意義」『文物』2004 年 11 月（総第 582 号）, pp.65-67+3plates.

ものと推定されている。この古船とともに、石弾、「銅砲」、「鉄砲」が出土したという²⁴。火銃を使用した海戦が想定されていたとすると、火器を装備した軍船が中国に現れていたことを示唆する驚愕すべき例である。

おわりに

以上、火薬兵器を中心として、日本におけるモンゴル帝国像の変化、そして、軍事技術からみたモンゴル時代のユーラシア交流について、見てきた。モンゴル帝国の火薬兵器使用の技術史的な考証も重要ではあるが、本稿で注目したいのは、明治と現代日本の元寇イメージの対比において、火薬兵器がひとつの鍵となるのではないか、という点であった。

湯地丈雄らは、『元寇』結論において、中央アジアの地、トルキスタンなどがチンギス칸の脚下に屈したのは、忠臣義士がいなかったのではなく、「愛国の心」が足りなかったのであるとし、「我が大日本帝国の人民」は時宗の英断や諸將の胆勇だけでなく、「愛国の心」がなければ、強敵を挫き、わが帝国の威武を海外に輝かし、日本男児の勇気を世界に示すことはなかったであろう、と述べている²⁵。また、湯地は矢田一嘯の元寇大油絵の画集に付した序に、日清戦争後の明治30年（1897）、当時の情勢を、「宇内の形勢東洋の危機、益々迫るの秋」とし「今や平和親睦なりと雖も、戦後の警戒、又前日に倍するものあり」と認識していた²⁶。その背景には、日露戦争を控え、欧米列強に対抗しつつ国家の生存戦略を立てなくてはならなかった明治の日本が置かれた状況が色濃く反映されている。これはまた今日われわれが置かれている状況ともどこか似かよう。

ユーラシア東方に史上屈指の衝撃をもたらしたモンゴル襲来の記憶は、漫画から、TVドラマ、映画など表現の場が広がっていくなかで、今後、どのようなインスピレーションを人々に与え続けるのだろうか。日本をとりまく極東情勢が不透明さを増すなか、中国の経済大国化や海洋進出は話題となりやすい。世界史的に見れば、中国シーパワーの拡大は、明の鄭和から実に600年ぶりの現象である。外洋艦隊の運用という意味では、「鄭和による大航海はモンゴル帝国の海洋政策の続きである」といわれる²⁷。鄭和の大航海のときには日本列島は巻き込まれていないが、モンゴル襲来のときには対馬や博多などが戦場となった。漫画『アンゴルモア』で描かれるハイテクの象徴としての火薬兵器は、およそ730年ぶりに先進的な軍事大国として海上に台頭する隣国への畏怖のシンボルなのであり、人々の不安な心理を代弁している、というのは考えすぎだろうか。

矢田一嘯のパノラマ画においては、残虐性が誇張されて描かれ、モンゴル襲来の恐怖にみちたイメージが形作られていた。しかし、『アンゴルモア』で、元軍兵士の戦利品の奪い合いなど醜い面が描かれることはあっても、それは日本側の登場人物の裏切りや悪逆非道な行為などよりもひどく扱われているわけではない（そもそもこの作品には、湯地・矢田のような愛国主義的なテーマが与えられているわけではない）。火薬兵器の描写についても、宋元崖門古戦場の再現CGに比べれば控えめですらある。しかし、敵対する他者は、（その非道性を強調することで自己と区別され、それとして認識される以外に）実際よりも強大な力をもつかのように描かれる傾向があるのも常である。日本・ヨーロッパ・イスラーム史料におけるモンゴル軍イメージをはじめ古今東西の歴史記録にそうした例は数知れない、イラクの旧フセイン政権の核疑惑もそうした面をもつだろう。モンゴル軍の恐怖イメージは、紋切り型の誇張表現がリアリティを持たなくなったいま、新型火薬兵器によってしか成立しえないといえるのではないか。

24 席龍飛『中国造船史』武漢：湖北教育出版社，2000，p. 210；山東省文物考古研究所，煙台市博物館，蓬萊市文物局『蓬萊古船』北京：文物出版社，2006：彩図20，41，図版4。

25 太田，2009，p. 106。

26 太田，2009，p. 128。

27 『新編高等世界史B 最新版』帝国書院，2002，p. 147。

【発表論文6】

朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる 元の日本侵攻に関する叙述

孫 衛国（南開大学歴史学院）

[原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）]

至元十一年（1274）と至元十八年（1281）に、フビライは二回にわたって日本遠征に踏み切った。これは近世東アジアにおける歴史上の一大事件であり、後世に深刻な影響を与えた。元の藩属国として、高麗王朝は元の日本遠征において重要な役割を果たした。元は高麗に日本遠征のための造船や物資の用意を強要した。同時に、高麗王朝も元と協力し、遠征軍を派遣した。朝鮮王朝の鄭麟趾によって編纂された『高麗史』での関連記載は、高麗王朝が日本遠征で果たした役割を考査する上での肝心な資料であり、また朝鮮王朝の遠征に対する見方を検討する上で肝心の根拠である。『高麗史』に見える日本遠征に関する記述は「元宗世家」、「忠烈王世家」、「兵誌」や「金方慶伝」などの章節で散見される。内容はバラバラだが、詳しく分析すれば、日本侵攻の理解に繋がると思う。また、戦争時、元の要求に対処して行われた高麗の巧妙な対応を分析することにより、元王朝と高麗の宗藩関係の特徴を明らかにしたい。

一、朝鮮王朝が『高麗史』を編纂した意図と経緯

1392年、李成桂は高麗の幼い王から高麗王位を篡奪して高麗王を称した。朝鮮王朝の正統性を確立するために、李成桂は即位するとすぐさま明へ使者を派遣し、「権知国事」の名義のもとで、「朝鮮」と「和寧」の二つの名前を持ち出し、積極的に明を宗主とする宗藩関係を築こうと努めた。そして、明の太祖朱元璋から「朝鮮」の国号を使うことを許され、李成桂とその臣下は喜んで受け入れた。かつて、箕氏朝鮮が周武王によって朝鮮侯に封じられたという歴史を踏襲して、明王朝の皇帝から冊封を受け、宗主国に承認され、その正統性を確立しようとした¹。同時に、建国の初期から、李成桂は高麗王朝の歴史の編纂を最重要の仕事として、本国の歴史から、新王朝の合法性を見出そうとした。韓国の学者が指摘した通り、「高麗時期の史料を整理することで、高麗王朝の問題を指摘した。これらの問題を克服して確立した朝鮮王朝の正統性を体現するだけでなく、新しい統治理念の方向も確立しようとした。」² 政治面における要請から、朝鮮王朝も高麗史の編纂を始めた。

最初は編年体で高麗の歴史編纂の仕事を展開した。太祖四年（1395）、李成桂は鄭道伝に『朝鮮王朝実録』などの史料をもとに、編年体の『高麗国史』の編纂を命じ、全37巻の『高麗国史』が仕上がった。今この本は失われている。

「各王朝の実録を集め、検校侍中文仁公閔漬の『綱目』、侍中文忠公李齊賢の『史略』、侍中文靖公李穡の『金鏡録』を集めて編纂する。左氏の編年体を真似て、三年かけて仕上げた。三十七巻である。その書には誤りもたくさんある。大体の内容は、元宗を肯定し、僭越な記載が多いし、後から訂正すべき所がたくさんある。」³

1 陳尚勝、『朝鮮王朝が明王朝に対する事大観』、『第三回韓国伝統文化国際學術シンポジウム論文集』、済南、山東大学出版社、1999年、第924ページ。

2 （韓国）朴仁鎭『韓国史学史』、全奎、金錦子、鄭京日訳、香港亞洲出版社、2012年、第55ページ。

3 『東文選』巻93『進高麗史序』、漢城：慶熙大学出版社、1968年。（原文：采摭各朝实录、及檢校中文仁公閔漬『綱目』、侍中文忠公李齊賢『史略』、侍中文靖公李穡『金鏡録』、汇而輯之。仿左氏編年之体、三年而成、為卷三十有七。顧其書、頗有舛誤。至于凡例、以元宗以上、事多僭擬、往往有所追改者。）

史書の編纂はすぐに完成したが、集めた史料の数が限られたし、且つ当時の李成桂に関する記載は事実に合わないと思われ、「僭越な記載が多い」と批判された。しかし、この本の史論は『高麗史節要』に大量に取り入れられ、後世に伝わった⁴。そして、後の高麗史の編纂のための基礎を築き上げた。

太宗十四年（1414）、太宗は春秋館事河侁、卞季良などに『高麗国史』の再編集を命じた。しかし、二年後、河侁はなくなり、再編集の仕事もやむなく止めさせた。世宗元年（1419）、勅命により、編纂の仕事が再開した。三年後（1421）、完成した本を国王に捧げたが、依然として世宗の意に召さない。世宗五年（1423）、世宗は卞季良、柳觀、尹准などに史書の改編を命じた。翌年に、『讎校高麗史』が完成したが、意見が一致せず、発行できなかった。世宗十三年（1431）、世宗は監春秋館事申概、権踰に高麗史料を幅広く集め、高麗史を編纂するようにと命じた。世宗二十四年（1442）八月に、編集の仕事が終わり、『高麗史全文』と名付けた。世宗三十年（1448）に、この史書は初めて印刷された。多くの史料を取り入れたが、主旨が明らかではないから、後年、本の発行は停止した。しかし、この本は『高麗史』と『高麗史節要』の編纂のための、豊富な資料を提供している⁵。

最初の数十年間、朝鮮当局は高麗史の編集の為に、全力を尽くしたが、意に合う史書を得なかった。世宗三十一年（1449）、金宗瑞、鄭麟趾は世宗の命令により『高麗史』を再編修し、編年体を紀伝体に切り替えた。『進高麗史箋』に述べた通り、「凡例は司馬遷の『史記』に従い、大義は皇帝の裁断に準じる。藩国として名義を示すために、本紀ではなく、世家に編入する」⁶。編年体で編纂する場合、朝鮮王朝の正統性を確立しにくい。太祖は建国の当初から、編纂の仕事を始めたが、数代を経て、幾つかの史書を編纂したにもかかわらず、朝鮮国王の意に合うものはない。紀伝体で再編集するしかない。「歴史に対する批判的分析と構造的な理解の面で、紀伝体の記述は編年体より有利であるし、朝鮮王朝統治者が高麗歴史を編纂する目的に当てはまる」⁷。文宗元年（1451）八月に、『高麗史』の再編修が完成した。全書は目次2巻、世家46巻、志39巻、表2巻と列伝50巻からなり、合計139巻である。そして、金宗瑞は紀伝体『高麗史』に基づき、編年体で書き直した。翌年の二月に、『高麗史節要』が完成した。全書、35巻である。二冊の本により、高麗王朝の歴史の編修を通じて、朝鮮王朝の正統性を確立する目的が実現した。

『高麗史』は国王に関する内容を「世家」に編入し、藩属国としての地位を表明したが、宋、元など中国皇帝の年号ではなく、高麗国王の在位年数を以て編年体で記述した。これにより、高麗王朝の相対的独立性を表した。高麗王朝は建国して以来、相次いで五代、宋、遼、金王朝の皇帝の年号を使用していた。高麗の元宗から、モンゴルの年号を使用した。忠烈王によって李成桂の政権が覆されるまで、元王朝の年号を使い続けた。高麗は中国の諸王朝と付き合いしてきた。文化の面で、高麗王朝は宋王朝を正統としてきたが、宋王朝との宗藩関係は非常に短い時間しか続かない。そして、宗主国は次々に遼、金と元と変わっていった。高麗王朝は遊牧民族に建立された中国王朝に対して、政治や軍事の面で臣服しなければいけないが、文化の面では自負を持ち、臣服しなかった。朝鮮王朝の官撰史書『高麗史』では、歴代の高麗王の記述が天子を意味する「本紀」ではなく、諸侯の歴史をさす「世家」となっている。藩王としての地位を表したが、『高麗史』は、中国皇帝の年号ではなく、高麗国王の在位年数を以て編年体で記述した。この折衷の方法によって、高麗の藩属国としての地位を認めながら、完全には臣服せずに、独立自主の意識を持っているという朝鮮王朝の基本的な認識をはっきりと表明した。以上のように二つの意識の結合は『高麗史』編纂の基調となった。

高宗五年（1218）に、モンゴルの軍隊は契丹の残余勢力を追い掛け、高麗に入り、高麗と公式に接触し始めた。まもなく、兄弟盟約を結び、公式に往来する。モンゴルは何度も高麗に財物を強要したから、高麗の不満を起こした。モンゴルの使臣が帰国の途中で殺されてしまい、両国の間で戦争が起きた。1231年から1258年まで、モンゴルは朝鮮侵攻を七度も実施した。高宗四十六年（1259）に、太子王僖をモンゴルへ派遣し、双方が平和交渉を行った。丁度その時、モンゴルの大汗が逝去して、王僖は自らフビライを迎えに行った。フビライは即位し、元王朝を建てた。まもなく、高麗の高宗も逝去した。フビライは王僖を高麗まで送って即位させた。王僖は元宗となり、両国の平和の道を開いた。元宗の時代から、フビライは高麗の協力のもとで、日本遠征の準備を始めた。朝鮮王朝は高麗

4 (韓国) 朴仁鎬『韓国史学史』、第55ページ。

5 (韓国) 朴仁鎬『韓国史学史』、2012年、第57ページ。

6 『東文選』巻44『進高麗史箋』(原文：凡例皆法于迁史，大義悉禀于圣裁。遵本紀为世家，所以示名分之重)

7 (韓国) 朴仁鎬『韓国史学史』、2012年、第56～57ページ。

を中心に、歴史の編修を始め、その方針を『高麗史』全体に貫いた。だから、『高麗史』における元の日本遠征に関する記載は朝鮮王朝の「モンゴル襲来」の物語である。

二、『高麗史・世家』における元による日本進攻の史料の選択や編纂の原則

元が日本遠征を始める前に、フビライは使者を日本へ派遣し、日本と緊密な関係を築こうと要請した。この過程が長く続いた。初めから、高麗王朝はやむを得ず元王朝の日本東征のお先棒を担いだ。『高麗史』の詳しい関連記述には、やむを得ず、不満である意識が溢れ、また元王朝の威圧のもとで、高麗王朝が独立した姿勢で本国の利益を守ろうと試みた様子が伺える。高麗王朝を中心に、本国の意識と本国の立場を明らかに表明することは『高麗史』編纂の基本的な原則である。主に次の面に表われている。

第一、戦争の準備段階で、元王朝の理不尽な要求に対し高麗がやむを得ず対応したことを全面的に記述している。

元宗七年（1266）、日本遠征の前に、フビライは高麗を経由して使者を日本へ派遣した。高麗人趙彝の密告によって、フビライは高麗と日本の頻繁な往来を知り、使者黒的、殷弘を高麗へ派遣した。そして、使者に持たせた詔書によれば、フビライは高麗に使者と同行するように命じ、命令に違反した場合、元に対する忠実を疑うしかなないと脅かした。高麗はやむを得ず、枢密院の副使宋君斐、金賛などを黒的に同行させた。しかし、日本へは到達しなかった。元宗八年（1267）正月に、宋君斐、金賛とモンゴルの使者は巨済松辺浦に着き、「荒波を恐れて」帰った。元宗は宋君斐に黒的と一緒に元王朝へ復命に行き、皇帝に上奏するように命じた。上奏書は幾つかの意味を含んでいる。第一は、使者が日本へ到達できなかった理由について説明する。荒波はきわめて険しいので、使者の安全が懸念された。また、日本人が「頑固で粗野で礼儀知らず」、モンゴルの使者の安全を保証できないから、途中で帰るしかない。第二は、元王朝の皇帝が趙彝の話聞き、高麗と日本が緊密に往来していると信じていることについて弁明した。とくに「且つ日本は、素より小邦と未だ嘗て通好せず」と強調し、但し対馬島の人、時に貿易によって、金州に往来するのみであり、それ以外の日本人と一切往来したことがないから、趙彝の進言はうそである。第三に、元王朝の世祖が即位して以来、高麗は深く世祖の仁恤を蒙り、深く心に刻んでいる。「聖恩は天大にして、誓いて報せんと欲す。如しなすべきの勢いありて、心力を尽さざらんには、天日の如きものあり」⁸。少しでも恩返しできればと願っている。これは決意を表す上奏書であり、高麗が責任から逃れるために、弁明する為の上奏書でもあり、外交辞令を羅列したものである。モンゴルは初めて日本へ使者を派遣することは空振りに終わった。当時高麗はこの件に興味がなく、いい加減に済ませただけである。

モンゴル側も高麗の口実がよく分かった。八月一日、黒的、殷弘及び宋君斐などが罪を問う勅命を持って再び高麗を訪れた。フビライは勅命において、高麗の責任を逃れるための計略を指摘し、高麗のいい加減な態度と不誠実さを非難した。「天命は謀を難んじ、人道は誠を貴ぶ。卿は先後食言すること多し。宜しく自省すべし」⁹と高麗を嚴重に警告した。さらに、フビライは日本へ使者を派遣する決意を強く表した。「必ず要領を得るを似て期となせ」¹⁰、必ず結果を出すまでに諦めない決意を表した。最後に、高麗の「誓いて報効せんと欲す」¹¹という言い方に対して、今こそ報効すべき時だと指摘した。元王朝が硬軟両方の手段を用いたから、高麗はやむを得ず、使臣を日本へ派遣し、日本遠征のお先棒を担ぐしかない。

数十日を経て、高麗国王元宗は起居舎人の潘阜を遣わし、蒙古書および国書を持って日本に向かわせた。蒙古書に曰く、「高麗は朕の東藩なり。日本は（高麗に）密邇し、開国より以来、また時に中国に通ずるに、朕の躬に至りて、一乗の使いの似て和好を通ずるなし。尚お恐る、王の国のこれを知ること、未だ審かならざるを。故に使いを遣わし、書を持して、朕の志を布告せしむ。冀わくは、自今似往、通問して好みを結び、似て親睦せん。且つ聖人は至りては、夫れ、孰れか好む所ぞ。王、それ、これを図れ」¹²とのたまう。フビライは日本と使者を派

8 鄭麟趾『高麗史』巻26「元宗世家二」、元宗八年正月癸丑。台北：莊嚴文化事業有限公司、1996年（聖恩天大、誓欲報効、如有可為之勢、而不尽心力有如天日）

9 原文：天命難謀、人道貴誠、卿先後食言多矣、宜自省焉。

10 原文：以必得要領為期。

11 『高麗史』巻26「元宗世家二」、元宗八年八月丙辰。

12 『高麗史』巻26「元宗世家二」、元宗八年八月丁丑。（原文：高麗、朕之東藩也；日本密邇、開國以來、亦時通中國、至于朕躬、而无一乘之使以通和好、尚恐王國知之未申、故遣使持書布告朕志、冀自今以往、通問結好、以相親睦。且聖人以四海為家、不相通好、豈一家之理哉！以至用兵、夫孰所好、王其圖之。）

遣し合うという願望を表し、日本に通好を願う国書を出して貰いたいという願望を伝え、「似て親睦せん」。もし日本が元の要求を無視したら、元王朝は軍隊を派遣すると脅かした。同時に、高麗も日本に国書を奉じ、モンゴルに対する見方を伝え、日本に元王朝の皇帝に臣事することを勧めた。よって、元王朝と日本は往来しなかった上に、お互いもよく知らないが、フビライは高麗国王を通じて、日本に使者を派遣し合うという要請を伝え、両国の間で友好関係を構築しようとする意思を表した。高麗国王は両国の媒介にはなりたくないが、モンゴル帝国の高圧のもとで、やむをえずモンゴル帝国の皇帝フビライの詔書と高麗の国書を日本へ送り、使者を派遣し合うように要請した。モンゴル帝国は日本に使者を派遣し、好意を表したが、日本は取り合わなかった。その後、フビライは再び使者趙良弼を日本へ遣わした。

このように『高麗史』の「元宗世家」では、高麗がモンゴルの威嚇を受け、日本へ使者を遣わした史実は詳しく記述されている。その史実には、高麗のやむをえず消極的な態度が隠れている。そして、文章の中には、モンゴル帝国の威力が明らかに表われている。関連の評論がないにも関わらず、幾つかの詔書から、元王朝の威嚇が明らかに伺える。即ち、朝鮮王朝の史官がこの歴史を記述する時に、表した嫌悪の情である。実際に、高麗の使者を通じて伝えたのは単なる前ぶれであり、フビライの日本に対する野心は使者往来に止まる訳がない。

元宗十二年（1271）正月に、「モンゴルは日本国信使秘書の趙良弼及び忽林赤、王国昌、洪茶丘など四十人を遣わした」¹³。そしてフビライの詔書を持ってきた。彼らはモンゴル帝国が高麗を経由し、日本へ派遣した最初の使者団であり、実際に二回に分けて派遣されている。一回目は、趙良弼を国書使者として日本へ遣わし、そして趙良弼は高麗の「寵臣」康允紹を同行させた。二回目に、忽林赤、王国昌、洪茶丘などは予備使臣として、兵士を率いて海上で待機した。注意すべきなのは、もともと洪茶丘は高麗人であり、彼の父がモンゴルへ帰服したから、彼はモンゴルの將軍になった。史料の中に、洪茶丘が郊外へ迎えに行った高麗国王元宗を見ても「拝謁しなかった」¹⁴ことを特筆した。即ち、洪茶丘が臣下として国王へ拝礼しなかった。この件を取り上げ、洪茶丘の傲慢な態度をよく表し、高麗君臣と朝鮮の史官の不満を引き立てた。

日本がモンゴルの使者派遣の要請を取り合わないから、モンゴルは軍隊派遣の準備を開始した。出兵する前に糧秣を準備しておくべきである。糧秣を準備するために、忻都は軍隊を率いて高麗へ屯田した。そして、高麗に協力してもらい、三千匹の牛、農耕機具や種などの用意を求めた。その後、高麗は殿中監郭汝弼を派遣し蒙古へ陳情書を提出した。モンゴルに困窮を訴え、要求を一つずつ断った。

中書省から公文書を承り、元軍が鳳州に屯田し、農耕用牛、器具、種や軍隊用食糧の準備の命令を受けた。農耕用牛は、前に上奏した通り、弊国の都には家畜を農耕に使う人が殆どいない。他の地域には家畜を飼う農耕民がいるが、多くても一か二匹に過ぎない。貧乏な人は大抵農具（耒耜）を以て、或は牛を借りて耕作する。今、牛等の家畜は、全羅道食糧の運輸のため、餓死や疲労で大半を失った。元来弊国の農民は多くの農耕用器具を持っていないが、要求を達成できなくても、出来るだけの数を揃えるように努めた。種は、農民が毎年耕作して、租税を納めて、食糧とする。……軍隊用の食糧について、弊国の貯蔵した食糧は逆賊に奪われたもの以外、全部駐屯する軍隊や馬そして討伐の軍隊に提供し、使い切った。国内外からの賦税や徴用は農民の大負担となり、生計すら問題になったが、さらに、種や餌がたくさん徴用された。秋に軍隊用の数万碩はどこから調達すべきだろうか¹⁵。

高麗が提出した陳情書は、責任から逃れる為に様々な口実を設けて、困窮を訴えている。『高麗史』では、このような陳情書や、高麗がいかにモンゴルの要求に対応したかをめぐって重点的に記述した。朝鮮王朝の史官は『高麗史』を編纂する時も、宗主国の明王朝に同じ感情を抱いた。元王朝に比べて、明王朝は朝鮮王朝に対してそれ

13 『高麗史』卷27「元宗世家三」、元宗十二年正月己卯。

14 『高麗史』卷27「元宗世家三」、元宗十二年正月己卯。

15 『高麗史』卷27「元宗世家三」、元宗十二年正月丙寅。（原文：承中書省牒，鳳州屯田，農牛、農器、種子、軍糧等事。若乃農牛，如前表奏，小邦京中鮮有畜使者，外方農民雖產之，饒者畜養亦不過一二頭，貧者多以耒耜，或相賃牛而使之。今外方牛畜，悉因全羅道糧餉轉輸，以至飢困，損失者大半。農器，則小邦人民元來未有贍卹者，此皆雖不得如數，并當隨力供力。種子，則百姓趁年耕作，以修貢賦用，其餘以為糧料。……軍糧，則大軍之後，小邦元來蓄積，除逆賊攘奪外，悉因供億留屯軍馬及追討軍馬，罄竭無余。中外臣民征斂者累度，猶不連續，且又泛計種子、葛秣，接秋軍糧凡几万碩，此則何從而致之耶！）

だけの物資や食糧を求めてはいなかった。しかし、明朝の初期、高麗に、毎年処女と火者の貢進を求め、宦官を派遣した。それは当時の朝鮮王朝にとって、耐えられない大きな負担である¹⁶。それゆえ、『高麗史』を編纂するときも、その史実を重点的に記述し、藩属国としてのやむをえない気持ちを表しながら、藩属国としての反抗も表現した。その反抗は大した効果を得なかったが、朝鮮王朝が自主意識を持っていて理不尽な待遇に甘んじている訳ではない証拠である。

陳情書だけでなく、またフビライに朝鮮王朝に対する請求を放棄させる為に、断事官・沈渾を派遣し、陳情や請願を繰り返していた。

「百姓は皆皇帝の百姓であり、牛、農耕機具、種など全部徴用されて生計を失ったら、酷い労役を服し疲れきって、苦難に堪えられぬ百姓は餓死するのを恐れている。また、反逆者は豊作であり、愚民たちは反逆者になりかねない！陛下ははじめからこんな状況に至るとご存知なら、必ず、なぜはじめから実情を報告せず、わが百姓をこんな境地に迫るのかと問い詰めるだろう。今実情を報告しないと、将来誰がその責任を取るだろうか¹⁷。

この陳情書から、高麗は全力を尽くしてモンゴルの要求を満たそうとする姿勢を表したが、より重要なのは、百姓を代弁して皇帝に困窮を訴えたことである。農耕用牛、機具、種など全部徴用されたら、百姓は生計を立てる道がないから、窮地に追い込まれて、謀反を起こすかもしれない。だけど、「百姓は皆皇帝の百姓である」から、モンゴル皇帝にもそんな事態になってほしくないと信じ、命をかけて陳情し、皇帝に高麗の百姓の苦境を伝える。実際には、再び抗争を表す。

元宗十三年（1272）の正月に、趙良弼は日本から高麗へ戻り、日本の使者十二人を連れてきた。高麗の国王元宗はすぐに、報告と祝賀のために使者を大都へ派遣した。同年の十二月、元は再び日本に帰順を説得するために趙良弼を派遣した。でも、一回目はどうまくいかなかった。元宗十四年（1273）三月に、趙良弼は日本の太宰府を訪れたが、都に入ることは許可されないから、再び高麗に戻るしかなかった。モンゴルは使者を日本へ派遣すると同時に、忻都と洪茶丘がモンゴルの軍隊を率いて元宗十四年（1273）四月までに、三別抄に占領されていた朝鮮半島東南沿海の諸島を占拠し、珍島、耽羅を平定し、日本遠征の準備を行った。討伐の経緯は「忠烈王世家」に簡略に記述されている。

一回目の日本遠征にあたり、高麗は受動的に元王朝の要求に対応せざるを得なかった。二回目の日本遠征に当たって、高麗の国内は積極的に参加し、その意思決定に加わろうと試みて、出来るだけモンゴルの將軍の権限を制限し、高麗への影響を最小化する。二回目の日本遠征を決定する時に、高麗の国王忠烈王は大都にいて自ら皇帝の命令を受けた。『高麗史』に意思決定の過程は次のように書かれている。

忠烈王は7つの希望条項を上奏した：一、我が軍は耽羅を鎮戍（鎮守）する兵を以て、東征を補うこと；二、高麗、漠の両軍より、寧ろ蒙軍を以て前線に立てること；三、洪茶丘の職任を加えず、臣も亦、征東行中書省の事を管轄すること；四、小国の軍官、みな牌面（勳章などの類）を賜ること；五、漠の地浜海の者を梢工、水手に充てること；六、按察使（地方行政監察官）を遣わして、百姓の疾苦を見させること；七、臣が自ら合浦に到って、軍馬を閑送をすること¹⁸。

よって、高麗の国王は日本遠征に参加することを非常に重視し、大臣を皇帝に拝謁させ、自ら東征の命令を受けたいと上奏してもらった。他の臣下を通して勅命を受けるのではなく、直接に命令を受けることで、主導権を

16 この問題に関して、陳学森『明王朝の人物と伝説』を参照ください。香港：香港中文大学出版社、1997年。

17 この問題に関しては陳学森の『明代人物と伝説』、香港：香港中文大学出版社、1997年。（原文：噫！此百姓皆是皇帝之百姓，乃此农牛、农器、种子一皆收夺，使失其业，则恐百姓决定饥死，其又在此者役倾力竭，不堪困苦。而从逆贼者，靡有歉艰，则焉知愚民有所忒于彼哉！圣鉴若知如此，必曰何不揆力陈实，早达宸所，使我百姓至于此极？然则谁当任其责？）

18 『高麗史』卷29「忠烈王世家二」、元宗六年八月辛卯。（原文：王以七事请：一以我军镇戍耽罗者，补东征之师；二减丽汉军，使闍里帖木儿益发蒙军以进；三勿加洪茶丘职任，待其成功赏之，且令闍里帖木儿与臣管征东省事；四小国军官皆赐牌面；五汉地滨海之人并充梢工水手；六遣按察使廉问百姓疾苦；七臣躬至合浦闲送军马。）

握ろうとした。戦略の制定と軍隊の派遣について、忠烈王は7つの希望条項を上奏した。一方で、高麗、漢の両軍より、寧ろ蒙軍を以て前線に立てると要請した。船員も高麗の兵士に頼るのではなく、漢の地浜海の者を梢工、水手に充てることにより、高麗王朝の責任を減少する。そして、洪茶丘の権限を抑制し、洪茶丘の職任を加えないと要請した。高麗の国王と洪茶丘は犬猿の仲であるからだ。高麗の国王は閩里帖木儿とともに日本遠征を担当すると要請した。忠烈王の意図は明らかであり、日本遠征において、他人に牽制されたり、日本遠征のため、政敵に権力を握られ、高麗の国政に影響を与えたりするようなことを避けるために、忠烈王は主導権を握ろうとした。『高麗史』はそれに重点をおいて記述している。フビライは忠烈王の希望条項を採用しなかったが、忠烈王の意見は重視した。九月丙辰、モンゴル日本遠征の軍隊を拘束する為に、遠征の元帥府鎮抚也速達賚二関字が来た。「その一……本国の食糧の貯蔵、梢工、水手、一切の軍隊の需要などは、それぞれの人に担当させ、下された命令通りに用意させた。失敗を起こさず、徴用されるのを待つ。その一、取り扱う人の中に、国法を恐れず、放火し食糧を焼き尽くした人がある恐れがある。食糧は大事であるから、それぞれの人に担当させることで、関連規定を公布し、違反する場合は、担当者の罪を問う。」¹⁹ 皇帝は忠烈王が提出した7つの希望条項に応じて、日本遠征の將軍たちの行動を拘束し、高麗への悪影響を避ける為に、この二つの規定を出した。『高麗史』にモンゴルの日本遠征の軍隊がもたらす危害は詳しく記述されていないが、忠烈王が第二次日本遠征までに行った積極的な行動から、日本遠征がもたらす危害が伺える。忠烈王が高麗への影響と危害を防ぐ為に積極的に行動を取り、ようやく報われた。

戦争準備の段階において、最初高麗王朝はやむを得ずモンゴルの要求に応え、巧みに対応し、困窮を訴えたが、第二次日本遠征の前に、高麗の国王は積極的に対応し、主導権を握るために行動を取った。これらの行動や変化は『高麗史』に詳しく記述されている。そこから高麗王朝が宗主国の元王朝に対する抗争やお茶を濁す態度が伺える。また、高麗王朝が独立自主を獲得しようとする意志が明らかである。

第二、高麗が戦争のために大量の人力、食糧、馬の餌などを消耗した。それが高麗にまざまな困難を齎したことは『高麗史』に詳しく記述された。

前述したように、高麗王朝は元王朝の様々な要求に対し、口実を設けていい加減に対応した。『高麗史』は高麗のやむを得ない立場を表現しようと試みた。高麗が消耗した物資、直面する困難、日本遠征のために作った戦艦、そして、消耗した人力、食糧、馬の餌などが一々記述され、元王朝の日本遠征のために払った対価もよく表した。例えば「(元宗)十五年の春正月、元は総管察忽を派遣し、三百艘の戦船の建造を監督した。すべての人々を徴用対象とし、高麗の担当者にすべてを任せる……徴用や監督が厳しく行われる……交州道で部夫を任命し、職人など三萬五千人あまりを徴用させ、造船所に派遣する。当時、駅に往来する人が後を絶たず、徴用等の負担が大きく、期限が迫っている。人々を苦しめる」²⁰。元宗十五年(1274)二月甲子に、高麗王は別將李仁を派遣し、元王朝に準備の状況を報告させる。今までの準備、消耗した食糧、些細なことまで全部皇帝に上奏し、特に高麗が直面する困窮を表明し、さらに百姓の困窮を訴え、最後に「毎年の徴用と税収は相次ぎ、期限もなく、人々はどうすることもできない！百姓に同情し、税収等を減免し、子孫後代を恵ませる」²¹と懇願した。減免を懇願し、民力を養うことにより、百姓を苦境から脱出させようとした。

高麗はよく元王朝に経済のことを報告した。高麗は常に提供した食糧の数を元王朝に報告し、一つ一つきちんと整理した。忠烈王三年(1277)に、高麗は使者を派遣し、中書省に上書し、「弊国は元七年以来、珍島、耽羅を討伐し、東征大軍の食糧は百姓に徴収し、そして、合浦鎮辺軍、耽羅防守軍隊、塩白州帰順の軍隊と關端赤のために、一年間食糧一万八千六百二十九石二斗を提供し、また牛や馬の餌を三万二千九百五十二石六斗も提供した。すべては元の測量単位斗で計算する。全部を百姓から徴収した。今度屯田軍の三千二百石の食糧と關端赤の食糧はどこから徴収すべきでしょうか！」²²。特に、「すべては元の測量単位斗で計算する」を特筆した。高麗がこれらの

19 『高麗史』卷29『忠烈王世家二』、元宗六年九月丙辰。(原文：其一一……据本国见管粮儲船只梢工水手，一切軍須，請照驗行下合属，如法准备，听候区用，勿值临时失误。其一，经行去处，窃恐不畏公法之人，放火烧草，事系利害，請照驗行下合属，出榜禁约，如违，罪有所归。)

20 『高麗史』卷27『忠烈王世家三』、元宗十五年正月。(原文：(元宗)十五年春正月，元遣总管察忽监造战舰三百艘，其工匠役徒一切对象，全委本国副副……兴役催督甚严……于交州道各为部夫，使征集工匠役徒三万五百余名，起赴造船所。是时，驿骑络绎，庶务烦剧，期限急迫，疾如雷电，民甚苦之)

21 『高麗史』卷27『忠烈王世家三』、元宗十五年二月甲子、原文：岁令供给，罔有期限，将无奈何！兹实悯焉！乞皆蠲免，以惠远人。

22 『高麗史』卷28『忠烈王世家一』、忠烈王三年二月丁卯。原文：小邦自至元七年以来，征讨珍岛、耽罗、日本大军粮饷，悉于百姓科收，尔后见在合浦镇边军、耽罗防护军、

食糧を非常に重視する姿勢が伺える。一回目の日本遠征のために、高麗が集めた食糧である。二回目の日本遠征にあたって、食糧を集めるために、様々な方法を講じた。上記の内容は『兵誌』により詳しく記載されている。

忠烈王三年(1277)二月に、諸王百官から庶民まで、米を徴収し、洪茶丘軍の食糧に充てる……八年(1282)四月、東征所用兵隊の食糧は十二万三千五百六十石余りに達した。九年(1283)二月に、各道に都に転送されていない食糧を全部軍隊の食糧に充てる。三月に、諸王百官及び工商業者、奴隷、僧侶から軍隊食糧を徴収した。諸王、宰樞、仆射米二十石；宰樞、三品の顯官米十五石；宰樞、三品の顯官或は四、五品の文、武官米十石；文武六品、侍衛護軍八石；文官、武官七八品參上解官六石；東班九品參外副使校尉南班九品四石；正雜權務隊正三石；東西散職業中僧一石；白丁抄奴所由丁吏諸司下典独女官寺奴婢十斗；商人七石大戸；中戸五石；小戸三石。唯七十歳以上の男女から徴収してはいけない²³。

この史料には高麗王朝が軍隊の食糧を集める為に、取らなければならない方法が記載されている。第一、この史料から、二回目の日本遠征の間に、軍隊の食糧を集める為に、高麗王朝の国王から、庶民まで皆定量の食糧を徴収し、前線の軍需を確保したことが伺える。第二、日本遠征は高麗社会のあらゆる面に損害をもたらし、すべての人に影響が出てしまったことがよく表明されている。一回目の日本遠征の前に、モンゴルの軍隊は高麗で駐屯し、食糧を生産し、軍隊の食糧準備のための高麗の負担を軽減した。二回目の日本遠征の前には、モンゴルの軍隊は駐屯しなかったから、高麗の王朝は全国民を動員し、すべての国民が食糧を寄与した。第三、『高麗史』は特に「兵志」に、軍隊の食糧を集める問題について述べている。「世家」の部分に、軍隊の食糧など物資の供給が詳しく述べられていることを裏付けるものである。この部分の史実は注目すべきである。

『高麗史』巻29「忠烈王世家二」忠烈王六年(1280)十月戊戌条に、元中書行省の移牒を収録し、東征の軍事移牒を転載した。主に兵士の逃亡やその処置について検討する内容である。且つ文章は長くて、日本侵攻の過程の記載よりもはるかに長いことから、この問題の重要性がわかる一方、朝鮮王朝の史官が元王朝の問題を喜ぶ態度も伺える。六年十一月、中書省に上奏し、準備の状況を報告した。「弊国は兵戦九百艘、梢工水手一万五千人、正軍一万人を用意した。兵隊の食糧は漢の計量単位で表示する場合、十一万石、他の物資や機械なども数えられないほど用意した。全力を尽くし、聖恩に報いる。」²⁴ これは準備の事項を詳しく述べ、皇帝に忠誠心を表すための長編の上奏文である。この巻には、二つ極めて長い上奏文が収録され、高麗が日本遠征のために払った努力と代価を表現した。朝鮮王朝の史官から見れば、高麗の準備と貢献がなければ、元王朝の日本遠征は実現できない。高麗は単に日本遠征の先棒を担いだけであるが、高麗社会に対し、深遠かつ全面的な影響を持っている。

第三、『高麗史・忠烈王世家』は二回の日本遠征の経緯について、簡略に説明した。記載の史実は高麗の將軍を中心とした。

元十一年(1274)年十月、日本は元麗連合軍第一次の日本遠征を「文永の役」と呼ぶ。『高麗史・忠烈王世家』にこの戦争についての記述は数行しかない。

冬十月乙巳に、都督は金方慶を、朴之亮、金忻を知兵馬事、任豈を副使に任命する。金佺を左軍使、韋得儒を知兵馬事、孫世貞を副使、金文庇を右軍使、羅裕、朴保を知兵馬事、潘阜を副使に任命し、三翼軍を呼ばれる。都督は元の都元帥忽敦、右副元帥洪茶丘、左副元帥劉復亨などと一緒に、モンゴルや漢軍二万五千、我が軍八千、梢工と水手六千七百、戦艦九百艘余りを率いて日本を討伐し、一岐島に到達し、千人余りの敵を殺し、軍隊を分けて別々の道を進み、倭は退却した。残骸が累々とし、夕方になってよう

盐白州归 附军并阔端赤、一年都支人粮一万八千六百二十九石二斗、马牛料三万二千九百五十二石六斗、皆以汉斗计。亦于百姓科收、今者所遣屯田军三千二百并阔端赤等粮料、更于何处索之！

23 『高麗史』巻82『兵志二』(原文：忠烈王三年(1277)二月，令諸王百官以至庶民，出米有差，以充洪茶丘軍糧……八年(1282)四月，東征所支兵糧十二万三千五百六十石。九年(1283)二月，命各道祿轉未輸京者悉充軍糧。三月，令諸王百官及工商奴隸僧徒出軍糧有差：諸王、宰樞、仆射、承旨，米二十石；致仕宰樞、顯官三品十五石；致仕三品顯官、文武四品五品十石；文武六品、侍衛護軍八石；文武七八品參上解官六石；東班九品參外副使校尉南班九品四石；正雜權務隊正三石；東西散職業中僧一石；白丁抄奴所由丁吏諸司下典独女官寺奴婢十斗；賈人大戸七石；中戸五石；小戸三石。唯年七十以上男女勿斂。)。

24 『高麗史』巻28『忠烈王世家一』、忠烈王六年十一月己酉(原文：小国已备兵船九百艘，梢工水手一万五千名，正军一万名。兵粮以汉石计者十一万，什物、机械不可缕数，庶几尽力，以报圣德。))。

やく停戦した。夜、暴風雨に遭い、戦艦、巖崖に触れて大敗し、金佺が溺死した²⁵。

元十八年（1281）、日本は元王朝の第二次遠征を「弘安の役」を呼ぶ。『高麗史・忠烈王世家』に今度の日本遠征についての記載は数行しかない。

七年五月戊戌に、忻都、茶丘及金方慶、朴球、金周鼎等は戦艦を率いて日本を討伐した。

癸亥、行省総把報：当月二十六日、諸軍は一歧島へ向かい、忽魯勿塔船軍一百十三人、梢手三十六人は暴風に遭い、方向を失った。郎將柳庇を派遣し、元王朝に事情を報告した。

六月壬申に、金方慶等は日本と戦って、三百人余りの敵を殺した。翌日再び戦闘し、範文虎は戦艦三千五百艘と十万余りの軍隊を率いて戦った。暴風雨に遭い、軍隊は全部溺死した。

八月己卯に、別將金洪柱は合浦から出発し、行宮へ東征群戦敗の知らせを報告した。元帥などは再び合浦に戻った。

同じ月に、忻都、茶丘、範文虎などが帰還し、元王朝の軍隊で犠牲になった数は十数万以上である。

十一月壬午、各道は東征軍九千九百六十人、梢工水手一万七千二十九人を派遣し、生還者は一万九千三百九十七人しかない²⁶。

二つの史料を総じて見れば、次の結論が得られる。

第一、簡略な記述は『高麗史・忠烈王世家』が日本遠征の戦争を重視していないことを裏付ける。あるいは、戦争の経過は注目される重要な歴史事件ではない。

第二、簡略な記述だが、どんな内容が記載されているかは注目すべきである。高麗の軍隊の將軍たちや制度整備の状況などが重点的に紹介された。初回の日本遠征において、八千人しかない高麗の軍隊は、左、中、右という三部分に分けて、それぞれの將軍によって指揮されたと記載されているが、元王朝の將軍については手短に触れただけである。人数から見れば、高麗の軍隊はごく一部しか占めていないが、『高麗史』においては、高麗の軍隊に重点を置いて記述されている。第二次の日本遠征の記述にも高麗の將軍たちを重点的に紹介し、日本遠征に参加した高麗の將軍たちの名前が紹介されただけでなく、本に記載される唯一の勝ち戦は高麗將軍金方慶が指揮した高麗の軍隊によるものであり、敵軍の三百人を殺した。元王朝の戦争状況については、敗戦しか触れていない。そして、「蛮軍」と呼ばれる範文虎が率いるモンゴルの軍隊に対し、輕蔑の意を表した。

第三、具体的な戦争状況についての記述は簡略であり、二回の敗戦にも「暴風」が言及された。初めての日本遠征には「一歧島に到達し、千人余りの敵を殺し、軍隊を分けて別々の道を進み、倭は退却した。殘骸が累々とし、夕方になってようやく停戦した。夜、暴風雨に遭い、戦艦、巖崖に触れて大敗し」と記載されている。日本を討伐し、最初は勝ったが、夜からものすぎ暴風雨となり、「暴風雨」に負けた。いわゆる「神風」のことである。第二回に「暴風に遭い、方向を失って」「暴風雨に遭い、軍隊は全部溺死した」。東征失敗の直接な原因ともいえる。

第四、二回戦争の記述とも、具体的な損失が言及された。史料の第一段落には、戦艦の大部分が沈没すること以外、左軍使「金佺が溺死した」事も特筆された。「金佺」は高麗の最高指揮官であった。後の『年表』には、「十月、金方慶と元の元帥忽敦、洪茶丘などは日本を討伐し、一歧で戦敗し、犠牲になった兵士は一万三千五百人以上」²⁷。上記史料の第二段落に元軍の死傷状況に関するデータがたくさんある。そのデータは元軍の東征の死傷状況を明らかにした。後文の『年表二』に「元十八年、忠烈王七年五月まで、金方慶と忻篤（都）、茶丘が日本を討伐

25 『高麗史』卷28『忠烈王世家一』、即位年十月乙巳（原文：冬十月乙巳、都督使金方庆将中军、朴之亮、金忻知兵马事、任愷为副使；金佺为左军使、韦得儒知兵马事、孙世贞为副使；金文庇为右军使、罗裕、朴保知兵马事、潘阜为副使、号三翼军。与元都元帅忽敦、右副元帅洪茶丘、左副元帅刘复亨、以蒙古军二万五千、我军八千、梢工引海水手六千七百、战舰九百余艘征日本、至一歧岛、击杀千余级、分道以进、倭却走、伏尸如麻、及暮乃解。会夜大风雨、战舰触岩崖多败、金佺溺死。）。

26 『高麗史』卷29『忠烈王世家二』（原文：七年五月戊戌、忻都、茶丘及金方庆、朴球、金周鼎等以舟师征日本。癸亥、行省总把报：是月二十六日、诸军向一歧岛、忽鲁勿塔船军一百十三人、梢手三十六人、遭风失其所之。遣郎将柳庇告于元。六月壬申、金方庆等与日本战、斩首三百余级；翼日复战、茶丘军败绩、范文虎亦以战舰三千五百艘、蛮军十余万来会、值大风、蛮军皆溺死。八月己卯、别将金洪柱自合浦至行宫、告东征军败、元帅等还至合浦。是月、忻都、茶丘、范文虎等还、元官军不返者、无虑十万有七。十一月壬午、各道按廉使启：东征军九千九百六十名、梢工水手一万七千二十九名、其生还者一万九千三百九十七名。）。

27 『高麗史』卷29『年表二』（原文：十月、金方庆与元元帅忽敦、洪茶丘等征日本、至一歧战败、军不还者万三千五百余人。）。

し、覇家台で戦敗し、犠牲になった者は十万を超えた」²⁸が記載されている。一回目の討伐の記述と類似し、短い、簡略であるが、冷淡な態度を明らかに表すともいえる。

以上のことから、『高麗王・忠烈王世家』のその戦争に関する記述において、高麗軍隊は主役であり、モンゴルの軍隊は単なる脇役にすぎず、日本の海戦も背景にすぎない。史料の選択は、『高麗史』の主体意識を明らかに表している。『高麗史』はこの戦争を全面的に記述するのではなく、高麗の軍隊の役割を示し、選択を経た書き方である。

三、『高麗史』日本遠征における高麗の将軍たちに関する記載

紀伝体の史書は人物をめぐる展開し、歴史事件の記述に人物の伝記が加わる。『高麗史』の人物紀伝はこの戦争に参加する将軍たちの一部分しか取り上げてない。主に、「金方慶伝」、金方慶の子金忻付の紀伝、その部下朴球付の伝記、「金周鼎伝」、「羅裕伝」や金文庇伝の附録「李貞伝」などである。その他に、例えば李蔵用、洪福源、趙彝有など関連人物の伝記もある。これらの伝記の中で、「金方慶伝」にこの戦争は詳しく記載されたが、他の人物の伝記はその戦争について簡単に触れただけであり、触れない者すらある。人物の生前の表現に基づいて、人物を肯定的に記述するものがあり、例えば「金方慶伝」である。反面の典型例もあり、例えば趙彝と洪福源は全部「叛逆伝」に編入される。よって、『高麗史』は強い政治的意図から、人物を選択し、記載している。

『高麗史』の「叛逆伝」は六巻からなる。序言は「孔子『春秋』を作る。尤も乱臣賊子及び地に據り以て叛する者を嚴にす。其れ誅死する者は而して貸（寛貸：刑罰をゆるくする）せず。後（世）に生きる者を戒める所以なり。夫れ人臣が忠順なれば則ち其の身栄え、其の宗族を保って、美名を後世に流（傳）す。叛逆者は未だ脂が鼎鐘（人を刑罰でかまゆでにするのに用いた）を潤さざること有らず。其の族を赤（誅滅）して其の（祭）祀を覆（顛覆）す者は戒めざる可けんや。叛逆伝を作る。」²⁹『高麗史』において、元王朝に投降し、高麗に損害をもたらした人の多くは「叛逆伝」に編入された。例えば、東征の将軍の「洪福源伝」と「趙彝伝」は『叛逆伝』に編入された。趙彝は「科挙の殿試に合格し、進士となって叛逆し、元王朝に帰服し、秀才として、諸国の言語を理解できて、宮廷に通っている」。彼は軍隊を率いて高麗を討伐したことがない。『高麗史』によれば、彼はフビライに「高麗と日本は親交を交わし、元は日本へ使者を派遣した時に、高麗の人々に案内させる」と進言した。だから、高麗は使者宋君妻を元王朝の使者に同行させる。その後、何度も高麗を「中傷」したから、『高麗史』には「彝はいつも高麗を中傷し、不満が鬱積し死んだ」と記載されている。『高麗史』は高麗を「中傷」する人々を貶し、「金裕、李枢なども反逆者である」³⁰と述べた。彼らを「叛逆伝」に編入し、「反人」という呼び方から、朝鮮王朝の史官がこれら金や権力のために国家を裏切った人々を恨むことが伺える。

洪福源は洪茶丘の父であり、「叛逆伝」に編入された。『高麗史』には洪茶丘伝がないが、「洪福源伝」の中に、洪茶丘の悪行が記載されている。洪福源はもと高麗の西京郎将であり、高宗二十年（1233）に、宣諭使鄭毅を倒す為に挙兵したが、失敗し、モンゴルへ逃げた。「福源は元王朝で東京総管を担当し、高麗軍民を率いて、四十余りの城を屈服させた。百姓たちも帰伏した。彼は高麗を中傷し、軍隊と一緒に高麗に行き来した……一年後元王朝の兵隊が到達し、州郡を占拠した。すべて福源が導いた結果である。」³¹その後、洪福源は高麗の人質永寧公綽のモンゴル人の妻に失礼な行動を取ったから、死刑に処された。「家産を没収し、彼の妻と子茶丘、君祥等を拘束し福源の帰還を待つ。福源の子たちは父の死を悔やみ、高麗を中傷してまであらゆる行動を取った。」³²元宗二年（1261）、フビライが即位した後、洪福源の冤罪を晴らし、彼の息子洪茶丘に父の職務を継承させた。「帰服した高麗軍隊と百姓を統率する総管である」³³。それ以来、洪茶丘は元王朝の官僚であり、高麗の出身という点から、高

28 『高麗史』巻29『年表二』（原文：元至元十八年，忠烈王七年五月，金方慶与忻篤（都）、茶丘征日本，至覇家台战败，军不还者十万有奇）。

29 『高麗史』巻127『叛逆伝一』序（原文：孔子作《春秋》，尤严于乱臣贼子及据地以叛者，其誅死者而不貸，所以戒生者于后也。夫人臣忠顺，则荣其身，保其宗，而美名流于后；叛逆者未有不自脂鼎鑊，赤其族而覆其祀者，可不戒哉！作《叛逆伝》。）。

30 『高麗史』巻130『叛逆伝四、趙彝伝』（原文：有金裕、李枢者，亦反人也）。

31 原文：福源在元为东京总管，领高丽军民，凡降附四十余城民皆属焉。谗构本国，随兵往来……然自是元兵岁至，攻陷州郡，皆福源导之也。

32 『高麗史』巻130『叛逆伝四、洪福源伝』（原文：籍没家产，械其妻及子茶丘、君祥等以归。福源诸子憾父之死，谋陷本国，无所不至。）。

33 原文：管领归附高丽军民总管。

麗の関連事務の処理を任された。洪茶丘は高麗に同情することもなく、いつも高麗を困らせるから、高麗の君臣たちは洪茶丘を恨んでいる。

高麗の国王忠烈王はかなり洪茶丘を憚っていた。彼はフビライに洪茶丘を元王朝に呼び戻してほしいと進言し、高麗に置いてはいけなと表明した。「洪茶丘がいる限り、国を治めにくい！洪茶丘は軍隊事務だけを担当すべきだが、国家政務まで勝手に口を挟んだ……元王朝が軍隊を弊国に置くなら、鞏韃の軍隊或は漢軍を派遣してください。しかし、洪茶丘の軍隊は、呼び戻してください。」³⁴ 忠烈王から見れば、洪茶丘が勝手に国政に介入し、独断専行するから、忠烈王は国を統治するすべもない。だから、自ら皇帝に洪茶丘を呼び戻してほしいと進言した。フビライは朝鮮国王に関連事項を注意したが、忠烈王は「それは洪茶丘の妄言である」と糾弾した。フビライは「茶丘だけでなく、多くの人がそう言った」と返した。フビライが「忻都はいかがだろう」と聞いたら、忠烈王は「忻都、鞏韃人であり、彼を派遣してもいい。茶丘はいつも高麗の軍隊を中傷した。忻都を信じるしかない。洪茶丘と高麗の軍隊を呼び戻し、鞏韃漢軍と交替してください」³⁵ と答えた。よって、忠烈王にとって、洪茶丘が皇帝に讒言を告げるより、むしろ鞏韃人忻都をもって洪茶丘に取って代わったほうがましである。高麗の国王と洪茶丘は犬猿の仲である。同時期、洪茶丘は耽羅を守っている。フビライはトラブルを防ぐ為に、忻都と洪茶丘を呼び戻した。高麗はこの時機に乗じて、耽羅を守るという任務を受け、さらに、耽羅を自分の支配に置く。東征の期間に、「元は洪茶丘を総管とし、戦船の建造を監督した。洪茶丘が徴用や監督を厳しく行い、各州道で部夫を任命し、職人などを徴用させる。各道で騒然とする。また、皇帝は洪茶丘に高麗の農業の指導を任せ、また洪茶丘を東征の副元帥に任命した。忠清道の梢工や水手が期間に遅れるから、洪茶丘は部夫を処罰し、大府卿朴暉を以て大將軍崔沔に取って代わる。」³⁶ この史料は元が高麗の人力や物資を徴用する事に触れたが、主に洪茶丘が戦争に乗じて高麗に危害をもたらした行為について記述する。彼は東征の副元帥であるが、高麗の利益を損害する一方で、迭魯花赤よりも遥かにひどかった。洪茶丘のためには立伝していないが、洪福源伝の中に洪茶丘の行為を記述した。この伝記で、洪茶丘の行為の時代背景として、元王朝が高麗から物資等を徴用していることを記述した。洪茶丘を元王朝の人と見なしたにもかかわらず、洪茶丘を「叛逆伝」に収め、彼を叛逆として扱う。趙彝が「叛逆伝」に編入される理由と同じであり、朝鮮王朝の史官は国家の立場から、彼らを批判し、モンゴル帝国に降伏した高麗人を貶し、「反人」として「叛逆伝」に編入した。

洪福源、趙彝が『叛逆伝』に編入される反面、金方慶は肯定すべき対象として取り上げた。金方慶は兵部尚書翰林学士まで担当した。二回にわたる日本遠征において、金方慶は高麗の軍隊の最高責任者であり、その伝記は二回の戦争について詳しく描写している。一回目の東征について、「金方慶伝」は次のように述べた。

(元宗)十五年、皇帝は日本の征伐を企てて、方慶と茶丘に戦艦の建造を命じた。元の要求通りに戦艦を建造する場合、費用がかさみ、間に合わないから、全国国民が心配した。方慶……は高麗船を建造した。其の年に、元宗が薨去し、忠烈王が即位し、方慶と茶丘は軍隊を率いず、一人で祝賀の意を表しに來た。方慶が合浦に戻り、都元帥忽敦、副元帥茶丘、刘复亨と一緒に戦艦の建造状況を確認した。方慶が中軍に、朴之亮、金忻が知兵馬事に任命され、任豈が副使、樞密院副使金侁が左軍使、韋得儒が知兵馬事、孫世貞が副使に任命された；上將軍金文底は右軍使であり、羅佑、朴保が知兵馬事、潘阜が副使に任命され、三翼軍と呼ばれ、忻都が金印を授けられる。モンゴル軍隊や漢軍合わせて二万五千人、高麗の軍隊八千人、梢工や水手六千七百人、戦艦九百艘を率いて、合浦で女真族の軍隊を待つ。女真族の軍隊が着いたら、対馬島へ出発し、日本兵士をたくさん殺した。一岐島に至り、倭の兵士が海岸で待っていた。之亮、方慶壻と趙抃は日本の軍隊を追い払った。日本の軍隊が投降を求めたが、再び交戦した。茶丘と之亮は千人余りの敵を殺し、戦艦を三郎浦に残し、軍隊を分けて別々の道を進み、多くの敵を殺した。日本の軍隊が急に現れ、

34 『高麗史』巻28『忠烈王世家一』、忠烈王四年七月甲申(原文：然茶丘在焉，臣之爲國，不亦難哉！如茶丘者，只宜理會軍事，至于國家之事，皆欲擅斷……上國必欲置軍于小邦，寧以鞏韃漢兒軍，無論多小而遣之，如茶丘之軍，惟望召還)。

35 『高麗史』巻28『忠烈王世家一』、忠烈王四年七月甲申(原文：忻都，鞏韃人也，可則可矣。使茶丘在，則與高麗軍安構是非，虽忻都不能不信，望令茶丘與高麗軍皆還于朝，以鞏韃漢兒軍代之)。

36 『高麗史』巻130『叛逆伝四、洪福源伝』(原文：先是)，以茶丘爲監督造船官軍民總管。茶丘克期催督甚急，分遣部夫，使征集工匠，諸道騷然。帝又命茶丘提點高麗農事，又命爲東征副元帥。茶丘以忠清道梢工水手不及期，杖部夫，使大將軍崔沔以大府卿朴暉代之)。

中軍と交戦し、方慶は両手に剣を握り、退却せず、矢を出して大声を出し、倭人は退却した。之亮、忻、朴、李唐公、金天禄、申奕などが奮戦し、倭人の軍隊は大敗し、残骸が累々とした。忽敦は：「モンゴル人は戦いに長けているが、ここまでとは思わなかった！」諸軍隊と戦い、夕方になってようやく停戦した。方慶は忽敦と茶丘に「兵法によれば、千里軍の意気込みは食い止められない。我が軍隊の数は少ないが、敵の土地に立ち、兵士たちは自分のために戦い、まるで孟明が船を焼却したごとく、背水の陣を敷いて戦った」と言った。忽敦は「兵法において、敵の実力を軽視し、自分の戦果を過大評価し、疲れた兵隊を率いて大量の敵と戦うことは、最善な戦略ではない。取り敢えず軍隊を率いて帰った方がいい。」と言った。复亨は矢に刺されて、先に船に乗り、軍隊を率いて帰った。その夜に、暴風雨に遭い、戦艦は巖崖に触れて大破し、金佺が溺死した。合浦で奪い取った兵器などを皇帝や国王に捧げ、国王は枢密副使の張鑑を派遣し軍隊を慰勞し、方慶に先に戻ると命じた。そして方慶を上柱国判御史台事に任命した³⁷。

第二次日本遠征の状況については、『金方慶伝』で次のように述べている。

「七年三月、日本遠征へ出発した。方慶は先に義安軍に軍隊を検閲し、後で国王も合浦に来て諸軍隊を検閲した。方慶と忻都、茶丘、朴球、金周鼎などが出発し、日本の世界村大明浦に到達し、檄文を以て通事に知らせる。周鼎先は倭人の軍隊と交戦し、諸軍隊も戦場に加わり、郎将康彦（康師子）等が死んだ。六月、周鼎、球、朴之亮、荆万户等は日本の軍隊と交戦し、三百人以上の敵を殺した。日本の兵士が急に攻め込み、官軍を破り、茶丘は馬を捨てて逃げた。王万户は横から進攻し、五十人余りの敵を殺し、日本の軍隊が退却して、茶丘は命が助かった。翌日再び戦ったが、戦敗した。軍隊の中で疫病が広がり、死者は三千人を超えた。忻都、茶丘などは戦況は不利であり、かつ范文虎は時機を遅れたことを考慮に入れ、軍隊の撤退を議論した。「勅命によれば、江南軍と東路軍を派遣し、其の月に一歧島に到達すると見込んでいる。今南軍はまだ着いてないが、我が軍隊が先に到達し、数回も戦って戦艦や食糧を大量に消耗した。どうするべきだろう？」という。方慶は黙り込んだ。十日以上経ったが、議論は進展を遂げていない。方慶は「勅命により、三ヶ月の食糧を用意したが、今は一ヶ月の食糧がまだ残っている。南軍が進攻するのを待って、必ず敵軍を破る。諸將軍は異議を出す勇気がない。その後、文虎が十万以上の軍隊や九千艘の船を率いて到達した。八月、暴風に遭い、蛮軍は全部溺死した。朝夕で死体は浦に流れて浦を塞いだ。死体を踏んで浦を通ることもできる。遂に軍隊を撤退した。」³⁸

この二つの史実に対する描写は、東征の戦場のもう一つの姿を明らかにしている。幾つの特徴がある。第一、元王朝の東征の記載の中で、『高麗史』における最も詳しい史料であり、「忠烈王世家」の記載より詳しいし、細部の記述がたくさんあってより具体的である。この歴史の記述は、金方慶を中心に展開し、金方慶の戦功と勇ましい行いを浮き出させている。それ故、金方慶を中心に、彼の言行を記述する事により、この戦争で行動を表現することがこの史料の本筋である。前述したように、金方慶は高麗の有名な將軍であり、立派な家柄をもち、輝かしい戦功を建てた。この二回にわたる戦争から、金方慶が勇敢で戦争に詳しく、重責に適う人材であることが

37 『高麗史』卷 104 『金方慶伝』（原文：（元宗）十五年，帝欲征日本，诏方庆与茶丘监造战舰。造船若依蛮样，则工费多，将不及期，一国忧之。方庆……用本国船样督造。是年元宗薨，忠烈即位，方庆与茶丘 单骑来陈慰，还到合浦，与都元帅忽敦及副元帅茶丘、刘复亨阅战舰。方庆将中军，朴之亮、金忻知兵马事，任恺为副使，枢密院副使金佺为左军使，韦得儒知兵马事，孙世 贞为副使；上将军金文庇为右军使，罗佑、朴保知兵马事，潘阜为副使，号三翼军，忻 即经也。以蒙汉军二万五千、我军八千、梢工引海水手六千七百、战舰九百余艘，留合 浦以待女真军，女真后期。乃发船入对马岛，击杀甚众。至一歧岛，倭兵陈于岸上，之亮及方庆增起扑逐之，倭请降，复来战。茶丘与之亮、朴击杀千余级，舍舟三郎浦，分道而进，所杀过当。倭兵突至，冲中军，长剑交左右方庆如植，不少却，拔一啼矢，厉 声大喝，倭辟易而走。之亮、忻、朴、李唐公、金天禄、申奕等力战，倭兵大败，伏尸如麻。忽敦曰：“蒙人虽习战，何以加此！”诸军与战，及暮乃解，方庆谓忽敦、茶丘曰：“兵法：千里县军，其锋不可当，我师虽少，已入敌境，人自为战，即孟明焚船淮阴背 水也，请复战。”忽敦曰：“兵法小敌之坚，大敌之擒，策疲乏之兵，敌日滋之众，非完 计也，不若回军。”复亨中流矢，先登舟，遂引兵还。会夜大风雨，战舰触岩崖多败，佺堕水死。到合浦，以俘获器械献帝及王，王遣枢密副使张鑑慰谕，命方庆先还，加上 柱国判御史台事）

38 『高麗史』卷 104 『金方慶伝』（原文：七年三月，出师东征。方庆先到义安军阅兵仗王至合浦，大阅诸军。方庆与忻都、茶丘、朴球、金周鼎等发，至日本世界村大明浦，使通事金佺檄谕之。周鼎先与倭交锋，诸军皆下与战，郎将康彦（康师子）等死之。六月，方庆、周鼎、球、朴之亮、荆万户 等与日本兵合战，斩三百余级。日本兵突进，官军溃，茶丘奔马走，王万户复横击之，斩五十余级，日本兵乃退，茶丘仅免。翼日复战，败绩。军中又大疫，死者凡三千余人。忻都、茶丘等以累战不利，且范文虎过期不至，议回军，曰：圣旨令江南军与东路军必 及，是月望会一歧岛，今南军不至，我军先到数战，船腐粮尽，其将奈何？方庆默然。旬余，又议如初。方庆曰：奉圣旨，赍三月粮，今一月粮尚在，俟南军来合攻，必灭之。诸将不敢复言。既而，文虎以蛮军十余万至，船凡九千艘。八月，值大风，蛮军皆溺死，尸随潮汐入浦，浦为之塞，可践而行。遂还军。）

伺える。

第二、この史料では、金方慶がまるで戦争の決め手のようである。第一次戦争が激しい時に、金方慶「矢を出して大声を出し、倭人が退却した……倭人の軍隊を大敗させ、残骸が累々とした」、モンゴルの元帥も「モンゴル人は戦いに長けているが、ここまでとは思わなかった！」と言って彼を褒めた。戦争状況が有利であって、彼は勝利に乗じて追撃するように勧めたが、採用されず、暴風雨に出合って兵船が沈没して戦敗した。第二次討伐の時も、金方慶が高麗軍隊を指揮し、「三百人余りの敵を殺し」勝利を納めた。モンゴルの軍隊は何度も失敗した。洪茶丘甚至仅以身免、最終“暴風に遭い、蛮軍は全部溺死した。朝夕で死体は浦に流れて浦を塞いだ。死体を踏んで浦を通ることもできる。”これらのことから、戦争が如何に激しかったかが伺える。このような比較法を以て、金方慶の戦功を浮き彫りにした。

第三に、この史料は『高麗史』の他の史料と同じであり、高麗の軍隊の戦場での様子を表している。『高麗史』だけでは戦争の状況を全面的には把握できない。高麗の軍隊に関する内容は朝鮮王朝当局が作り出したものであり、大げさで、作り話とも疑われる。実際に、史料の偏っている表現を無視して、戦争の立場から見れば、元王朝が戦争を起こし、高麗はやむを得ず元の先棒を担いだけである。高麗の軍隊は単なる補助的な役割を果たしていて、戦争の勝負を決めわけがない。従って、『高麗史』の一部の内容は大げさであり、作り話の部分すらある。例えば、金方慶と元帥の対話は本当の話だとは考えられない。朝鮮王朝の歴史の編集者が、これらの会話を知るわけがない。たとえ高麗王朝が関連の書類や資料を残していても、そんな対話が記録されるわけがない。従って、合理的な想像を通じて、金方慶の戦争での重要性を誇大し、彼を輝かしく表現している。『高麗史』の関連記述には、多少このような大げさな部分がある。

総じて、『高麗史』は高麗に忠実であるかどうかを人物の判断基準とする。たとえ高麗が元王朝の藩属国であっても、『高麗史』は高麗を裏切って元王朝に降伏した人を「反人」と見なし、「叛逆伝」に編入する。金方慶は日本遠征で高麗の最高将軍であり、高麗東征の代表人物、英雄の模範として仕上げた。金方慶の伝記において、金方慶を中心に朝鮮史官は合理的な想像による金方慶との対話を通じて、モンゴルの東征をより立体的なものにし、金方慶が東征の戦争の決め手であるというイメージを作った。モンゴルの将軍は失敗の象徴で、東征の失敗に主な責任を負うべきだとした。

四、終わりに

朝鮮王朝の官撰史書『高麗史』は、章節「忠烈王世家」と「金方慶」で、元の日本遠征の二つの類似して少し異なる姿を表わした。基本的な主旨は同じであり、高麗王朝のこの戦争における貢献を浮き彫りにし、高麗の将軍の戦功を宣伝した。『高麗史』によれば、高麗はこの戦争の決め手であり、元王朝の元帥が高麗の将軍の進言を聞かないから、暴風雨に遭い、戦敗したとする。誠にフランスの歴史学者ミシェル・ド・セルトーが述べた通り、官撰の歴史の編纂は国家理性によって成し遂げたものである。「現存の材料に基づいて、専門の手法を以てある「環境」における諸要素を「処理」し、緻密な記述を作り上げた。」³⁹ 従って、この史料は朝鮮王朝の史官によって構築されたものであり、明王朝が編纂した『元史』や日本の関連史書の記載とは大きく異なる。

『高麗史』と『元史』を比べたら、様々な相違点に気付くはずである。例えば、洪茶丘が金方慶を誣告する案件について、『高麗史』には金方慶は功績を上げて賞賜を貰い、朝廷の官員たちに排除され、叛逆の罪と誣告され、「(洪)茶丘は高麗を憎んでいて、高麗を中傷しようを企てた。方慶を陥れることを聞いたら、中書省に調査を依頼する。」⁴⁰ 洪茶丘は様々な手を講じて、金方慶を迫害しようとした。金方慶は苦しめられ、フビライは尋問した後に、金方慶のでっち上げの罪名を晴らした。『元史・高麗伝』には「十四年正月、金方慶などが反乱し、皇帝は確信し反乱を鎮圧するように命じたが、また忻都、洪茶丘に軍隊を整えさせた」⁴¹と記載されている。この伝記では金方慶を反乱と見なし、『高麗史』では洪茶丘が金方慶を罪に陥れる。両者は正反対の見方を示している。『高麗史』と『元史』において、様々な記述は矛盾していて、金方慶案件は典型的な例である。『高麗史』において、金方慶は重臣

39 (フランス) ミシェル・ド・セルトー、『歴史のエクリチュール』、倪夏生訳、北京：中国人民大学出版社、2012年、第11ページ。

40 『高麗史』巻104『金方慶伝』(原文：洪茶丘与本国宿憾，欲伺衅嫁祸，闻方庆事，请中书省来鞠。)

41 『元史』巻208『外夷一・高麗』第4620ページ。北京：中華書局、1976年(原文：十四年正月，金方庆等为乱，命愷治之，仍命忻都、洪茶丘饬兵御备。)

と見なされ、彼のために立伝したが、『元史』に金方慶は反乱の容疑者とみなされた。洪福源は『元史』に功臣と見なされたが、『高麗史』の「叛逆伝」に編入された。

このような大きな違いに我々は注意しなければならない。いかに東アジア三国に及ぶ歴史事件を扱うべきか、いかにそのような問題を防ぐべきか、或は以下に史書における作り話をいかに分析すべきかなどは一国の立場と角度から歴史を判定してはいけない⁴²。史料を扱う時、陳寅恪が「他国の旧典を以て我が国の旧典を補うべきだ」⁴³と指摘した。より重要なのは、国と民族のクルワから脱却し、一国史の束縛から脱して、東アジアの立場から全体を眺めたとき、初めて歴史の真相に近づくことが可能になるのである。

42 葛兆光は『「一国史」と「東アジア史」の間に：13～16世紀東アジアの三つ歴史事件を例として』（『中国文化研究』2016年冬の巻）に「一国の歴史の立場、角度から東アジアの歴史を観察すれば、「死角」や「盲点」があるかもしれないから、一国の歴史ではなく、東アジアの立場から、これらの歴史事件を見直すべきだ。」

43 陳寅恪、『王静安先生遺書序』、許冠三を参照に、『新史学九十年』（長沙：岳麓書社、2003年）、第83ページ。

【発表論文7】

日本遠征をめぐる高麗忠烈王の政治的意図

金 甫 桃（嘉泉大学）

[原文：韓国語、翻訳：李へり（韓国外国語大学）]

はじめに

モンゴル帝国の登場と拡散という世界史的な事件は、朝鮮半島への侵出により高麗に絶大な影響を及ぼした。モンゴルが高麗に影響を及ぼした期間は、「抗蒙」と言う戦争時期と「干渉期」と言われる戦争後の時期に大別することができるが、1219年から14世紀半ば以降の約200年という期間にわたる。2回にかけて進められた「日本遠征」は後者の時期に当たる。はじめモンゴルは高麗に日本の降伏を促すように招諭を要求したが、「日本遠征」とは、その失敗の後、モンゴルが高麗を引き連れて直接に日本征伐をおこなうとした征服事業であった。

これまでの研究のなかで「日本遠征」に関しては、モンゴルが主導し高麗がそこに動員された戦争と理解する傾向が強かった。筆者もこの遠征に高麗が動員されたという事実を否定するわけではない。ただし、筆者が注目したいのは、忠烈王の立場が第1次遠征と第2次遠征の間に消極的回避から積極的加担へと変わっていくことが見過ごされてきた点である。そこで、本稿では態度の変化の背景にある忠烈王の意図や政治的な狙いが何なのかをまとめたい。

ところで、最近の研究トレンドは、高麗が一方的に日本の征伐に動員されたことを強調する従来の傾向から離れ、この事件を高麗自体がどのように活用したのかという部分に注目している。こうした立場からの理解は、大きく2つに分けられる。1つはイ・ミョンミを中心とする研究であり、高麗王がモンゴル帝国の威を借りて王権を確立し、国王の地位を確固たるものにする意図から態度を変化させたと論じられている。結果的に、日本遠征の推進組織である征東行省の丞相を忠烈王が兼ねることになり、国王の地位が確固たるものになったという。もう1つは、モンゴル帝国で駙馬（皇帝の娘婿）という位置づけを確保した高麗王、つまり忠烈王が自身の立場による「助軍の義務」を積極的に活用したという理解がある。この2つの見解に多少の違いはあるが、忠烈王がモンゴル帝国の丞相や駙馬などの地位を通じて政治的な効果を期待したという点では共通している。

そこで、本稿は忠烈王の立場をより具体的に見ることにその目的を置く。

1. 日本遠征の進行の過程

高麗が日本遠征に参加することになったきっかけは、モンゴルの使節団を案内して、日本を招諭させる役割を担ってからである。1266年（元宗7）にモンゴルがヒズル（黒的）と殷弘を使者として日本へ派遣しようとした際、高麗に彼らを案内させた。案内役として宋君斐・金贊らが護送を担当したが、巨済島に至り風浪の險しさを理由に帰朝した。その翌年にモンゴルは日本招諭を高麗に委任し、高麗は潘阜を派遣して、モンゴルおよび高麗の国書を持って日本に行くことになった。しかし、日本がそれらを受け入れなかったため、成果をあげられなかった。その後、10数回にかけてモンゴル人と高麗人が日本に派遣されたが、拘留や殺害を受けてモンゴルの日本に対する外交的な招諭は失敗した。

計6回にかけた使節団の派遣が失敗すると、モンゴルは日本を直接に征伐しようとした。そこで、高麗に戦艦の造船を命じ、黒山島をはじめ高麗の南端にモンゴルの官吏を派遣して地形を偵察させた。また、軍糧を確保す

るという名目で高麗に屯田を設置した。1271年（元宗12）にはその経営のために屯田経略司を設置して、モンゴル軍を鳳州・金州・鹽州・黃州・白州・海州など10ヶ所に派遣した。高麗は戦争による荒廃のなかでもモンゴルの要求に応えるために努力せざるを得なかった。

1274年6月にはひとまず日本遠征の準備が整った。こうした準備を経て、ついに東征都元帥府の忻都（きんと）と洪茶丘（こうちゃきゅう：ホン・タグ）の率いる蒙漢軍25,000名を中心に第1次日本遠征が断行された。ここには金方慶を都督使として兵士8,000人、船頭6,700人、そして艦船900艘を準備した高麗も参戦することになった。第1次遠征当時、博多一帯での最初の戦闘でモンゴルと高麗の連合軍は一時的な勝利を収めたものの、結果としては敗北に終わった。当初、金方慶が率いる高麗軍は博多一帯で勝ち続けていた。日が暮れると、忻都は一旦退却することを主張したが、金方慶はこの勢いに乗じてもう一度闘うことを主張した。しかし、忻都の主張通りにモンゴルと高麗の軍隊は一旦退却することになった。周知のようにこの時の退却は連合軍の敗北につながる決定的瞬間であった。とにかく、モンゴルの主張に従ったばかりに第1次遠征は失敗に終わり、さらには13,500人ももの人々が帰らぬ人となった。ここで注目すべき点は、高麗とモンゴルの指揮官の間で戦勢への判断と対処について見解が食い違っていたことである。

第1次日本遠征が台風で継続できず失敗に終わっても、モンゴルのクビライはその計画を諦めず、また日本に宣諭使を派遣する一方で、戦争の準備を指示しつづけた。そして、1279年（忠烈王5）に南宋を完全に征服し、ある程度の余力ができると、日本遠征にさらなる拍車をかけるようになった。この時、高麗は南部の延辺を侵略しはじめた倭寇を退治するため、またモンゴル帝国内での地位を強化するために積極的に参加した。このことにより、翌1280年に忠烈王は日本遠征の推進機関である征東行中書省の丞相に任命された。こうした地位の向上にともなって、高麗に駐屯する忻都・洪茶丘などモンゴルの武將たちの横暴をある程度は抑制できるようになった。

しかし、一方で高麗はまた大きな負担を抱えるようになった。高麗は兵士10,000人、船頭15,000人、艦船900艘、軍糧11万石をはじめ、多くの軍事力を準備することになり、そのため国のすべての生産力の動員を余儀なくされた。第2次日本遠征は、高麗から征東行省麾下の高麗軍・蒙漢軍が、中国の江南地方から征日本行省麾下の江南軍が全力をかけて日本を攻撃したが、台風に会い10予万人の損失を出したまま失敗に終わってしまった。

2. 日本遠征に対する高麗の態度 —— 日本招諭及び第1次征伐の時期まで

ここで筆者が注目したいは、高麗の態度である。まず、日本に降伏を勧めなければならなかった初期の状況をみてみよう。

1) 1267年の春、正月宋君斐と金贊がモンゴルの使節団とともに巨済島の松辺浦に到着して風浪の險阻を見て怖がって引き返してきた。王（元宗）はもう一度宋君斐を黒的（ヒズル）とともにモンゴルへ派遣し、（モンゴル皇帝に次のように）報告させた。「詔書で示されました使節団を案内して日本と友好関係を結ぶ件に関しては、陪臣の宋君斐と金贊らを派遣して、使節団に同行させました。（しかし）巨済県に到着して遠く対馬を眺めていると、大きな海が10,000里にもおよび、波浪が天にまで届くのが見えました。（彼らはこれを見て）『こんなに危険なのにどうやって上国の使節団を案内して危険を恐れず進んでいけるだろうか。たとえ対馬に到着したとしても、彼ら（対馬の人々）はかたくなで荒々しく礼儀を知らないのも、もし不慮の事故にあえば、将来どうすべきか』と思い、ともに引き返してきました。また、日本は本来私たちとは外交関係がなく、ただ対馬の人々が時折貿易をするために金州（現在の慶尚南道金海市）を往来するだけでした。我国は、陛下が即位されてから仁徳をこうむり、30年の戦争の末にやっと息を吹き返すことになり、延命しております。（クビライの）聖恩は偉大でございますが、（我々は）功を立ててその恩に報いることを誓いたいと思っております。もしできることなのに心身を尽くさないのだとすれば、天の太陽が我々を見ていることでしょう」と。〔（丁卯）八年 春正月 宋君斐・金贊與蒙使，至巨濟松邊浦，畏風濤之險，

遂還。王又令君斐，隨黑的如蒙古，奏曰，“詔旨所諭，道達使臣，通好日本事，謹遣陪臣宋君斐等，伴使臣以往。至巨濟縣，遙望對馬島，見大洋萬里，風濤蹴天，意謂‘危險若此，安可奉上國使臣，冒險輕進？雖至對馬島，彼俗頑獷，無禮義，設有不軌，將如之何？’是以，與俱而還。且日本素與小邦，未嘗通好，但對馬島人，時因貿易，往來金州耳。小邦自陛下卽祚以來，深蒙仁恤，三十年兵革之餘，稍得蘇息，綿綿存喘。聖恩天大，誓欲報効。如有可爲之勢，而不盡心力，有如天日。”]（『高麗史』卷26 世家26、元宗8年（1267）正月）

2）癸丑日、モンゴルが黑的（ヒズル）と殷弘などを派遣し、(次のような)詔書を送ってきた。「今、貴国の趙彝（ちょうい）は、『日本は高麗と近い隣国であり、典章（制度や法律）や政治に賛美するに足るものがあります。また、漢・唐の時代から使者を派遣して中国と通じてきました』と述べている。だから、今に黑的らを日本に派遣して友好関係を結ぼうと思う。貴国は使節団がその地に到着できるように案内し、東の国の人々を悟らせ、中国の義をしたわせるようにせよ。そなたは責任をもつべきであり、(使節団の同行者が)風浪の險阻を理由にしたり、あるいは未だ日本と通行がないことを理由にしたりさせるな。彼ら(日本)が命令に従わず使臣を拒否するかもしれないなどと言いつてをさせるな。そなたの忠誠心はこのことで明らかになるであろうから格別に努めよ」と。[癸丑 蒙古遣黑的・殷弘等來，詔曰，“今爾國人趙彝來告，‘日本與爾國爲近隣，典章政治，有足嘉者。漢唐而下，亦或通使中國。’故今遣黑的等，往日本，欲與通和，卿其道達去使，以徹彼疆，開悟東方，向風慕義。茲事之責，卿宜任之，勿以風濤險阻爲辭，勿以未嘗通好爲解。恐彼不順命，有阻去使爲托。卿之忠誠，於斯可見，卿其勉之。”]（『高麗史』卷26 世家26、元宗7年（1266）11月癸丑(25)）

以上の事例をみると、外交的に日本を招諭しなければならない状況に対し、高麗はとても困惑しながらもこの問題を最大限に回避しようとしていたと思われる。もし日本が外交的招諭に応じて、モンゴルに降伏すれば幸いだが、そうでない場合、モンゴルが戦争をしてでも日本を降伏させようとするのは自明なことである。そして、その戦争に高麗が直接的ないし間接的に関与しなければならなくなることも自明だからだ。さらに、日本の反応が降伏に対しては否定的だろうということもある程度予想できる。この点は、1268年に高麗が日本に送った国書の記述からも分かる。「急に他の形式の服を着た人たちと一緒に海を渡っていけば、貴国は私たちの意図を疑うのでないかと思う。(中略)クビライの命令を拒めず、モンゴルの使臣を海側まで連れてきたが、風浪が険しいという言い訳で時間を長引かせ、結局戻った。これは我国が貴国に対してどんな考えを持っているのかを示すものである」(『鎌倉遺文』9845号、高麗國牒狀案)。

そして、引き続き第1次征伐を準備する過程で、高麗はモンゴル側に戦争準備のための負担が自国にとって無理な量であることを何度も訴えた。

3. 第2次征伐をめぐる忠烈王の意図

しかし、第2次征伐の過程では、以前とちがった様相が現れた。今まではモンゴルが高麗に日本の招諭を要求していたが、この段階になると逆に高麗が日本征伐を先に持ちかけている。次の史料を見てみよう。

3）王（忠烈王）は次のように言った。「日本は一概の島に住む東夷で、地勢が険しいことをいいことに帰順しないで、なんと王（皇帝：クビライ）のなさることに抵抗しています。臣が思うに、(高麗は皇帝の)徳に報いたことがありません。(そのため)願わくば、また船を作り、穀物を集めて(日本を)罪に問いて討伐すれば必ず成功するでしょう」と。(そこで)皇帝（クビライ）は「王（忠烈王）は戻って宰相たちと深く議論してから人を遣って話させよ」と言った。[王又奏曰，“日本一島夷耳，恃險不庭，敢抗王師，臣自念，無以報德，願更造船積穀，聲罪致討，蔑不濟矣。”帝曰，“王歸與宰相熟計，遣人奏之。”]（『高麗史』卷28、忠烈王4年（1278）7月甲申（3））

忠烈王はクビライに対し、高麗が先に日本を征伐することを提案している。事実彼がクビライに日本の征伐事業をけしかけているようなものといえよう。もちろん、この発言は高麗—モンゴル間の懸案として浮上していた金方慶冤罪事件を解決しようとするなかで出たものである。モンゴルが元々やりたがっていた日本征伐について、高麗が積極的に応えようとする過程で提案された。とにかく、この言葉の前提には日本征伐という事業をある程度負担できるという高麗側の状況があつてのことであり、できるだけ負担を避けようとしていた第1次征伐の時と最も大きな違いともいえる。

だとすれば、日本征伐を巡って第1次までと第2次の時の高麗の態度に変化が生まれたのはなぜだろうか。その点について論じてみよう。第2次征伐に忠烈王が以前より積極性を見せたことの背景には、高麗がモンゴルとの関係を好転させ、さらに一步進んで、洪茶丘など高麗在駐のモンゴル勢力をけん制する理由があつたと見られている。もちろん、こうした解釈は否定できず、大きく見て間違っているとも思わない。但し、これは当時の高麗側の政治的背景は説明できるが、態度の変化の直接的な理由というには多少分析が不足している。

つまり、高麗—モンゴルという国家間の関係だけでなく、国王の立場から見た他の側面も考慮されるべきだろう。特に、第1次征伐と第2次征伐を準備した主体である2人の高麗国王の違いに注目したい。元宗と忠烈王は親子関係であり、100年間続いた武臣政権のなかで弱化した王権を回復させようという傾向は両者に共通する。しかし、モンゴルを理解し、受け入れる部分では違いがあり、次のエピソードがその点をよく表している。

4) 西北面に王(忠烈王)が赴き、公主(姫)を迎えた。順安公棕、廣平公諶、帶方公激、漢陽侯僎、平章事・兪千遇、知樞密院事・張鎰、知奏事・李汾禧、承宣崔文本・朴恒、上將軍・朴成大、知御史台事・李汾成が従った。(a)王(忠烈王)が汾禧たちに対して弁髪しないことを責めると、(汾禧たちは)「臣が弁髪にするのを嫌がっているのではなく、他の人たちが一緒にやってくれることを待っているだけです」と答えた。モンゴルの風俗であり、頭頂部から額まで四角くして真ん中のところの毛髪だけ残してそり上げるが、モンゴル語で「ケグル(怯仇兒)」という。王は元に入って朝会をするときにすでに弁髪をしていたが、国人はまだやっていたのでそれを叱ったのである。後に宋松禮宋松禮と鄭子璵が弁髪をして朝会をすると、他の人々も皆それに従った。かつて印公秀が元宗に元の風俗に従って服飾を直すことを勧めた際、(b)元宗が「私にはとても祖宗の法を急に変えられないので、私が死んだ後にあなたたちが自分でやりなさい」と答えたことがあった。〔幸西北面，迎公主。順安公棕廣平公諶帶方公激漢陽侯僎平章事兪千遇知樞密院事張鎰知奏事李汾禧承宣崔文本朴恒上將軍朴成大知御史臺事李汾成從行。王責汾禧等不開剃，對曰，“臣等非惡開剃，唯俟衆例耳。”蒙古俗，剃頂至額，方其形，留髮其中，謂之怯仇兒。王入朝時已開剃，而國人則未也，故責之。後，宋松禮鄭子璵開剃而朝，餘皆效之。初，印公秀勸元宗，效元俗，改服色，元宗曰，“吾未忍遽變祖宗之法。我死之後，卿等自爲之。”〕(『高麗史節要』卷19、忠烈王即位年(1274)10月)

1274年に高麗に入国した齊国大長公主を忠烈王が迎えた際の逸話であり、モンゴル風のヘアスタイルである弁髪のことを論じられている。(a)と(b)は、弁髪に対する元宗と忠烈王の立場を対比している。(b)に見られるように、元宗は弁髪をはじめ服飾をモンゴル式に変えることができないとし、臣下たちには自分が死んだ後にしてほしいと述べた。対して、(a)によれば忠烈王は他の人々より先に弁髪にして、まだ弁髪をしていない李汾禧たちを叱っている。父の元宗よりも積極的にモンゴルの影響を受け入れようと努力する忠烈王のスタンスが理解される。

また、第2次征伐を提案・準備する過程での忠烈王の発言を詳細に検討する必要がある。彼は征伐を準備するなかで7つの要請をした。

5) 王(忠烈王)は7つの項目について要請をした。「1. 耽羅を守っている我国の軍隊を東征軍に補充させること、2. 高麗軍と漢軍を減らし、閩里帖木兒(チェリテムル)にモンゴル軍をもっと徴兵させて、出征させること、3. 洪茶丘の職任を高めず、彼が成功するのを待って賞を与えること、また閩里帖木兒には臣(忠烈王)とともに日本遠征に関する職務を管掌させること、4. 我国の軍官に皆牌面を下賜すること、5. 漢

地の海辺の人々を梢工（船頭）と水手（水夫）に充てること、6. 按察使を派遣し民の苦情を把握すること、7. 臣（忠烈王）が直接合浦（現在の昌原馬山）に行き、兵士と馬を点検して送ること」であった。皇帝（クビライ）は「建議したものをすべて受け入れる」と言った。[王以七事請，“一，以我軍鎮戍耽羅者，補東征之師，二，減麗漢軍，使閩里帖木兒，益發蒙軍以進，三，勿加洪茶丘職任，待其成功賞之，且令閩里帖木兒，與臣管征東省事，四，小國軍官，皆賜牌面，五，漢地濱海之人，并充梢工水手，六，遣按察使，廉問百姓疾苦，七，臣躬至合浦，閱送軍馬。”帝曰，“已領所奏。”]（『高麗史』卷 29 世家 29、忠烈王 6 年（1280）8 月乙未（23））

6）我国の兵士と民たちは早くから珍島・耽羅・日本の 3 カ所で何度も戦功を上げたにも関わらず、まだ賞をもらっていません。願わくば以前の戦功を調査してそれぞれ牌面を下賜して、（こうした行賞を）後代の人たちにも勧めてほしいと思います。兵士 1,000 人ごとに總管と千戸各 1 名、總把各 2 名であり、下記のように氏名を列挙します。願わくば上將軍・朴之亮、大將軍・文壽、羅裕、韓希愈、趙圭、親從將軍・鄭守琪、大將軍・李伸、朴保、盧挺儒、安社ら 10 名を總管に、大將軍趙朴、將軍安迪材、許洪材、金德至、徐靖、任愷、金臣正、李廷翼、朴益桓ら 10 名を千戸に、中郎將 柳甫、金天祿、李臣伯、辛奕、崔公節、呂文就、安興、李淳、金福大、車公胤、李唐公、郎將朴成進、高世和、中郎將宋仁允、郎將玉環、桂富、金天固、李貞、徐光純、咸益深ら 20 名を總把にさせていただくことを願います。[小國軍民，曾於珍島・耽羅・日本三處，累有戰功，未蒙官賞，伏望追錄前功，各賜牌面，以勸來効。每一千軍，總管千戸各一，總把各二，花名，抄連在前。請以上將軍朴之亮，大將軍文壽・羅裕・韓希愈・趙圭・親從將軍鄭守琪・大將軍李伸・朴保・盧挺儒・安社等十人爲總管。大將軍趙朴，將軍安迪材・許洪材・金德至・徐靖・任愷・金臣正・李廷翼・朴益桓等十人爲千戸，中郎將柳甫・金天祿・李臣伯・辛奕・崔公節・呂文就・安興・李淳・金福大・車公胤・李唐公，郎將朴成進・高世和，中郎將宋仁允，郎將玉環・桂富・金天固・李貞・徐光純・咸益深等二十人爲總把。]（『高麗史』卷 29 世家 29、忠烈王 6 年（1280）11 月己酉（11））

これらの史料を見ると、忠烈王は高麗の武将たちにモンゴルの官職を要請しており、また対象の候補者も提示している。具体的には彼らに対する萬戸の任命や牌面の下賜などを忠烈王が積極的に要請している。このことはモンゴルの官職などの授与が高麗王の要請のもとで行われていたことを物語っており、忠烈王の狙いが強く込められているものと言える。

だとすれば、忠烈王の意図は何なのか。まず、彼の要請として、洪茶丘の昇進を制限し功績を待って褒賞することを提示している。ここには洪茶丘をけん制しようとする意図が窺われる。さらに、表面的にはモンゴルと同じ官職名を使って一元的な指揮体系を構築しながらも、事実上は高麗軍をモンゴル軍から分離して、指揮をする上での混乱を避け、実際には高麗軍の指揮府の人選過程で自分が直接介入しようとする意図として理解される。

こうした忠烈王の要請をクビライはすべて受け入れ、高麗に虎符などを下賜した。このことによって、忠烈王は金方慶をはじめ、高麗の武将たちにモンゴルの官職名と印章を次のように下賜することができた。

7）元の皇帝（クビライ）が王（忠烈王）を開府儀同三司中書左丞相行中書省事に冊封し、印信を下賜した。また、金方慶を中奉大夫管領高麗軍都元帥に、知密直司事の朴球・金周鼎を召勇大將軍左・右副都統に任命し、皆に虎頭金牌と印信を下賜した。趙仁規を宣武將軍・王京斷事官兼脫脫禾孫として任命して金牌と印信を下賜し、朴之亮など 10 名を武德將軍・管軍千戸に任命して金牌と判子を下賜した。趙朴ら 10 名を召信校尉管軍總把に任命し、銀牌と印信を下賜し、金仲成など 20 名を忠顯校尉管軍總把として任命した。[帝冊王爲開府儀同三司中書左丞相行中書省事，賜印信。又以金方慶爲中奉大夫管領高麗軍都元帥，知密直司事朴球・金周鼎爲召勇大將軍左右副都統，並賜虎頭金牌・印信。趙仁規爲宣武將軍王京斷事官兼脫脫禾孫，賜金牌・印信，朴之亮等十人爲武德將軍管軍千戸，賜金牌及印，趙朴等十人爲召信校尉管軍總把，賜銀牌及印，金仲成等二十人爲忠顯校尉管軍總把。]（高麗史卷 29 世家 29、忠烈王 6 年（1280）12 月辛卯（23））

金方慶・朴球・金周鼎は1281年3月、合浦に軍隊を率いて出ており、この時のモンゴルの官職任命が日本征伐のための編成の所産であったことがわかる。つまり、忠烈王が高麗の武将たちに対するモンゴルの官職の任命を要請し、これが受け入れられた。そして、こうしたモンゴルの官職を与えられた武将たちは、第2次日本征伐に参加している。このように見ていくと、この時、忠烈王が官職をモンゴルに要請した意図は、モンゴル軍と同じように構築された指揮体系のなかで自分の影響力を行使していくことにあったと推測できる。

このような事実からは、萬戸などモンゴルの官職や金牌などの地位を「下賜」する形を借りて、軍の統帥権を確立しようとする忠烈王の意図が読みとれる。忠烈王はモンゴルの官職に関する人事権行使を通じて、統帥権の掌握、さらには彼らの忠誠心まで確保した。つまり、萬戸などの地位の任免や与奪など人事権を通じて、国王の臣僚に対する掌握力を高めたといえる。

そして、もう1つ考慮しなければならないのは、征東行省の存在である。同省はモンゴルが日本征伐のために設置した軍前行省であり、軍司令部の性格をもっていた点はすでに古くから指摘される。1280年に第2次征伐の準備過程で設置された征東行省は、今度は高麗に置かれ、忠烈王がその丞相に任命された。同年6月頃の日本征伐に対する議論にはじまり、モンゴルは10月に忠烈王を征東行省の左丞相、12月に右丞相に任命した。そして、日本遠征が終わった1283年6月には、征東中書省の左丞相に任命された忠烈王が、阿塔海（アタカイ）とともに征東行省の職務を管掌するようになった。今や、忠烈王は、征東行省内でも最も高い地位にあった。

高麗の官職だけを持った同国の大多数の官人たちにとって高麗王は唯一の命令権者であり、彼らからは一国の支配者という地位が無理なく認知されていた。しかし、行政官などモンゴルの管制に編入された高麗出身の官人たちにとって、高麗王は「唯一の」君主ではなかった。現実的にはモンゴル皇帝の地位と影響力がより大きかった。そのため、高麗王にはモンゴル官僚体系内の高位職を確保し、さらに行省の人事に影響力を発揮できる丞相という地位が切実に求められた。形式上の最終命令権者は皇帝であったが、高麗王は萬戸や摠管など軍官をはじめモンゴルの官職の任命に高麗官人たちを推薦できる形を作り上げることができた。そうすることで、高麗王はモンゴルの官僚である高麗人と君臣関係を維持しえた。まさにここに第2次日本征伐に積極的であった忠烈王の政治的目的があったといえよう。

むすびにかえて

忠烈王はモンゴル皇帝の駙馬（皇帝の娘婿）でありながら、征東行省の丞相の1人であった。つまり、高麗国王、駙馬（皇帝の娘婿）、丞相という3つの地位を持っていた。彼は高麗の国内だけでなく、モンゴルの官僚体系との関係から自身の政治的地位を確保できた。こうした地位の確保のために、忠烈王はモンゴルの日本征伐、特に第2次征伐を積極的に活用したといえる。

結果的に忠烈王の意図は、それなりに成果を上げたと評価できる。しかし、彼はその後「ナヤン乱」の過程で平壤に出て行き、クビライに助軍の意志を明かしてもいるが、彼にとってこの行動はモンゴル王室の一員という地位を維持するために必然的なものであった。言い換えれば、モンゴルに依存することで王権を確保・強化しようとした忠烈王の選択は、高麗の政治的・外交的なスタンスを限定させる結果をもたらした。

【発表論文 8】

対蒙戦争

——講和の過程と高麗の政権を取り巻く環境の変化

李 命美 (ソウル大学)

[原文は韓国語、翻訳：全相律 (東京大学)]

導入—講和のための、モンゴルの要求条件、 「モンゴルの（従属）関係」の形成方法

1231年、モンゴルは、高麗を侵入した。当時、崔氏武臣政権が権力を握っていた高麗朝廷は江華島への遷都を断行した。以後30年以上に及ぶ間、講和と戦争を繰り返しながら、モンゴルは講和の条件として、いくつかの事項を一貫して求めた。そこには、江華島に遷した都を再び開京に戻すことに対する要求(出陸還都)、王の親朝、納質、郵驛の設置、供戸数籍、助軍、兵糧調達、達魯花赤の設置など、モンゴルが征服地に要求した普遍的な事項が含まれている(これらは一般的に「6事」と呼ばれる)。これらの要求事項は、モンゴルが服属国を直接統治しなくても、その政治・軍事・経済に関する重要な問題を直接制御するために要求されたものである。

その中でも、本発表では、国王の親朝と納質要求を主に扱うことにする。本発表で特にこの二つの問題に注目する理由は、これらが、「モンゴルが、他の政治単位と関係を形成し、維持する方法、すなわち遊牧社会における政治的ネットワークの形成とそれが維持される方式」と関連しているからである。支配一族間の世代を重ねた通婚もこのような方法の一つであり、高麗王室もその対象となっていたが、それは元々、モンゴル側が高麗に要求した事案というより、高麗武臣執権者による国王(「元宗」)の退位という事件を收拾する過程で「突発的に」(高麗世子によって)提起され、実現されたことである。一方、国王の親朝と王室の子弟を「質子」、いわゆる「トルガク[禿魯花, turγaγ]」とする要求は、モンゴルがすでに戦争初期から行ってきたことである。

モンゴルが「納質」を要求した一次的な理由は、講和を介して戦争を終了させると共に、服属国の首長の子弟を「人質」としようとした両側面がある。しかし、戦争の終了という短期的「事件」の後、両者の関係が長期的に持続する状況でトルガクとしてモンゴルに入ったいわゆる「人質_質子」は、通常、ケシク[怯薛, kešig]に入り、モンゴルの皇帝・皇室及び支配層と個人的な関係を形成し、新しい支配層として再教育される。これらの点は、その時期及びその後にモンゴルに入った高麗宗室も同様である。

一方、講和のため、国王の「親朝」を要求したのも、政治単位首長間の直接的な関係形成に対する要求という点では「納質」要求と一脈相通ずることがある。モンゴルで政治単位首長間の直接的な関係が政治単位間の関係において重要な意味を持っていたのは、戦争で勢力の糾合と分裂が繰り返されていた遊牧社会の特性、そして分封を通じて設定されたモンゴルの国家体制の講和分立的・分権的性格と関係している。モンゴルにとって、戦争中の国、あるいは政治単位と講和を結ぶために、その国王、あるいは首長との直接的な関係(個人間・家系間の関係)を持つのが何より重要であった。その表現手段の一つが、首長たちが皇帝を直接面對して服属を表する「親朝」だった。また、これらの関係が持続的に維持するためには、首長一族の子弟をモンゴルに呼び、入侍させる「トルガク[禿魯花]派遣」が必要とされ、必要に応じて首長の親朝も継続的に行われていた¹。これらの首長個人間・

¹ そのためモンゴルにとって親朝は諸王・封君がカーンに臣服する象徴であり、これを拒否することは背反と認識された。モンゴルでの親朝、朝覲に関する詳細な内容については、以下を参照されたい。李治安、1989「元代分封制度研究」、天津古籍出版社、297-299。

家系間の直接的な関係形成は²、それまで主に使臣を媒介して間接的に行われる冊封と、朝貢という形を用いて行われる国家間の関係の形成方法に慣れていた高麗の立場では、異質なものであった。それに対して、高麗側ではこれらの事案に対して要求されたままの形ではなく、高麗なりの解釈を加え対応した。さらに、そのような対応が両者の関係の進展に応じて変化しながらも、高麗社会、特にその政治的環境に影響を及ぼしたことも、本発表でこの二つの問題に注目する理由である。

以下では、講和のための要求条件に含まれていた国王親朝と納貢要求に対する高麗側の理解と対応について考えてみる。そして、そのような対応方式が両国関係の安定の後、どのように変化し、その変化の様相が反映する時期における「高麗-モンゴル関係」の特徴とその政治的影響についても簡単に説明する。

国王親朝要求の解釈と対応 - 宗室の外交活動：講和交渉の使行団引率

モンゴルは1231年（高麗高宗18）1次侵入の後、高麗が講和を結んだ状態で江華遷都を断行すると、これを理由に再び高麗を侵入してきた。そして撤軍の条件として国王が、モンゴルに来て直接皇帝に会うこと、つまり、親朝を要求した³。これは、一次侵入以降国王の親朝なしに結んだ講和の不安定性が江華遷都によって顕著になったための要求であった。しかし、高麗側はあれこれ理由をつけ、これを受け入れず、以降もモンゴルの侵入と国王親朝の要求は引き続かれ、最終的には1258年、崔氏政権終息後、太子の親朝を通じて両国間の講和が実現された。

高麗側で国王が親朝要求に応じなかった理由には、心理的な抵抗と武臣執権期という政治的状況などが複合的に作用されたもので、高麗は国王親朝という、モンゴル側の要求を避けながらも、一方で、その要求に内在している安定的な関係成立には応じようと、それなりの工夫を凝らしたと考えられる。講和交渉の過程における宗室の活動と講和以降宗室が正使として活動していたことが、その事例である。

高麗の宗室が正使として使行団を率いる様相はモンゴルとの関係で現れるユニークな使行様相の一つで、この時期の高麗-モンゴル関係の側面を示す事例とも言える。モンゴルとの関係で高麗宗室が使行団を率いた事例は以下の通りである。

< 表 > 高麗宗室が対モンゴル使行団を導いた事例（典拠：「高麗史」、「高麗史節要」）

番号	使行時期	人物	使行目的
1	高宗 26 年 (1339) 12 月	新安公 王佺	戦争中の交渉
2	高宗 32 年 10 月 壬午	新安公 王佺	戦争中の交渉
3	高宗 40 年 12 月 壬申	安慶公 王湍	戦争中の交渉
4	高宗 44 年 12 月	安慶公 王湍	戦争中の交渉
5	元宗 元年 (1260) 4 月 丙寅	永安公 王僖	皇帝即位の賀礼
6	元宗 2 年 4 月 己酉	太子 王諶	アリクブケ (Ariq Böke) 平定の賀礼
7	元宗 6 年 正月 乙未	廣平公 王恂	元宗親朝の時の厚意に対する謝礼
8	元宗 8 年 11 月 甲午	安慶公 王湍	新年の賀礼、日本招諭関連報告
9	元宗 11 年 8 月 戊辰	世子 王諶	聖節賀礼、ベ・ジュンソンの反逆の報告
10	元宗 13 年 正月 甲申	濟安侯 王淑	「大元」国号制定の賀礼
11	元宗 14 年 正月 癸亥	帶方侯 王澂	祭祀・婚礼許諾の謝礼
12	元宗 14 年 閏 6 月 己未	順安侯 王棕	皇后・皇太子の冊立賀礼
13	忠烈王 即位年 (1274) 9 月 戊戌	濟安公 王淑	王女の下嫁・国王爵位継承の謝礼
14	忠烈王 12 年 5 月 庚午	濟安公 王淑	皇太子「眞金」の死亡の弔意
15	忠烈王 18 年 閏 6 月 丙戌	世子 王璋	聖節賀礼
16	忠烈王 即位年 (1298) 正月	平陽侯 王暉	禪位許可の謝礼
17	忠烈王 復位年 (1298) 9 月	中原侯 王昱	復位謝礼

2 モンゴル支配層の個人間・家系間の関係の具体的な形及びその意味と関連についてはキム・ホドン、2010『モンゴル帝国と世界史の誕生』、トルベグ、pp.96-100を参照。

3 高宗19年（1232）11月に、モンゴル皇帝に送った、本当に表の内容のうち、皇帝の調書の内容を云々し、国王が直接朝覲する問題と関連した高麗側の立場を表明した部分があることを通じ、「高麗史」巻23、高宗19年11月）これに先立ち高麗に渡された、モンゴル皇帝の調書に国王の親朝を要求する内容があったことを知ることができる。高宗19年11月以前、同年7月に、モンゴルの調書が渡されている。（「高麗史」巻23、高宗19年7月に庚辰朔）

18	忠烈王 29 年 11 月 戊寅	濟安公 王淑	前王の帰国要請
19	忠肅王 7 年 (1320) 6 月 己巳	丹陽大君 王珣	皇帝の即位賀礼
20	忠肅王 8 年 3 月	丹陽大君 王珣	年号改正・太后冊封賀礼

高麗宗室が、モンゴル側に使臣として派遣された事例は、戦争中の交渉の過程で行われた 4 つの事例とモンゴルと講和が行われた 1259 年以降の 16 件の事例、計 20 件の事例が確認される。そのうち元宗在位期間中の事例が 8 件で、この時期に宗室正使派遣が集中していることが注目される。特に元宗代の最初の事例である元宗元年 (1260) 4 月の使行では「高麗－モンゴル間」の講和が実現され、元宗が即位した後、初めてモンゴルに派遣した使行でもある。

モンゴルとの関係で宗室が正使として使行団を率いるようになった背景にはまず、このような事例が、通常、特別な事案と関連した儀式的使行だったということである。上記の表のように宗室が使行団を率いた事例には、新年・聖節の賀礼のような定例使行も含まれているが、皇帝の政敵平定賀礼や王室間の通婚成功の謝礼などの特別な事案の賀礼或いは謝礼のための使行が多数含まれている。

高麗が宗室を正使として派遣したのはモンゴルとの関係の初期における特別な意味と重要性を意味し、関連した使行の格を高めるための人選であったと推測できる。一般的に、外交のための国家間の使行で、「使臣」、特に正使の格は、使者派遣主体が相手国との関係においてどれ程の意味と重要性を与えているかを反映するものである。正使の「格」をどのような基準で選定し、構成するかは使行の目的と派遣主体及び対象によって異なる場合がある。高麗の前期、宋との関係で派遣された高麗側使臣を見ると、高麗では使臣の家の背景と官品、学識などを使臣人選の重要な基準として設定していたことが分かる⁴。このように、宗室を正使として派遣した背景には、高麗が家の背景や官品といった「正使の格」の基準を最大限に高め、モンゴルとの関係において最大限の意味と重要性を付与しようとした側面があると考えられる。

一方、このように宗室が正使として派遣された事例がモンゴルとの関係以前に観察されないのは、これらが関係を結ぶ対象であるモンゴルの影響を受けた側面があることを示している。その具体的な一面を高麗宗室の使行が始まった初期の状況を通して確認することができる。高麗の宗室が使臣として派遣された最初の事例は、1339 年 (高宗 26) の新安公王佺の使行である。この使行以来、高宗代では全 4 回に渡って宗室使臣を派遣している。しかし、これらの使行には、その目的が明記されていないが、当時の戦争の過程で戦争終結の前提条件として、モンゴル側が要求していた国王親朝の問題と関連していると考えられる。

前述したように、モンゴルは 2 次侵入以降、講和の条件として、国王の親朝を要求した。以後 1235 年 (高宗 22) から開始された 3 次の侵入中、モンゴルは、高宗 26 年 (1239) 4 月と 8 月二度にわたって使者を派遣して国王がモンゴルに親朝することを再度要求し、12 月には、高麗が新安公王佺と少卿宋彦瑋をモンゴルに派遣した⁵。以降、高宗の次男であり、元宗の弟である安慶公王湍も 1253 年 (高宗 40) と 1257 年に、二度にわたってモンゴルに派遣された、これも当時新たに皇帝位に上がった憲宗モンケ (Möngke) が軍事的侵入と共に国王あるいは王子 (太子であると考えられる) の親朝を要求したことに伴う措置であった⁶。要するに、宗室の使行は、モンゴルとの戦争の過程でモンゴルが継続的に要求した国王親朝を避けながら、モンゴルの圧迫から抜け出すための高麗側の臨機応変の一つとして開始されたものと考えられる。その後も高宗は、モンゴルの使者が王に江外で出迎えることを要求されるが自らは出迎えず新安公王佺を送って使者を迎えることにした⁷。また、モンゴル軍が侵入してきて王と太子が直接降伏することを要求されたときにも永安公王僖を代わりに送った⁸。

これらの宗室の使行は高麗側が期待したように、モンゴル側の国王や太子に対する親朝あるいは直接降伏の意味としては認められなかったようだ。1239 年 (高宗 26) モンゴルに行った新安公王佺は翌年 9 月に戻ってきて皇帝が王の親朝を要求したことを再度伝え、安慶公王湍自身も「王子」だったため、1257 年 (高宗 44) の「王

4 パク・ヨンウン、1995・1996「高麗・宋交聘の目的と使節の考察 (上)・(下)」『韓国学報』21・22。

5 『高麗史』巻 23、高宗 26 年 4 月、8 月、12 月。

6 『高麗史』巻 23、高宗 2『高麗史』巻 24、高宗 40 年 8 月己未、庚午、10 月辛未、12 月壬申；44 年 7 月壬申、12 月。6 年 4 月、8 月、12 月。

7 『高麗史』巻 23、高宗 37 年 6 月庚子。

8 『高麗史』巻 24、高宗 45 年 6 月丙申。

子入朝」の要求による入朝にもかかわらず、翌年モンゴルは、再び太子の親朝を求めてきた。そして太子王儁（後に元宗）の親朝を通じて、漸く両国間の講和は成立された。つまり、当時モンゴル側は、国王・太子との直接的な関係を求めただけで宗室を使臣に送るように要求することはなかったが、前者に対して拒否感を持っていた高麗側⁹は、モンゴル側の要求を「高麗の立場」で調整し、宗室を使者として派遣することになり、これらは講和後も同様であった。

自らモンゴルに入朝して講和を成功させた後、即位した元宗は、世祖クビライ（Khubilai）の即位を賀礼するために、モンゴルへの初めての使行団に宗室永安公王僖を派遣し、しばらくしてクビライが即位過程で競争したアリクブケ（Ariq Buka）との戦争で勝利したことを賀礼するための使行団には息子であり、太子であった王諱を正使として派遣した。そして、上記の表でも示したように、これらの使行はその後も数回続いた。自ら親朝することに対して拒否感を持っている状況で、また通婚など、「モンゴルの（従属）関係」の要素が介入されていない高麗 - モンゴル間の関係において、元宗は伝統的に国家間の関係を媒介する主要な手段であった使行の格を高めることにより、モンゴルとの講和を維持しようとしていたと考えられる。これは、以前の使臣人選基準に基づき、使行団を率いる正使の格を最大限に高めることに、当時高麗側が認識していたモンゴルの立場とあわせて、宗室を使臣として登用するという高麗の工夫によってなされた。つまり、宗室の正使派遣は自ら太子として入朝した経験もあり、自分の入朝が行われるまでの過程をよく知っていた元宗が自分の立場から、過去高麗が経験してきた中国王朝との使行の様相に、モンゴルとの関係形成過程で見られた特徴的な側面をある部分収容し折衝した結果として生まれたものである。

これは、「モンゴルの（従属）関係」を基本にして高麗との関係を考えていたモンゴルと、東アジア的な関係に基づいてモンゴルとの関係を考えていた高麗の間に、未だに完全な同意・定着がされていないことを示していると同時に、そのような関係に悩まされた元宗と高麗側の視点も反映していると言える。このように元宗と高麗 - モンゴル関係において、首長の個人・首長家との直接的な関係の形成と維持という、「モンゴルの（従属）関係」の要素は、それ自体の機能よりも定例・儀礼的使行という国家間の関係を介して間接的に表現されたのである。しかし、これらの側面は忠烈王代以降王室間の通婚や国王親和条のような直接的な関係が高麗 - モンゴル関係に全面的に導入されて活用される過程で、徐々に減少していくことになる。

ところが、上の表で示したように、宗室を正使として派遣する事例は元宗代に集中的に現れ、忠烈王代以降、特に 1298 年忠烈王と忠宣王の間に発生した重祚事件後にはあまり現れない。それにはまず、忠烈王代以降、国王自らがモンゴル帝国と通婚したり、積極的に親朝に臨んだりして、個人間・家系間の関係を中心とした「モンゴルの（従属）関係」の要素が前面に浮上されることになり、あえて宗室の正使を派遣するという折衷案を使う必要がなくなった。これは言い換えれば高麗とモンゴルの関係において定例・儀礼的な使行が持つ重要性和意義が縮小されていく様相とも関連している。これらは、使行自体において実務使行の重要性和意義が増加した結果でもあるが、両国間の関係を安定させ、安定した関係を定期的に相互に換気・維持させる主な手段が使行、特に定例・儀礼的な使行の他にはなかった時期の国家間の関係とは異なり、高麗 - モンゴル関係において高麗国王が、モンゴルの皇帝・皇室と直接結んだ関係等、高麗とモンゴルの関係を媒介する他の手段が非常に重要な意味を持って登場することになり、使行の格を高めて関係の重要性を強調する必要が以前に比べて縮小された状況と関連している。

一方、忠烈王代以降宗室正使派遣事例が明らかに減少されたのは高麗 - モンゴル関係において宗室が持つ意味と重要性的問題が関連していると考えられる。これは、この時期の高麗 - モンゴル関係の性質とそれに基づいた高麗の権力構造の問題、また国王の位相の変化とも関連している。高麗 - モンゴル間の関係は、冊封と朝貢という形を用いて形成される東アジアの伝統的な国家間の関係要素と通婚などを通じて形成されるモンゴルの（遊牧社会での）個人間・家系間の関係要素が相互に有機的に結合されている関係である。これらの関係に基づいて形成されたモンゴル服属期の権力構造における高麗国王の位相変化は大きく三つに分けることができる。①高麗国王のモンゴル皇帝の諸侯としての地位が外交秩序上だけでなく、高麗の内部においても実質的な意味を持つようになっ

9 講和後も高麗側では国王の親朝に否定的な認識を示しているが、これは元宗 5 年、モンゴル側の親朝要求に対する高麗側の反応を通して確認することができる。（『高麗史節要』巻 18、原種 5 年 5 月）

たということ、②モンゴルの皇帝権が実質的な最高権力として存在し、それとの関係（個人間・家系間の関係を含む）を使用して権力が付与される構造において、高麗国王は、モンゴルの皇帝・皇室と同じような関係を形成した他の権力主体と競争をしなければならなかったこと、③最後に以上のような過程を介して王朝体制において高麗王室が持っていた血縁の正統性における権威の重要性が縮小されたことである。このような変化は、既存の冊封・朝貢関係において形式的に機能していた高麗・高麗国王の諸侯・諸侯としての地位が実質化したのに加えて、「駙馬」の地位や「通婚という関係」を通して「非常に特別だが、変動可能であり、多面的に形成される関係」に、高麗国王権がかなり依存することになったことも、「行省丞相」という地位を通して官僚としての属性がある部分、高麗国王の地位に移入された結果であると考えられる。このような王の地位の変化は、以前の高麗という政治単位の中で、独自の論理に基づいて最高権力として存在してきた高麗国王権が、モンゴル服属期に入り、その上位、そして競争関係の他の権力者との関係の中に位置づけになったこと、さらにそれにより発生した変化ということで「相対化」と表現することができる。

このような高麗・モンゴル関係とそれに基づいた権力構造は、1269年元宗復位過程を経て成立されたが、高麗国王と臣僚たちがモンゴルとの関係と、それに基づいた権力構造の全貌を認知し、活用していく過程は段階的に行われた。高麗国王と臣僚たちが、このようなモンゴル服属期の権力構造の特徴を完全に認知されたのは、1298年忠烈王と忠宣王間の重祚過程を通じてであった。この事件により、高麗国王と臣僚たちは高麗国王が皇帝と形成した関係に問題が発生した場合、国王が退位されることもあるということを認識し、以降忠肅王の時代に発生した瀋王擁立の動きの過程は、王室直系でなくても、彼らが皇帝・皇室と形成した関係が国王・皇帝の関係よりも密接して強固な場合、その関係に基づいて、国王に挑戦することが可能であることを示した事例である¹⁰。このような状況で国王がモンゴルに派遣する重要な使行を宗室に引率させるのは多少政治的にリスクになる行為であった。そのため、忠烈王代以降宗室を正使として派遣するケースが確実に減少した背景にはこのようなモンゴル服属期権力構造の認識問題も影響していると考えられる。

トルガク〔禿魯花、turxax〕の派遣と宗室のケシク参加

使行を通じた宗室の活動は、元宗代以降、特に忠烈王代重祚以降にはほとんど現れないが、高麗宗室の政治的・外交的活動は、他の通路を通して引き続き行われた。特に注目されるのが、モンゴルのケシク〔怯薛、kešig〕制度である。

高宗28年（1441）4月、高麗では顯宗の子孫である宗室永寧公王俊を王の息子であると「だまし」両班のご子息10人と共にトルガクに送った。これは、モンゴル側の要件である「6事」のうちの一つである「納質」の要求に応えるものであると同時に、前年モンゴル側の国王親朝要求を補うための措置でもあった。以後王俊が王の息子ではないことが「発覚」するが、彼のモンゴル朝廷での活動が認められ、引き続きモンゴルに滞在しながら遼瀋地域の総管として務めることになる。高麗側の最初のトルガク派遣は上記のように、やや「曖昧に」行われたが、後にも、引き続きモンゴル側の要求に応じてトルガクが派遣され、トルガクとして派遣された高麗の宗室はケシクにも参加した。ケシクは宿衛のモンゴル式表現で、チンギス・ハーンと親密な関係にあり、信頼を受けた代表的なヌケール（nöker）家をはじめ、新たに服属した政治単位長の子孫や親族を含む、モンゴル帝国の親衛隊である。これはモンゴル帝国の主要な支配層を構成する集団であった。ケシクに他の政治単位長の子孫を召喚して参加させるのは、モンゴルの立場から、他の政治単位の服属を担保するための手段としての側面だけでなく、モンゴル支配層にしつけをするという意味もあった¹¹。また、対象者の立場ではケシクに参加している間、モンゴルの政治勢力との交遊を介して、その政治的基盤を拡張することができる。

これらのことは高麗の場合も同様であった。若い年齢で即位した忠穆王と忠定王を除く高麗国王はすべて即位前、モンゴルにケシク生活を経験した。忠烈王は元宗12年（1271、世祖至元8）から王位を継承した元宗15年

10 以上、モンゴル服属期の権力構造についてはイ・ミョンミ、2016、『13～14世紀の高麗・モンゴル関係の研究－征東行省丞相駙馬高麗国王、その複合位相の探求』慧眼、参照。

11 森平雅彦、2001年、「元朝ケシク制度と高麗王家－高麗・元関係における禿魯花の意義について」、『史學雜誌』第110編第2号。

(1274、至元 11) までに、重祚した忠宣王は忠烈王 16 年 (1290) ~ 24 年 (1298、成宗大徳 2) 正月、そして同年 8 月に廃位された後、1308 年に復位するまで (武宗至大 1)、以降同年 11 月に、モンゴルに行ってから、チベットに配流される忠肅王 7 年 (1320、英宗即位) までケシク生活を行った。忠肅王は忠宣王が復位し、ケシクに召喚され、王位を継承する忠宣王 5 年 (1313、仁宗皇慶 2) までケシク生活を行なった、忠惠王も忠肅王 15 年 (1328、天順帝致和 1・明宗天曆 1) から 17 年 (1330、文宗至順 1) までケシク生活をして王位を継承したが、忠肅王が復位するようになり、再度ケシクに召喚された。しかし、不誠実な生活を理由に忠肅王後 5 年 (1336、順帝至元 2) に高麗に帰国措置された。恭愍王もやはり忠惠王復位後ケシクに召喚されて 1351 年王位を継承するまでケシク生活を行った¹²。

モンゴルのケシクに参加した高麗宗室は世子に限定されたわけではない。モンゴルとの関係序盤には王室の直系ではない人物がトルガクとして派遣されることもあった¹³、上記の高麗国王の事例の中でも、忠肅王と恭愍王の場合のように、「世子」ではない状態でケシクに召喚された事例が含まれている。忠宣王の次男だった忠肅王は忠宣王が復位した後、兄である世子王鑑と共に、モンゴルに宿衛として召喚された。モンゴル側が二人の王子と一緒に送信するように命令したからであった¹⁴。恭愍王の場合も兄である忠惠王が復位した後、宿衛に召喚されたので、世子としてケシクに参加したわけではない。実現されたわけではないが、恭愍王即位後、忠惠王の庶子である釋器を召喚したのも、彼をケシクに入らせるためのものであった可能性が高い。

モンゴルが「世子」ではない高麗宗室を宿衛に呼び入れたのは、明らかではないが彼らを次期の国王位継承権者にすることで、万が一の場合に備えようとしたからだと思われる。高麗の臣僚たちはこのような形でモンゴルのケシクに入られた宗室を事実上、次期王位継承権者として認識していた。これは高麗臣僚たちが「王祺 (後の恭愍王) がケシクに入れられたとき、彼を「大元子」と称していたことから推測できる¹⁵。「元子」というのは、元々王の長子を指す言葉で「元子=世子」、または「元子=王位継承権者」を意味するものではない。ところが、当時高麗の臣僚たちは忠惠王の弟である王祺をあえて「大元子」と称したのは、彼が「世子」に冊封されたわけではないが、モンゴルで宿衛をすることになった次期継承権者であると認識していたことに起因する。このように、モンゴルのケシク制度が高麗に王位継承候補資格を提供し、その政治的環境を助成する制度として認識され、機能していたため、それまで同様の役割を果たしていた高麗の太子制度には変化が見られた。

光宗代に導入された高麗時代の太子制度は大きく冊封と東宮官運営に分けられる。通常在位中の王 [現王] の長男を太子に冊封することにより、血縁の正統性を基盤として権威が与えられる場合、東宮官の任命と運用は、彼が即位した後、「事前に」国王として王権を行使するための政治的環境を与えてくれる。太子の教育と護衛を担当した東宮官は、それ自体が太子の王としての資質育成のためのものであるが、後に国王が統治を行う過程において官僚との関係を予め形成することを可能にする制度でもある。東宮官に任命された人物は、通常、任命当時高位官職を兼ねている場合も多く、そうでない場合でも、太子が王位に上がった後、高位官職に就いていたことが確認できる¹⁶。さらに、太子制度は後継を取り巻く政局分裂の可能性を遮断するという面で現国王の政治的基盤を安定させるためのものでもある。太子の冊封が王によって行われるということが決定的ではあるが、東宮官の構成においても以前の説明で分かるように太子の政治的且つ人的基盤は事実上現国王にあったと思われる。

このような高麗の太子制度はモンゴルとの関係によって多少変化することになる。まず、格式な面において高麗の王位継承権者である太子が諸侯国の位相を反映して「世子」に格下げされた。一方、高麗前期の事例では、太子の冊封は順次に行われていたものであり、通常現王の長男を太子にして [立太子、爲太子]、東宮官を任命して太子府を構成し、教育をさせた後、適切な時期に、彼を太子に冊封した [冊太子]。太子を立てた [立太子] 後、太子を冊封する [冊太子] までの時差は多様である。元宗代から忠烈王代までの世子制度運用は高麗前期と同じ様相を示す。しかし、このような「世子制度」は、忠宣王代に入ってから大きく変化され、王権と王位継承の過程

12 ケシク参加期間は、代替的なもので年度単位を中心に表示し、一時的に帰国した期間は、表示しなかった。高麗国王の即位前のケシク参加状況及び考慮宗室のケシク参加状況の具体的な内容については森平雅彦の上記の論文 (注 11)、2001 年を参照。

13 モンゴルとの講和が行われる前である高宗 28 年 (1241)、モンゴルにトルガクとして行った永寧公王綽、忠烈王の帶方公王澈及び彼の息子である中原公王暉などがそのような事例である。その他、忠宣王から瀋王位を継承した王属とその孫として瀋王位を継承した王篤榮不花もケシクに参加した。

14 「高麗史」巻 124、尹碩傳。

15 「高麗史」巻 38、恭愍王叢書忠惠王後 2 年 5 月。

16 キム・チャンギョム、2008 年、「高麗顯宗代東宮官インストール」『韓国史官報』33。

を安定させるための機能を失い、正常に運用されなくなる。

忠宣王の長子の王鑑と次子の王燾（後に忠肅王）はそれぞれ1310年（忠宣王後2）正月と1313（忠宣王後5）3月に「世子」として王位を継承した記録から両方ともに世子だったことが確認できる。彼らが世子になった時期は、王鑑の場合、忠宣王が復位した1308年8月以降1310年正月前、彼の弟の王燾は王鑑が死亡した1310年5月以降、「世子として王位を受け継ぐ」1313年3月以前であったと推定される。ところが、忠宣王の二人の王子に関して、特に王位を継承した忠肅王については、その冊封と関連する記録だけでなく、その世子府の構成の記録が見当たらないことに留意する必要がある。これらは、以降の世子にも同様である。

忠肅王の長子である、世子の王禎（後の忠惠王）については、彼が1328年（忠肅王15）に「世子として」モンゴルの宿衛に行ったことは記録として残っているものの、やはり世子冊封や世子府構成などについての記録は確認できない。そこには、忠肅王が瀋王との紛争の時、モンゴルに召喚されて1325年になって漸く高麗に帰国できたことが影響していると考えられる。しかし、その後1328年に王禎が世子として（宿衛のために）、モンゴルへ行くまで、3年程の時間があり、瀋王との王位継承紛争の後も政局安定のための政治的行為として世子冊封や世子府設置などが必要だったと考えられるが、関連する記録が見当たらないという点は、先行した元宗代や忠烈王代の王世子冊封及び関連制度の運営の様相と対比されるところである。

忠惠王の長子であり、王位を受け継いだ忠穆王には「世子」という記録が確認されない。忠穆王が即位した当時8歳だったことを考慮すれば、子供の年齢のために忠惠王の在位時に「まだ」世子として立てられなかったら可能性がある。さらに、忠宣王が復位した後、長男を世子に立てたが、実質的な政治基盤を確保するための世子府の設置や世子の地位を確定する世子冊封などは事実上行われていなかった。もちろん、これらのことは、記録上の問題である可能性もある。しかし、現国王の公式王位継承者としての太子-世子が持つ位相を考慮すれば、世子を冊封する儀式は、それ自体が重要な意味を持つ。また、太子の冊封礼の後、関連赦免令を下したり、太子の誕生日を節日として記念するなど、高麗前期の前例と比べたら、実際の冊封が行われたとしても、その記録を残さなかった当時の状況は、それなりの意味を持っている。一方、忠定王と恭愍王が「先代王[前王]」の息子ではなかったことも、「世子」になれなかった理由の一つとして考えられる。

このように、特に忠宣王代以降、太子/世子制度が適切に運用されなくなったのは、この制度の基底にある王位継承に関する高麗伝来の観念が持っていた権威と規定力がモンゴルとの関係において弱体化されたのに起因する。このような変化は、当然のことながら高麗王権をめぐる政治的環境にも大きな変化をもたらした。

伝統時代の王朝体制で太子が国王に次ぐ権力を持ちながらも王権への脅威にならないのは、彼の権力が国王によって託されたものであり、太子の政治的基盤が国王のそれと直結されていたからである。しかし、次期王位継承権者が高麗におらず、モンゴルの朝廷でケシクに参加することになり、国王は自分の後継が独自勢力を形成する過程をコントロールできなくなった。太子制度を通じて構成された太子の政治的且つ人的基盤が国王の支配圏に含まれていた時に比べて、ケシク制度で設定された世子あるいは継承候補者の勢力基盤は王のそれと重なりを見せながらも違う部分もあった。そのために、宿衛期間とその能力に応じて、宗室の勢力基盤が独立に拡大することが可能となった。

また、この時期に繰り返されていた継承紛争の過程で国王が廃位される事態が相次いだが、高麗国王は前国王の身柄も掌握できなかった。それぞれ1298年と1332年に、モンゴルで廃位された忠宣王と忠惠王は両方、モンゴルに召喚され、宿衛期間を再度経た後、それぞれ父王が死亡してから復位した。1332年に廃位後、再びケシクに入った忠惠王が不誠実さを理由に帰還措置されたことを見ると、彼らをモンゴルに召喚し、ケシクに参加させたのは「再教育」の意味が大きいと思われる。ところが、モンゴルの意図とは別に、廃位された国王の上記のような措置は、「前王」の身柄を「現王」が掌握できなくするとともに、「前王」の復位可能性を残しておくことにより高麗の権力の中心を二元化させ、国王権を制約する結果をもたらした。いわゆる「反元改革」を断行した恭愍王が、モンゴルが召喚した忠惠王の庶子である釋器に反逆罪をかぶせて誅殺しようとしたことや、その後、モンゴルにいた忠宣王の孽子である徳興君塔思帖木兒の送還を要求したこともすべてこれらのモンゴル服属期における権力構造を克服しようとしたものである。

一方、ケシク制度は、国王をめぐる政治的人間関係網、すなわち臣僚たちとの関係にも影響を及ぼした。世子あるいは王位継承の可能性を持った宗室がモンゴルに宿衛する過程で、高麗臣僚たちが彼らを随行することになり、これらは以前太子府東宮官と同じような役割をするようになった点に注目する必要がある。つまり、王位後継者が高麗の現政権と密着した高麗臣僚たちとの関係を通じて政治的基盤を磨くのではなく、離れた地域であるモンゴルで、場合によっては10年にも及ぶ長期間、随行する臣僚たちと関係し、またはモンゴル内の勢力と関係し、政治的基盤を構成するようになる。このような随従臣僚たちは彼らが随従した人物が王に即位した後、いわゆる「側近勢力」として、主要な政治的基盤として活躍したのも周知の事実である¹⁷。

これらの随従臣僚たちの中には、彼ら自身がケシクに参加したりする場合もあったが、これらのケシク参加は、臣僚当代に限らず、その子弟に受け継がれ継承された。つまり、モンゴルとの関係で高麗国王が自分の核心的且つ政治的人間関係を形成する重要な通路の一つであったケシク制度は、一方では高麗の臣僚たちが国王の制御から外れ、皇帝権と直接的に繋がることを恒常的・構造的に可能にしたのである。既存のような国王を頂点に形成された高麗の政治的人間関係網が皇帝を中心に再編されたものである。

結 び

モンゴルは高麗との関係において既存の東アジアの国際社会で国家間の関係を規定していた（形式的な側面で）、いわゆる「冊封 - 朝貢」という儀礼的形式に加えて、遊牧集団間の関係維持において重要な意味を果たしていた首長や首長一族間の直接的な関係を形成するいくつかの方法を適用させようとした。30年に及ぶ戦争の過程で講和の条件として提示された国王親朝と質子—トルガク派遣要求は、そのような過程で生まれたものである。このような要求に対して高麗は、積極的にそれに応じることなく、自分たちが慣れていた国家間の関係をベースに、それなりの解釈を加えながら対応を行った。その中でも、モンゴルとの関係以前にはほとんど現れなかった高麗宗室及び太子の政治的・外交的活動に著しい変化が生じたのである。

高麗 - モンゴル関係の初期における宗室や太子 / 世子の政治的・外交的活動は、主に「高麗對モンゴル」という関係の構図の中で高麗側の利害関係を反映して行われた。戦争当時講和交渉の主体として取り上げられたり、関係の序盤に正使として使行団を引率した宗室の活動もこのような意味として行われたものである。また、初期のトルガクとして派遣された傍系宗室や太子 / 世子の活動もやはり、このような文脈で理解することができる。しかし、両国関係の展開とモンゴル皇帝権を実質的に左右する権力構造が形成されるにつれ、これらの側面も変化を見せることになる。

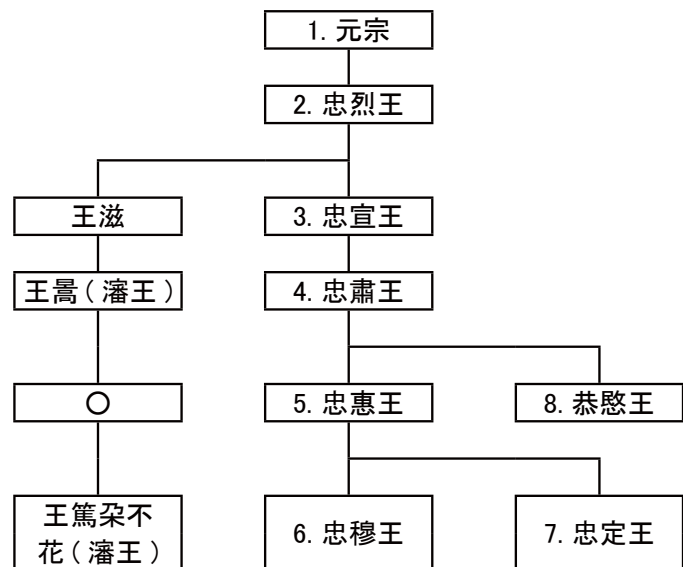
つまり、実質的な最高権力である皇帝権との関係に基づいて権力が付与されるにつれ—これらの「関係」には「1:1」で結ばれる「君主対君主」の関係だけでなく、「1:多」で形成される「個人間・家間」の関係も含まれて—高麗国王は、国王になり、その地位を維持して王権を行使するためには、自ら、モンゴル皇帝・皇室との関係に依存しなければならず、同じような関係を形成した他の権力主体とも競争しなければならない状況に置かれた。また、世子がモンゴルでケシク生活をするようになるため世子の身柄とその政治的人間関係が高麗国王の制御範囲を脱することになり、重祚が頻発する中、廃位された国王も、まずはモンゴルに召喚され、ケシクに入られる。また、現国王においても廃位されたら前国王の身柄を自ら掌握することができなくなる。つまり、モンゴルとの関係及びそれに基づいた権力構造のため、高麗宗室や世子は高麗国王と異なる政治的立場をとる存在となったのである。

そのため、宗室正使派遣のように、高麗側でモンゴル側の要求にそれなりの解釈を加えて進行していた部分は確実に減少していく変化を見せた。しかし、モンゴルが他の政治単位との関係で普遍的に運用し、帝国運営の根幹にもなったケシク制度を通じて宗室 / 世子の政治活動は維持されるしかなかった。つまり、首長個人間あるいは支配一族との間の直接的な関係を通して、政治単位間の関係が形成・維持されていたモンゴルの関係形成方式は高麗においても適用され、これは高麗王権を取り巻く環境に変化をもたらし、そのような変化は高麗 - モンゴル

¹⁷ モンゴル服属記の側近勢力については、キム・グァンチョル、1991年、「高麗後期世族層図説」、東亜大学出版；イ・イクジュ、1996年、「高麗・元関係の構造と高麗後期の政治体制」、ソウル大学国史学科博士学位論文を参照。

関係の中で発生したいくつかの政治的事件を発生させた構造的変化であったと見なすことができる。

< 参考資料 > モンゴル服属期の高麗国王の位継承図



【発表論文9】

北元と高麗との関係に関する考察 —— 禡王時代の関係を中心に

ツェレンドルジ（モンゴル社会科学院歴史研究所）

[原文は韓国語、翻訳：李へり（韓国外国語大学）]

1. 北元に対する高麗の外交路線の変化

北元と高麗の関係は大きく「恭愍王時代」と「禡王時代」という二つの時期に分類することができる。恭愍王時代に高麗は、元と明が角逐する合間を縫って自主性を強化させる政策を繰り広げた。1369年、恭愍王政権は、元との関係を断絶し、明との事大関係を樹立させた。それだけでなく元の領土を征討するなど、敵対的な態度を示した。恭愍王のこのような措置は、あまりにも性急な判断だった。一方で、恭愍王は事実上北元との関係も完全には断絶できずに両端外交を行った。

1372年前後に北元は、国内外の安定を回復させ、高麗に対する外交活動も活発化させた。しかし、恭愍王が親明政策を取り続けたため高麗に対する懐柔政策は失敗した。

恭愍王を継承した禡王時代に、北元と高麗の関係には大きな変化があった。恭愍王が殺害された後、北元が瀋王脱脱不花を高麗王に任命したことを見れば、当時噂になっていた北元が国王を交代させたという話もあながち嘘ではなかった可能性もある。親明外交路線を取っていた恭愍王が1374年9月に殺害された後、恭愍王が主導していた親明外交路線は混乱に陥るようになった¹。

恭愍王が殺害され、同年11月頃、貢馬を徴集するために高麗に派遣されていた明の使者である林密、蔡斌などが、帰途の途中にある開州站到着した際、護送官の金義が蔡斌とその息子を殺害し、林密を捕らえて北元に逃げる²という事件が起きた。明に請諡・承襲使、告訃使として派遣されていた使者たちはこの事件のことを聞くや否や早々に帰還した。これにより高麗と明の間の友好関係は事実上断絶した。その後も明の間責を恐れた官吏たちが使者として行きたがらないことによって、高麗は恭愍王殺害と明の使者殺害事件が発生した直後に明に対して適切な解明をすることができなかった。従って、禡王の王位継承を通報し、その承認を得るのが難しくなった。

1374年11月、ナガチュ（納哈出）がムンバラブカを高麗に派遣し、駱駝1頭と馬4頭を持ってきたが、これは恭愍王の³殺害後、北元から来た最初の使者であった。使者を通じて恭愍王の死後の情勢を把握しようとしていたようだ。

それから1ヶ月後の12月、李仁任政権は判密直司事の金湑（キム・ソ）を北元に送り、恭愍王が没したことを知らせた⁴。これにより、恭愍王の殺害事実は明より先に北元に通報された。禡王が即位した後、李仁任政権では明と北元どちらも事大の対象国として認め、禡王冊封を要請した。つまり、恭愍王末期の親明一辺倒の外交路線に変化があった⁵ということだ。

しかし、金湑（キム・ソ）を北元に派遣したのは、恭愍王の喪を知らせるためであり、これは禡王の冊封とは無関係であった。喪を知らせることと王位継承の承認に対する要請は別のことであった。つまり、恭愍王の喪を知らせると同時に恭愍王時代まで続いていた親善関係を維持しようとする狙いだった。しかし、このように先制

1 キム・スンジャ、韓国中世の韓中関係史、ヘアン、2007、82頁。

2 高麗史卷133、列伝46、辛禡 1、11月。

3 高麗史卷133、列伝46、辛禡 1、11月。

4 高麗史卷133 m、列伝 46、辛禡 1、12月。

5 キム・スンジャ、前出の書籍（2007）、83-84頁。

の使者を派遣したことを北元が逆手にとり、禡王冊封にまで関与し始めた。その後に起こったことが、それを裏付けている。禡王元年(1375)正月にナガチュ(納哈出)が使者を高麗に派遣して正式に関与しはじめた。ナガチュは「先王には息子がいないが今誰が王位を継承したのか」と聞いた。ナガチュがこのような質問をしたのは、この時すでに、恭愍王に代を次ぐ太子がいないので瀋王暲の孫である脱脱不花を奉って高麗王にしているからだ。しかし、李仁任などは、明・元どちらに対してもいい顔をする両面外交路線を選んではいたけれども、王権のことまで北元の要求通りにするのは反対であった。

同年4月、李仁任が何人もの臣下たちを従えて孝思親に出て行き、太祖の靈魂に誓って、「本国の無頼漢たちが瀋王の孫を手懐けて北側の辺境に来て王位を窺うので、我々同盟する臣下たちは力を尽くしてそれを防ぎ新王を助け奉ります。この誓いに変わりがあれば、天地と宗廟社稷が必ず隠密な罰を下す」⁶、とした。つまり、李仁任らは瀋王を高麗王に擁立した事件に反対し、自分たちが推戴した禡王の地位を少しでも揺るがしてはならないということを表明するための対策だった。

同月に判事の朴思敬が北元から帰還し、明德太后に次のように告げた。

ナガチュ曰く「貴国の宰相が金義を派遣して、王が亡くなったのに後継ぎがなく瀋王を奉って王にしたというので、皇帝は「瀋王を」奉って貴国の王にした。もし、先王に息子がいれば朝廷から絶対に瀋王を送りはしないと、いった⁷。

この話を聞いた恭愍王の母親である明德太后は李仁任を呼びつけ「宰相が金義を元に派遣したという話は私も聞いて久しい。そなたたちは知らないのか」⁸と、聞いた。ここで言及されている朴思敬をいつ北元に派遣したのかについての記録はないが、北元に派遣された金湑の副使として派遣したとみる見解⁹がある。

ちょうどその頃明の使者を殺して北元に逃げた金義の部下が高麗に戻ってきたが、この時李仁任と安師琦らは彼を手厚くもてなした。これを見た朴尙衷は国王に上訴文を提出した。

金義が使者を殺した罪を当然追及しなければならないにも関わらず宰相たちが犯人の随行員たちを手厚く待遇しているということは、安師琦が金義をそそのかして使者を殺させた証拠となるものです。つまりこの罪を明かさなければ今から国の災いが始まります¹⁰。

この上訴に対しては久しく対応されなかったが、この時になって太后がその上訴を都堂に下し、また安師琦を監獄に入れた。その後、安師琦が他人の家に逃げていき刀を取り出し自決すると、その死体を処刑した¹¹。これを見ていた李仁任は、「金義の元への派遣は、賛成事・康舜龍、知密直・趙希古、同知密直・成大庸らがやったことだ。」とし、彼らをみな遠方へと流刑にした¹²。

次いで同年4月高麗は、判密直・李子松を西北面都巡問使兼平壤尹に、賛成事・池濠を西北面都元帥に、門下評理・柳淵を東北面都元帥に任命し、各道の兵を徴発して北元の侵攻に対して守備させたが、後に国境の情勢は平安であるという情報を受けてすぐに中止した¹³。

高麗はただ対外的に圧力を受けただけではない。瀋王に協力する余地を持った人物たちが高麗の国内にも依然として存在していた。僧である小英が自分の手下何人かを北方に送り、秘密裏に瀋王に書信を渡して「今の国の状況は、臣下が王様を殺し、また王様が臣下のゴマすりに騙されている。国権はただ権勢のある臣下の手で手

6 高麗史節要卷30, 辛禡元年4月。

7 高麗史卷126, 列伝39, 姦臣2, 李仁任:「納哈出謂臣言, 爾國宰相, 遣金義請云, 王薨無嗣, 願奉瀋王爲主故, 帝封爲爾主。若前王有子, 朝廷必付遣瀋王也。」

8 高麗史節要卷30, 辛禡元年4月:「太后召仁任曰, 宰相遣金義如元, 予聞此言久矣。卿等獨不知乎。」

9 池内宏, 「高麗末における明及北元との關係」・史學雜誌・, 29-1, 2, 3, 4/ 1917, 満鮮史研究・中世 第三冊, 1963, 282面。

10 高麗史卷112, 列伝25, 朴尙衷:「尙衷上疎曰:金義殺使之罪, 在所當問, 宰相待其從者甚厚。是師琦嚙義殺使, 其迹已見。今若不正其罪, 社稷之禍, 自此始矣。」

11 高麗史節要卷30, 辛禡元年4月。

12 高麗史節要卷30, 辛禡元年4月。

13 高麗史卷133, 列伝46, 辛禡元年4月。

籠めにされているので、もし今の時期に兵を起こしてくれれば大事を成すことができる¹⁴とした。また、禰王元年(1375)9月に泥城元帥崔公哲の下、200人が反乱を起こし軍民たちを殺害して鴨緑江を渡っていった¹⁵。こうした事例は禰王即位の初期における親元勢力の活動を示すものと言える。こうした状況の下で、李仁任政権はどんな対策を使ってでも瀋王が高麗国王に擁立されるのを防がなければならなかった。1375年4月に李仁任は百官たちと共に連名で文を書き北元の中書省に訴えようとしていた。その文書には次のように書かれている。

世祖皇帝が王業を成すときに、我国の忠敬王がいち早く皇帝に謁見するために入朝し、皇帝のご恩を被り、貴朝廷の世襲する王たち及び駙馬（皇帝の娘婿）たちの礼に準じて王位を授かりました。そして、忠烈王は公主（皇帝の娘）を与えられ駙馬（皇帝の娘婿）となり、忠宣王が生まれ、忠宣王から忠肅王が誕生し、これまですべての王位が世襲されてきました。しかし、英宗皇帝の時に、江陽君王滋の息子であり、我が王室の支派に分かれていった完澤禿、瀋王暲が現れ、王位を争奪しようとしたけれど、貴朝廷が判別してくれたので実現できなかったのです。その後、先王である伯顔帖木兒は、まさに忠肅王の息子として襲位しており、その24年に遺言で彼の真の息子である元子の王禰が襲位するように指示しました。謹んで判密直事・金湑を派遣して先王の訃音を伝えさせたところ、彼が貴朝廷に行った今になって知ることになったのですが、完澤禿、瀋王の孫である脱脱不花は、我が国に嫁にきた公主の皇孫でもないのに邪な野望を抱いて王位を争奪するために力を入れている。これは、世祖皇帝が制定したのとは大きく違反することなので禁止して下さることを願います¹⁶。

しかし、左代言の林樸、典校令の朴尙衷、典儀副令の鄭道傳は、「先王が計策を決定して南の明を慕っていたのに、今や北の元を慕うなら不当である」と、言って署名しなかった¹⁷。

つまり、李仁任政権は、北元の軍事作戦に備えると同時に外交での打開策を考え、北元に高麗王として擁立した脱脱不花を廃位させることを要請したのである。この文書が、北元に伝えられたのかどうかは明らかではない。これに対し、高麗から文天式を北元に派遣し、その文書を伝えたという推測がある¹⁸。しかし、北元で禰王2年(1376)10月に高麗に伝えた擴廓帖木兒の書信に「伯顔帖木兒王には、息子牟尼奴があり、国民の推戴を受けて国事をしているという事情を抄兒志から聞いて知った」としているため、上記の文書は北元に伝わらなかったようだ。抄兒志は禰王2年2月に高麗に行ってきた人でもし文天式が上記の文を北元に伝えていたなら、北元がその後から来た抄兒志から高麗の事情を聴き知ったとは言わなかっただろう。

どうやら当時李仁任政権が取った脱脱不花を拒否した措置は情勢に合っていた。先王が殺害され新王が冊封もされていないところで、たとえ虚名に過ぎなかったとしても脱脱不花を王に推戴すれば危険なので、どんな計略を使ってでもそれを防ぐ必要があった。

これより一カ月後の1375年5月に北元が使者を派遣してきた。彼は、その前に(1374年12月)金湑を北元に派遣して恭愍王の葬事を知らせた後、北元から送られてきた使者であった。

この使者が持ってきた文書には、「バヤンテムル（恭愍王）は我々を裏切り、明に付いたので貴国の王を殺した罪を許す」とあった。この時に李仁任と池瀛が元の使者を迎えようとしたので、三司左尹の金九容、典理摠郎の李崇仁、典儀副令の鄭道傳、藝文應教の權近などの激しい反対に会い、使者は開京に入れなかった。李仁任などは賛成事・黄裳を西北面道体察使に、左副代言・成石璘を体察使として任命し、江界に派遣して北元使者を慰勞し送り返した。その結果、彼らが高麗に来て直接脱脱不花の王位継承問題を掲げることを防ぎ、国の根本を覆す混乱を予防した¹⁹。

1375年8月に泥城萬戸は、「瀋王母子が反逆者である金義と進奉使金湑の群れを従えすでに信州に到着した」

14 高麗史卷133、列伝46、辛禰2年7月：“今國家、臣弑其君、主諛臣諂、國柄專在權臣、若引兵來、大事可成。”

15 高麗史卷133、列伝46、辛禰元年9月。

16 高麗史卷126、列伝39、李仁任

17 高麗史節要卷30、辛禰元年4月

18 池内宏、前述の論文、294面

19 盧啓鉉、高麗外交史、甲寅出版社、1994、635頁

と報告した。これに高麗が恐れ、いくつもの道の兵士を徴発して北元の侵略に備えた。しかし、この知らせは嘘であったことが明らかになった。この時鴨緑江以北で頻繁に略奪事件が発生し、高麗では金義が北元の軍隊を連れてきたと疑ったが、藩王の軍隊ではなく難民であることが確認された²⁰。その後約半年間北元と高麗の間で使者の交換は行われなかった。高麗は、禡王2年(1376)2月に李原實を送ってナガチュ(納哈出)を訪問させた。

同年5月、北元から吳抄児志が来ると、禡王はこれを手厚くもてなした²¹。明との関係が断絶され、北元との関係の最も重要な問題である脱脱不花の高麗王擁立問題も解けず、禡王即位自体も不安定を感じると、これを解決するために高麗の朝廷では、ナガチュを通じて北元との公式的な関係再開を試みた。この時まで高麗は北元の使者を受け入れなかったため、北元にも高麗に対する不信感があった。しかし、ナガチュに使者を送った数日後に安州の副元帥王安徳は藩王が死んだと報告した。北元との外交関係再開を取り巻く高麗官吏たちの葛藤は早くから学界の注目を受けており、当時の政治勢力を親明派、または親元派に分けて説明する傾向が一般的であった。ただ、一部の学者たちはこうした立場を批判しながらこの葛藤は単純に外交関係に対する見解の差からくるわけではなく、高麗国内の政治勢力間の政治的対立の結果であったと主張した。そして、当時執権勢力であった武将たちが北元との外交関係に積極的であった理由は、明が高麗に対して高圧的な姿勢を取ることで反明の雰囲気が高潮しており、特に明の使者の殺害事件により明との外交関係が収拾しにくくなった事実と、北元が脱脱不花を高麗王に冊封することで、高麗を軍事力で脅威した状況を指摘した²²。北元との公式的な関係の再開は単純に軍事衝突を防いだり、禡王冊封を受けるための行為であるとは説明しにくい。特に、当時北元で高麗を軍事的に圧迫したことはなく、北元の軍事が高麗の領土を攻撃してきたという情報は嘘であったことが後日明らかになった。

大体、北元との関係の再開は、対内的及び対外的という二つの目標の下で行われたと言える。対内的には当時執権者であった李仁任などにとって、彼らの執権を持続させるためには対外的安定が必要であり、このため明に対して一方では使者を送りながら、また元とも関係を持ち、両国の脅威の中で自国の利益を図った²³。北元との関係再開は明との関係を絶つという意味ではなかった。李仁任は、明の使者殺害事件とつなげて元と縁故のある賛成・康舜龍、知密直・趙希古、同知密直・成大庸などを流刑にして、親明的な勢力非難に対する自分の名分を立てた²⁴。また、李仁任、池籛らに対し、明との関係を絶ち北元との関係を再開させようとしているので、彼らを死刑に処してほしいと上訴した反対勢力をも大挙粛清した。こうすることで、李仁任らは自分の地位を確固たるものにして対外政策を勝手に施行していった。一方、北元との関係再開は対外的にはもっと重要な意味を持っていたと言える。先学たちが指摘した禡王冊封などは完全には否定しにくい事実だが、これより大きく重要な目的があったと言える。事実、禡王即位時点では東アジアの国際情勢に少なからず変化があった。特に、北元においては元順帝(妥懽帖睦爾)が大都(現在の北京)から北側に逃げた混乱期とは情勢がかなり変わっていた。北元は1372年に明の大規模な征伐軍を撃破し、政局も安定した。

一方、遼東のナガチュ(納哈出)も1372年牛家庄を攻撃し、遼東の明軍に大きな打撃を与えた。雲南にあった北元の残存勢力もそのまま明に対抗しながら粘っていた。つまり、1374年前後の時期に北元は政治・経済・軍事的に比較的安定を取り戻した。恭愍王は、元がすぐに滅亡すると判断し、明と事大関係を結んだ可能性が高いが、実際の状況は推測とは食い違っていた。北元は簡単に滅びる存在ではなく、高麗もこれを実感するようになった。弱小国にとっては、国家を守る方法は強大国間の勢力均衡を取るより効果的な方法はなかった。しかし、恭愍王末期の高麗対外政策は強大国の勢力間のバランスが取れない、言い換えれば北元を排斥し、明側に傾いた極端なものであった。元をただ排斥するだけでなく、北元領土に対する数回の征伐も断行していた。だからといって、明の高麗に対する見方はよくなかった。明の遼東征伐に対する奨励は、高麗と元を窮地に追い込むときに利用する一時的な方法であって、彼らの狙いは完全に違っていた。遼東の北元勢力が崩れると明の次のターゲットは高麗だった。明は、1371年から遼東経営をしながらこうした態度を示しはじめた。国際状況の変化を高麗の執権者たちは知っていた。特に、北元との関係再開を牽引した李仁任、池籛、崔瑩などの武将たちは北元と手を結び日々

20 高麗史卷114、列伝27、楊伯淵

21 高麗史節要卷30、辛禡2年5月庚午

22 金塘澤、「高麗禡王元年(1375)元との外交関係再開をめぐる政治勢力間の葛藤」、震檀学報 83, 1997.

23 高惠玲、「李仁任政権に対する一考察」、歴史学報、第91集、1981、24-25頁。

24 Ibid. 20頁。

高麗に圧迫を加える抑圧的な明をけん制しようと方向転換した。彼らは、明の攻撃など、非常事態が起きた場合、北元の軍事援助を受けて抗争する方法も考慮した。高麗の北元との関係再開は明をけん制しようとする北元と高麗の実質的な必要性から始まった、これは当時の東アジアの勢力均衡を維持しようとする努力の結果であったと言える。こうした状況だったので、李仁任など、高麗の執権者たちは反対勢力の強大な反発にも関わらず北元との関係再開政策を守った。高麗は北元と連合して明をけん制したり、少なくともこれを通じて明を圧迫して譲歩させようとした。

2. 事大関係再開過程とその終末

1376年7月、1年半前に北元に派遣された「判密直司事・金湑がナガチュ（納哈出）のところから逃げてきた」という記録から考えたとき、北元が彼を人質に捕らえた可能性もある。北元の朝廷は、高麗から派遣された吳抄児志（チョルジ）を通じて高麗情勢に関する詳細な情報を得て、李仁任などの執権者たちの本意を知った。これは、1376年10月、北元で兵部尚書ボロト・テムル（孛羅帖木児）を派遣して伝達したココ・テムル（擴廓帖木児）の書信で²⁵確認される。その書信には、当時高麗に対して北元が実施してきた政策、この間両国で行われたこと、北元と明との関係、明の本性が何なのかなど、重要な情報が反映されている。つまり、ココ・テムル（擴廓帖木児）は、「禡王の父親である恭愍王と親しくしたこと」に言及し、続けて北元との関係は「義理の父と娘婿との関係から姻戚間」としており、「恭愍王が死んだ後に彼には子孫がないというので、禡王の一家の人で代を継ぐようにした」といった。次いで「これに対する詔書を伝えようとする使者を派遣したが、高麗で塞がれ、高麗が過誤に気づいて悟ることだけを待ち、やっと高麗が派遣した抄児志を通じて高麗が元を裏切らなかったということを知り、Bayan Temür（伯顔帖木児王：恭愍王）には息子牟尼奴（禡王の幼名）がいて国事をしているという事情を知った」といった。そして、「国の人たちが王者（つまり、禡王）に服従すると言ってもまだ元の朝廷の責命を受けたことがないので、高麗の人たちの動向もその支持と反対がたぶんそれぞれ半々になるだろう」と、当時の高麗の最も重要で敏感な問題に触れた。こうすることで、禡王の冊封問題は迅速に解決しなければならず、これを解く主体は北元だということを悟らせた。

また、「小国が大国に従う時必ず信任をもらわないと国を保存できない」と諭しながら、「高麗が元に再び戻らず朱元璋に仕えるなら、その時に朱元璋は高麗を侵略するであろうし、高麗がいくら大国を敬う礼を尽くすといっても明は高麗の財力を奪い、人民を移させ、社稷まで改めてしまうなど、どこまでやるかわからないだろう」と言った。最後に元は、「国土を回復させる大計を企てている途中であり、高麗は皇帝の命令に従えるならば、すぐ軍事を訓練し、軍馬を肥やして私たちと共に敵を前後にけん制することで、元の復興事業に貢献せよ！」としながら、「書信を受けて一日も早く使者を送れば元は必ずやいい措置を取るだろう」と、説得と威嚇を同時にした。後日、明と高麗との間に起こったことを見たとき、明の本性に対する北元の推測が合っていたことがわかる。

この書信に両国関係に対する「姻戚関係」という再三の言及は、北元はクビライ時代に結ばれた駙馬（皇帝の娘婿）関係というモンゴル優位の関係を自ら捨て、奇皇后の母国として高麗を姻戚関係として認める平等な関係に格上げし²⁶、北元は高麗を味方につけるためにこうした計略を使った。

そして、1376年10月ナガチュ（納哈出）も右丞九住を派遣してきて、高麗に行っていた文天式を送り返してきた。文天式は恭愍王17年（1368）10月皇太子の誕生日を祝賀するために元に派遣した使者であった。彼はその8年後に高麗に戻ってきた計算になる。右丞相ココ・テムル（擴廓帖木児）の書信を受けた高麗の朝廷は禡王2年（1376）10月に密直副使孫彦を北元に送り、禡王の王位継承問題と関連した百官連名書を北元の中書省に送った。それは禡王が恭愍王の遺志で即位し、北元皇帝の冊封詔書が下される時を待っていたことを知らせるものだった。同年10月、高麗は開城尹黃淑卿をナガチュ（納哈出）に送り、ナガチュの使者九住の来訪に答礼し、12月

25 高麗史卷133、列伝46、辛禡2年10月

26 ユン・ウンスク「アーユシュリーダラ（愛猷識理達臘）」の活動と麗・蒙関係の変化」、東北亜歴史財団及び骨科学アカデミー共催韓・蒙関係の昨日と今日・2010韓・蒙国際学術会議の発表論文集、ウランバートル、2010、237頁

ナガチュに書信を送って銀と羊を贈り物としてささげた²⁷。翌年の禡王3年(1377)の正月にナガチュが使者を送ってきて、羊と馬を贈り物として持ってきた。そして、2月北元から翰林承旨ボラド(孛剌剌)を派遣し、王を冊封する命令と酒と海東青を持ってきた²⁸。

北元の禡王冊封に対して「傾いていく北元としては、脱脱不花を最後まで高麗王として貫く力がなく、それよりはいつそ高麗の権臣たちの要求通りにすることで、高麗の気を引いた方がいいだろうという策であった²⁹、という解釈がある。しかし、この時は脱脱不花がすでに死んだ後だったので、事実北元には高麗国王として立てられる人物もいなかった。

こうして北元は禡王3年(1377)2月に禡王を冊封し、これにより恭愍王18年以降断絶していた冊封・朝貢関係がまた成立した³⁰。北元が禡王を冊封した時また尹桓など、6名に平章事という位を与えた。次いでナガチュは、ムンバラブカを派遣して親善を図り、北元は豆歹達を派遣して恭愍王神位に祭祀をさせた。北元が高麗にこのような関心を示すと、高麗はついに北元の年号である宣光を使った³¹。同時に「内外の獄事を判決する時にただ至正條格に従え！」³²という命を下した。

1377年3月に高麗は三司左使李子松を北元に派遣し、王の冊封に対する事例の文を捧げる³³と同時に北元の皇帝をはじめとする統治者たちに贈り物を贈った。また、礼儀判書の文天式をナガチュに答礼使として送り、多くの贈り物を与え、親善を強くした。ナガチュに送った文天式が6月に北元から帰還した後に、北元に行っていた謝恩使の李子松も戻って来た。この時、「元の朝廷の臣下たちは李子松が朝服を着て礼をつくす姿を見て、みな泣きながら『わが朝廷が北に移った後、軍事隊列の中で辛い時期を送っていた時は今日もう一度礼儀を見られるとは考えもしなかった』とし、手厚くもてなした³⁴」という。

高麗国王を冊封し、その権臣たちの関心を買ったと判断した北元は7月に宣徽院使チェリックテムル(徹里帖木兒)を高麗に派遣して定遼衛を挟み撃ちすることを要請した³⁵。これは北元としては復興の意志として強力な提案ではあったが、高麗は北元と明に対して両面外交を行っていた時であったので、これを受けるにも反対しようにもいささか難しいジレンマの立場であった。そこで、この提案を受け入れるよりは、うまく説得して時期を延長するか、その提案自体をうやむやにしようとした³⁶。禡王は、北元の使者に金の帯と鞍を乗せた馬を与えたが使者は受け取らなかった。これは高麗が北元の要求を受け入れなかったからである。同年8月に高麗は啓稟使晉川君姜仁裕を北元に送り³⁷、姜仁裕は9月に北元から人を遣ってこれまでの事情を知らせてきた。その情報は、平章の文典成と大參政の張海馬は、ナガチュと共に軍事を訓練し軍馬を肥やし、高麗軍が来ることを待って定遼衛を攻撃する計画を立てているという内容であった³⁸。

これに対して高麗は、軍簿判書・文天式を北元に派遣して寒い冬だということを理由に軍隊を動員することは難しいと伝えた。つまり、軍隊動員を正式には断れず先延ばし作戦を使ったのだ。そして、高麗は11月に黃淑卿を北元に派遣して冬至を祝賀し³⁹、12月には王昇を派遣して新年を祝賀させた⁴⁰。同月にナガチュが使者を高麗に遣わし、羊160頭と毛牛3頭を贈った⁴¹。

しかし、定遼衛征伐は北元だけが欲してたわけではない。倭寇が全州に侵入した時に都堂で敵の選択について相談したが、当時執権していた大臣の一人であった池齋は「倭寇はただ辺境をうるさくするだけなのでそれほど

27 高麗史卷133、列伝46、辛禡2年10月

28 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年2月

29 盧啓鉉、前述の書籍(1994)、638頁

30 キム・スンジャ、前述の書籍(2007)、85頁

31 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年2月

32 高麗史卷84、志38、刑法1、職制、辛禡3年朝：「中外決獄・遵至正條格」

33 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年3月

34 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年6月

35 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年7月

36 盧啓鉉、前出の書籍(1994)、639頁

37 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年8月

38 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年9月

39 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年11月

40 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年12月

41 Ibid.

憂慮することはない。しかし、もし明の大軍が定遼衛に根拠地を作ってしまうと攻撃するのがとても難しくなるので兵力を回して遼を攻撃するのが上策である⁴²と主張した。倭寇の全州侵略というのは1376年9月倭寇が全州を陥落させたことをいう。これは北元が定遼衛を挟み撃ちにしようとする案を1年前のことである。したがって、池淵のこの言葉は高麗の執権者たちが北元との関係再開を試みながら明の遼東進出もけん制することを考えていた証しであるといえよう。一方、禡王が即位した直後から高麗は北元との関係再開を推進すると同時に、1374年末明に使者殺害事件が起こり、より悪化した明との関係を正常化させ禡王の冊封を受けるために地道に努力してきた。しかし、明はほとんど反応を見せず、高麗を外交的に圧迫する政策を繰り返した。

さらに1376年8月「定遼衛から秋に高麗を進攻する」という知らせが入った。この情報をつかんだ高麗は、各道に人を派遣して、軍隊を点検し、もしもの事態に備えた⁴³。定遼衛が高麗を進攻するということが事実だったのかどうかは明らかではないが、この知らせは高麗と北元との関係を促進させる役割を果たした。当時明は、国内問題に汲々としていて高麗を侵略する立場になく、これよりわずか2か月前に送った文書で要求した事項に対する高麗の反応を見ずして、急いで高麗をやっつけるといえるのはあまりにも性急なことであった。したがって、これは噂に過ぎなかった可能性が高い。たぶん、明と高麗との関係を綿密に伺っていた北元が、当時明と高麗の關係に改善傾向が見られないことを知ってこうした噂を広めた可能性は排除しにくい。1376年8月以降、高麗と北元との友好關係が速いスピードで推進するためにもこの事件がある程度作用したものと思われる。高麗が北元と事大關係を結ぶと明も高麗に対して宥和政策を取り始めた。1377年12月に明がそれまで抑留していた高麗人の丁彦など、358名を送り返してきた。そうすると、高麗は1378年3月判繕工寺事柳藩を明に送り、皇帝の恩に対して謝礼し、また礼儀判書・周誼を派遣して恭愍王の諡号と王位継承の責命を要請する上表文を提出した⁴⁴。そして同年6月に高麗使者(行人)である崔源、全甫、李之富なども釈放して送り返してきた。一方では、1378年(禡王4年)7月に北元の使者が来てトグス・テムル(豆叱仇帖木兒)の即位を報告しようとする、禡王は病気を言い訳に迎えに行こうとはしなかったが、使者が強要したので王が行省に出て迎えた⁴⁵。同年8月に周誼と柳藩が明から帰還したが、彼らは明の礼部商書・朱夢炎が皇帝の教示を記録して高麗人たちに見せる文書を持ってきた。この文書の主な内容は、明は高麗に対して内政干渉も使者の抑留もしないというものだったが、かえって高麗の明に対する姿勢を見守るという意味合いの強いものであった⁴⁶。

しかし、いくばくもしないで同年9月に高麗は明の洪武年号を再び使い始めた。これは一方では北元の皇帝が没し、新しい皇帝が即位したので、これまで使ってきた年号をそのまま使いにくく、他方では高麗に対する明の宥和政策と関連があった。洪武年号を使って親明態度を示すと、明は高麗に対する宥和政策を以前のような圧迫政策へと変えていった。高麗は、1378年10月に沈徳符を明に送り、新年を祝賀すると同時に版図判書の金宝生を送って崔源などを送り返したことについて感謝を表明したが、明の高麗に対する姿勢は中々よくなり、却って強硬路線へと旋回した。1379年正月遼東も指揮使が鎮撫任誠を派遣して洪武3年11月高麗軍が捕虜にした遼陽地方の遼陽地方の官民男女1千余人及び高麗に逃げてきた明の兵士たちを返還せよと要求した⁴⁷。その理由は高麗が兵士を送って北元を助けてあげるからと言った。これを通じて明の高麗に対する懷疑がまだ解かれてないということがわかる。

一方、北元はほとんど1年ぶりである1379年6月に僉院甫非を派遣して、郊祀を行ない、年号を天元に改称すると報告した。また、ナガチュ(納哈出)もムンバラブカを高麗に送り付けてきた。禡王は、ムンバラブカが帰る際に、「丞相は、亡くなった父とお互いに兄弟だと称した」といい、苧布と麻布をそれぞれ150匹(むら)ずつ与え⁴⁸、彼らに親近感をあらわにした。また、高麗は同年7月に永寧君王彬を北元に派遣して郊祀を行ない、年号を変えたことを祝賀した。12月にナガチュが鷹と羊を贈り物として送ってきた。

このように高麗は明の洪武年号を使った後も、北元と続けて外交を結んでいた。明との関係がまだ正常化して

42 高麗史卷125、列伝38、姦臣1、池淵；・高麗史節要卷30、辛禡2年10月

43 高麗史卷133、列伝46、辛禡2年8月

44 高麗史卷133、列伝46、辛禡4年3月

45 高麗史卷133、列伝46、辛禡4年7月

46 盧啓鉉、前述の書籍(1994)、643頁

47 高麗史卷134、列伝47、辛禡5年正月

48 高麗史卷134、列伝47、辛禡5年6月

おらず、緊張関係が続いていたため高麗としては北元との関係を絶つことを急ぐ必要はなかった。他方では、高麗が明との事大関係を回復させても北元と関係を維持する両端政策を維持することを決定した可能性も否めない。

禡王6年(1380)、永寧君王彬が北元の詔書を持って帰還し、同年2月に北元は、礼部尚書の時刺問、直省舎人の大都閫を派遣して、禡王を太尉に冊封すると、王が百官を従えて郊外にまで出て彼らを迎接した。3月に高麗は、密直部使である文天式を北元に送り、節日を祝賀し、冊封に対して謝礼した。同年7月に北元は使者を派遣して、大事を頒布し、ナガチュも使者を派遣してきた。

北元との使者往来は、その後激減した。ナガチュの使者が最後に禡王9年(1383)1月に高麗を訪問し、昔のような友好関係を結ぼうと提案した。北元の朝廷から高麗に派遣した使者は最後に1384年10月に和寧府までやってきた。高麗は、護軍任彦忠を派遣し、この使者を労い説得して帰らせたが、交通が塞がっていて半年も逗留して帰っていった。その後北元と高麗の間には使者の往来が途絶えた。その理由は、1385年の遼東に対する明の攻略の始まりと関連している。明は、ナガチュを攻撃する前の1384年にナガチュと高麗の中間地点に居住していた女真部落を攻撃して、ナガチュと高麗の連絡を遮断させたのである。これにより、ナガチュ直轄領土を経由しなければ高麗に行けなかった北元の中央政府使者にとってもその往来が中断せざるを得なかった。しかし、これは完全に断絶されず必要な場合、いつでも再開可能な潜在的な状況にあったと言える。

結論にかえて

恭愍王を継承した禡王代から高麗と北元関係には大きな変化があった。高麗はただ明と事大関係を維持するだけでなく、一時期国交が断絶した北元とも関係再開を試みた。

高麗が1369年に最後の使者を派遣してから5年ぶりである1374年に北元に告訃使を派遣したことを見ると、両国関係を再開しようとする要請は高麗が先に出した。早くから高麗との関係再開を試みていた北元はこのようなチャンスをうまく利用した。

高麗の北元との関係再開は、明をけん制しようとする北元と高麗の実質的な必要性によって始まった、当時の東アジアの勢力均衡を維持しようとする努力の賜物であるといえる。このような状況であったため、李仁任など、高麗の執権者たちは反対勢力の強力な反発にもかかわらず、北元との関係再開政策を守った。その結果、禡王3年(1377)2月に北元が禡王を冊封することにより、恭愍王18年以降断絶していた冊封-朝貢関係がもう一度成立した。北元がこのような高麗の関心を買うような態度をとるので、高麗はやっと北元の年号である宣光を使った。しかし、高麗は北元の主目的である明に対する共同作戦の提案に関しては回避した。高麗は、北元と明という両大国のうち、一方に偏った政策を取らず、両国と同時に関係を結びながら勢力のバランスを維持して実利を図ったからだ。結局北元との事大関係を利用して、明を圧迫することで、1378年高麗は明から禡王の冊封を受けた。

こうして、明と北元の両国をすべて事大の対象国として認めた関係が持続した。しかし、高麗が事大の主な対象と設定した国は明であった。特に、明との関係が再開した禡王4年以降は、高麗は北元との関係を維持したが、明との関係を基本にしていた。禡王6年までの北元との使者の交換も北元を事大の対象としてみないからだけではなかった。両国のどちらにも事大形式を取るのとは当時の外交的な問題を解きほぐすためのひとつの方法であった。高麗の北元との関係の目的を、明の過渡な貢物要求をけん制し、新しい王である禡王の冊封問題を解決するためにあった⁴⁹という見解がある。しかし、高麗の目的はこれだけではなく、ずっと大きな目的である東アジアの勢力のバランスを維持しようとする意志であった。つまり、より強固となる明の勢力拡大を北元と手を組むことでけん制することにあったといえよう。反面、高麗と北元間の友好関係は高麗だけが得するものではなかった。北側に追いやられ国際的に厳しい状況にあった北元にとって、一時期ほとんど断絶していた高麗との関係再開は何よりも重要であった。高麗との関係が改善されれば高麗と連合して明を挟み撃ちし、少なくとも元帝国に属していた国家たちが背を向けた状態の当時は、国家の国際的な名誉と権威を回復するよいチャンスであった。つまり、軍事的と外交的の二つの目的があった。北元において高麗との友好関係がどれだけ重要だったのかを北元時代に

49 キム・スンジャ、前述の書籍(2007)、87頁

両国間で交わされた使者の回数の約 1/5 は北元から高麗に派遣された使者であった事実が物語っている。

禍王時代の北元と高麗の関係の最大の特徴は、高麗が初めて北元と典型的な冊封・朝貢関係を結んだという事実である。禍王 3 年から 2 年間続いたこの関係は元の干渉期に比べるとその性格がまるで異なる。それより 160 余年前のモンゴルと高麗関係が成立する時、高麗が願っていた関係の形であったといえよう。

参考文献

I. 史料鄭麟趾など、『高麗史』、北韓社会科学院民族研究所翻訳、ヌリメディア。

『明史』、北京、中華書局、1997.

『元史』(A Mongolian translation from Chinese by Ch. Dandaa), Volume I-XXII, Foreword and textological study by Ts.Tserendorj, The Institute of History, The National Library of Mongolia., Ulaanbaatar, 2003-2004.

II. 著書

1) 韓国語

キムスンジャ、韓国中世韓中関係史、ヘアン、2007.

盧啓鉉、高麗外交史、甲寅出版社、1994.

ユンウンスク、モンゴル帝国の満州支配史、ソナム、2010.

2) モンゴル語 Ч.Далай, Монголын түүх (1260-1388), УБ., Эрдэм, 1992.

. 論文

1) 韓国語：高惠玲「李仁任政権に対する一考察」歴史学報、第 91 集、1981 .

金塘澤「高麗 禍王 元年 (1375) 元との外交関係再開をめぐる政治勢力間の葛藤」震壇学報 83, 1997.

ユンウンスク、「アユシリダラの活動と麗・蒙関係の変化」、東北亜歴史財団及びモンゴル科学アカデミー共催韓・蒙関係の昨日と今日 2010 韓・蒙国際学術会議の発表論文集、ウーランバートル、2010. チェックメド・チェレンドルジ、「14 世紀後半東アジアの国際情勢と北元と高麗の関係」、韓国学中央研究院、韓国学大学院博士学位論文、2010

許興植、「高麗末李成桂の勢力基盤」、歴史と人間の対応：高柄翊博士華甲紀念史学論集、ハンウル、1984.

2) その他

池内宏、「高麗末における明及び北元との関係」史学雑誌、1917, 29-1, 2, 3, 4

Ts.Tserendorj, 「A royal rescript of Emperor Ayushridar of Mongolia to the Koryo king and some issues on the relationship between Northern Yuan and Koryo」, Acta Historica, No10, Mongolian State University of Education, Ulaanbaatar, 2009.

【発表論文 10】

モンゴル帝国の飲食文化の高麗流入と変化

趙 阮 (漢陽大学)

[原著：韓国語、翻訳：金範洙]

1. 序 論

13世紀におけるモンゴル帝国の建設以来、大規模な人的移動が発生し、それによる各地域の文化間交流が行われた。文化的接触や刺激、また変容の現象は、モンゴル帝国期における物質文化の領域の中でも飲食文化に色濃く反映されている。12世紀から13世紀のモンゴル草原では、肉類や乳製品を主食として摂取していたモンゴルの支配領域が定住地域へと拡大し、それに伴って遊牧民の穀類摂取が増えるようになった。モンゴルが中国全域を征服して以来、中国各地で生産された野菜や果物もまたモンゴル支配層の食卓に上がるようになった。モンゴルがユーラシア大陸を征服したあと、各地域の飲食文化がモンゴル大カアンに進上されたことで、14世紀モンゴル大カアンの宮廷では飲食文化の多様化や融合現象が現れるようになった。飲食文化の変化は、単に帝国の中心部に限定して出現したのではなく、漸進的な過程を経て帝国の周辺地域にも出現した。

モンゴル支配は、モンゴル人の食生活に様々な変化をもたらしただけでなく、漢人の飲食文化にも少なからず影響を与えた。モンゴル西域人の移住により、モンゴル、回回(ハルハク)の飲食文化が伝わった。漢人もモンゴル酒であるアイラグ、馬乳酒などを摂取し、またムスリム飲食文化の影響を受けた。この時期にはまた、「一日三餐」の飲食文化も普遍的となった¹。このような現象は、中国地域に止まらず、韓半島(訳注：朝鮮半島)地域の飲食文化にも現れた。韓半島では、高麗後期になるとモンゴルの影響で肉類の摂取が盛んとなる²。

その影響の相関関係については、早い時期から民俗学界から注目されている。モンゴルの肉汁であるシオルや韓国のタン(湯)文化、肉のスープにご飯や麺を入れて作る方式、ユピョのような干し肉を作る方式、モンゴルのゲデスや韓国のスンデ(訳注：豚腸詰。血を固めたソンジや餅米、春雨などを入れる)を比較して両国の肉食文化の類似性に注目した研究がある³。一方で、モンゴルが百年余り耽羅を軍事的要衝地にしたこと、済州の言語や習俗、飲食文化には、モンゴルの影響が残っている。その中で済州地域に残るモンゴル飲食文化の影響に注目した研究によると、130年間のモンゴル軍の駐屯により、モンゴル式スンデであるケデス、ユックポ(干し肉)、焼酎、タンの文化が耽羅に伝わったとする。済州の郷土料理であるモムクックは、モンゴルの飲食文化が済州の環境に適応して郷土化した飲食文化の事例とされる。モムクックは、豚肉を茹でたスープ(タン・湯)に海藻類のホンダワラを入れて作ったもので、モンゴル式タンスープが済州の風土に合う形で変容したものと考えられる⁴。

モンゴルは、帝国の建設以降、ある地域の文化を他の地域へ流通させる、文化の媒介者としての役割を果たした。このような様相は飲食文化にも現れ、モンゴル本土の飲食文化だけでなく、モンゴルが征服した地域の飲食文化がモンゴル征服期やそれ以降の時期に他地域で現れることもあった。高麗末の中国において発展した蒸留法は、モンゴルを通じて韓半島に伝わった。モンゴルは、征服地域の蒸留器術を活用して馬乳飲料を蒸留酒化し、それ

1 史衛民『元代社會生活史』(北京、中國社會科學出版社、2005)p105-106。

2 金尙寶『韓国の飲食生活文化史』(パジュ、クァンムンカク、1997)p 331-332。最近、国内においても、モンゴル飲食文化の韓半島流入と影響に関する研究が進められている。

3 キムチョンホ「韓蒙間の肉食文化の比較」『モンゴル学』4、1996。

4 李ジュンス「13世紀における耽羅と元帝国の飲食文化変動分析」『亜細亜研究』59-1、2016、p143-179。

をアラキと名付けたが、このような蒸留文化はモンゴルの支配力が及ぶ地域から他地域へと普及していった。高麗に伝わった蒸留酒は、「焼酒」と呼ばれた⁵。

一方で、モンゴル支配下の中国では、各地域間の文化的交流の中で百科事典的な著作が編纂された。このような類書に出ている料理関連の項目や飲食関連の専門書籍を通じ、大元帝国の多元的世界を反映した飲食文化を垣間見ることができる。代表的に日常的な知識を盛り込んでいる『居家必用事類全集』や『事林広記』には、当時の民間で食用された飲食が紹介されており、当時の飲食文化の実態を把握することができる。それと共に、モンゴル支配層のために調理された料理が整理・編纂された『飲膳正要』は、大元帝国の飲食文化の豊かさを示す貴重な資料である。興味深いことに、これらの類書に出ている一部の調理法は、17世紀から18世紀の朝鮮後期における日用生活書である『山林經濟』、『農書』、『林園經濟志』に収録されており、これらはモンゴル帝国の飲食調理法に関する知識の流通に関する端緒を提供している。

本稿では、『山林經濟』や農書の『林園經濟志』に出ている肉類調理法、及び飲料と関連した記録に基づき、それに残されているモンゴル帝国の飲食文化の高麗地域への流入現象の推移を検討したい。それにより、13世紀モンゴル帝国の征服や膨脹が東アジア地域にもたらした文化的影響の一面を把握し、その意味について考察したい。

2. 高麗飲食文化の韓半島流入の背景 ——高麗とモンゴル間の人的交流を中心に

1260年モンゴルと和親を結んで交流が再開されてからモンゴルと高麗間の人的・経済的交流は活発となり、元帝国の飲食文化も自然に韓半島に伝わった⁶。元帝国の飲食文化の高麗への流入に媒介となったのは、人的交流が主要因であったととらえることができる。高麗とモンゴルの関係は、1218年「哈真」と「札剌」が1万のモンゴル軍を率いて契丹族の制圧のために高麗に侵境したことから始まった。それから1368年に元帝国が滅亡するまで、軍人やモンゴルの支配勢力に至るまで、様々な階層が高麗を訪問したり長期間居住したりしたが、彼らによって他国の文化が韓半島へ流入したものと考えられる。もちろん、それにはモンゴル人だけでなく、モンゴル帝国の色目人官員、イスラーム商人、漢人も含まれている。

まず、高麗に下嫁した高麗の皇后らとその陪従であるケリンク（怯憐口）による文化流入が考えられる。1274年、忠烈王とクビライの娘であるクトウルク・ケルミシュ（忽都魯揭里迷失）が婚姻してから、両国の通婚が通例的に定着され、恭愍王代までの80年余りの期間に全部で7名のモンゴル人の妃が高麗にやってきた。彼女らは、ときには高麗政治に直接介入して強力な影響力を駆使し、妃らの私属人であるケリンクは自然な形で高麗の新支配層として浮上した⁷。ケリンクは、モンゴルの有力支配層の家門に従属された奴隷で、モンゴル人の妃に付き添って高麗にやってきたが、その正確な数の把握は難しい。彼らの他に、王族女性が嫁ぐときに追従する家臣を意味する「媵臣」、つまり「陪臣」もモンゴル人の妃に従って高麗にやってきた。代表的な例として、印侯として知られるモンゴル人コラタイ（忽剌歹）、モスリムのセンゲ（三哥）、タングート人のシトゥール（式篤児）がある。この他にも高麗人の車信がクトウルク・ケルミシュを補佐した。以上の記録から推察して、モンゴル人の妃が高麗に下嫁したときにモンゴル、色目、漢人、高麗人で構成される多様な種族出身の陪臣5-6人と奴僕が随行したものであると思われる。大元帝国の飲食文化は、このようなモンゴル王侯を始めとするモンゴル支配層を通じて高麗に紹介されたと考えられる。

次に、高麗に派遣されたモンゴル人のダルガチ（達魯花赤）が挙げられる。彼らは、モンゴル帝国初期から占領地を治めるために派遣された監督官である。1232年に初めて開京や西京、また北界に72人が派遣され、高麗人によって殺害されることがあった。以降、1260年に高麗とモンゴルの和議がなされ、スルダイ（東里大）と康和

5 バクヒョンヒ「焼酒の興起 - モンゴル時期 (1206-1368) 「中国」から韓半島への蒸留技術の伝来 -」『中央亜細亜研究』21-1、2016、p69-93。

6 朝鮮後期の農書で日用書籍である『山林經濟』や『園圃經濟志』には、大元帝国時期の『居家必用』で紹介されている料理法が引用されている。『居家必用』が高麗、或いは朝鮮時代のどの時点で流入したのかは分らないが、大元帝国の飲食文化と関連した知識が韓半島に流入・受容された事例としてみることができる。関連研究は、ジュヨンハ編『東アジアの本の文化史と朝鮮時代における飲食の知識体系：『居家必用事類全集』を中心に』（2017、出版予定）参考。

7 コミュンス「忠烈王代の怯憐口（怯憐口）出身官員」『史学研究』118、2015、p235-236。

尚がダルガチに任命された。彼らの主な任務は、高麗王室の出陸を監督し、駐屯するモンゴル軍を統率することであった。任務を終えたあと彼らは帰国する。その後の元宗 10 年 (1269)、高麗権臣の林衍が元宗を廃位させたことをきっかけにダルガチが派遣されるようになり、1270 年 2 月にトクトル (脱朶児) が高麗のダルガチに任命された。以後、1278 年まで、7 名のダルガチが高麗に派遣された。モンゴル人出身であるトクトル (脱朶児) と黒的、その他には、漢人の焦天翼、李益、張国綱、契丹人の石抹天衢が高麗に派遣された。モンゴルから派遣された彼ら官員の中には、高麗支配層と通婚関係を結ぶ者もあった。その代表的な例は、1270 年のダルガチトクトルの要求による高麗大臣の金鍊家門との通婚である⁸。1283 年には高麗に赴任した耽羅ダルガチのタラチが内侍である鄭孚の娘を妻にしたことがあり⁹、1289 年にはモンゴル使臣のアクタイが高麗の功臣官僚である洪奎の長女と結婚した¹⁰。以上のような支配層を中心とするモンゴルと高麗の通婚の事例から、モンゴルの風習や文化が高麗社会に流入したものと推察できるのである。

その他にも、元帝国の命により高麗には鷹狩や鷹の飼育に従事する鷹坊が設置された。元が設置した鷹坊の規模は 250 戸であるとされる。その管理者は、尹秀、朴義などの高麗人であったが、実際には、鷹の管理のため、モンゴル大カンは鷹狩や飼育に長けていた鷹坊子のニャンギアタイ [郎哥歹] 20 人を高麗慶尚道の永州などへ送り込んだ¹¹。その事実から、鷹坊の運営のためにモンゴル人が派遣されたと考えられる。

一方で、1266 年以来、日本との交渉や南宋征伐に備えて高麗に戦艦の建造と軍費を負担させ、1269 年の林衍の乱を期にモンゴル軍が高麗に駐屯するようになった。当時、高麗に派遣された軍の規模は明確に把握されていないが、林衍の誅伐を目的としたムンケト (蒙哥都) が率いる二千人のモンゴル軍が派遣され¹² 西京に駐屯した。また、頭輦哥の国王が率いる大規模な軍も西京へ移動して元宗を護送した。1270 年 12 月、元の朝廷は二千の兵力を高麗に増員し、屯田を設置させた。さらに、ヒンドウとサチに 5 千の軍を与えて屯田させ¹³、洪茶丘には高麗人で構成される領民二千を以って屯田させた。屯田は日本征伐に備えるためで、その他にも、王京、東寧府、黃州、鳳州など、11 ケ所の屯田を配置して経略使をおいた¹⁴。以後 1275 年には、南宋軍で構成される蛮子軍 1400 人を海州、塩州、白州に定住させた。1276 年、元は楊仲信に幣帛を与え、その中の 500 人には妻を求め与えたという記録が残されている¹⁵。1278 年、ダルガチが撤収するときクビライの命によって屯田軍はすべて廃止されたが、一部は残留したと考えられる¹⁶。高麗で屯田を耕作したのは、モンゴル人、漢人、南宋人、高麗人など、人的構成は多様であった。先述したように、高麗に定着している間、高麗人と通婚する事例もあった。このような状況から考えると、元帝国からやってきた屯田勢力を通じて、元帝国の飲食文化が高麗に流入した可能性がある。その中で、焼酎の蒸留技術は高麗地域の屯田のために徴発されたモンゴル人を介して伝わった可能性が提起されたことがある¹⁷。

一方で、1273 年に耽羅へ拠点を移した三別抄勢力を鎮圧するため麗蒙連合軍が結成されてから帝国末期まで、耽羅は直轄支配地としてモンゴルに統治された。この時期の耽羅に任官したモンゴルダルガチ、駐屯軍や牧人らは耽羅に居住し、モンゴル文化の跡をこの地域に残した。耽羅ダルガチは、屯田兵や住民に馬と牛の牧場を設置させ飼育するようにした。モンゴルの影響は、済州の肉食文化や肉スープ、酒のような地域飲食文化の中に色濃く残されている。

高麗を訪問したモンゴル人だけでなく、大元帝国を訪問した高麗人によって元の飲食文化が紹介された可能性もまた大きい。実際に、忠定王に付き添って大元帝国を訪れた文人である閔思平の『及菴詩集』には、「飲膳経」、つまり「飲膳正要」が言及されているが¹⁸、これは 1330 年の元文宗、トクテムル期における太医院の飲膳太医で

8 『高麗史』巻 26 「元宗世家」

9 『高麗史』巻 29 「忠烈王世家」

10 『高麗史』巻 106 「洪奎傳」

11 『高麗史』巻 124 「嬖幸傳」

12 『高麗史』巻 26 「元宗世家」

13 『元高麗紀事』

14 リケンソク『高麗 - 大元関係の研究』知識産業社、2013、p178。

15 『高麗史』巻 28 「忠烈王世家」

16 『高麗史』巻 29 「忠烈王世家」

17 李盛雨『韓國食品社會史』教文社、1984、p216。

18 「丹靛散香風淡淡，皴皮弄色雨溟溟，心知此物眞仙味，故入皇元飲膳經」(閔思平、ユホジン訳、『及菴詩集』，ソウル、韓国古典翻訳院 2013)

ある忽思慧が大カンのために執筆した薬膳書である。そこには豊富な元帝国の料理が紹介されているが、閔思平の詩にも言及されていることから、高麗後半に『飲膳正要』とそれに紹介された元帝国の飲食が高麗に知られたと考えることができる。

3. 韓半島の飲食文化に表れる元帝国の影響¹⁹

高麗初期から朝廷は牧畜を勧奨した。馬は戦闘用や運搬に使われ、牛は主に農耕に利用され、相対的に牛馬の食用の比重は低かった。とくに高麗では仏教が隆盛し、何度も屠殺禁止令が出され²⁰、成宗期には肉食を禁じる勅令まで下された²¹。その影響で肉食文化はあまり発達しなかったと考えられる。『高麗図経』の風俗編には、高麗人の宴会場面が紹介されているが、献立は次のように素朴に描写されている。「今時の高麗人は、平床の上にまた小さい小盤〔小俎〕を置き、銅器を使用する。干し肉〔鱸腊〕と魚、野菜と一緒に出されるが豊かでない。」徐兢は、高麗人の肉食に関する「雑俗・屠宰」編において次のように記述している。

「高麗の政治は非常に善良で仏を好み殺生を警戒する。そのため、国王や宰相〔相臣〕以外は羊や豚を食べることができない。また屠殺を好むこともない。ただ、使臣が訪れることになると、あらかじめ羊・豚を育てる。（その家畜を）屠畜する際は手足を縛り付け、燃える炎の中に投げ入れ、その息が絶えて毛がなくなると水で洗う。もし生き返ると棒で殴り殺した後、腹を切り開き、腸胃をすべて切り、糞と汚物を洗い落す。そのため、スープや焼き物にしても酷い臭いがなくなり、その下手さはこの通りである。」²²

これらの記録を通じて、当時の高麗王室を除いて肉食摂取は難しかったことが分かる。また、高麗における肉食は、宴会や客をもてなすための特別食だったと考えられる。肉食が普遍的なものでなかった状況で、高麗人の屠畜技術も相対的に発達しなかったとみられる。もちろん高麗の北辺地域は、契丹や女真との接触を通じて狩猟部族の飲食文化にさらされていたと思われる。それに対し、相対的に高麗内地における肉食文化は普遍的でなかったと考えられる。

ところが、1260年モンゴルと高麗の和親が成立してから、高麗地域における肉食文化は拡大の様子を呈する。『高麗史』を記した史家は、忠烈王の妃后である齊国大長公主が母の訃音に接して号泣しながらも、以前と変わらず肉類を摂取したと記録している。史家の視線では、喪中にも関わらず肉食を禁ずることなく肉類を摂取したモンゴル人後妃の姿が印象的だったようである。肉食が主食だったモンゴル人の妃は、高麗王室にきてからも日常的に肉を摂取したと思われる。モンゴル人が高麗にやってきて、肉を日常食として摂取できるという認識を与えたかもしれない。

モンゴル大カンは、モンゴルと高麗が和親を結んで以来、高麗王に羊を下賜することもあった。1263年、クビライは元宗に調書や500頭の羊を送り、元宗はそれを諸王や5品以上の官吏に分け与えている²³。1297年にも忠烈王の誕生日を迎えて元帝国の太后が羊50頭と白鳥10匹、またモンゴルカン室の酒を下賜しており²⁴、忠烈王期の王室が開催した宴会では、酒と羊肉を出して宴会を開いたとする記録がある²⁵。このことから、モンゴルとの和親成立以来、モンゴル人の主食であり北中国で多く摂取されていた羊が高麗王室を中心とする支配層の食卓に上がったと考えられる。ところが、高麗の風土は羊飼育には合わず盛んにはならなかった。このように、高麗後期には上流層を中心に祭祀と宴会などで羊肉や豚肉が使われ、庶民層では、広く飼育されていた鶏や犬が食用されたととらえることができる。²⁶

一方で、高麗末の肉食の普及と共に、農作業で活用されていた牛を食用として認識するようになった。モン

19 本章は、筆者の論文、趙ウォン「『飲膳正要』と大元帝国飲食文化の東アジア伝来」『歴史学報』233、

2017の一部内容を修正・補完したものである。

20 「禁屠殺、肉膳亦買市廛以進」（『高麗史』巻2光宗19年）；「自今年限三年、禁中外屠殺」（『高麗史』巻8文宗20年1月）

21 「禁屠殺、斷肉膳」（『高麗史』巻3成宗8年12月）

22 『高麗圖経』巻23「雑俗・屠宰」

23 『高麗史』巻25「元宗世家」

24 『高麗史』巻31「忠烈王世家」

25 『高麗史』巻31「忠烈王世家」

26 李盛雨『高麗以前の韓国食生活史研究』郷文社、1978、p362-363

ゴルとの関係が成立する以前の牛肉の食用は、羊肉や豚肉と比べて相対的に少なく、上流層の一部が牛肉を食用したという記録がある。モンゴルと高麗の和親以来、モンゴル朝廷は、牛や白鳥を徴発し貢納するよう命じた。1271年の元宗期は、モンゴルから農牛6000頭を要求されており、高麗に来ていた屯田兵にとっても、牛は農作業のためだけでなく食用としても重要であった。元の農牛徴発の要求により高麗では牧牛が行われたが、それは牛の数を増加させただけでなく、食肉観が自然な形で高麗社会に定着していく上で重要な役割を果たしたと考えられる²⁷。

『居家必用』の庚集には、元代における民間の料理文化が紹介されている。『居家必用』に編纂された調理法は、17世紀の朝鮮で編纂された実学書である『山林經濟』にその多くが収録されている。金尙寶は、元末の類書『居家必用』に出てくる料理は、17世紀朝鮮時代の「治膳」編に60%以上がそのまま収録されているとし、そのことから、高麗後期に元から肉類の料理法が伝わったとした。ただ、元の肉類料理における主材料であった羊肉に代わって、高麗や朝鮮では牛肉と豚肉を活用したととらえている²⁸。

『居家必用』に紹介された肉類調理法の中で、『山林經濟』に引用されている事例をみると次の通りである。『居家必用』焼肉品のところでは、焼肉、羊膊、羊肋、羊耳舌、野鷄、鶻鶻、羊胛肪、野鴨が、煮肉品の煮諸般肉法としては、羊肉、敗肉、煮驢馬、煮肥肉、牛肉、馬肉、獐肉、鹿肉、熊掌が『山林經濟』に原用されている。焼肉は、「肉を焼いて出す方法として、火爐に焼く羊以外、すべての肉は串刺しにして油・塩・醬・刻み薬味・酒・酢を付け、のり（糊）を薄く塗りつけ炭火の上でひっくり返しながらかき上げ、小麦粉の皮を剥ぎ取って出す」とする。それには、羊膊、羊肋、羊耳舌など、羊の前足、羊のあばら骨、羊の耳や舌の焼き物料理が紹介されている。「煮諸般肉法」には、牛、羊、ロバ、馬、鹿、ノロ、アナグマ、雁肉、熊掌などの頑丈な肉、脂っぽい肉、傷んだ肉など、様々な肉類を茹でて食べる方法を挙げている²⁹。高麗後期以降、韓半島では肉は食したものの干し物や煮物以外の調理法は発達しなかったが、北宋期から元代までの多様な調理法が盛り込まれている『居家必用』の肉類調理に関連した豊富な知識は、有効な情報を提供したと考えられる。

モンゴル帝国の形成以来、モンゴルやその支配下にあった各地域の文化が東アジアに流入した。以上の内容を通じて、モンゴルと高麗王室が和親を結んでから、王侯、官僚、商人、軍人などの身分で高麗にやってきた人々たちを通じ、高麗社会の上層部のみに消費され仏教文化の影響により制限されていた肉類の摂取は、より普遍化して拡大していく傾向を確認することができる。

肉類の普及と共に、モンゴルの征服以後、生産が増えたのが酪と酥であった。朝鮮時代の王室では、酪粥を常膳として食したという記録がある。酪粥は駝酪粥とも呼ばれたが、興味深い事に、駝酪はモンゴルで牛乳を発酵させて作ったヨーグルトを意味する。これは朝鮮時代に御貢として王家で摂取しただけでなく、朝鮮上層部でも常食され、外国からの使臣が来たときもこれをもてなした。朝鮮時代に廐牧や牧畜を管轄した司僕寺、内医院などで進封を担当した。朝鮮前期には、駝酪粥のような乳製品を専門的に製造する集団があり、スユチ（酥油赤）と呼ばれた。彼らは、黄海道、平安道にいたモンゴル人らで屠畜業に従事し、朝鮮初期に朝鮮王室へ食事を供給した司饗房に酥油を上納したが、世宗3年（1421）、朝廷はこれを廃止するよう命じた³⁰。このようなスユチの存在は、高麗末期から韓半島北部に居住していたモンゴル人だった可能性が高い。また、朝鮮初期にモンゴル人が乳製品の製造を専門的に担当した事実から、乳製品を主食とするモンゴルの飲食文化が朝鮮王室に残っていたと推察できる。では、このような乳製品は、いつ頃から韓半島で食用されただろうか。

『高麗史』によると、高麗の明宗の在位期間中、翰林学士を歴任した李純佑が八関会で使うために牛乳で煉乳を作ったが、四頭の乳牛が全部動員され、牛と小牛が弱まることを指摘する上疏をした³¹。その事実から、高麗時代の上層部では特別な行事に乳製品を製造し使用したことが分かる。高麗末になると、乳製品の生産がさらに専門化する様子を呈する。高麗末の禡王代には乳牛所という御用の乳製品を製造する専門機関を置いた。ここでは、牛酪を作って王に献上し、王はこれを近臣らに保養食として下賜することもあった。

27 李盛雨『高麗以前の韓國食生活史研究』p364。

28 金尙寶、前掲書、p331-332。

29 キムヘスク『『居家必用事類全集』の飲食調理法の内容と朝鮮での引用』『東アジアの本の文化史と朝鮮時代における飲食の知識体系』p77-80。

30 『朝鮮王朝實錄』2「世宗實錄」世宗3年。

31 『高麗史』卷99「李純佑傳」

以上の内容から、高麗末に乳製品を製造する専門の機構が置かれ、乳製品を王室に進上する制度が朝鮮にも引き継がれたことが分かる。また高麗末に王室が乳製品を常食する風習は、乳製品を主食とするモンゴルの風習から由来したものであり、高麗に嫁いだモンゴル王侯らや官僚を通じてモンゴル風の飲食文化が伝わったと推定することができる。

肉類や乳製品の摂取の他に本稿で注目したことは、モンゴル帝国で飲用されていた飲料である舎児別の伝来である。朝鮮時代には仏教の衰退と共に、お茶に代わって飲料が発達することになった。その過程で、モンゴル帝国期に飲用された飲料が韓半島にも紹介される。朝鮮後期の日用生活書である『山林經濟』には、喝水、つまり清涼飲料として「木瓜喝水」と「五味喝水」が出ている³²。また『林園經濟志』には、御方喝水、林檎喝水、木瓜喝水、蒲萄喝水、香糖喝水が紹介されているが³³、その調理法は、『居家必用』の「喝水番名撮里白」の項目からそのまま引用したもので、『飲膳正要』にはモンゴル大カンが飲用した舎児別として紹介されている。

「喝水番名撮里白」は、番名、つまりペルシア語で撮里白と呼ばれた喝水である。その種類として、桂皮、丁香、ゲファなどを入れて作った御方喝水、もぎ立ての林檎汁を煮て作った林檎喝水、山桃汁を絞って作った楊梅喝水、木瓜を入れて作った木瓜喝水、五味子汁を蜂蜜と一緒に煮て作った五味喝水、ぶどう汁に蜂蜜などを入れて食べる蒲萄喝水、鬆糖、藿香の葉、ショウガなどを入れて煮た香糖喝水、葛粉、鬱金、山梔、甘草などを水と混ぜて作った造清涼飲法などの清涼飲料が紹介されている。このなかで五味子汁を入れて煮た五味喝水の製法が『飲膳正要』に出ている五味子舎児別と非常に類似している。

史料	原文
『飲膳正要』	五味子舎児別：新北五味十斤、去子、水浸、取汁；白沙糖八斤、煉淨、右件一同熬成煎
『居家必用』	五味喝水：北五味子肉一兩爲率、滾湯浸一宿、取汁同煎、下濃豆汁對當的顏色恰好、同煉熟蜜對入、酸甜得中、慢火同熬一時許、涼熱任用。
『事林廣記』	五味喝水：北五味子肉一兩爲率、滾湯浸一宿、取汁同煮、下濃黑豆汁對當的顏色恰好、同煉熟蜜對入、酸甜得所、慢火同熬一時許、涼熱任意用之。
『山林經濟』	五味子滾湯浸一宿、取汁同煮、下濃豆汁對當的顏色恰好、同煉熟蜜對入、酸甜得中、慢火同熬一時許、涼熱任意用之。 ¹

『飲膳正要』、『居家必用』、『事林廣記』、『山林經濟』などの五味子喝水は、製法において、五味子汁を糖分と一緒に煮た後、冷まして飲む点で基本的に類似している。また朝鮮後期に編纂された『山林經濟』の五味子喝水製法は、『居家必用』の製法をそのまま引用している点から、『居家必用』の料理法を参照したことが分かる。ところで、細部の調理過程をみると、食材の使用に多少の相異点を発見できる。『飲膳正要』では白沙糖が使われたことに対し、『居家必用』、『事林廣記』、『山林經濟』では五味子と一緒に豆汁を入れて煮込み、最後に蜂蜜を混ぜて冷ます方式を取っている。また、『居家必用』、『山林經濟』の豆汁を入れるという記述に対し、『事林廣記』では黑豆汁の特定材料が記されている。五味子喝水製法において五味子を除いた食材の活用には差が生じたのは、各地域の風土や環境の違いによるものと考えられる。

『飲膳正要』では、甘味を出す調味料として砂糖と白沙密が様々な料理に活用されている。当時、砂糖生産を専担していた砂糖局は杭州に所在し、その他に泉州の永春地域は白沙糖の主要産地であった。ここでは、ムスリムとユダヤ人が砂糖の製造技術を掌握していた。このような技術は、アラビア半島から泉州地域に定着したこの地域出身の技術者を通じて流入し、そこで製造された白沙糖は大都のモンゴル宮廷に進上されたのである。当時の元の宮廷で飲用された五味子喝水は、西域から伝わった白沙糖技術が加わって貴重な飲料として進上されたのである。その反面、他の日用書に出ている五味子喝水は、当時、容易に手に入れることができた豆汁を活用して製造した庶民的な飲料であった。我が国においては、伝統的に五味喝水に五味子と一緒に緑豆が使われた。これもまた、当時の韓半島における主要生産物であり食材として多く活用されていた緑豆は購入が容易で、韓国人の味覚にもなじんだためであろう。

32 洪萬『山林經濟』（パジュ、景仁文化社、1973）。

33 徐有渠『林園經濟志』（ソウル、保景文化社、1983）。

34 韓国伝統知識ポータル <http://www.koreantk.com/ktkp2014/kfood/kfood-view.view?foodCd=109513>（検索日：2016年8月20日）

4. 結 論

13世紀におけるモンゴルの大帝国建設以降、モンゴル帝国の影響力は東アジアの政治、社会、制度などの各分野において強い影響を残した。本稿では、モンゴル襲来が東アジア地域に残した痕跡について文化的な側面から考察を試みた。

モンゴル帝国期には、ユーラシア大陸を網羅する広範な規模の交流が展開された。このようなダイナミックさは、帝国の中心部と征服地域文化に変動をもたらし、ときには地域文化の地形を変えることもあった。本稿で考察したように、大元帝国の中心部は各地域の文化が接触し交流する場であった。モンゴルの開放主義政策により、モンゴル、ウイグル、チベット、ペルシア、漢人、高麗人が官僚として登用され、クビライ期の海運体系の整備により物資運輸インフラが確立され、各征服地域の物資が大都に集められるなど、人的・経済的レベルにおいて帝国の中心部には多様な文化が共存した。この時期の文化的多様性や融合の現象を目に見える形で示してくれるのが飲食文化である。大カンは、西アジア、中央アジアから東南沿海や高麗に至るまで、各地域からもたらされる多様な朝貢品により、各地域の山海珍味を味わうことができた。

1260年モンゴルと和親を結び交流が再開されてから人的交流が活発に行われ、帝国の飲食文化も自然な形で韓半島地域へ流入した。高麗に下嫁したモンゴルの王侯らや私属人、ダルガチを始めとするモンゴルの官員、駐屯軍や屯田勢力、元帝国を訪れた高麗人を通じて元帝国の飲食文化が伝えられ、自然に高麗の飲食文化に新しい要素と認識が加わり、変化がもたらされた。飲食文化は文化要素の中でも長期的な接触や交流を通じて受容される分野である。元帝国の飲食文化の一部が高麗と朝鮮に受容されたことは、モンゴルと高麗の長期的、かつ広範にわたる接触が反映されたものである。

1260年、モンゴルと高麗の和親が成立してから、高麗地域では仏教の影響で弱化した肉食文化が流入した。しかし、大元帝国の飲食文化をそのまま受け入れたのではなく、高麗の実情に合わせて変容した様子が伺える。肉を扱う方法や多様な調理法が流入され、羊の屠畜や消費傾向が牛肉や豚肉に代わった。高麗末の王室や上層部を中心に、乳製品を常用する文化が出現し、それは朝鮮時代まで続くことになる。

一方で、大元帝国の飲料文化も韓半島に流入し、選択的に受容され、変容する様相が現れる。朝鮮時代には仏教の衰退とともに、お茶に代わって花菜、蜜水、食鹽、水正果などの飲料や薬餌性の飲清類が発達するようになった。14世紀『飲膳正要』に紹介された清涼飲料である舎児別の調理に関する知識が17-18世紀の朝鮮後期における日用生活書である『山林經濟』や農書『林園經濟志』に渴水として紹介されている。舎児別は、西アジア地域からモンゴル宮廷に伝わった清涼飲料であるが、宋元代を経て中国地域に土着する過程の中で渴水という名称を持ち、白沙密に代わって豆汁で甘味を出すようになった。それ以降、渴水は高麗末や朝鮮時期を経て韓半島に流入し、選択的に受容された。その過程で、緑豆が五味子と共に主材料として定着した。

【発表論文 11】

「深簷胡帽」考 ——蒙元時代における女真族の帽子の盛衰史

張 佳（復旦大学文史研究院）

[原文は中国語、翻訳：丁莉（北京大学）]

一．序文：ある史料の校勘から

洪武元年2月の壬子（1368年2月29日）に、即位からわずか38日の明太祖朱元璋（1328-1398）はかの有名な「胡服¹」をなくす詔令を出し、「復衣冠如唐制」、即ち唐代当時の服装への回帰を臣民に呼びかけた。これは、新王朝が文化的には「中国の伝統」を継承しようとしたことを示している。『明太祖実録』には、この詔令の内容に関する以下の抜粋がみられる。

詔して衣冠を復すること唐制の如くならしむ。初め元の世組は朔漠より起りて、以て天下を有す。悉く胡俗を以て中国の制を変易す。士庶みな辮髪椎髻、深簷胡俗、衣服は袴褶窄袖及び辮線腰褶をなし、婦女は窄袖の短衣を衣、下に裙裳を服し、復た中国衣冠の旧なし。甚しければ其の姓氏を易えて胡名となし、胡語を習う。俗化既に久しく恬として恠しむを知らず。上久しくこれを厭う。是に至り悉く命じて衣冠を復して唐制の如くならしむ。……両截の胡服を服すを得ず、其の辮髪椎髻、胡服、胡語、胡姓は一切禁止し、斟酌損益すること、みな聖心より断じたり。是において百有余年の胡俗、悉く中国の旧に復せり矣²。

中国近世の文化史において、これは非常に重要な文献であり、蒙元史と明史の研究者によってしばしば引用されている。しかし、この詔令に記される具体的な服飾品についての研究は管見ではまだ行われていない。今日一般的に使われている台湾中央研究院歴史言語研究所校印本『明実録』は、明や清の数種の写本を組み合わせ、校勘を行ったものであるが、誤った記述が多くみられる。この詔令の表現に見られる相容れない点についても、きちんとした校勘がなされておらず、整合性があるわけではない。

例えば、「深簷胡俗」の「簷」という字は、『洪武正韵』などの字書によると、古代服飾品の「蔽膝」³にあたるというが、それでは「深簷胡俗」という語句の意味が成り立たない。『太祖実録校勘記』では「旧校の『俗』という字を『帽』に変えた」⁴が、それでも「深簷胡帽」の意味が分りにくい。幸い、嘉靖以降、明代における『実録』の諸写本が公になったので、明朝後期の歴史家の間で歴史書の編纂時に『実録』を引用することが頻繁に行われた。周藩宗正である朱睦㮮（1517-1588）は、洪武朝の政事記録である『聖典』の中で、『実録』のこの記事を引用し「深簷胡帽」⁵とした。嘉靖『宣府镇志』や顧炎武『日知録』の中でも引用され、同じく「深簷胡帽」となっている⁶。また、この詔令の前後の文脈から、「辮髪椎髻」を元代の髪型、「袴褶窄袖」をその服装、「深簷胡帽」を帽子の様式

1 本文で用いる「胡服」「胡化」「華夷」「夷夏」などの語彙は従来の表現を踏襲したものであり、特定の価値観を表すものではない。

2 『明太祖実録』30、台湾中研院史語所校印本、p.525

3 宋濂等『洪武正韵』巻6。

4 『明太祖実録校勘記』p103。『校勘記』では「胡俗衣服」は一つの語句とされているが、必ずしも妥当ではないと（筆者は）考える。

5 朱睦㮮『聖典』巻9「易俗」、『四庫全書存目叢書』史部第25冊 p342。

6 嘉靖（1970年）『宣府镇志』、『中国方志丛书・塞北地方・察哈尔省』に収録、台北成文出版公司、1970年、巻20、p216。陳垣『日知録校注』巻28、2007年、p1624、安徽大学出版社。

とすれば、文の意味も成立する。上記の要素を総合的にみると、通行本『明太祖実録』に見られる、「胡服」を改める詔令にある「深簷胡俗」という語句は、「深簷胡帽」としななければならない。「簷」は「簷（異体字は「檐」）」と形の類似による誤りで、「俗」は前の文にある「胡俗」の語に影響され、「帽」を「俗」と間違えた。

しかし、「深簷胡帽」とは一体どのような帽子なのか。元朝においてどの程度流行していたのか。元朝から明朝に変遷されたのち、「胡服」禁令によって果たして人々の生活から姿を消してしまったのだろうか。校勘だけでは答えを出すのは困難である。そこで、元朝や明朝の史料、とりわけ社会生活の実態を反映した図像資料を用い、その答えを探ってみたい。

二. 名を正す：元代「瓦楞帽」という名の誤用

「深簷胡帽」は文字通り「深簷（長いひさし）」が特徴である。元朝の図像資料からも分かるように、このいささかユニークな帽子は元朝では頻繁に着用されていた。この帽子は早くから中国の服飾史を研究する学者たちに注目されていた。沈從文氏（1902-1988年）による『中国古代服飾研究』（1981年香港で出版）の中で、元至順（1330-1332年）の刻本『事林広記』に掲載されているすごろくを楽しむ人々の図（図1）を取り上げ、図中の役人がかぶっている「深簷（長いひさし）」、四角、方形の帽子をはじめて「四方瓦楞帽⁷」と名付けた。沈氏の著書は中国の服飾史研究の草分け的な存在であり、大きな影響を持っている。

「瓦楞帽」という名称もその後の服飾史研究において踏襲された。ただ、この種類の帽子は「四楞（もしくは四角）」のものが多く見られるが、「六角」タイプのものも時折みられる。そこで研究者たちによって「四楞瓦楞帽」や「六楞瓦楞帽」などの名称も作られた⁸。

中国古代のものを研究する難しさは、図像資料や出土品にそもそも名前がなく、それらをどう命名するかということである。極めて確かな文献と照らし合わせることができない場合、学者はその物の形から名前を付けるという便宜的な方法を用いることが多い。実際に、「瓦楞帽」という名称は蒙元時代の文献には一切見られず、沈氏の命名は便宜的なものにすぎなかった。幸いにも、明洪武4年の『魁本対四言雑字』（現存する最古の図鑑）の復刻版が日本で刊行された。それには、このような帽子は「幔笠」という名称で表記されている（図2を参照⁹）。元朝の文献には「幔笠」とも表記されている。この他、形状が四角形で他の帽子とは異なるため「方笠」という表記もある。さらに、元朝ではこの帽子のもつ独特な「深簷（長いひさし）」という特徴を吟じる人々も多くいた。例えば、散曲家の王和卿がはげ頭の者が幔笠をかぶって頭を隠すという小令『天浄沙・咏秃』の中で以下のように詠んでいる。

笠のひさはしは両肩までのび、頭を覆う布は眉毛の位置まで固定されている。ゆったりとそれをめくりあげ、そして慌てて「君子よ、顔が見えないではないか¹⁰」と言った。

曲中の「笠のひさはしは両肩までのび」という個所は、いうまでもなく幔笠の「長いひさし」の特徴を大げさに描写している。



図1



図2

7 沈從文『中国古代服飾研究』146「元代玩双陸図中官僚と僕従」、上海書店出版社、2011年、p535。

8 趙剛『中国服装史』、清华大学出版社、2013年、p117。

9 『魁本対四言雑字』、『和刻本中国古逸書叢刊』15、鳳凰出版社、2012年、p344。

10 楊朝英編纂（1958）『朝野新声太平樂府』3、p110、中華書局、

単に「幔笠」(もしくは「方笠」)という歴史上本来の名称に戻すだけであれば、これほどの紙幅を費やして論ずるまでもない。

ここで特に指摘しておきたいのは、沈從文が「幔笠」を便宜的に「(四方)瓦楞帽」と命名したことが、意外にも明朝の服飾史乃至元・明の社会文化史の研究を誤った方向へと導いたことである。「瓦楞帽」という名称は元朝のいかなる資料の中にも確認されていないが、明朝後期の史料には非常に多く見られる。明朝の「瓦楞帽」はてっぺんが折り返された形状になっており、瓦にその形が似ていることからこのように命名された。これは、明朝末期の人物が登場する図像資料にはよく見られる(図3を参照。曾鯨(1568～1650年)による張卿子像)。沈氏の『中国古代服飾研究』という一冊が大きな影響力を持つようになる以前に、名物事典の中での「瓦楞帽」の解説には誤りはなかった。例えば、華夫氏を中心となって編纂した『中国古代名物大典』(済南出版社、1993年)では以下のように書かれている。

瓦楞帽、略称を「瓦楞」と呼び、てっぺんを折り返した瓦のような帽子である。

明代の庶民は皆これをかぶっていた¹¹。



図3

しかし、沈氏の著作よりもあとに出版された服飾史著作や最近の名物事典などの多くは、明朝の「瓦楞帽」を元朝の「幔笠」だと間違えている。例えば、『中国文物大辞典』(中国文物学会專家委員会編、2008年)の「瓦楞帽」の項目には「金・元の時代にはすでに存在し、明朝では庶民のみが着用した」とある。つまり、きちんとした根拠や調査に基づくことなく、「瓦楞帽」に関する従来の解釈を沈氏の研究と無理やりくっつけてしまったのである(筆者の固陋ゆえ、金朝や元朝の文献の中では、明朝のような「瓦楞帽」は発見できていない)。『中国設計全集・服飾類編』(張秋平等編集、2012年)の「元代瓦楞帽」の箇所を見ると、さらに様々な研究を取り入れており、「北方の遊牧民の間で流行した帽子で、明朝で踏襲された……瓦楞帽は明朝の庶民がかぶっていた。」とあり、多くの文献を引用して、この帽子が当時の流行であることを証明しようとしている¹²。このような例は他にもあるが、紙幅の関係でここでは逐一列挙しない。

「瓦楞帽」という名称の誤用は、元明社会文化史の研究をも誤った方向に導いた。蒙元時代(モンゴル時代)の歴史的な位置づけへの困惑から、明朝に対する蒙元の影響は非常に注目されるテーマである。研究者の中で、明朝後期に流行した「瓦楞帽」は、文化面において蒙元の影響を受け、「胡風」が流行した典型的な例だとする¹³。上記の考察から分かるように、これは元朝の「幔笠」と明朝の「瓦楞帽」が混同された故に生れた誤解である。

三. 起源と広がり：幔笠の起源とアジアにおける広がり

洪武元年の禁止令により、「深簷胡帽」はモンゴルというレッテルを貼られてしまう。「幔笠」というのは確かに元朝で流行したが、そもそもの起源はモンゴル民族の服飾ではない。考古学の資料を見ると、この類の帽子は、金の時代にはすでに中原地区に存在していた。今日発見された中で最も古く、確実な幔笠に関する図像資料は、山西省高平県李門村で発見された、金正隆2年(1157年)の石刻女真人樂舞図(図4を参照)である。

この資料は女真族の雰囲気の色濃く表しており、登場人物が辮髪をし、先が尖った靴を履き、蹀躞帯を着け、また笛や太鼓などを演奏に使うなど、これらはすべて、北宋と南宋の文献に描かれている女真族の風俗と合致す

11 華夫等編集『中国古代名物大典』、済南出版社、1993年、p529。

12 張秋平等編『中国設計全集・服飾類編』、商務印書館、2012年、p55。黄能馥等編『中国服飾史』、中国旅游出版社、1995年、p297。董進(攝芳主人)『大明衣冠図志』は管見ではこれまでの明代服飾研究における最高の専門書だが、残念ながらこの誤りはそのまま踏襲されている。(北京大学出版社2016年、p316)

13 罗玮『汉世胡风：明代社会中的蒙元服饰遗存研究』、首都师范大学修士学位论文、2012年、pp. 24-26。



図4

る¹⁴。この帽子が元朝で多く見られる帽子と若干異なるのはその先端である。ここのは先端がとがっているが、元朝で多いのは四角で、金大安2年（1210年）山西省の候馬董玘墓にあるレリーフに見られる。（図5を参照、上部に飾りがある）

現在発見された資料から推定すると、女真族の帽子に端を発したこの「幔笠」は、およそ金朝末期から中原地区の漢民族の中で流行しはじめたものである。元朝初期の北方地域の古墳からはこの帽子の図像や実物が多く出土している。山西省大同市にある馮道真（1265年）の墓からは籐製の幔笠が出土された。その後、王青（1297年）の墓でも籐製と草製の幔笠が出土している¹⁵（図6を参照）。陝西省の蒲城洞耳村壁画墓（1296年）には、モンゴル帝国時期における北方地域の漢民族、女真族、そしてモンゴル族の3つの文化の融合が見られる（図7を参照）。氏名や戸籍で見ると、墓に埋葬された男女は共に漢民族であるが、モンゴル名もあった。壁画の人物は総じて女真族（前合せが左前、幔笠）とモンゴル族（腰線襖、罽罽冠）のスタイルを融合した服装をしている。つまり、早くも元朝初期には、幔笠が北方民族の間で日常的に着用するものになっていたことが分かる。

一方、中国の南方地域の状況は北方地域とは異なる。長く続いた宋と金の軍事的対立のもとで、儒学でいう「華夷の弁」の考え方は、南宋朝廷が人心を掌握し、戦いに備える精神的支柱であった。これは、南宋の思想や文化に影響しただけでなく（例えば、南宋の人々の教科書となった胡安国（1074～1138年）の『春秋伝』は「攘夷」を主な特徴とした¹⁶）、日常生活にも影響を及ぼした。南宋の朝廷や士大夫たちは、異民族の風俗や風習が浸透することを極度に警戒した。紹興年間政局が安定すると、宋高宗は「かつての我々の領土はまだ取り戻していないため、漢民族の文化で夷（未開の異民族）を感化しよう」とし、庶民が胡楽、胡舞に倣い、長跪して献酒するなどの女真族の娯楽に興じることを禁じた¹⁷。金朝より南宋領内に逃れてきた「帰正人」は、南宋政府より居場所を与えられるとともに、胡服を着用しないことも要求された¹⁸。宋孝宗が在位していた乾道四年（1168年）には、



図5

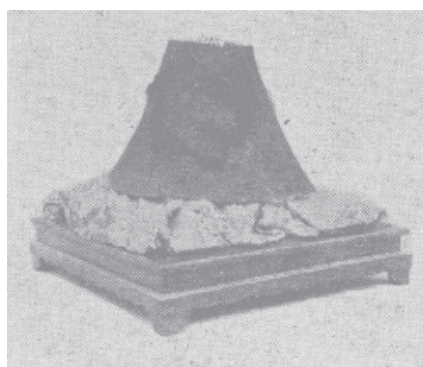


図6



図7

14 この図の紹介は、景李虎『金代楽舞劇石刻の新発見』、『文物』1991.12のpp34-37を参照。やはり沈從文の影響を受けて図の中の方笠を「瓦楞帽」と表記している。女真族が漢民族の文化を大きく取り入れる以前は、楽器は比較的単純なつくりをしていた。『三朝北盟匯編』では「其の楽器は即ち唯鼓、笛、其の歌は即ち鷓鴣の曲なり。」という記述がある。

15 『山西省大同市元馮道真、王青墓清理簡報』、『文物』1962.10。

16 牟潤孫『兩宋春秋學之主流』、『注史叢稿』、中華書局、2009年、p69-87。

17 馬端臨『文獻通考』卷310、浙江古籍出版社、2000年、p2436。

18 李之亮点校『宋史全文』卷24上、黑龍江人民出版社、2000年、下冊、p1640。

臨安の庶民が「胡俗」に倣うことに対しても注意喚起がなされた。以下は南宋社会の日常での「夷夏の弁」の意識を表した興味深い文献である。

臣僚言「臨安府風俗、自十数年、服飾乱常、習為胡装、声音乱雅、好為胡樂。如插棹篋、不問男女、如吹鷓鴣、如撥胡琴、如作胡舞、所在而然。此皆小人喜新、初則効學以供戲笑、久習之為非、甚則上之人亦將樂之、與之俱化矣。臣竊傷悼、中原士民淪於左衽、延首企踵、欲自致於衣冠之化者、三十四年却不可得、而东南礼儀之民、乃反墮於胡虜之習而不自知、甚可痛也。……伏望戒敕守臣、檢坐紹興三十一年指揮、嚴行禁止、犯者斷罪、令衆自然知懼矣。」詔從之。¹⁹

この史料からみると、金朝の服飾が南宋に一定の影響を与えたことは確かである。しかし、その影響を過大視し、南宋の服飾が「北方民族と混ざり合い、同一化した²⁰」と見るべきではない。中国の南北の服飾文化が「混ざり合い同一化した」という状態は、元朝が江南を統一し、地理的あるいは心理的な華夷の境界線が徐々に消滅した後には発生したものである。少なくとも、南宋の使節が残した大量の文献を見ると、服飾品における大きな差異は宋と金の人々の最も直観的差異である。例えば、乾道6年（1170年）に範成大が金に派遣された際に、開封を通り、以下のことに気が付いている：

民亦久習胡俗、態度嗜好與之俱化。男子髻頂頂、月輒三四髻、不然亦間養余髮、作椎髻於頂上、包以羅巾、号曰“鷓鴣”、可支数月或几年。村落間多不復巾、蓬辮如鬼、反以為便。最甚者衣裝之類、其制盡為胡矣。自過淮已北皆然、而京師尤甚。惟婦女之服不甚改、而戴冠者絕少、多綰髻。²¹

淳熙丙申（1176）年に周輝は金に派遣され、金の統治が及ぶ睢陽地区に入り、以下のように述べている。

入境、男子衣皆小窄、婦衣衫皆極寬大……無貴賤、皆著尖頭靴、所頂之巾、謂之鷓鴣。²²

この時南北分裂から半世紀しか経過していないが、北方民族の服装や髪型には、既に南方と大きな違いが生れていた。範成大や周輝が目にしたのは、明らかに南宋で見慣れた服装や髪型ではない。政治的な境界線、更には「夷夏之防」という心理的な境界線によって、北方民族の服飾が南方に伝わるのが阻まれたのである。この状況に変化が生じたのは、元朝以降であった。

「幔笠」は南宋末期に金やモンゴル族が支配していた淮北地区において流行したが、南宋治下の地域ではそれほど大きな影響はなかった。南宋が滅亡する直前の徳祐2年（1276年）2月に、左相の呉堅一行が祈請使としてモンゴルに派遣され、河を渡りかつて金朝の地であった邳州に到着した際、「これより先、人々はみな笠をかぶっており、服装も我々と異なっている」ことに気付いたという²³。モンゴル民族による南宋の征服がすすむにつれ、元々異国、異民族のものという色彩を帯びていた幔笠は、瞬く間に南方へと伝わり流行した。宋濂は、南宋の遺民で撫州士人であった李士華（1266～1352年）のために作成した墓誌の中で次のように記している。

会宋亡為元、更易方笠、窄袖衫、処士独深衣幅巾、翱翔自如、人競以為迂。処士笑曰「我故国之人也、義當然尔」。²⁴

故国の服装を断じて変えないのは、李士華のようなごく少数の遺民たちだけであった。出世の機会を狙い、多くの士人は笠をかぶり、北方民族の格好をすることを、モンゴル族の征服に対して従順である証拠とした。江南

19 『咸淳臨安志』47巻、（1990年）『宋元方志叢刊』第4冊中華書局 p3775-3776。

20 劉復生『宋代「衣服變古」乃其時代特徵——兼論「服妖」現象的社会意義』、『中国史研究』、1998・2、pp. 88-89。宋代の服装が北方民族の影響を受けた内容は、この論文で最も詳細に取扱っている。

21 範成大（2002年）『攬轡錄』、孔丹礼点校『範成大筆録六種』中華書局、2002年、p12。

22 周輝『北轅錄』、顧宏義点校『宋代日記叢編』、上海書店出版社、2013年、p1134。

23 嚴光大『祈請使行程記』、王瑞来『錢塘遺事校箋考原』、中華書局、2016年、p331。

24 宋濂『北麓処士李府君墓碣』、黃靈庚点校『宋濂全集』卷69、人民文学出版社、2014年、p1647。

平定当初、文人の胡長孺（1249～1323年）は都に呼ばれたときに笠をかぶっていったと言われている。『農田余話』に興味深い記述がある。

趙文敏孟頫、胡石塘長孺、至元中有以名聞于上、被召入。見問文敏「会甚麼？」奏曰「做得文章、曉得琴棋書画」。次問石塘、奏曰「臣曉得那正心、修身、齊家、治國、平天下本事」。時胡所戴笠相偏敝、上曰「頭上一個笠兒尚不端正、何以治國平天下！」竟不録用。²⁵

野史の中の話は必ずしも事実であるとは限らない。しかし、笠をかぶるのは元朝の江南地域では確かに流行していた。至順年間に刊行された日用類書である『事林廣記』には「笠とは、古くは外国のものだったが、今では庶民は皆それをかぶっている。」²⁶とある。図像資料からみると、幔笠を着用する人は必ずしも特定の家柄や社会階層に限ったということではないようだ。元朝文学者である虞集（1272～1348年）の後世に伝わった画像（図8を参照）では、頭に黒い笠をかぶっていることがわかる。元朝末期に張士誠を「幕府文人」と風刺した散曲の中で、「皂羅襪兒緊紮、頭戴方檐帽」²⁷とあり、辮髪で幔笠をかぶったような文士像が描かれている。また、福建将楽楊氏家族の壁画墓に描かれる車夫や召使いも同様の笠をかぶっている（図9を参照）。

幔笠の流行は、元朝末期まで衰えることはなく、皇帝もその流行に乗るほどであった。現存する元の帝王の肖像画を見ると、鉞笠以外に幔笠を着用する者もあった。元朝周朗『天馬図』を模写した明の作品には元の順帝も幔笠を着用している（図10を参照）。幔笠が流行した地域も中国に止まらず、モンゴル族の征服と共にアジア各地域にも広がった。

10世紀以降、高麗は遼と金の両国と国境を接していた。武力で迫られ、高麗はこの2つの北方民族政権に対して臣服するしかなかった。しかし、文化政策で言えば、高麗がとったのはむしろ後の朝鮮による「小中華主義」と類似する態度であった。即ち、中原地区の文明を受け入れ、できる限り遊牧民族の風習が浸透するのを回避した、という態度である。初代高麗王である王建（877-943）は、著名な「訓要十条」でこのように述べている：

我東方旧慕唐風、文物礼楽、悉尊其制……契丹是禽獸之國、風俗不同、言語亦異、衣冠制度、慎勿效焉。²⁸

学者たちの間で『高麗史』の記載の真偽に関する意見が分かれているが、記述の中に高麗の文化人が中華に憧れ、中華を慕う「慕華意識」が現れているのはいうまでもない。高麗末の政治家である趙浚（1346～1405年）は高



図8



図9



図10

25 長谷真逸『農田余話』巻2、『四庫全書存目叢書』子部第239冊、pp. 333-334。

26 『事林廣記』後集巻10、『統修四庫全書』第1218冊、p373。

27 瞿佑『歸田詩話』下巻、喬光輝『瞿佑全集校注』、浙江古籍出版社、2010年、p.473。

28 （2012年）『高麗史』2巻、『太祖二』第1冊 p26、台北文史哲出版社。

麗の服装の変化を「祖宗衣冠礼楽、悉遵唐制；迨至元朝、圧於時王之制、変華従戎（祖先の服装や礼楽は悉く唐制に従ったが、元朝に至ると、時の王に抑えつけられ、漢民族のものから異民族のものに変えてしまった）。」²⁹と述べている。『高麗史』で記載されている輿服制度は、唐と宋の制度がかなり混ざり合ったものである。北宋末期の使節である徐兢は高麗で見たものを記録し、以下のように述べている：

（高麗）唐初稍服五采……逮我中朝、歳同信使、屢賜裘衣、則漸漬華風、被服宠休、翕然丕変、一遵我宋之制度焉、非徒解辨削衽而已也。³⁰

しかし、このような儒教文化の影響から生まれた「夷夏」意識や服装のしきたりにおける「慕華」政策は、蒙元時代に入ると一変したのである。

モンゴルの9回にもわたる高麗侵攻（1231～1273年）への抵抗に失敗した後、高麗はモンゴルの世界体系に組み込まれることになった。クビライは高麗に対して服装を変えないことを許可したが、クビライの駙馬（娘婿）になった高麗の忠烈王（1274～1308年在位）は服従の態度を示すために、自ら「辮髮胡服」にただけでなく、1278年に全国の人々にモンゴル服の着用を命じた。

令境内皆服上国衣冠、開剃。蒙古俗、剃頂至額、方其形、留髮其中、謂之開剃。³¹

この命令が出されると、「宰相から官僚まで、頭を剃らぬ人はいない」ことになり、儒者でさえ免れることができなかった。高麗におけるこのような徹底的なモンゴル化にはクビライも驚きを隠せなかった。

（世祖）因問（高麗人）康守衡曰「高麗服色何如」。対曰「服鞞韞衣帽。至迎詔賀節等時、以高麗服将事。」帝曰「人謂朕禁高麗服、岂其然乎！汝国之礼、何遽废哉！」³²

忠烈王16年（1289年）には、高麗の儒臣である鄭可臣は辮髮に笠という姿でクビライに謁見した。騎馬民族風の格好は儒者の身分に合わないため、クビライは「笠を外す」ことを命じ、「秀才は辮髮をしてはいけない、頭巾をかぶる方がよろしい」と諭した³³。

しかし、高麗における笠の流行はその後も続き、高麗末期の恭愍王や禡王の時期には、むしろ幔笠（方笠）は役人（代言班主以上は黒草の方笠）や各司胥吏（白い方笠）が公式の場で着用するものとなった³⁴。

モンゴルの支配者たちは、幔笠を東アジアに限らず、中央アジアや西アジアにも持ち込んだ。高昌故城で出土した回鶻文刻本の仏本生譚の挿絵には、インド人もみな幔笠をかぶっている（図11を参照）。14世紀イルハン朝の歴史家ラシードウッディーンが編纂した歴史分野の大著『集史』のなかでも頭に幔笠をかぶったモンゴル族の君主が登場する（図12を参照）。元々女真族の服飾であった幔笠は、モンゴル族によって受け入れられたのち、彼らの支配がアジア各地に及ぶにつれ、アジア地域に広がったのである。モンゴルの征服が政治、民族、そして文化の垣根を超えた象徴の一つとして見る事ができる。

29 趙浚『松堂集』3巻、『韓国文集叢刊』大6冊 p425。

30 徐兢『宣和奉使高麗図経』巻七「冠服」。

31 『高麗史』巻72「輿服」第二冊、p476。

32 『高麗史』巻28「忠烈王一」。

33 『高麗史』巻105「鄭可臣伝」。

34 『高麗史』巻72「輿服一」。



図 11



図 12

四. 再び垣根を作る：幔笠の消失と東アジア「夷夏」意識の消長

14 世紀後半に元が滅亡し、異なる民族の文化が自由に融合する歴史は短くも幕を閉じた。モンゴル帝国の廃墟と化した地に、政権同士の地理的な境界線や民族間の心理的な界線が再び明確になった。新しくできた明帝国は北元の軍事圧力と、内部の社会秩序の問題を同時に対処しなければならず、その解決方法のひとつとして、儒教の「華夷の弁」の思想を改めて打ち出し、文化の上で「用夏變夷（夏を用て夷を變ず）」「復我中国先王之旧（我が中国先王の旧を復す）」を宣言することと、脱モンゴル化運動を行うことで自らの政権の正当性を造り出すことである³⁵。この政治および文化方面での大きな変化は東アジアの世界にも急速に影響をもたらした。

洪武元年の胡服禁令がまさに示すように、明朝が新しく作った服飾制度の目的は唐の時代の制度に戻すことである。服装を改めることは、「陋胡人旄頭之制、草場簡便之風（胡人の旄頭の制、草場簡便の風を陋とす）」、「特慕唐朝尊重之俗（唐朝尊重の俗を特に慕う）」ためであり、政府はこれを機に風習を改め、「共成復古之盛（共に復古の盛を成す）」ことを目的とした³⁶。「胡元」の騎馬民族としての風習、「奢侈粗戾（豪奢かつ無骨）」な風習の一部として、幔笠とその他の金・元など北方民族の服装や髪型が禁止、あるいは特殊な場合のみ着用可能という制限を受けることになった。その後、幔笠は明朝の図像資料から姿を消してしまったのである。特筆すべきは、一部では「明朝の」幔笠の写真が引用されているが、それは引用物の年代が間違えられたり、（例：『宝寧寺明代水陸画』図 13 を参照）、もしくは明代に改めて刊行された元朝の資料（例：万曆重刊本李孝美の『墨譜』図 14 を参照）であったりする。

これらの資料は、必ずしも明朝の社会生活の実態を反映したものではなく、研究者が陥りやすい「図像資料で歴史を証明する際のワナ」なのである³⁷。

以下の物語は、胡服が禁じられてから 100 年が経過した後に、明朝の人々にとって幔笠が既に見たこともない物になったことを示している。弘治元年（1488）、朝鮮の役人であった崔溥は、風で浙江省にまで漂流し、自らが喪中だったこともあり、頭には「深笠（幔笠と同じ、朝鮮では後に喪服のひとつになった、以下詳細アリ）」をかぶっていた。この奇抜な格好がすぐに中国人の注目を集めた。



図 13



図 14

（陳華）と役人が私のもとを訪れ、私の笠を指さし「これはどんな帽子か」と尋ねた。私は「喪笠なり。

国のしきたりで、3 年間墓守をすることになっているが、不幸にも私のように漂流してしまった者、やむ

35 関連内容は拙著を参照。『新天下之化：明初礼俗改革研究』、复旦大学出版社、2014 年。

36 劉夏『劉尚質文読集』巻 4、『統修四庫全書』第 1325 冊、p155。

37 歴史研究における図像資料の使い方について、纏哲「以図証史的陷阱」、『読書』2005・2 を参照。

を得ずふるさとから離れた者は、天に顔向けできず、血の涙を流すほどの悲しい気持ちをしっかりとさせるため、この笠をかぶっている。³⁸」

このような長いひさしが日差しを遮る笠子は明の人々にとって甚だ奇妙なもので、崔溥は笠子の説明に多言を費やさなければならなかった。しかし、わずか100年ほど前には笠は江南地区で流行し、上は知識人や士大夫、下は車夫や召使まで、幅広く受け入れられていた。この例が示すように、元から明に移り変わるにつれて、幔笠は明の人々の生活から姿を消してしまったのである。

モンゴル帝国崩壊後、朝鮮半島における幔笠の命運は中国大陆のそれと類似している。高麗末期の国家独立意識もあり、さらには明朝の影響も受け、高麗末期から李氏朝鮮の初期には「胡服」を排除する運動が起こった。復古を呼びかけた明の服飾改革は、高麗末期の儒臣によって「華夏」文明復興の象徴だとみなされた。明朝と高麗が宗藩関係を結ぶにあたり、高麗は度々使節を派遣しては「大明衣冠」の使用許可を懇願し、明朝に対して「慕華向化」（中華文化への憧れや帰順、服従）の意を示した。さらに、元朝の服飾を排除し、明朝の服装を受け入れることは、高麗国内において「祖先の古き良きものの復興」という特別な意義が付与された³⁹。

高麗恭愍王の在位中に、幔笠はひとたび「代言班主」以上の高官が着用する公式な服飾品になった。しかし、明朝を模倣している李氏朝鮮の服飾の中で、幔笠は「郷吏」階級の平服に指定された⁴⁰。李氏朝鮮初期には学識の高い人々を「郷吏」に任命できない規定が設けられた。官僚の中では、「郷吏」が前朝の服装を守り、当世の服装を着用できないのは言うまでもなく軽蔑されるという意味を含んでいた。明の初期にはモンゴル風「一塔頭」という髪型を宦官に命じ、「皂隶」（下級役人）には羽のついた小さな帽子をかぶるように命じたのと同じことである。朝鮮成宗3年（1472）に礼曹は平安道の「郷吏」に他所と同じように『経国大典』に照らし「黒竹方笠」をかぶることを要求したが、激しく反対された。

平安道江西县吏康翰等上言啓「本道诸邑乡吏、率以良民假属、故并着草笠、其来已久、不可依他道例著方笠、请仍旧。」従之。⁴¹

「良民」出身の郷吏でさえ、卑しい地位を示すことになる幔笠の着用をしたくはなかった。士大夫であればなおさらのことである。前文で崔溥の言葉にあったように、忌中期間中の外出は喪服を着るのがきまりが悪いため、長いひさしのある幔笠をかぶることで、「不敢仰見天日、以堅泣血之心」を示している。幔笠は朝鮮半島において外出する際に一時的に用いられる喪服に変化していた。李氏朝鮮の国王孝宗の在位時には、文臣の許積は君主と冠服制度についての議論を行い、「前王朝（高麗）の士大夫がかぶっていた四角い笠は、即ち現在忌中の人がかぶる方笠のこと⁴²」と述べた。

高官の服飾から便宜上の喪服にまで成り下がってしまったため、幔笠の地位は急激に下がってしまった。しかし、朝鮮知識人の「小中華」意識の向上につれ、幔笠は喪服としてでさえその資格が問われることになった。丁卯・丙子胡乱の後、学者たちは幔笠の起源に疑問を抱くようになり、忌中期間中の外出時に身に着けるものとしてふさわしいか否かについて議論がなされた。例えば、鄭経世（1563~1633年）は、「平涼笠」をもって「胡金之制」の方笠に取って代わるべきかどうかという質問に対して、「忌中期間中の外出は喪服を着用しなければならず、簡略化してはならない⁴³」と回答している。李光庭（1674~1756年）の意見は比較的曖昧で、「方笠は『胡金之制』だったとはいえ、古代の儒学者が喪中の時『深衣方笠』をよく着用していた」のは「喪服で外を歩いてはならない」という習慣があったことから、方笠をかぶることはやむを得なかった⁴⁴としている。それに対して、李德懋（1741~1793年）の考え方は非常にはっきりとしている。

38 崔溥『漂海録』、葛振家点校本、線装書局、2002年、p62。

39 高麗が明朝の服装のしきたりを取り入れ、「胡服」を改革する過程は拙論を参照。「衣冠与認同：明初朝鮮半島襲用「大明衣冠」歷程初探」、『史林』2017.1。

40 『経国大典』巻3の「礼典・儀章」、朝鮮総督府中枢院印刷、1934年、p231。

41 『成宗大王実録』21巻、成宗三年八月丁丑、『朝鮮王朝実録』、第8巻p680 韓国国史編纂委員会印刷、成宗四年正月壬寅26巻、『朝鮮王朝実録』第9冊p2。

42 『孝宗大王実録』18巻、孝宗八年正月壬辰、『朝鮮王朝実録』第36冊p74

43 鄭経世『愚伏集』11巻「答金伯顔問目（戊午）」、『韓国文集叢刊』第68冊p209。

44 李光庭『訥隱集』巻5、「答辛与則（帰錫）問目」、『韓国文集叢刊』第187冊、p223。

方笠是金人之服、麗末宰相戴之、我朝中叶胥吏戴之、今則為喪人所著。其制尤为怪
 駭。東國喪服粗具礼制、而头著虜笠、不可不改正者也。⁴⁵

「胡金」に端を発する幔笠は庶民の暮らしから徐々に姿を消しただけでなく、根強い夷夏論のもとで、便宜的な喪服としてでさえ疑いの目を向けられ、排斥された。蒙元時代の皇帝から庶民の間で人気を博した状況と比べると雲泥の差である。幔笠の中国と朝鮮半島における栄枯盛衰は、ある意味知識人階級の夷夏意識の消長を図る物差しになっていた。

五. むすび：小さな帽子と大きな歴史

以上の考察により、長らく「瓦楞帽」だと誤解され、更には典型的なモンゴルの服飾品だと見られてきた幔笠は、実は女真族に起源を有する帽子だと分かった。一見小さな笠に過ぎないが、その盛衰の歴史は、12世紀から14世紀にかけての東アジアの民族や政局の変遷、更には東アジアの儒教文化圏における華夷思想、胡漢観念の消長を直観的に反映するものである。

北方民族の要素が色濃い幔笠は、金朝後期に中原地区で流行した。宋朝の王室が中原地区から南に渡ったのち、知識人の中では中原地区は文化的な異国となり、服装や風俗における「華夷の弁」によって幔笠の南部への伝達が困難であった。高麗の国土は、遼や金と隣接していたが、文化における「慕華意識」から彼らの心には遊牧民族の服装に対するわだかまりがあった。13世紀モンゴル人の侵攻により、東アジア大陸の各政権の地理的な境界線、さらには民族間の文化的な垣根がなくなった。幔笠はこの時期のモンゴル族の動きに沿ってアジア各地に伝えられた。夷夏意識が希薄になり、時代の流れや利益が見え隠れする中、北方民族の服装は江南地域で一世を風靡した。高麗はトップダウンで「胡化」を促すやりかたで「鞬鞞衣帽（モンゴルの服飾）」を受け入れた。このような政治と思想の背景の中で、幔笠は東アジアの人々に広く受け入れられた。しかし、モンゴル帝国の崩壊は、各民族が融合する時代に終止符が打たれた象徴である。蒙元の古い基盤のもとで興った王朝は新たな政権及び文化の境界線を策定し始めた。日ごとに勢いを増す夷夏意識の影響のもと、幔笠は人々の生活で影を潜め、過去の歴史となってしまった。今日、それは図像資料を用いて時代を区分する際のものさしとなっている（図17、18を参照）。小さな幔笠は、モンゴル帝国前後の政治や文化が変遷した縮図なのである。



図 15



図 16

45 李之亮点校『宋史全文』卷24上、黒竜江人民出版社、2000年、下冊、p1640。

図像資料の説明

- 図1：『打双陸』、元至順刊『事林広記』続集6巻、『続修四庫全書』第1218冊。
- 図2：日本覆明洪武4年刊行『魁本対相四言雑字』、『和刻本中国古逸書叢刊』第15冊。
- 図3：曾鯨絵『張卿子像』。
- 図4：『女真楽図』、『金代楽舞雜劇石刻の新発見』、『文物』1991年第12期。
- 図5：大安2年侯馬董玘磚彫、『平陽金墓磚彫』。
- 図6：『醉帰楽舞図』、『陝西蒲城洞耳村元墓壁画（至元6年）』、『中国出土壁画全集』第7冊。
- 図7：王青墓出土藤幔笠、『山西省大同市元代馮道真、王青墓清理簡報告』、『文物』1962年第10期。
- 図8：虞集像、元佚名『名賢四像』、『元画全集』第4巻第5冊。
- 図9：『人物輶輿図』（一部）福建将楽元代墓室壁画、『中国出土壁画全集』第10冊。
- 図10：周朗『天馬図』明模写本、『故宫藏品大系・絵画編』第5冊。
- 図11：蒙元回鶻文刻本仏本生譚挿絵残片。
- 図12：『史集』挿絵の中の蒙古君主。
- 図13：『誤死針医横遭毒藥嚴寒衆』（一部）『宝寧寺明代水陸画』より。
- 図14：『和制』、万歴重刊本李孝美『墨譜』挿絵。
- 図15：旧題『宋佚名百子図』、『宋画全集』第6巻第2冊。
- 図16：旧題『道子墨宝・地獄变相図』（一部）、『宋画全集』第6巻第2冊。

著者略歴

葛 兆光 / GE Zhaoguang

1950年上海生まれ。1984年北京大學大学院文献学修士課程修了。1992年より清華大學歴史学部教授。2006～2013年復旦大學文史研究院長、教授。現在同研究院及び復旦大學歴史学部特別招聘教授。京都大學、ベルギー・ルモン大學、台灣大學、アメリカ・プリンストン大學などの客員教授を歴任。2009年第一回プリンストングローバル学者に当選された。専門分野は中国思想史、東アジア交流史。

主な著作：『中国思想史』、『宅茲中国』、『中国再考』（第26回アジア太平洋賞大賞）など。

四日市 康博 / Yokkaichi Yasuhiro

1995年早稲田大學（第一文学部）卒業。2004年早稲田大學文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007年学位（博士（文学））取得。2005年～2008年九州大學人文科学研究院専任講師（任期付）。2009年～駒澤大學文学部非常勤講師。2012年～早稲田大學総合研究機構中央ユーラシア歴史文化研究所招聘研究員。2014年～昭和女子大學国際文化研究所客員研究員。専門分野はモンゴル帝国期における東西ユーラシア交流史、海域アジア交流史。

主な著作：『モノから見た海域アジア史—モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流—』（福岡：九州大學出版会、2008）。

チョグト（朝 克图） / Borjigen Chogt

1963年内モンゴル自治区シリントル生まれ。1984年内モンゴル大學蒙古言語文学学部卒業後、同学蒙古言語文学学部の助手として勤務。北京大學当方言語学部でペルシヤ語を学び、内モンゴル大學蒙古歴史研究所の修士課程で女真語を専攻。富山大學の人文部に外国人研究者として滞在（1997年～1998年）した後、

早稲田大學大学院文学研究科で訪問学者として研究を進め（1998年～2000年）、早稲田大學大学院文学研究科に博士課程に入り東洋史を専攻した（2000年～2006年）。2006年に内モンゴル大學蒙古学院に就職し、2007年に副教授、2012年に教授に就任。

主な著作：『チンギス・ハンの法』（山川出版社、2010年）。このほか1990年代から今までモンゴル帝国、元朝歴史に関する学術研究論文を三十篇以上発表。

橋本 雄 / Hashimoto Yu

1972年東京生まれ。1995年東京大學文学部卒業。2000年同大学院博士課程単位取得退学。2004年博士（文学）学位取得。日本学術振興会特別研究員、九州国立博物館設立準備室、同学芸部研究員等を経て、現在、北海道大學大学院文学研究科准教授。専門分野は、中世日本の国際交流史・文化史。

主な著作：『中世日本の国際関係』（吉川弘文館、2005）、『中華幻想』（勉誠出版、2011）、『偽りの外交使節』（歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、2012）、『“日本国王”と勘合貿易 なぜ、足利将軍家は中華皇帝に「朝貢」したのか』（さかのぼり日本史：外交篇〔7〕室町、NHK出版、2013）など。

エルデニバートル（额尔敦巴特尔） / Eerdunbateer

1967年モンゴル生まれ。1991年内モンゴル大學モンゴル言語文学学部卒業（文学学士号取得）、1995年同学モンゴル歴史研究所修士課程卒業（歴史学修士号取得）。1995年より、内モンゴル大學モンゴル学院モンゴル歴史学部副研究員として勤務するかたわら、韓国江原国立大學歴史学科博士課程修了（2001年）、同学の訪問学者として博士論文を提出、博士号を取得する（2006年）。2013年～2014年アメリカインディアナ大學訪問学者。専門は元朝時代の元と高麗の関係史、韓国史、契丹と女眞の言語文字研究。

主な著作：「契丹と女真文字の比較研究」（『内蒙古大学学报』3、1996）、『大蒙古国と高麗』（韓国慧眼出版社、2009）、「高麗王室及び元晋王一族の関係について」（韓国『蒙古学』第35号、2013）など。

向 正樹／Mukai Masaki ※差替済

1974年福岡県北九州市生まれ。1998年大阪大学文学部史学科（東洋史学専攻）卒業。2003年～2005年中国・北京大学歴史学系留学。2007年大阪大学大学院文学研究科（文化形態論専攻）博士後期課程修了。2007年～2012年大阪大学大学院文学研究科特任研究員。2013年～現在、同志社大学グローバル地域文化学部准教授。

主な著作：「二章 モンゴル・シーパワーの構造と変遷」（『グローバルヒストリーと帝国』秋田茂・桃木至朗編 eds. 大阪大学出版会 April-2013, pp.71-106.）、「元代“朝貢”与南海信息」（『元史論叢』10 中国元史研究会, July-2005, pp.389-406.）など。

孫 衛国／Sun Weiguo ※差替済

1966年生まれ。湖南省衡東出身。武漢大学・南開大学・香港科技大学で学び、南開大学で歴史学の博士学位を取得（1998年）、香港科技大学で哲学の博士学位を取得（2001年）。現在は南開大学歴史学院の教授。かつて韓国の高麗大学、アメリカのハーバード大学のハーバード燕京研究所、台湾大学などで訪問学者を務めていた。主な研究分野は、韓国史、中韓関係史、中国史学の歴史、明清時代の中国史。

主な著作：『王世貞史学研究』（人民文学出版社、2006）、『大明旗印と小中華意識：朝鮮王朝尊周思明問題に関する研究 1637－1800』（商務印書館、2007）、『明清時代、中国史学の朝鮮に対する影響』（上海辞書出版社、2008）。

金 甫桃／Kim Bo-Kwang

高麗大学韓国史研究所の研究教授（2012年～2014年）、高麗大学BK21PLUS韓国史事業団の研究教授（2014年～2016年）を経て、現在は嘉泉（カチョン、Gachon）大学 Liberal Arts College 助教授（2017年～）。高麗の政治制度、権力構造などに関心を持っている。

主な著作：「高麗成宗、懸鐘台太祖配享功臣の選定過程と意味」（2014）、「高麗前期、魚袋の概念と運営方式に対する検討」（2015）、「高麗、モンゴル関係の展開とダルガチの置廃過程」（2015）、「高麗の対蒙対応論理と『大国イメージ』—1231、1232年の外交文書を中心に—」（2015）、「高麗前期、公服制の整備過程に対する研究」（2016）、「高麗内のダルガチの存在様相と影響—ダルガチを通じたモンゴル支配方式の経験—」（2016）。

李 命美／Lee, Myun gmi

ソウル大学の国史学科で学士、修士、博士学位を取得。ソウル大学歴史研究所、奎章閣韓国学研究院などを経て、現在は人文科学研究院の研究員として活動中。国家間関係（東アジア的關係形成方式）と個人間・家門間の関係（モンゴルの關係形成方式）が高麗・モンゴル間の關係のなかで影響し合う様子やそれによる高麗末の政治・社会變動に関心を持って研究している。

主な著作：修士学位論文「高麗・元の王室通婚の展開と特徴」、博士学位論文「高麗・モンゴルの關係と高麗国王の地位の變化」（『13～14世紀における高麗・モンゴルの關係研究—征東行省丞相駙馬高麗国王、その複合的地位に関する探究』ヘアン、2016）。

チェックメッド・ツェレンドルジ ※要確認

／ Tsegmed Tserendorj

1999 年モンゴル国立ウランバートル大学卒業。2010 年大韓民国韓国学中央研究院博士課程卒業。文学博士（歴史学）。専攻は中世韓－蒙関係史である。

主 な 著 作：Chinggis khan (encyclopedia), co-author, Ulaanbaatar, (2006)、Encyclopedia of history and culture of the Mongols /co-author/, Ulaanbaatar, (2004,2006)、History of the Yuan dynasty / 元史 / (A Mongolian translation from Chinese by Ch. Dandaa), Volume I-XII, Foreword and textological study by Ts.Tserendorj, Ulaanbaatar, (2003)、Samguk yusa (三 国 遺 事) "(translation from Korean into Mongolian with J.Gantulga), Ulaanbaatar, (2009)、Khubilai Khan and his successors, Ulaanbaatar, (2015)、「東西文化交流とアルタイ」(『アジア学術研究叢書 7』アルタイ学シリーズ 3：共著、亦楽、2016) など。

趙 阮／ Cho Won ※要確認

漢陽大学史学科卒業。中国の中央民族大学で 16 世紀モンゴル研究をテーマに修士学位を取得。北京大学歴史学科に進学し、「蒙元帝国期におけるダルガチ制度の研究」で博士学位を取る。ソウル大学歴史研究所で博士後研究課程 (Postdoc) の研究「17 ～ 20 世紀蒙元史研究に表れる清の知識人のモンゴル帝国認識」を進めた。漢陽大学比較歴史文化研究所の HK 研究教授を歴任。現在、漢陽大学や世宗大学で講義している。専攻分野は蒙元史。モンゴル帝国期の統治制度や周辺地域との文化交流、清代の史書に反映されたモンゴル帝国に関する認識などについて研究中。

主な著作：「明人の目線からみた 16 世紀漠南モンゴル社会の変化」(『モンゴル学』、2014)、「17-20 世紀蒙元史研究に表れた清知識人の『モンゴル帝国』認識—『元史類編』、『元史新編』、『新元史』を中心に—」(『中国学報』、2015) など。

張 佳／ Zhang Jia

1981 年山東省高密生まれ。北京大学中文系古典文献学学士 (2004 年)、清華大学歴史系歴史文献学修士 (2007 年)、復旦大学歴史系専門史博士 (2011 年)。現在は復旦大学文史研究院副研究員。専門分野は元明の社会文化史。

主な著作：『新天下之化：明初礼俗改革研究』(復旦大学出版社、2014)。論文は「元濟寧路景教世家考論」、「再叙彝伦：洪武時期的婚喪礼俗改革」、「別華夷與正名分：明初的日常雜礼規範」、「衣冠與認同：麗末鮮初朝鮮半島襲用「大明衣冠」历程初探」、「明初的漢族元遺民」等十数編。

参加者 リスト

発表者

趙 阮	Cho Won	漢陽大学
チョグト（朝克图）	Chogt, Borjigen	内蒙古大学
エルデニバートル（额尔敦巴特尔）	Eerdunbateer	内蒙古大学
橋本 雄	Hashimoto Yu	北海道大学
金 甫枕	Kim Bokwang	嘉泉大学
李 命美	Lee Myungmi	ソウル大学
向 正樹	Mukai Masaki	同志社大学
孫 衛国	Sun Weiguo	南開大学
ツェレンドルジ	Tserendorj, Tsegmed	モンゴル国科学院歴史研究所
四日市康博	Yokkaichi Yasuhiro	昭和女子大学
張 佳	Zhang Jia	復旦大学

発表者 / 実行委員

趙 珖	Cho Kwang	韓国国史編纂委員会
葛 兆光	Ge Zhaoguang	復旦大学
劉 傑	Liu Jie	早稲田大学
三谷 博	Mitani Hiroshi	跡見学園女子大学

招待研究者（討論者）

荒木和憲	Araki Kazunori	国立歴史民俗博物館
崔 永昌	Choi Youngchang	国立晋州博物館
榎本 涉	Enomoto Ayumu	国際日本文化研究センター
韓 承勲	Han Seunghoon	高麗大学
貴田 潔	Kida Kiyoshi	静岡大学
村 和明	Mura Kazuaki	三井文庫
佐藤 雄基	Sato Yuuki	立教大学
山内 晋次	Yamauchi Shinji	神戸女子大学

同時通訳

安 ヨンヒ（暎姫）	Ahn Younghee	ソウル外国語大学院大学
丁 莉	Ding Li	北京大学
李 ヘリ（恵利）	Lee Hyeri	韓国外国語大学
李 金花	Lee Jinhua	通訳翻訳者
朴 賢	Piao Xian	通訳翻訳者
宋 剛	Song Gang	北京外国語大学

通訳翻訳サポート

洪 性珉	Hong Sung-min	早稲田大学
全 相律	Jeon Sangryul	東京大学
宋 晗	Song Han	東京大学
孫 軍悦	Sun Junyue	明治大学
朱 琳	Zhu Lin	東北大学

実行委員

金 範洙	Kim Bumsu	東京学芸大学
金 キョンテ	Kim Kyongtae	高麗大学
李 恩民	Li Enmin	桜美林大学
ナヒヤ（娜荷芽）	Naheya	内蒙古大学
彭 浩	Peng Hao	大阪市立大学
徐 静波	Xu Jingbo	復旦大学

オブザーバー

陶 韓烁	Tao Weishuo	復旦大学
------	-------------	------

レポート編集

長井亜弓	Nagai Ayumi	編集者
------	-------------	-----

スタッフ

今西淳子	Imanishi Junko	渥美国際交流財団
角田英一	Tsunoda Eiichi	渥美国際交流財団
石井慶子	Ishii Keiko	渥美国際交流財団
本多康子	Honda Yasuko	渥美国際交流財団

第 57 回 SGRA フォーラム

第2回 日本・中国・韓国国史たちの対話の可能性

「蒙古襲来と 13 世紀のモンゴル帝国のグローバル化」

—予稿集—

編集・発行 公益財団法人 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)

〒 112-0014 東京都文京区関口 3-5-8

電話 03-3943-7612 FAX.03-3943-1512

SGRA ホームページ：<http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール：sgra.office@aisf.or.jp

発 行 日 2017 年 8 月 7 日

発行責任者 今西淳子

© 関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。

©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.